
明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治三十四年三月十五日發行（毎月一回五日發行）
女學世界定期增刊
第壹巻第四編
壷すみれ

『菫すみれ』目次

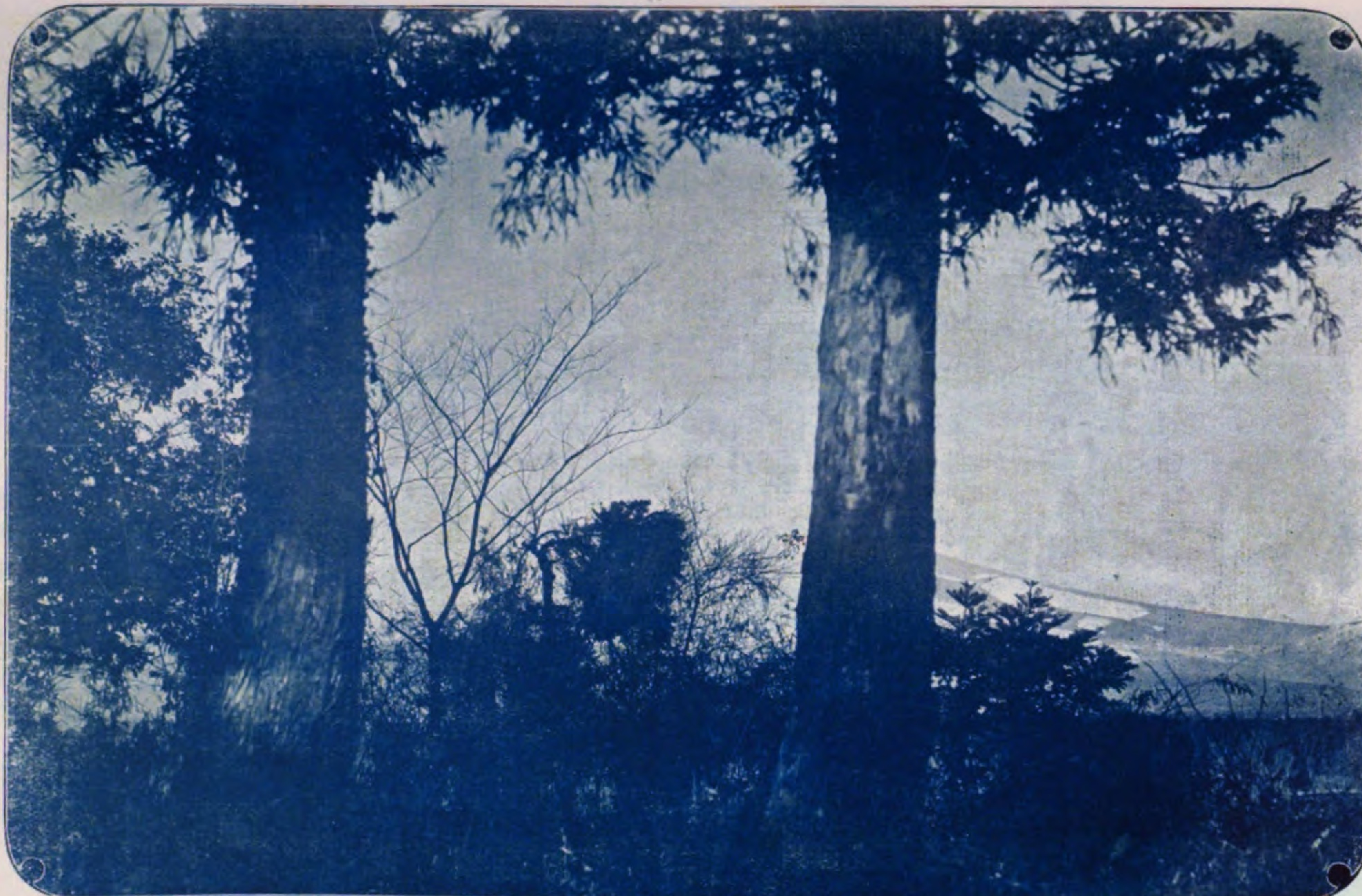
◉寫眞口繪

◉北白川宮御母堂富子殿下◉御殿場長原の富士◉バッテンベルグの王女ヘンリー殿下◉信濃善光寺◉跡見花蹊女史の書◉華族女學校◉奈良高等女學校◉東京女學館卒業生◉愛敬女學校生徒◉其他才媛の書畫種々

◉大懸賞文披露



北白川宮御母堂富子殿下



御殿場長原の富士

日本名刹



信濃善光寺



ベツテンベルグの王女ヘンリイ殿下

○博文館發行中等教育書及參考書類概要

著者	書名	冊數	定價	郵税
萩野由之君著	中等教育 日本歴史	全貳冊	正價壹冊金五拾五錢	郵税壹冊拾錢
萩野由之君著	中等教育 日本歴史要解	全壹冊	正價金五拾錢	郵税八錢
法學博士 有賀長雄君著	增訂 帝國史略	全壹冊	正價金壹圓五拾錢	郵税廿錢
文學士 木寺柳次郎君著	日本歴史	全壹冊	上製金五拾錢 並製金卌五錢	郵税拾錢 郵税八錢
文學士 木寺柳次郎君著	中等教育 東洋歴史	全壹冊	正價金八拾錢	郵税拾貳錢
文學士 木寺柳次郎君著	中等教育 西洋歴史	全壹冊	正價金七拾錢	郵税拾錢
理學士 佐藤傳藏君著	中等教育 地理學教科書 上卷日本之部	全壹冊	正價金五拾錢	郵税八錢
理學士 佐藤傳藏君著	中等教育 地理學教科書 下卷萬國之部	全壹冊	正價金五拾錢	郵税八錢
理學士 佐藤傳藏君著	中等教育 日本地圖 地理學教科書附圖	全壹冊	正價金四拾五錢	郵税八錢
理學士 佐藤傳藏君著	中等教育 萬國地圖 地理學教科書附圖	全壹冊	正價金六拾錢	郵税八錢
峰是三郎君著	中等教育 新編地文學	全壹冊	正價金五拾錢	郵税八錢
理學士 佐藤傳藏君著	日本新地理	全壹冊	上製金五拾錢 並製金卌五錢	郵税拾錢 郵税八錢
理學士 佐藤傳藏君著	萬國新地理	全壹冊	上製金五拾錢 並製金卌五錢	郵税拾錢 郵税八錢
落合直文君著	中等教育 日本文典	全壹冊	正價金六拾錢	郵税拾錢

（甲の一）

著者	書名	册數	正價	郵稅
落合直文君著	中等教育 文法教科書	全壹册	正價金四拾五錢	郵稅六錢
落合直文君著	中等教育 國文軌範	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
小中村増田兩君著	中等教育 日本文學史	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
大和田建樹君著	和文學史	全壹册	正價金四拾五錢	郵稅八錢
大和田建樹君著	日本大文學史	全五册	正價壹册金四拾錢	郵稅八錢宛
萩野由之君著	中等教育 作文文法	全壹册	正價金參拾錢	郵稅六錢
大和田建樹君著	古文讀本	全六册	自一編至五編各金廿五錢 六編金卅五錢	一册郵稅四錢
佐々木信綱君著	校註竹取物語	全壹册	正價金拾貳錢	郵稅貳錢
佐々木信綱君著	校註伊勢物語	全壹册	正價金拾貳錢	郵稅四錢
佐々木信綱君著	校註方丈記	全壹册	正價金八錢	郵稅貳錢
佐々木信綱君著	校註土佐日記	全壹册	正價金拾錢	郵稅貳錢
佐々木信綱君著	校註更科日記	全壹册	正價金拾貳錢	郵稅貳錢
佐々木信綱君著	校註徒然草	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
大宮宗司君著	校註神皇正統記	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
佐々木信綱君著	校註明倫歌集	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
岸本宗道君著	古今和歌集	全壹册	正價金拾五錢	郵稅四錢
中村秋香君著	校訂吉野拾遺詳解	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅四錢
大町文學士 白河文學士 合著	帝國漢文讀本	全五册	正價金壹圓五拾錢	郵稅三拾錢
石川鴻齋君著	中等教育 漢文軌範	全壹册	正價金貳拾錢	郵稅四錢
中島幹書君著	筑山訓點 四書讀本	全壹册	正價金參拾錢	郵稅六錢

(甲の二)

著者	書名	冊數	正價	郵稅
安原健堂君著	箋註 正文章軌範讀本	全壹册	正價金參拾錢	郵稅六錢
安原健堂君著	箋註 續文章軌範讀本	全壹册	正價金參拾錢	郵稅六錢
校訂飜刻	ロングマンス 第一讀本	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
校訂飜刻	同 第二讀本	全壹册	正價金參拾五錢	郵稅六錢
校訂飜刻	同 第三讀本	全壹册	正價金四拾錢	郵稅八錢
校訂飜刻	ナショナル 第一讀本	全壹册	特製金拾八錢 並製金拾五錢	郵稅各一册四錢
校訂飜刻	同 第二讀本	全壹册	特製金參拾錢 並製金貳拾四錢	郵稅各一册六錢
校訂飜刻	同 第三讀本	全壹册	特製金參拾五錢 並製金參拾錢	郵稅各一册六錢
峰是三郎君著	中等教育 應用心理學	全壹册	正價金五拾錢	郵稅八錢
文學士 藤代貞輔君著	埜氏 實踐教育學	全壹册	正價金七拾五錢	郵稅八錢
眞島 岡田 兩理學士合著	中等教育 理化示教	全壹册	正價金四拾錢	郵稅六錢
高橋章臣君著	中等教育 博物楷梯	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
工學士 鳥居忩夫君著	中等教育 有機化學	全壹册	正價金四拾錢	郵稅八錢
理學士 鮫島晋君著	普通教育 算術教科書	全貳册	正價壹册金貳拾五錢	郵稅一册六錢
片山三田兩君合著	理論適用 普通算術	全壹册	正價金參拾錢	郵稅六錢
林學士 林鶴一君著	初等 平面三角法教科書	全壹册	正價金四拾錢	郵稅六錢
下田歌子女史著	家政學 上下	全貳册	正價壹册金參拾錢	郵稅一册六錢
中島義一君著	新撰小學女禮式	全壹册	正價金貳拾五錢	郵稅六錢
三浦智之君著	實用 家事經濟學	全壹册	正價金貳拾錢	郵稅四錢

(甲の三)

著者	書名	册數	正價	郵税
三島通良君著	學校衛生學	全壹册	正價金七拾五錢	郵税八錢
吉田晩稼君書	楷書千字文	全壹册	正價金三拾八錢	郵税四錢
橘千蔭君書	烏丸帖	全壹册	正價金三拾五錢	郵税四錢
大和田君著 一六居士書	明治書簡文	全壹册	正價金三拾錢	郵税四錢
大和田君著 鷺堂君書	明治女子書簡文	全壹册	正價金四拾錢	郵税四錢
農學士 大内健君著	中等教育 農學通論	全壹册	正價金九拾錢	郵税拾貳錢
農學博士 稻垣乙丙君著	農學楷梯	全壹册	正價金七拾五錢	郵税拾錢
農學博士 稻垣乙丙君著	初等作物通論	全壹册	正價金五拾錢	郵税六錢
農學博士 稻垣乙丙君著	增訂農學入門	合本全壹册	正價金貳拾五錢	郵税八錢
農學博士 稻垣乙丙君著	同 分本（一）（二）（三）	全壹册	正價（一）（二）各八錢（三）九錢	郵税四錢宛
農學博士 横井時敬君著	農業讀本 上下	全貳册	正價壹册金拾四錢	郵税壹册四錢
保田安政君著	商業讀本（一）（二）（三）	全參册	正價金拾參錢	郵税壹册四錢
保田安政君著	商業教科書	全壹册	正價金六拾錢	郵税拾貳錢
六條近衛兩君著	中等教育 世界商業史	全壹册	正價金參拾錢	郵税八錢
井上敏夫君著	國語漢學類語 作文錦囊	全壹册	正價金參拾五錢	郵税八錢
宮川鐵次郎君著	通俗文章學	全壹册	正價金參拾錢	郵税八錢
堀江秀雄君著	學生必攜 作文資料	全壹册	正價金拾五錢	郵税四錢

以上は本館發行圖書中中學校、師範學校、高等女學校、農學校等の教科書若くは參考書として適切なるもの、概要を摘載したるものなり其詳細の如きは本館圖書目錄に就き御承知あらんとを乞ふ

幸福散史遊江保君譯

（三月下旬發行）

豫告

出世の栞

全壹冊洋裝
紙數
正價金
郵稅金

原書は、目下諸學校の教科書に用ゐる（フツシング ツー、ジー、フラント）にして議論斬新にして引證精確。自助論よりも一等の上に住すとは世上自ら定論あり。羽化生が澤文又流麗に能く原文の神髓を得、原著者の言ひ能はざる所を言ひ一讀人をして奮然字内に雄飛するの志を與起せしむ多く得難きの良書なり

寒澤振策君著

（三月下旬出版）

新撰五千字典

全壹冊洋裝
袖珍美本
正價金
郵稅金

今や漢字制限論は天下の一大問題となり世の博識の士甲論乙駁す玆に於て著者此問題を決せんとて此編あり採る處の字數に因るものにして書中文字の下には一々通常簡易の熟字を掲け便利を計れり

（甲の五）

目次

發兌

謹告 俳諧文庫は今や俳諧紀行全集を以て全部完成を告けんとす古哲の編著多く名山に藏葬せられんとするものを廣捜傍採し皆校訂を經たり以て俳家几上唯一の珍とするに足れり而して近來物價騰貴の趨勢につれ紙價其他の原費悉く上騰し無比の廉價なる本書の如きは到底舊來の價格を保持し難く依て來る四月一日より改正し全部廿四冊壹部正價三拾錢とす江湖諸君願くは之を諒し陸續御購讀あらんヿを但來三月卅一日迄は現今正價を以て高需に應じ可申候

（甲の七）

總裁小松宮大妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人
大日本女學會發行

東京麹町區土手三番町二八

第壹號再版出來

○○○○○第貳號發行

定價金拾五錢全國無遞送料

東京神田表神保町三
大賣捌　東京堂

をんな

女學の通信教授を以て有名なる大日本女學會の機關雜誌「をんな」第二號發行せり其論說●學藝●修身●齊家●世務●史傳●譚艸●詞藻●雜錄●時事●彙報の諸欄孰れも名家の筆に關り記述平易懇切にて婦人雜誌中最も時勢に適せりとの世評を得たり偏に淑女方の愛讀を願ふ

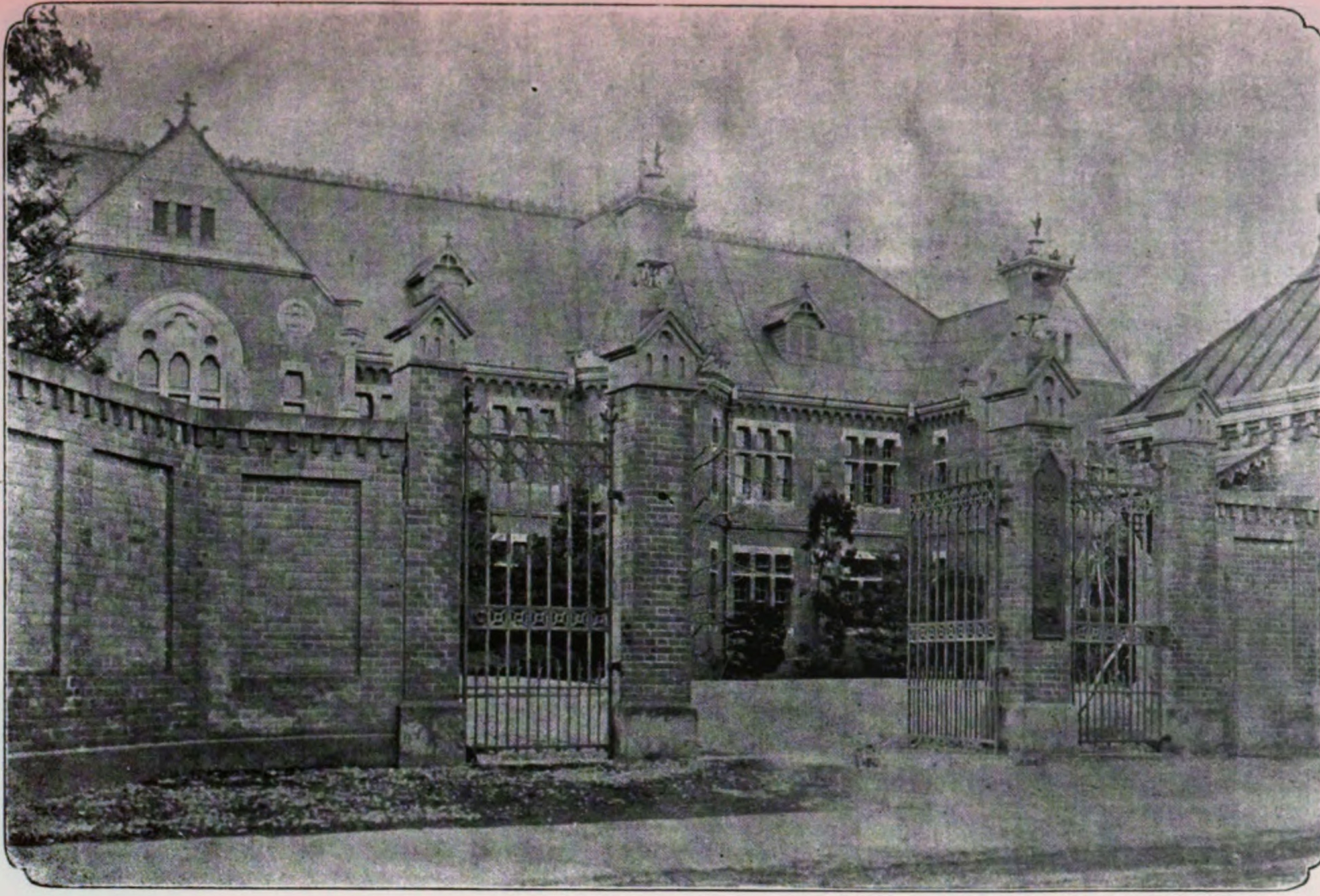
家事衛生

醫學博士三宅秀先生著
大日本女學會發行

總クロース綴金文字入
定價金六拾錢郵稅金六錢

東京神田一橋通町七
大賣捌所　有斐閣

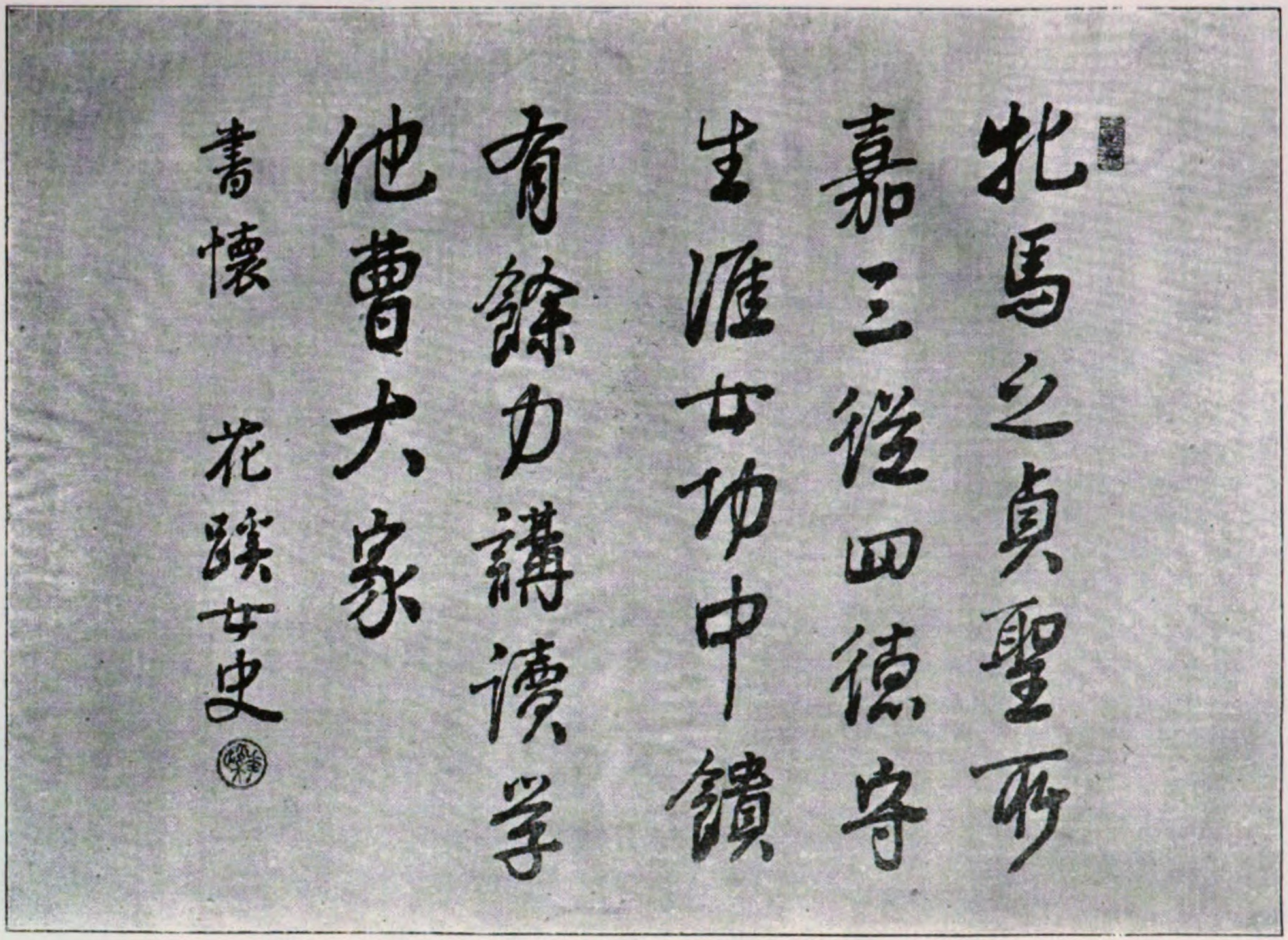
此書は醫學の泰斗たる元醫科大學長醫學博士三宅秀先生が文部省の囑託により各府縣師範學校高等女學校の女教員方を集め夏期講習會を開きて講義されたるものを此度大日本女學會より發行せられたるなり、書中、衣服、飲食物、住居、育兒、看病の五篇に別ち細密に其衛生法を示し我國一般の民度に應じて實行し易き樣に說明せられたり家政を主る人々に取りて此上なき有益の良書たるは勿論教育の任に當る人々にも缺くべからざる參考書なり



華族女學校



東京女學館卒業生



跡見花蹊女史の書



奈良高等女學校



生業卒校學女等高澤米

才媛筆蹟

愛敬女學校卒業生出羽すゑ子書

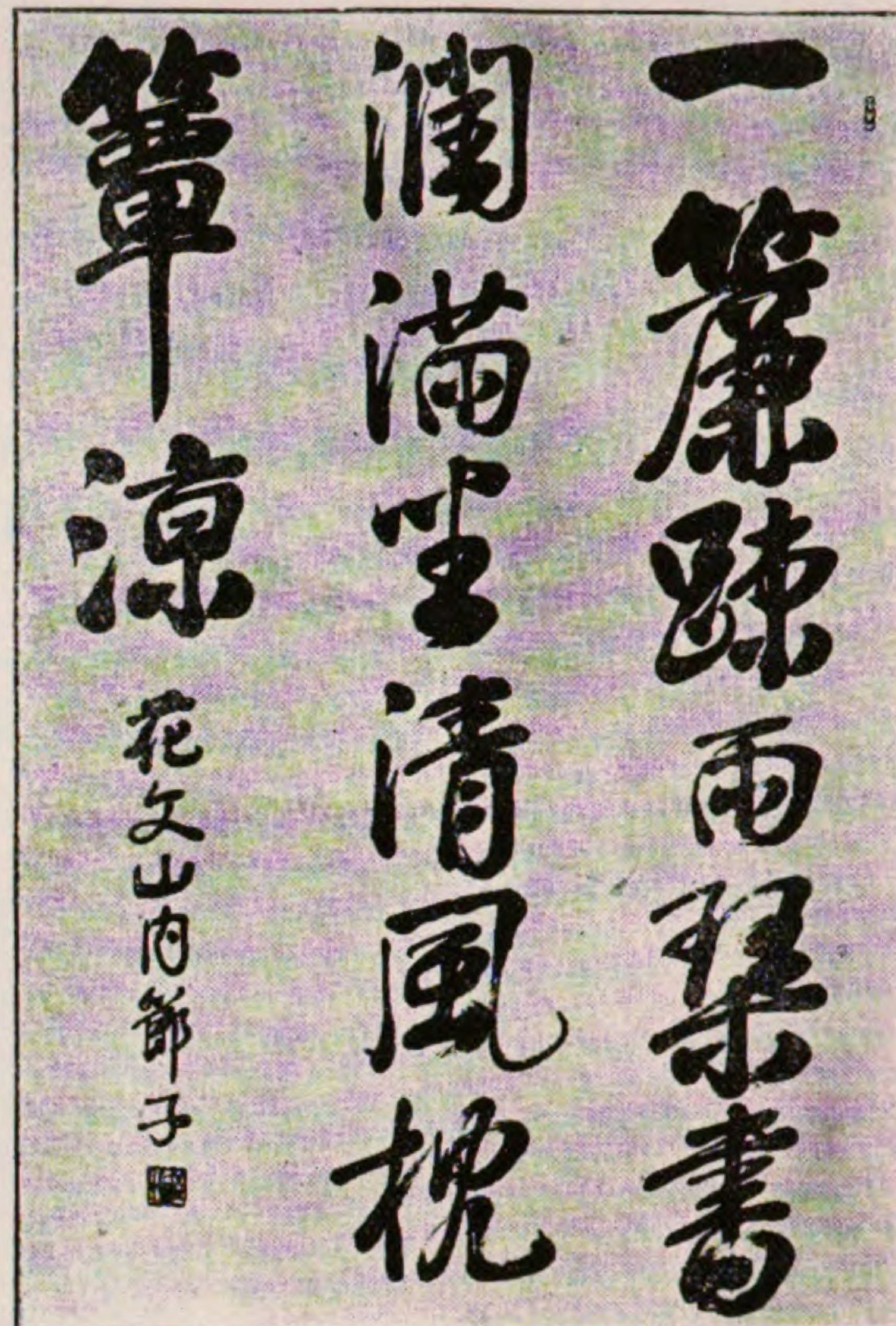




愛敬女學校卒業生山本政子書



愛 敬 女 學 校 生 徒


一簾疏雨琴書
潤滿堂清風枕
簟涼
花文山内節子



○博文館發兌袖珍書類

全一冊　洋裝袖珍美本

天地有情

―(第三版)―

文學士土井晩翠君著

峨々の山、洋々の水、以て晩翠君の詩を許すべし。此集君が今日迄の吟峨を錄してこゝに美麗の册子を成す。新體詩中別に一旗識を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ

正價金貳拾五錢　郵稅四錢

美文韻文　雪月花

―(第十版)―

大和田建樹君著

洋裝全壹册袖珍

正價金卅五錢郵稅六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ言々花を降すものは大和田先生の筆と爲す此篇收むるところ近作貳百篇纂し落英擬はざる今日の文學界中の旗鼓たるもの此書を擱きて他に何かある

博文館發兌

(一の二)

第十四版

鹽井、武島、大町三文學士著

美文韻文 花紅葉

全壹冊洋裝袖珍
正價三拾錢
郵稅六錢

春花秋葉は天の文、人間亦文辭なかるべけんや鹽井雨江武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に聞く。其錦心繡腸吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子に在り才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たるを、言を俟たず、天下文を好むの士、願くは一本を備へよ

第八版

文學士大町桂月君著

美文韻文

黄菊白菊

全一冊洋裝袖珍
正價廿五錢郵稅六錢

桂月先生の文は、蠻貊を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛。優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の摸範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可憐の冊子なかるべからす

大和田建樹君著

第三版

散文韻文

深山櫻

大和田先生の文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり。今此書は、先生の散文韻文貳百貳拾餘篇を輯めたる者、一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

全一冊洋裝袖珍正價四十錢郵稅六錢

(乙の三)

江見水蔭君編

新刊

短篇小說 月と梅

洋裝袖珍美本
紙數　頁

卷中目次

短篇小說

▲ぬれ燕
▲櫻山莊
▲放火犯
▲人の餌食
▲二人の海
▲難波舶
▲十人斬
▲貧家譜
▲山間の孤蝶
▲滊車の窓
▲魔日の出船
▲奉賀
▲わかれ
▲男泣き
▲梅見歸り

相撲小說

▲大錦の涙
▲黒汐の父
▲桃の谷の謙遜
▲鯱鉾の一番
▲綾波山の遺憾
▲大筒の骨拾ひ
▲源氏車の沈思
▲谷の戸緣切
▲鬼鹿毛述懷
▲八汐山の禁酒
▲曙の友情
▲鴨綠河勳章
▲梅崎の發心
▲智惠の弓

時代小說

▲元祿の花
▲朝日川
▲猪王丸

訪問實記

▲老探偵
▲老女將
▲新水夫

詩泉滾々として湧き、想地漾々として溢る。水蔭子の材料に富み、短篇に長ずるは實に明治文壇の珍とするに足るべし。此編、子が最も得意とする短篇中の傑作數十種の他に相撲小說、時代小說、訪問實記等を添へたり、子の觀察が多方面に渡りて趣味百様に躍出せるは、景整色ふ月と梅、春期絶好の讀物たるを失はず

江見水蔭君編 短篇小說 星 全一冊 洋裝珍美袖本 正價金五十錢郵稅八錢

江見水蔭君編 軍事小說 突貫 全一冊 洋裝袖珍 正價金卅錢郵稅六錢

發兌元 東京 博文館

(乙の四)

巖谷漣山著

女波男波

洋裝袖珍全一冊六百二十頁
正價金四十五錢郵稅金八錢

小說の體に過ぐるを斥く勿れ、個中大寓意あり大諷刺あり、論說の罵に失するを咎むる勿れ、這裡大抱負あり、大見識あり、若夫附錄の變女大學に至りては變生男子が大氣焔大の男も三舍を避くべき蓋し當代の大問題なるべし嗚呼大なる哉此書や實に寸珍の美本とす呵々

發兌元 博文館

櫻井鷗村君著

現代をんな氣質

再版出來

洋裝袖珍正價三拾五錢郵稅六錢

新刊

明治俳句

內藤鳴雪翁序文
竹村秋竹君編

維新王政の復興は明治文學の勃興となり、俳句の革新を促し、以て今日の盛況を見るに至れり、故に邦內の新聞雜誌にして此等俳家の作句を載せざるは殆んど稀なり、編者別に審美眼を以て方今作家中好句と認めたる者二萬以上に上り更に七千餘句を撰擇して、本冊となれり、春夏秋冬 此本なかるべけんや。

全一冊洋裝袖珍 正價卅五錢 郵稅六錢

（乙の五）

(二六)

女學世界定期增刊
第壹巻第四號 **壺すみれ** 才媛詞藻 妻の巻



小說

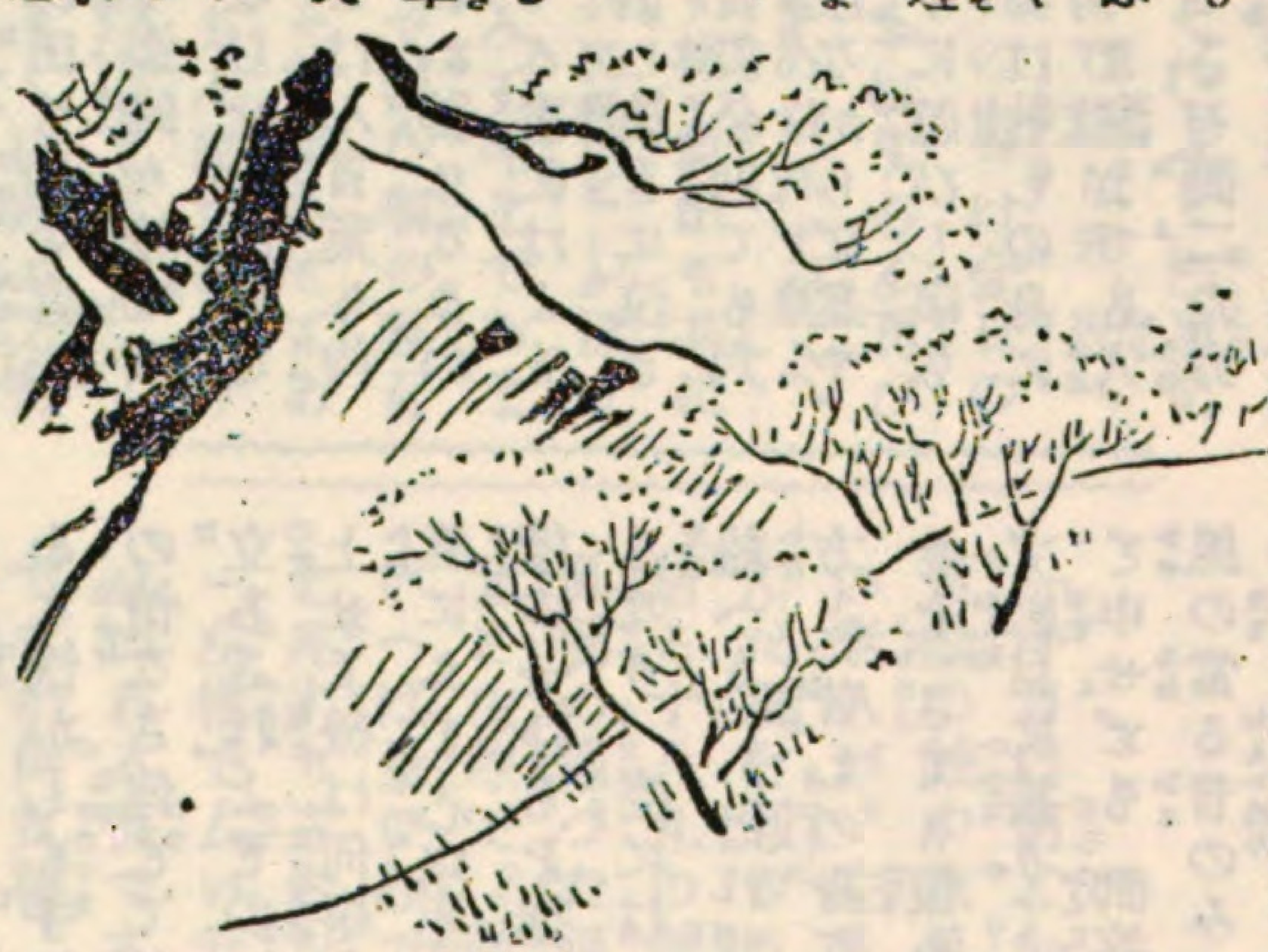
特賞 **無情**

田中はる風

夜のふけ行くまゝに、近邊の靜まると共に聞ゆる隣室の話聲、聞くともなしに聞き居たるに、それとも知らで、いかに前田の君よ、君なればこそかく打あけて申し侍るなれば、ゆめ人にな談り給ひそ、と云ふ聲は、年若き乙女の聲なり。何とて人にもらし侍るべき、と答ふるもまた女の聲。さらば申し侍らん實に我が身程世にさちなき者は侍るまじ、幼なき折父母に別れ、依るべき親類とてなく、離れ小島に只一人取り遺されて、せんすべも泣くばかりにて侍りしを、わづかなる知り人の哀れがりて養ひ給はりたれば、漸やう身の飢うる事もなく十五の年迄は事もなく送り居たるが、養父の御子に武雄の君とて其折二十歳になり給ふ君の侍りけるよ、わらはが斯かる身となりけるも此の君の爲よ、かく申さば浮きたる事の樣に思さるゝならんが、さる事はつら〳〵侍らず、長くとも聞き給ひてよ、とて鼻うちかむ樣子なりしが、やがて連くる樣は、さても十五の春わらは小學のわざを終へて、後都に出だし給はれと養ひ親に願ひしに、快くうべなひ給ひぬ、うれしくて用意も成

し明日は立たんと云ふ前日の事よ、養ひ父はわらはを呼びて、のたまふやう、早やくより申さんと思ひ居たれど、折なくて今日迄過せしが今日は御身の心を聞かん・爲呼びたるなれば何事も包まず云ふて給はれとて、やがてのたまふ樣、今更改めて云ふも可笑しけれど、武雄も早二十歳なれは、能き嫁を定め置かんと思ひたるに、幸ひ御身は今迄一所に住み氣も心も知れ居れば他家より迎へんよりはと思ひ妻とも相談し武雄の心も聞きたるに御身なれば如何で異存のあるべきかと答へしが、御身の心はいかに思ぼすか我等の望みを入れ給ふかそれとも武雄は心にかなはずや、確かに返事してよとのたまひし折わらはゝ未ださる心もなく日々人形など持ちて遊び居たる程なれば、斯かる事何と答ふべきかと思ひ煩ひ、たゞ頭を垂れたるのみなりしかば、養父は御心に染まぬにやと云はれしが、急に恥かしくなり行き胸のみおどりて侍りしが、漸くの事にてよしなに謀ひ給へと云ひしまでは臆へ居れど、後は何をなせしか夢中にて明けぬ、いざ立たんと門に出でし折、送りにと來給ひたる武雄の君の細かに旅の事など敎へ給ひ、つゝがなく歸りませせと談り給ひたる御顏、今迄も目にのこりて涙の種となり侍りぬ、其後文は度々通ひわが身も暑中休みには必ず返り侍りしが、何時も皆樣の御やさしきに長き日も短き樣に思はれ都に返らん日には何となく涙の出る事も侍りしが、變はれかはる物よ、わらは東京の學校卒業の後故鄕へ歸らんと思ひ居たるに、さる人のせちに賴み給ふに振り捨てんも氣の毒に又養ひ給ひし御恩の萬が一にても返しまゐらせんと思ひければ、或る學校に奉職し二た年あまりを過して故鄕なつかしく思ひ居たるに、出したる文の戾り來りたる事ありたれば、いぶかしとは思ひしが何事かの行き違ひならん近きうちに二三日まゐらんと思へば其折に何事も申さんと、さのみ心にも留めず居たりしが此の春の事少しいとまを得たれば久々にて父母の君の御樣子さては武雄の君にも御目に掛らんと勇みて上野より汽車に乘りぬ、行く程の心千里も唯一と時と云ふ汽車の走りも牛の歩みのそれにもまして遲き樣思はれ、空に聳ゆる筑波の峯も變り行く田畑の影色も、目には入らでひたすら家の事のみ思はれて先づ家に入りなば皆の君の如何に驚き給ふらん、母君は何とて前よりしらせぬぞとのたまうなるべしさぞたのしき事ならん、二年以前

の夏休み彼の折はいと暑の烈しかりしが今は春なれば庭にむしろ敷き花の前にて一日を過ごさん、夜に入りなば父君母君の御腰などさすりまゐらせん、東京の御話もせんそれよ此の土產出したる時は如何なる御顏を遊ばすか、武雄の君の好ませ給ふ物も求め來れば舌うちならして、味ひ給ふ折はさぞや嬉れしからんなど思ひ連くれば、速く行かまほしく一人汽車の遲きに氣をいらち居たるが、やがて止まりしは待に待ちたる仙臺停車場なり、嬉しくて急がはしく降り車を飛し、一里餘ある我が家に來りぬ、前にたてる藪も、小さき流れも、幼なき折の思出草ならぬはなく、胸に浮ぶは父母の御笑顏、武雄ぬしの御姿などあまりのうれしさに胸とゞろき、門の戶押しあけ入らんとせしが、あれ不思儀我が家と思ひしに見なれぬ人聞きなれぬ聲などするに、いよ〳〵いぶかし、前の文の事まで思はれてさすがに入り兼ねしがそも、かくとも案內をこひしに見も知らぬ女出で



來りたれば、父母の君の事申し出でしに、さる人は知らず此頃此所に來りたるなればと云ひし言葉いとも〳〵をかしく、其まゝ立ち出でしが、未だ心づかでさらばわらは家を違へしにやと、あたり見れども我が家らしきは外になくふと目に入りしは庭の櫻よ今を盛りと咲き出でゝ昔しを語り顏なるは正しく、我が家よ父母の君は何所に坐すか、と思ひてははる〳〵御目に掛らんと來りしを家のみにて君だちはいまさぬかと早かなしく、せん方つきて立ち居たる所に來りし女はわらはが幼き折より往き來したる隣の老母なるにぞ、近よりて聞かんとするに老母はいぶかしげに御身は何しに來りしぞとおそろしき顏して言ひければ、先づ驚き今迄の始終を語り父母の御わり家を尋たるに、老母は目を圓くし知ろし召さぬかと淚を流しつゝ語る樣はと云ふ聲うち振へ暫時言葉もたえてすゝり泣の聲かすかに聞えぬ、前田の君よ今思ひ起してもくやしさのせき來る物をあゝ手紙

の歸りたるも其はずよ、わらはの歸る半年あまり前よりたのみたる武雄の君はいづれにてか夜をふかしいたくゑひしれて歸り給ふ事にて、父君の御訓しも母君の御言の葉も耳には入れで家を外の御遊び田も畑も皆失なひあまつさへいづくにか行き給ひ、今迄歸り給はぬとよ其をうれいて御兩方ともまへなくならせ給ひしとか、そを聞きし時のわらはの驚き今更言はん言葉も侍らず、あれなどわらはに報らせ給はぬにか神もなきか佛もあらぬか速くわらはしりたらばかゝる事にはよもなるまじきを、おゝ遲かりき／＼と口惜し泣きに泣きふし侍りしが、老母になぐさめられて實に今思ても六月のあやめ十月の菊せんすべもなく、涙ながらに見やる目の前に見ゆるは庭の櫻よ、あれあの下に遊びし事もあるものを、櫻は春に遭ひたれど此の身は昔しの身にあらず、父母を失ひ夫に別れ、其上住むべき家までも人手に渡りし事のいかに情なき世の樣よ、さぞ御二た方は御心苦しくおはしつらん、御死目にも合ひまつらぬ不孝者、何の御詫を申しあげんか申しあげるとも御答へあるまじ、御墓の中の戀しさよ、今宵は一夜御とぎしてつくせし罪を御詫びせんと泣く／＼其所を立ちけるが、十數年の其間朝夕目なれし家の樣今更別るゝかなしさに、又たち戻りて見入りけるに、花も哀れと思ひしかはら／＼とちりてわらはの手にせる包に止まりぬ、あな懷かしと手に取りて涙にかきくれ居たるに、家人の情なさ何とて其所に立ち居るぞ、あやしき者よ疾く立ちされよとのゝしられて いと口惜しくはつと取り上せて後は何事をなせしか知らず、身に冷々と當る夜風にふと心附きしに、父母の御石碑の前に最前取りし櫻の一ひらを握りしめて、前後も知らず泣きふし居たるなり。空にはかすめる月の影ありて、此身を照らし給へり、あはれ此の下に坐はすは御なさけあつき御二方よ、昔しの身なればかく御墓はみすぼらしくはあるまじ、さても恨めしきはわが夫よ、何處に坐はすとも必ず御目に掛りて御心行く樣に致さんゆるさせ給ひてよと申せども、御答へとてはなくたゞ御墓じるしの松に風の當る音のみいと淋しくかたへにある包は、よろこび給ふ御顏見んとて持ち來りし土産よ、今はかへりてあだとなりける事よ、又今迄奉職せしもかへりてかゝる事を起す基となり侍りぬ、かくと前より知りしならばなどて都にあるべきか、何事もいすかのはしとくひ

違ひ、今更うらめどせんもなく唯むせび入るのみなりしが、夜も明けゝれば、御名殘はつきねどもかゝる樣人に見られむ事のうしろめたさに、必ず武雄の君にめぐり合はんとちかひて立ち出づれば、後髪引かるゝ思にて後のみ見返らるゝぞやる方もなし、それより汽車にて上野には着き侍りしが、たゞ夢心地にて侍りき、思へば世の中は無情のものにて侍るよ、昨日の喜は今日のかなしみよ、我が夫は今頃如何にしておはすらん再び家を起し給ひしかど、思ふ折は身も世もあられず候よ、御察しあれど、よゝとばかりに泣きふす樣、前田も共に涙にかきくれ居たる樣子なり、吾れも共に袖をしぼりぬ、あはれなる女よ、つれなき夫をたのみて今まであまた、嫁にせんと云ひ越せしをも、皆行かで養ひ親の家をもとの如くなさんとて、日毎に武雄をさがさんとてあてもなく歩みては、夫の心のもとに返らん事を神掛けて願ふとか、あはれ燈火くらく五月雨降りしきる夜半、さては月すむ秋の夜などには寢られぬまゝに來し方行く末の事など思ひては、心細そさに枕の紙をや絞るらん、哀れの女よ。

甲賞

浮沈

遠江氣賀町　氣賀澄子

「今日は何とか沙汰が有るだらうが大變遲いね。」黃縞の紬の夜具を着た。病み耄けた七十餘才の舅らしい老人が。左も重さうに寢返りをして。どんよりと沈んだ眼を懶さうに見開いて。枕邊に氣遣しげに坐つて居る十八九の嫁に言つた。

鼻筋の通つた眼元の凉しい。殊に際立つて好いのは口元と生際で。隨分目に付く容色ではあるが。何方かといへば憂ひ顏であるのは。種々の心配が。あたら美人を見劣りさせたのであらう?。

「左樣でムい升ね。もう遲くも昨夜迄には何とか知らせがある筈ですのに。何うといふものでムいませう‥‥。ですが阿父樣。餘り御心配遊ばして御障りになると困り升から。もう取越苦勞はお止めに遊ばせ。今日はきつと好い沙汰がムいませうよ‥‥。オヤもう九時。お藥の時間が參りました。召上り升か。そしてまた御足

でも擦りませう。」

「ア、飲みませう。お前も長い間の看病で嘸勞れるだろうが。俺はもうお前許が賴りだから。何卒見捨てずに死ぬ迄傍に居てお呉れ……。健三が立つ時分は未だ此樣に惡くは無かつたんだが。此頃ぢやあもう起きて見る氣も出ない……。此樣ぢやあ何時死ぬか分らないが。何卒死ぬ前に一度健三に逢て死にたいが。併し之も空賴みで健三はもう魚の腹に入つて居るかも知れない。」

「マー飛でもない……。阿父樣今度の御病氣はお重うムい升が。御養生次第で御快復遊ばすッて。艶雄さんも仰しやつたぢやムいませんか。御氣の持樣で御病氣は長くも短くも成ると申すとですから。お力をお落しなすつてはいけません。また旦那樣も。此度のお役は隨分危ない仕事ですけれども。マー外に自分から進んで行ふつていふ人が無いものですから。阿父樣とも御相談で。三日月の艇長に成てお出でなすつたんですが。ホラ昨日私が讀みました時事新報でも大層褒めてムいましたろう。旦那樣が御歸へりになれば。キット半年以上行衛の知れない月島丸の沈沒したかしないかも確かになるだろうつて。世間でも大變待て居る樣に書いてムいましたね。旦那樣のことですから一月や二月長く成ても。分る迄はお探しなさるに違ひ有ません。だから例令目指してお出でに成た遠州灘に暴風があつたからつて。キット三日月も沈沒したとは限らないと思ひ升よ。阿父樣。さうぢやあムいませんか。」

「それはもう海軍の軍人に育てた位だもの。海で死ぬのは當前の事。殊に政府の手で二度も三度も捜索しても分らない月島丸には。百人以上の乘組員も有たといふし。其親や兄弟の心持は何んなだらうと察すると。我子で譽めるんぢや無いが。健三に眞實は勇ましい軍人だ。何うしても分らないつて。其まゝにしようとしたのを。進んで願つて。確かに何處々々と分つても居ない廣い洋へ出掛けたんだもの。假令死んだつて遺憾はないが……。忰を待兼るより俺は却てお前が可愛想でならない。此家へ客分として來た丈けで。婚禮も濟さない中に健三は出掛ける。俺は長患ひをする。實に心細かろうと氣の毒で……。お前の爲め猶健三の歸りを待兼るよ。」

「マ勿躰ない……。」

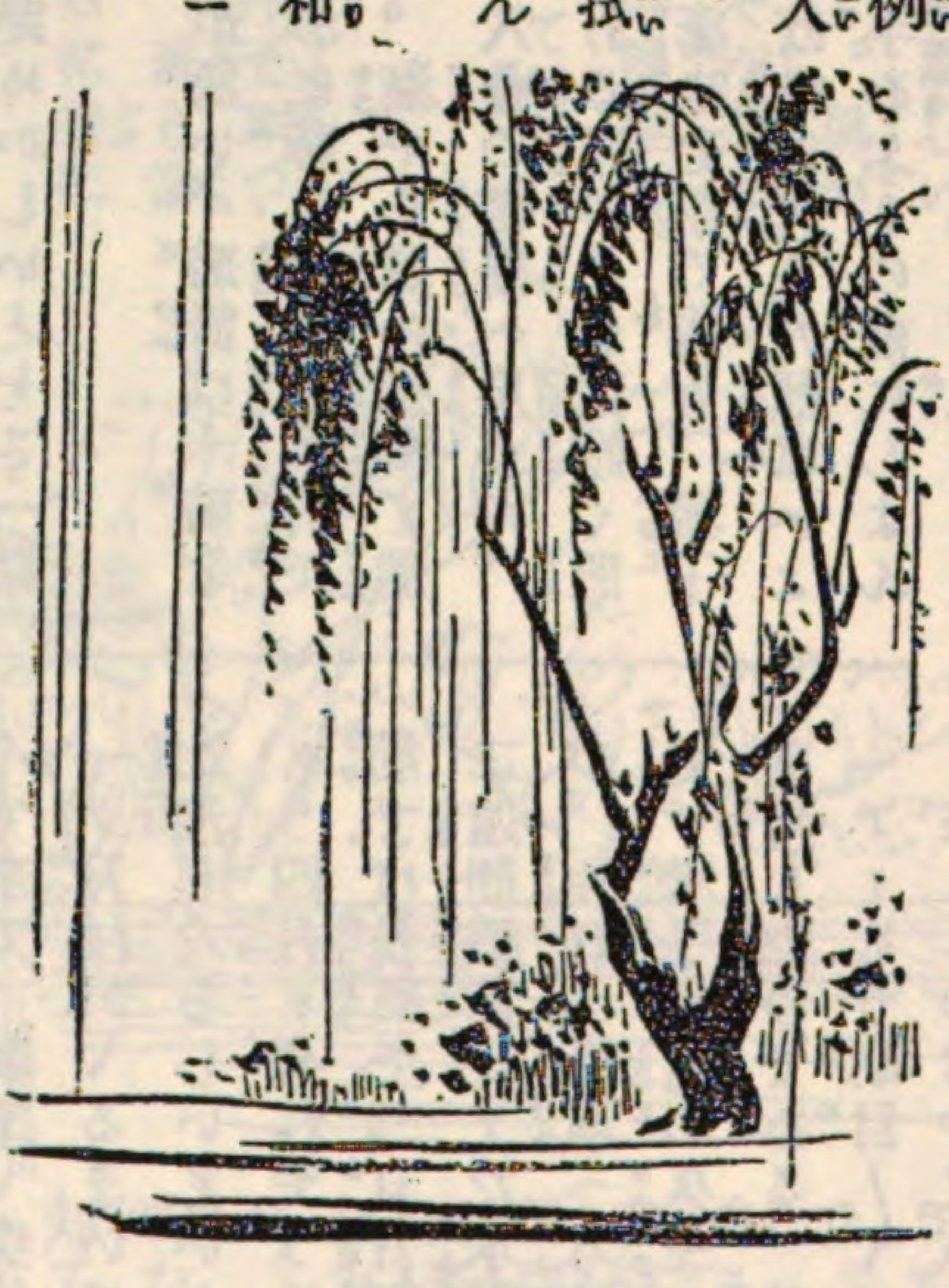
舅の久三を慰めやうと務めて居た雪子は。今更の様に悲しく成て。胸は一ぱいになるし。涙は止度もなく頬を流れるので。

「阿父様一寸御免遊ばせ。」

と。ついと立て襖を明ける出合頭に。豫て主任醫で。且健三の從弟の松山艶雄が。例の心安さに案内もなく病間へ入つて來た。デ雪子は仕方なく。手早く「ハンカチツフ」で涙を拭て。艶雄に坐布團火鉢茶とだん〳〵にすゝめた。

「叔父さん今日は随分いゝ日和ですが御氣分は如何です。ナニ相變らずですかハヽア。」

と艶雄は病人の手を取うちも。雪子の顔をじろ〳〵と眺めて居る。尤も之はいつでもそうなので。病人よりは雪子の様子をしげ〳〵と見るのである。雪子は艶雄が舅のお氣に入り。殊に夫の從弟といふので。出來る丈は愛想よくして居るが。心の中では爪はじきをして居る。开れも其筈。健三が出立以來。猥らな艶書さへよこしたのである。



「成程相變らずですナ。熱が何うも下らないので困る。粉藥を少し加減しませう。ナニ健三さんですか。私も實に心配ですから。今しがた海軍省へ寄て水島（朋友の名）に聞きましたが。三日月艇の難船は大抵確からしいです。現に其暴風の時。三日月の難船しかゝつて居つたのを遠くで望んだが。何分救ひに行く譯に行かず。其儘自分の船の難を避けて。漸やく自國へ歸つた英國の商船が有るといふとです。」

「して見ると健三は十中の九迄は魚腹に葬られたものだネ。」

「併し叔父さん。例之健三さんに萬一の事が有ても。それは御覺悟のと。また立派な軍人の任を盡す爲に不慮の災難に逢た事ですから。仕方が有ません。それが爲め貴方まで弱くお成なすつてはそれこそ困り升から。確かりなさらなくつちやいけません。」

雪子に懸想して居るとは。夢にも久三は知らないので。

相變らぬ艶雄の親切を謝し。自分及健三がいよ〳〵世に亡くなつたら。雪子と結婚して櫻井家を立てる樣。幾度と無く艶雄に繰り返した。雪子はもう斯樣な話は聞くに堪えられなくて。ツッと居間へ外した。艶雄は思ふ坪と。病人を出來る丈け慰めて。歸りにはわざわざ雪子の部屋を尋ねて。亦例の艶めかしいことをさへほのめかして行つた。

日は暮れても健三の安否は報知が無い。時計は十時を打ても。門を音づれるものは靜かに降る夜の春雨許である。雪子は舅に度々促されて。漸やく舅の病間と隣つた。自分及び夫の居間である八疊の書齋へ戻つた。室の眞中に。たゞ一ッ敷かれてある床の上を薄暗く照して居る行燈の光も。何となく凄味を帶て居る。雪子は臥戸へ入ろうともしない。半ば襟に埋めた顏はいよ〳〵蒼白く。枕頭に置いてある手あぶりの前にしよんぼりと坐つて居る。ホッと長い溜息をして。見るともなく夫の机の邊を見やつた。自分が手拵らへの郡内の坐布團。然も夫の氣に入つて居た坐布團。愛玩して居た古銅の一輪生け。さては夫が夕飯後。例の樣にして寄り掛つた床柱迄が懷かしく成て。健三の面影が目の前にあり〳〵と見える樣な心持がする。雪子は堪えられなく成て。机の曳出しから取出したのは。出立の數日前寫した。海軍大尉の正服を着た櫻井健三が勇ましい寫眞で有つた。雪子は凡そ五分間も昵と見つめて居たが。持た手がブル〳〵と慄ふと共に。双の眼もうるんで來て。其まゝ突伏して忍び音に泣き出した。

一ヶ月はかゝるまいといふ豫定で。二月上旬健三は。沈沒したらしいといふ月島丸の搜索に出掛けたのが。もう四月も暮れやうとするのに風のたよりもない。其筋では暴風で三日月艇も沈沒したと專ばら噂されて。二週間程前。また水雷艇三日月の行衛を搜しに行た艦が。昨日は横濱へ入港する積で有たのがまた違つたので。雪子と舅の久三とは。堪えられない程の心痛の種を增したのである。時計は十二時を報じた。

「アーもう駄目〳〵。斯樣に遲く成て何うして電報が來るものぢやない……。斯うして居ても仕方がない。暫く床へ入つて見やうか。」

雪子は床に就くは就たが。生憎「セコンド」の音が今夜に限り高い樣で。窓を打つ雨さへいよ〳〵しげく。折々は舅の寢苦しさうな呻き聲も聞えて。眠らうと思ふ

程眼は洗つた樣に冴える。明方に成て。夫がしぼる樣な軍服を着て。生きた顔色もなく。阿父樣を頼むぞと。己が手を取ると夢見たのは。流石に少しはまどろんだのでもあろう?。

夢が醒めてからは。猶胸騒ぎが烈しいので。曉の鴉より先きに起きて。舅が朝飯の仕度を何くれと。勝手で指揮して居た雪子を驚かしたのは例の艶雄である。其手には一通の電報を持て居る。

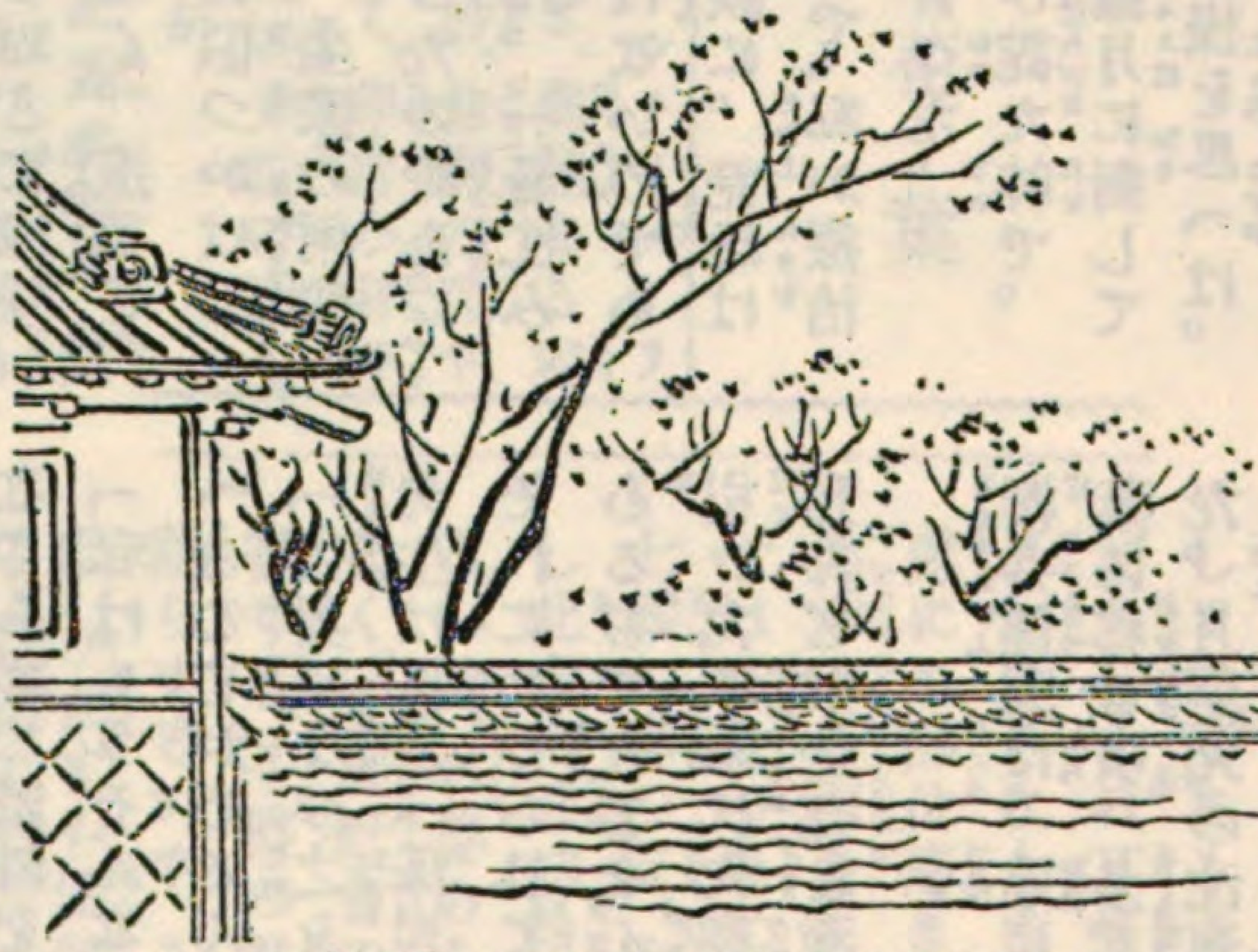
「ア電報?……。何うです。」

思はず雪子は叫んだ。

「海軍省から水島が。たつた今受取つたつて屆けてくれましたから。直き當家へも沙汰が有でせうが。御目に掛に出ました。」

底氣味の悪い笑顔を押隠す樣にして。艶雄は雪子に電報を渡した。雪子は思はず其塲へどうと倒れたが。幽かな聲で。

「艶雄さん。何卒阿父樣に之れをお聞せなさらない樣に。」



と言つたが。艶雄は聞えぬふりして奧へ急いで行た。孝行な雪子の心を察しもせず。艶雄は思ふ心が有るので。叔父久三に。全く健三等は暴風の爲に溺死したといふ事を話した。久三も豫て斯うあろうと覺悟はして居たが。病み疲れた身で。此樣な悲しい事を聞ては。一時に身も心も消える樣な心地がして。急に容躰も悪しく見えた。艶雄は心からの親切では有まいが。兎に角醫師の手で出來る丈の介抱をする。艶雄も之程に叔父が一時に重ろうとは思はなかつたが。實に僅かの間に容易ならぬ容躰と成た。久三自身も。死の近づいたとを知てか。艶雄の介抱で漸やく我れにかへつた。雪子をも枕邊に喚んで。健三が亡くなつた上は。櫻井家の血統が絶えるわけ故。甥の艶雄と結婚して。櫻井家の後を續ぐ樣にとくれ〴〵も遺言した。艶雄の得意なのに引かへて。雪子は涙に咽ぶのみで返事も出來なかつた。久三は遂に二三日を經て此世を見捨てた。

一時に親夫を失つた雪子の悲歎は。なみ〳〵ではないので。書く筆も涙ににぶる程であつた。

久三及健三の葬式も濟んで。親類も協議の上。いよいよ雪子は舅の遺言で艶雄と結婚せねばならぬ事に成つた。是は無論雪子の返子を聞いたのでもなく。遺言といひ。殊に艶雄の樣子もよく。丁度雪子に似つかはしいので。まだ若い身を一人でおくのもと。生家の兩親始め親戚が。一も二もなく取極めて仕舞つたのであつた。元より浮々した方では無かつた雪子は。一層沈み勝ちで引籠つてばかり居て。何人にも會はないのである。親類の重だつた人々が心配しての相談に。艶雄は事も無げに。婦人によくある「ヒステリー」で。私が療治すれば一ケ月位で大丈夫全快しませうと言つた。

結婚も愈明日と成た日の夕方。雪子は思ひ詫た躰で。書齋の小窓に寄て。人のもてはやす春の朧月に對して泣くのである。舅への義理を思ひ。夫への操を思へは。實に身の置所もない程で。雄々しい雪子の心も流石に攪亂されて。殆んど狂氣せん許である。

主人が二人まで一時に亡くなつて人少なの。殊に夕暮の淋しさを破つて。けたゝましい鈴の音に續いて。號外の聲が聞えたと思ふ間もなく。書生の牧村はあはたゞしく雪子の居間へ駈け込んだ。

「ヤ、奥樣またふさいで許……。マーそんなにお泣きなさらずと號外を御覽なさい。」

「私はもうそんなもの見たくもない……。今少し考かへることがあるんだから。捨てといて下さい。」

「否奥樣まづ之を御覽なさい。考がへ處ぢや有ません。先生は孤島へ泳ぎ附いて。日本丸が其附近を通る時。それに助けられて。昨日長崎へ御着きに成たと書いてあるぢや有ませんか。」

引ッたくられた號外は。無言なる讀人の熱涙を以て。殆んど其全部を濡ほされた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

櫻井健三は。遂に五月の半ば。櫻も散て木々の梢は青葉に移る頃。多くの友人の喝采のうちに事なく歸京した。月島丸の沈没は。數へられぬ程の艱難の末。漸やく確かめられて。檣まで拾つて積み込み。いよ〳〵歸る日に成て難船したとの事で。久しく不明であつた月島丸の沈没は。健三が危難の中も肌身離さず守護して居た。船長の日記で確かに成て。健三が名は海軍部内

否日本國中に稱揚された。雪子の喜びは何んなであろう！。是れと同時に艶雄の失望は。

賞 女優

德島市　波間花葉

（一）

此處は倫敦の有名なる劇場にて、女優ベントリメーリ嬢の一座なり、嬢は今年未だ廿四歳なれど、美麗なる容貌と共に、舞臺に出でたるしぐさ擧動の妙、音調の凉やかなる、當時此れ程の優はなかるべしとて、非常の好評にて嬢が舞臺に現はるゝ時は早や見物は花束投げ出して、暫は拍手喝采の聲鳴りも止まざるなり、

されば嬢は何不自由なく、數多の貴公子に愛せられ、貴族も及ばぬ生活をなせり、されど此嬢の身の上は最も哀れなるものなり、いざ謂はん此嬢の身の上を詳かに嬢はもと片田舍なる貧家に生れたり、されど其系統は決して鄙しきものに非ず、其父母は日耳曼の貴族にて、故あつて此英國に流れ來り、浮世を捨てゝ平民に身を投じたるなり、されば唯一人も彼が日耳曼の貴族なりとは知らず、此夫婦の片言交りの英國語にて、折々は日耳曼語の交り居るを不思議に思ひ、斯かる貧家の常として如何なるゆえやと問ひけるに、もとは英國なりしが久しく日耳曼に居たりし爲めなりと謂ひ遁れしかば人々もさなりと思ひて疑ふものも非ざりき、されど何處にか品位高きには皆々敬服せりとぞ、嬢はこの閑靜清淨なる田舍に初聲を上げたるなるが、嬢が拾六歳までは浮世の塵にも染まず、いと無事に暮せしが嬢が拾七歳の春の頃、倫敦の貴公子此地に駕を枉げられて、暫し此處に遊び給へり、貴公子は名をリーサの君と呼びなして、名譽ある子爵の若君なりけり、美男の聞え隱れなく、交際社會の令嬢達は何れも、リーサの君に懷ひを寄せて、子爵の君の夜會には、いづれも一しほ粧飾ひを凝らすとかや、されど君は此等の事には頓着したまはで、ひたすら旅行を好ませられ、暇の折々には微びやかに、近郊の散歩を常とし給へり、今日も亦例もの好奇心に驅られて、此村には來遊せられしなりけり。

（二）

春風輕う野邊は霞みて、空にはおだやかなる雲の低う漂ひ太陽は圓かに金色の光を放てり、一面に菫の花美はしう小蝶は香に醉ひて、長閑に翩々と彼方這方に飛び舞へりおりしも帽子眉深に杖を振りつゝ下僕も連れず、漫歩と畔道をものしたまふはリーサの君なり。弗と視れば道野邊に草花を摘む少女ありき、黄金の髪ゆら〳〵と春風にうち靡かせつ、頓がて摘みたせる花籠を持ちて、日耳曼の哀歌を小聲に謳ひつゝ、太陽の光線をまともに浴びて、美はしき顔は眩ゆき迄に照り輝やき、其短かき裾の衣服は鄙びたれど、其の無邪氣に好き花やあると視つゝ來かゝる樣の愛らしく、リーサの君は粧飾なくこの自然なる美に思はず、微笑み給ひて、突と寄り添ひて「のう御身の持てる花の愛らしき事よ吾に其花一つ惠み給はずや」と、謂ひ給へば少女は顔うち赧らめて「ハイ、此花の御入用なれば幾何なりとも」とて籠の美はしき花をよりて參らせけり、リーサの君は感謝の辭もて其花を受取りつ「御身は澤山なる其花を如何にしたまふにや」と問ひ給へば、少女はいと低き音聲にて「こは何れも花束になすなり」とていとゞ顔を赧らめぬ、リーサの君もよしなき事尋ねしよと想ひて「其美はしき花は何處に求めしにや」「オ、此花は彼這なる小高き丘に」と彼那邊を指さし示しぬ「のう孃よ、何卒吾を其花のある所まで導き給はずや」「そはいと安き事なり」とて兩人は連れ立てり、少女は先に立ちて進み、それ此邊なる花こそ最も美はしきなれ、と愛らしき笑みを傾けて後なるリーサの君を顧みて謂へりき。

前の程よりリーサの君は此少女の美はしく、しかも犯し難き品位あるに怪しき心地のされて奇異なる想ひになやめるなりけり、さるに今斯く謂はれて「ヲ、此花よりも御身の方がいとゝ麗はし」など想はず手を握りて戯れ給へばアレョと思はず聲を放ち不思儀なる眸もてつと飛びのきぬ、リーサの君は一しほ耻ぢらひて「あゝ惡しかりし許してよ」と眞面目に打詫ぶれば、少女も前の如く無邪氣に樂しく打解けたり、兩人は春の野に彼方這方と逍遙ひて、太陽の斜めに傾く頃漸く家路に着き、リーサの君も一夜を少女が家に宿れり。

其よりリーサの君は漸々此田舎に來給ひて、遂に孃と相愛し夫婦の約束迄し給へるなりけり、さるに一月程前よりリーサの君の姿見えず、如何せしか、我身の身分

の逢へるに嫌いてか、それとも御病氣にやと、孃はいと
ゞ心配せしかど遂に來り給はず、哀しみながら早や一
年も立てり、斯かる内に孃の父母は孃を捨てゝ死の國
へと逝けり、孃は詮便なく悲しみたりしが悲しみのあ
げくや、遂に大決心を起し、女の身の大膽にも倫敦に行
き、いざリーサの君の薄情を訴
んとて獨り旅立ちたり是れ孃が
拾九歳なる年の秋にぞある。

（三）

人の身の上變れば變るものかや、
孃が拾六歳の齢までは清き汀に
寄る波の安らかに暮せしが、愛
情てふものを覺え染めてより、
數多き悲みに出合ひて仍もこれ
より艱難をなめんとはする。
さて孃は假に倫敦に至りたるなれば、其市街の繁華な
る衣服の美を盡せる、何れも歎くべき事のみにて、有繫
に我姿の耻かしく、リーサの君は斯かる所に住み給ふ
にや、妾の如き鄙しきものを見捨るは不思儀に非ずと



思ひて心細さも一しほなりき、されど此より田舍に退
返さんも辛し、如何はせんと市中を彼那此那と彷徨ひ
あるき遂に廣き公園にと出でたり、若しや彼の君は在
まさずやと氣を注ばれど、これと想ふものはなかりき。
孃は果敢なく歩む力も失せてよろ〳〵と彼那の木影に
憩へり、折から驀直に馳せ來る馬
車あり、弗と車上を覩れば輝くば
かりの美人と、相乘りせる貴公子
あり、何心なく其人を見れば、憎く
や今迄束の間も忘れざりけるリー
サの君にぞある、あまりの事に茫
然と馬車の後を見送りながら、扨
ても斯かる事とは期しながら、什
麽に鄙き身なりとて、僅か一年立
つか立たぬに我身を捨てゝ顧みざ
るとは、何たる情なし男子ぞと、今はなか〳〵に愛想の
盡きて元より潔白に育ちたる身の、早くも心を取り直
しぬ、さりながら想へば口惜しく亦彼の女こそ何物に
やと、往來の人に外事ながら尋ぬるに、おもはざりけり
彼れは當時有名なる女優にて名をミスレーとなん呼び

なすものなりとこれを聞くや、何思ひけん孃は遂に身を俳優の社會に投じたるなりき。

（四）

是より孃は一心に勉強なしつ一二年にして早や一かどの俳優とはなれりき、先づ始めは田舍にて一二度興行せしが、何れも好人氣にてこれならばミスレー孃と競爭するも近きにあるべしと、勵みに勵みて、遂に其翌年倫敦大劇場にて興行する事とはなれり。

興行の初日より非常の好人氣にて孃が一度び舞臺に現はるゝや見物は皆々醉ふたる如く、とりわけ其悲劇の處などは顔を蔽ひて視るものなき程なり、されば何處に斯かる女優の隱れたるやなど噂取々にて、名聲旭日の登るが如く、僅か一年立たざるにベントリメーリの名は知らぬものなく劇場社會を動かしぬ。

こゝに亦リーサの君の身、上如何と見るに君は初よりしてメーリ孃を忘れたるには非りき、もと〳〵身分違へるに、到底も末長く添ふる事の出來ざるものと思止め、切めてもの慰みにもと或日偶と劇場へ行きけるが、ミスレー孃の姿何處やらにメーリに似たる處あるに、うかれ男の心動きて此より身を持ち蕩して、ミスレー孃を愛せしなりき、されどミスレー孃の浮氣なるに、女優とは斯かるものかと、間もなく愛想の盡き、此頃は一間の内に籠りて、交際社會にも出でず、思へば田舍のメーリと夫婦の約束迄なせしが、定めてわれを薄情なるものと思ふならん、まゝよ身分の違へばとて何かは、明日は行きて尋ねんと思ひては中々に嬉しく、氣の引き立ちて久しぶりに、廣き庭に出でゝ散歩をぞなしけり、木立深き所のベンチに腰打掛け、懷しき或想ひもて恍惚と空を眺め「あゝメーリよ許してよ、われは決して御身を忘れしには非ざりしなり、されどされど、吁如何にしても吾れの悪しかりき」と身を悶え悶えつ、

不意に後よりリーサの君の肩に手を懸くるものありけり、誰ならんかと振向けば、久しく訪はざりし友人なり「君は何を考へつゝあるにや、此頃は少しも交際社會に顔を出さぬではなきか、令孃たちが泣いてゐるべし」と調戯へども取り合はず、「僕は少し考ふる事があるから」と避けたり、友人は尚も「そう一間にばかり居ては害になるチット劇場へ行き給へな、此度のベントリメーリ孃の一座は非常に面白い僕なども昨晩行つたけれ

ども今夜も行かんと君を誘ひに來たのだ」と頻に進めて止まざりしにぞリーサの君はメーリの名を何とやら戀しくて遂に身を引かれけり。

(五)

さるほどにメリー孃は數多の貴公子に愛せられしが、其内にて當時有名なる侯爵の弟君なるセコレー侯といふあり、孃を愛すること狂するばかりにて、屢々愛情の言葉を吐きて孃を困らし給へりき、されど今は昔の田舍娘に非ず、交際に長じたる女優なり、言葉を左右にあやなして靡くが如く靡かざるが如く、他の貴公子と同じく平等に交際せりき、今日もセコレー侯の來りて、種々の品物を持ちメーリの心を迎へんとはせしなり。亦愛き事よと思へど色にも現さず、暫し待ちてよ、少し用のあればとて辭へぬ。孃は廊下をつたひて庭に出て散歩せんと、下らんとする刹那、後より孃を呼ぶものあり。

孃は何人ぞと想ひて顧みれば、常々愛顧になし給へる貴公子なれば、よきほどに會釋しつ弗と其傍らなる一人を視れば、想ひきや憎し戀しと想へるリーサの君なり、孃ははつと驚きて氣はうつゝの如く心の異しう亂れ始むるに、いと苦なく垂頭けり。

此時孃がリーサの君を視たらんには、其駭きの大なるに感ずるならんが、遺憾にも此有樣を見る能はざりき、漸く心を取りなほし苦しさを壓へて平氣に粧へりしがリーサの君も心を取り靜めしか、前の駭き影さへも視えず、孃は却て惡く顏を青くしながら、宜しく御愛顧をと、立派に云ひて初對面の挨拶無事に濟みたり、孃は心を靜めんと二人の客を其儘に己が室に赴かしめはら〱と庭を彼方這方漫歩せり、想へば彼の君は今も尙ミスレー孃を愛せるならん、われに會ひて顏色もかへず、斯くも冷淡にあしらふかと、流石に口惜しくよし〱彼方もさすれば、われも冷淡にせんなど、キット想ひて遂に孃は室に歸れり。

孃が室に歸れば早や方々は、椅子に就き給へり、セコレー侯は完爾やかに何處に何せしなど尋ねて、返事もせざるに直ぐ孃の手を牽りて、傍らなる椅子に座せしめたり、孃は竊にリーサ君を覩れば、其樣を見て心快からぬか、眉に苦悶の色見えたり、孃はいとも滿足げに前の事を忘れし如く、快活に談笑談話なして、其日は無事に忘れたり。

（六）

今日はセコンー侯の大夜會なり、數多の貴紳淑女は大廣間に集まりて今舞踏最中なり、其列より離れて靜に庭に下る一人の美人あり。

やがて後園の花檀のある方に歩みを運ばせり。

廣々と花檀は美はしき花植えられて皆一樣に月光を浴び、紅なる黄なる紫なる、黒く白のみが一しを明瞭と冴えて見ゆ、美人は其傍らに立ちて身動きもせず空を仰げり、面は青白う後に緩く垂れたる髮は、微かに打震へり、雲の如き裳裾は長く地に曳きて高尙に、されど其眸は怪しき露の宿りて、息烈しく遂に細く細く眸を閉ぢたり、後の地に印せる影はびり〳〵と打搖けり、啜る音は次第に高く堪えやらぬか、よろ〳〵とたぢろかんとする刹那に、後より犇と胞き締むるものあり。

「のー孃よ我愛するメーリ！　許してよ、われの罪は何處迄も詫すべし、御身は人知れず何日も斯く嘆きつゝあるか、あゝあゝメーリよ、御身は昔し愛せし吾れを今も尙ほ戀人と想はざるか、のー孃！」と悲しき語調もて斯く謂ふはリーサ君の聲なり、孃はキットなりてリーサ君を振りのけ腹立たしく眤と視入るに、哀れに面は痩せて悲しく立ちたる風情に、そゞろ昔し懷しさの溢き來り、何の恨みも忘れ果て、無邪氣なく笑を湛えて走せ寄り、面を暖き胸に押しあてゝ咽び入れり、リーサは「チ、可愛のもの」と叫びて孃の波うてる背を沾める眸もて視入り、犇と再び胞き締めぬ。

やがて兩人は睦まじく相擁して花檀の中に進み入り、樂しき清き昔の戀を操り返し操り返し想ひ出されて嬉しく懷しくリーサ君は夜目にも眞紅なりと思はるゝ薔薇の花を搴りて孃が胸に翳しぬ、花の薰りの優かしく孃を醉はしめぬ、あわれ兩人は幸福なる眸もて空を仰げり、月は罪なく汚れなく照り渡りぬ、夢のやうに兩人は花檀を却きて彼那邊なる木立深き內に徐々に進み入れり。

よも兩人は知るまじ後には怪しき黒き影の就き纏へるなり、何處迄もと同じく木立深き內に影を隱せり。

（七）

セコレー侯の大夜會のありし翌日、メーリ孃は己が室の安樂椅子に寄りて、昨夜の事を想ひ浮べて打笑める時部屋の戶は開かれて悲しげにセコレー侯は入り來れり、孃は急ぎ立ちて昨夜の禮を懇ろに述べぬ、セコレー

侯は愁に沈める眸もて「孃！われは再び御身に愛情の言葉は吐かざるべし、のーわれの心を察してよ、われは眞に御身を愛するなり、御身なければ憂世の面白くなきなり活きてかひなきなり、されどされどわれはもう謂はざるべし、これ此指環は御身に與へんとて持ち來りしものなり」とてダイヤモンドの少さき指環を「ポッケット」より出しぬ、セコレー侯は尚も言葉を續ぎ「のー孃！最後にわれは謂はん、何卒リーサと末長く睦まじく添はるべし、われは御身に未練も何もなし、長く〳〵旅行の途に登るなり、此衣服は婚禮の當日に就てよ、こは吾が切に願ふ所なり、さらばよ孃よ」と鞄より白き大禮服を出して其儘出で行かんとするに、前程より孃は惠深きセコレー侯の愛に激せられて想ひに沈めるに今侯の出で行かんとするにつと急ぎ馳せ止むるにセコレー侯は振り切りて遂に戸外に出で姿は覗えずなりぬ。

孃は茫然と暫し成す事を知らず、次第に今の言葉の浮ばれてセコレー侯の心を察し參らせば如何ならん、あゝ御慨しや我身の罪の恐ろしやと身を悶え悶えぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

倫敦には有名なるセコレー侯は覗えずなりぬ、多くの令孃たちが望みを屬せし、リーサ君は遂にメーリと結婚しメーリは子爵夫人となりて、温和なる上にいとゞ靜かになりて終身慈善事業に身をゆだねぬ。

（をはり）

丙賞

雪の山家

（一）

信州松本田町　牧野鈴子

「父樣、母樣、私は今日から十八になりました。」

思はず雪に手を着いたが—と兩親の無い人は私に語つた。

山の中で、掌が並んで雪の上に印された、雪には限らず、泥にでも、砂にでも、這麼跡が着くと、其手を魔が曳いて導くと聞いたら、袂で消して衝と立つて、遙に眞白な谷の向ふの峯の方を仰いだ。

(二)

毎年元日祖父の墓に參詣するのが父の例で在た、一昨年其の亡つた後、私が代つたので、父も母も同一處に葬つてある。

墓と思ふ處の、少し小高く見えたのは、氣の所爲であらう、山は唯雪で、あたりに生きたものは何もない。

麓から、此處に來る間に、出逢つたものは唯一頭の瘦せた犬で、奥山の雪が日に日に深くなるに從ふて、恰も洪水の力で、巨大な石が川上へ流れて來るやう、猨が一ツづゝ次第に里近く推出されるといふことを聽いて居たので、可恐かつたから其の毛色も見えなかつたが、立窘んだ傍を通つて、路を除けて、西の方天神山の森の方へ弓形に大きく雪の上を驅けて行つた。

見返りもしないで走つて來たが、足跡は其處から二筋に分れて居やう、一筋は麓の方へ、一筋は森ある方へ。見返れば又それから此處まで一筋、飛々に、草鞋で踏んで來た足跡が、果なく續いてゐるが、身の周圍のは大きく入亂れて、亘離れたのは正しく片足づゝ入違ひに、雪は刻々な角を立てゝ窪んで居る、遠くは唯一筋白い糸を引いたやう。

(三)

心寂しいので、又墓の方に向つて御名を唱へた。

其の墓を二町ばかり隔つたところに、峯の堂が一ツある。

翁の堂守が其の子の嫁と二人で籠つて居るが、元日の此の墓參の時に限らず、盂蘭盆、又祥月命日などに登山の都度、堂に寄つて憩ふのが例で、翁は山男、猨、猿、兎、木靈などの、怪しく、奇しく、珍しい話をしてくれる　面白い。

嫁は餅を炙つてくれた、栗を剝いてくれた……可懷い。

冷い足袋を脱がせて貰つて、早く爐の椽へと思つて來たのに、丁度目の前五六間の處、山懷の崖路が、上の峯から、一雪頽に谷の底まで降積つて、爪尖を懸ける凹凸もなく、團栗の枝の栞もないので、一足も進まれなかつたのである。

あれは堂の中に籠つて此雪に埋るゝ二人、爐のある次の間に何時も秋を通してくれる、那の六疊の南の小窓一つ開けても見よ、雪の山に四角な黒い穴が開いて、其美しい顏が覗くであらうのにと、思ふ時、ふと其の六疊の間の、紙で貼た天井の、渦巻のことが胸に浮むだ。

墨繪の渦巻は、なにがしの繪師が描いたといふ、手拭に濃い墨を絞るばかりに含ませた一筆で、打付けた、其の筆を起した處が龍の頭の形になつて、勢餘る墨の飛沫は、其處とも分かず、一面に迸しり、猛然として凄じい、下の疊はいつも青々と綺麗な、これが飾で寶物である。

然し、峯の堂の天井の渦巻は黒いが、裏の戸を一枚開けると、山の奥は吹雪の白い渦であらう、其の渦が重り、又重る空の、巻いて〳〵、渦を巻いて段々奥深くなる方は白山よ、大汝よ、御前ヶ嶽よ劒ヶ峯よ、石炭のやうな黒雲の中からすら〳〵と研出した如く、白刃を交へて現れて居るが、山は近いほど、間近なほど、次第に薄雲のどむよりとなつて、南下りに金澤の町、海の方は蒼い空。

(四)

一月元旦不斷着のまゝ、羽子を突いて居た、十二三なのが二三人門口に立つた中を通つて出ので、大通の商賣は未だ一様に戸を鎖して居たが、今は早や、両側の家の軒毎に國旗の飜へるのが、ちら〳〵と遙に望まれて、車の響と、人聲と、凡そ胸に浮ぶほどの元旦のものゝ氣勢が、廣い空氣を傳はつて一人雪の中に立つてる耳に響いた。



眺めて佇む、身の周圍は極めて寒い、嵐が吹く毎に降るともしない雪がひらひらと來ては袂に觸はる、爪尖は氷のやう、私は歸りかけた。

正月はどうこまで、
から〳〵山の志いたまで、
土産は何じや、
榧や、勝栗、蜜柑、柑子、橘。

此時いとせめて、あはれな、冴えた、且つ細い、透る、幼い聲で唄ふのが山の中に聞えて、木靈の響いたので。

耳を澄すと谷の底、それよ、藁屋根に厚い雪を被つた、土人の家が、戸を見せ、脊戸を見せ、ふつくりして横に長い垣根を見せて五六ある。

あゝ、雪に埋もれた、白い墓の中で唄ふのであらう、其

聲は、魔が、拘して來た兒に唄はせるかのやうにも聞え又、山姫が、女？童に唄はせるやうにも聞え、聖の膝下に新發意が唄ふやうでもあり、繼子が唄ふやうでもあり、腕白が喚くやうでもあつたが、故郷の兒等は皆師走に入つて半頃から吟ずるので、私はこれを幼い時、戸外で、雪丸げをして體は皆氷のやうになつて赤くなつて、晩方内へ歸ると（御覽、惡戲が過ぎますから。）と火鉢の上で母親に手を握られつゝ唄つたのである。

（五）

「もう十八になりました」と思はず俯向いた。目に入つたのは雪にさした一把の花。

水仙、梅の枝など取添へて、之は下から買つて來た。丁度山の裾を流るゝ大川の橋を渡つて、坂の取着に來る觀音町と云ふのを出脱れる處に、石の地藏尊が七躰、手ン手に珍しい、一束の稻を提げた七ッ地藏といふのがある。今年は國々豊穰だつたけれども、去にし飢饉の時、徒黨を組んで此の山の嶺に推登つて、城内の藩主の寢耳に響くやう、一齊に聲を放つて泣いた。爲に倉庫は開かれて、幾多の貧民は命を繫いだが、重立つた者七人といふのが刑に處せられた、其紀念なので地藏堂の傍に花を賣る店がある。其の門を出て立向ふと、直ぐに此の抱いてあがるやうな雪の山。

其の主の婆さんから買つて來た、例年、其の時分には未だ何處も市では店を出さぬので、父の代も、花は其處で買ふのであつた、蓋し、其の七ッ地藏を境として、五六の山家も麓の小家も、郡部に屬して、正月は舊暦を用ふるのであるから、

正月はどうこまで、
から〳〵山のおいたまで。

と又繰返す、苧環の糸の縺れ〳〵て、峯から谷、一山を幪つたやうに聞えるのに引留められながら斷ちもやらず、その、黒い渦卷ある部屋、吹雪の白い渦卷きのある奥山の方を見返つては、俯向き〳〵、引返す空は、下りるに從つて次第に晴れて、日の御旗は大きく鮮明になつた。

（六）

麓で又、花屋に休んだ時。

「もう今年あたりから坊樣達と一所のお正月にいたしたうございます」

と婆さんは言つた、而して爾時花屋の脊戸に迫る、山續

きの崖を落つる、雌龍の音、雄龍の音が、凛ともしないで二筋聞えた。此音は、市と一處に此の山へ正月が來るやうになつても聞えやう。　（完）

丙賞

尼

麹町區飯田町三丁目二三番地前田氏方　河村君子

あぢきなき此世も戀てふものゝありてこそ慰むよすがもあるべし。樂しきも戀なり。悲しきも戀なり。頼みがたき世に頼みがたき人の心を頼むはかなさ、木葉の如き小舟にて大海原を渡るよりも危ふく、かすかにもゆる燈火の、嵐にあへらんよりもはかなし。さればとて一度かくぞと思ひ詰しことの、今更引返へすべくもあらず。思へばまさなき人に哀れをしりそめたれど、月影まどかなる望みもなく、我が胸は荒磯の波しづかなる暇もなし。何を希ひ何を望みてはるけくも我が思ひを辿るか。君や命と頼めども、風そよぐ旦の野邊のあともなく、君や我が心と願へども空行く夕の雲のごとく果敢なし。我が命は君に捧げしも君が命は我れに與へず。我が心は君に送りしも君が心は我れに許されず。吾が心は遂に癒えぬべく君が爲めに傷つけられしか。吾が命はとこしえに君に捧げつくす能はざるか。花のあした、月の夕、誰れと共にかたらん。誰と共に慰さまん。戀ありてこそ嬉しけれ。うれしきこそ戀の終りを得たるなれ。何の因、何の縁ありてはかなき世に、五十の命をのぞみて來つる。血をわけし父母も逝きたり。いとしき兄弟も世をさりたり。めぐみふかき祖母我れをいと愛しみし伯父伯母もかくれぬ。たゞたのむは君が心のみ。君が命のみ。さはれ君が命は手折らんとすれども手折られず。君が心ばかりは眺めんとすれども眺められじ。如何にせん。いかにせん。君心あらば人しらずしぼる我が袂を思へ。君人ならば密かにむせぶ我が思を顧みよ。吾が一生は空行く雲の如く、風あり雨あり。吾が一身は秋ふく風の如く悲しみあり、恨みあり。いかなる黄金を送るも我が涙を買ふ事能はず。いかなる名譽を與ふるも我思ひを賣しむる事能はじ、我が涙を買ひ我が思ひをうらしめんとするは、たゞ君

の心なるよ。たゞ君の命なるよ。我れや何の爲めにかくもひとり思ひの淵にしづむか。夢か、あらず。現か、あらず。我が心は我が心にそを戀なりと語りき。思はざらんとすれば思ひ、捨てんとすれども捨てられず。吾が命は君にさゝげんか。君は許さず。我が心は君に與へんか。君はきかず。我が願は何時達すべきか。くるしき戀の闇路をたどるにまかせて、一歩よりは二歩、二歩よりは三歩とさまよへば、いつしか都よりあまり程遠からぬ小高き丘にのぼりぬ。月影はかなたの山にかたふきて眞如の理をしめすらん如く、一片の雲は殘ん、、、、、、、、、、、、の光に青みて五色の蓮花の如し。傍へのいさゝ小川の小波は何にか是非を呟くらんやうに聞ゆ。今は戀よりも身はこの世をはなれて、たゞ奈落の底に沈まんばかりなりけり。驚きてかへらんとすれば、はるか隔たりたる處に燈火の影のするを、かゝる處にあるかと思へばいとあやしきに木魚の聲さへ響くはいかなる世捨て人のすみかにや。抜提河の邊にはあらで、いさゝ小川の雙林樹下に唱へ給ふいと哀れふかし。かゝる人まれなる處にさゝやかなる庵をむすびて、しかもものすごき夜半にさへ法の道をたどるは誰がなれのはてぞ。おそましき今の世に佛身に歸依し給ひしは男か女か。樋の水はかたたく流れて八德の水のやうに聞え、木魚のひゞきはます〳〵高く魔道に沈む群類をいましむに似たり。あまりの怪しさに庵ちかくよりて佇めば、やさしくはあれどなれぬ聲にて『寂莫無人聲あらありがたや』といひさして經を唱しぬ。怪かしさ餘りて簀子より垣間見たれば人のけはひするに驚きたるにや、讀經の聲も木魚の響もやみて、石段をきざみてのぼりくる足音かすかなり。見られじと松の木影に身をひそめて樣子を伺ひ居るに、皺枯れたる聲して御孃樣御免あそばせといひつゝ戸おし開ているに、此の庵のあるじ驚きてあら乳母よと云ふ聲聞えぬ。何にかゆえよしあるにかあらんと更にまた簀子より伺ひ見るに、あるじといへるは思はざりき、十七八の蕾の花、後髮ひかるゝをものともせず、おしげもなくみどりの黑髮そりて墨染の衣さへまとひたり。すき間もる風のかろき袖をひるがへすは、まだ浮世の風のこの蕾の花を一度さきてこそ散れとのいたづらか。乳母と覺しきは五十路の坂はいつしか過ぎると見えて腰は稍弓なりに頭はチラホラ霜をいたゞきぬ。あはれ蕾の花としも譬へつべき末頼もしき

齡をもてかゝるさびしき庵にひとり佛果を得んと望み給ふ姫君こそいかなる爲めに身を亡ぼし給ひしか。眼元に愛嬌の溢るゝあたり鼻といひ口といひ吾がおもふ君にはあらざるか。さりとてよもや斯るなりの果はしたまはじなど思へば只なんとやら胸のわく／＼するを手抑當てしづかにきゝおるに、親御のなげきをかへりみ遊ばして、も一度もとの御身にかへり給ひ、恙なく世を送り給ひてよ。よしや武雄樣がもろこしの原にて刄の恨みときえ給ひしとも、許婚とのみいふばかりにて未だ夫婦の交りをも致さゞる間柄に侍れば思ひかへし給へ、思ひかへし給へと云ふに、乳母よ妾とて父上母上を殘してかゝるみすぼらしき姿にうつる事にしあれば、さる考へのなかりし事も侍らねど、武雄樣は許婚のみにて夫婦の交りをせずとはいへ、一度親のゆるせし間柄に侍ればいかで思ひ諦めらるべき。武雄樣の志願したまひて十二ヶ月のみぢかからぬ日數をくるしといへる兵營のすごし給ひし時さへ、終日よもすがら心も武雄さまの上にのみ走りて、ひとり忍び涙にむせびしに、時さり時うつりて一ヶ年の現役をつゝがなく終へ給ひしと思ふまもなく、また東洋の空俄に黒雲おこりて北清事件とやらかしましく、少尉の軍服身にまとひて、いかめしく出で立ち給ふに、妾とていかに消え入りたき心地はすなれど、武雄樣の雄々しさになでう涙のおとさるべき。苦みは暫へつべくもなけれど小さき胸につゝみて見送りまゐらせし時のなげきいかばかりなりけん。出で立ち給ひし後とても人にこそ言はね、思はぬおりは片時もなく毎朝々々鈴の聲と共になげ入れ行く新聞をとる手おそしとながめて、今日も武雄樣のきずうけ給ひし事もなしなど一日／＼新聞にて胸なでおろし、我が心を慰めはしつれど、ひまさへあれば神に祈り佛に念じたゝさきくあれ、すこやかにあれと願ひしかひなく天津の戰にてあえなくなり



給ひしとのしらせ、あゝ言はじ、語らじ女のはかなきくりごと、くりかへし、くりかへしてもつきざるにと、衣の袖も濡んばかりに啻泣に泣き入ぬ。乳母はなぐさめんすべもしらずとやせんかくやせましとまどひしが、詮なきまゝに弱き心をいらだてゝ御孃様いかに御思召すともかくれ給ひし人はかへり給はず、さりとて今蕾の花の御身をもて黒染の風に吹きちらさずとも更に思ひかへし給ひて、むかしあり給ひし如く、髪をマガレットに桃色のリボンをさし給ひ、鰕茶色の袴をつけ給ひし女學生の御姿に立返らせ給へとすゝむれど、いなとよ妾はいかになりとも武雄様の御事のみ思ひ出されてもとの姿にいかでたちかへらるべき。乳母よ、乳母よ、妾をこれにてみすて給ひてよ。思ひあきらめし身の果、誰かいかにのたもふももとの姿にはかへらじ。波風あらき浮世の事のみ思ひつゞけて佛道に歸依せし身の未來の罪業。あなおそろしや。あなおそろしや。地獄遠きにあらず。經を誦せずんば菩提の心を失なはん、ゆるさせ給へ、ゆるさせ給へとたちあがる袖を、乳母はなさじとかたくひけど、衣のやれんも思はず引放ち、御孃様文子様と涙ながらに呼止むるもかへりみず。珠數左手にかけて、すげなく廻廊のあたりに足の音するひまなく、またよみはじむる經の聲、木魚の音にひゞきて高し。あはれ文子といへるは我が君ならではとちかひしその人なるよ。あやまてり、あやまてり、許婚のある君ともしらではかなき戀路に迷ひしおろかさ、生を求むるよりも死を求むるにしかじ。ひろき天地も我が爲めに笑ふ人はありとも泣く人とてはなく誰と共に泣かん。誰と共にあはれまん。[illegible]あゝ月は今まさに汚濁の世界を去らんとす。月よ月よとこしへに歩みをやめよ。吾は汝と共に笑ふべく、汝と共に泣くべく、泣と共に哀むべく、汝と共にかなしまん。恍然として月をうちまもりし間にはやかくれて宇宙はくらき暗にておほはれぬ。あはれ、我が死や晩かりし。人に捨てられ月に捨てられ我は只天に號泣するのみ。

故税所敦子

花さそふあらしも慾しみよし野の
すゞのまのやのはるの曙

秀逸

蕾の花

（上）

大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番屋敷服部方
松木涙子

「朝夕如何に御起居遊ばし候や木枯の風寒く時けいの秒の音のみ高き夜机に向へばそゞろ樂しかりし時の忍ばれて今更女々しく胸のせまり候慈愛深き父君母君わけてあのやさしかりし姉君の慰とし給はん悲しき悲しき内にもまた樂しからん父も無く母も無く兄弟も無く其上今の身の上あまり神の所置の無殘かと存じ候されどもはや申上げず徒に心勞をかくる己なれば」と讀みつゝ。眞實に無慈悲と云ふのか何と云ふて宜しいのかあんまりの仕方此も素は伯母樣だ伯母樣が眞實の伯母樣であつたら御自身が世話して結婚さして今更人の受けが惡るいの貧困なとか其のみでなく目上を尊敬せぬとか私を伯母と思はぬ恩を知らぬとかあゝあの

時私が強情張つて歸國せねばよかつたのでこんな事とは夢にも思ふては居らずすぐ又歸る事とのみ思ふて居つたのに、其れに其後繁くお手紙も出さず薄情なと恨んでお出でなさるであらふ。おやさしゐ其れとも云はず淋しい〳〵との御手紙、今から羽でもあつたらば飛でゝも行きたい位、嗚呼どうしたらいゝだろふとはや涙聲にて獨ごつ十九ばかりの令孃、その顏の美しき氣高き〳〵に、びんの毛の三筋四筋亂れたるに涙ぐめる樣かゝるを梨花一枝春の雨を帶ぶとかや云ふならん。どんなにお淋しゐであろふと、伯母樣のおいひなさる通り、人の受けはよく無いそれはあまり強情であるからまた伯母樣をお大切にせぬそれを軍人であるからとかく兵などに叱つて〳〵お出でなさるくせが有るので物云ひが荒く〳〵そんなおベッかなどごく〳〵お嫌であるからお遣ひなさらぬ其をお云ひ遊ばすのであらふ此お手紙のにじんで居るのは涙の痕であるかと云ひつゝまたも讀み行くに「如何に思ふも致しかた無し御身も早く良ゑんを求めて」あゝ私は兩親のどんなにお云ひなさつても一旦義郞樣の妻となつたから「幸福に幾久しくと祈り候もはや男の身に女々しき手紙は此度限

りに候此最後と思へば悲しく〳〵御身よりも便なき故大抵は察し居り候我心の亂れ〳〵たる夕認めし物宜しく御察しあれもはや此限りお名殘惜しく候明日か明後日には兼ねて志願の臺灣中備隊附と相成り出發仕るべく其地を通過致候折は如何に悲しきかと存候不一」澤井雪子樣田中義郎と讀み終りて雪子は忍び音に泣き伏しぬ

如何にお云ひなすつても私はお嫁入りはしませぬこの樣な事云つておこし遊ばす其お心が水くさい私かお手紙もあまり出さぬこれは兩親のいつ迄も未練らしくときびしい〳〵御命令忍び〳〵にをり〳〵交通するのみで

（中）

雪子〳〵をや何を泣いて入らしつやるの。義郎樣からお手紙が參りましたの。眞實にねー。あのかたもお氣の毒だよ、どんな事を云つてお出でなさつたのと、手紙を讀み行く姉も涙ぐみぬ、

「お姉樣私はなぜこんなであらふと思ひますよ、よそ樣ならば此頃は夫婦のむつまじいのを喜んで入らつしやるのに」

「もう〳〵お泣きなさらないで。お父樣が京都へ梅見に明日行くからと云つてお出でなさつたよ、入らつしやるでしよかねー、」

「私もお供しませうがねー、花子樣や照子樣も皆お片附き遊ばして波風なく樂しゐ〳〵家庭でお出で遊ばすのに。もう〳〵何にもお思ひ遊ばさなゐで梅見のおこしらへでもねー、」

「それでも私は悲しくて〳〵私だけなぜこんなでしよふ、あのおやさしゐ義郎樣になぜ別れねばならぬでしよふ。何にもいんねんだからねー、一度そんなにおなり遊ばしたのだからどうせ義郎樣にお嫁にはたといお父樣やお母樣が御承知遊ばしても伯母樣がお聞き遊ばさぬからね。それに義郎樣がつらい〳〵中からでもこの樣なお手紙をおよこし遊ばしたのだからねー、私はいつもお父樣に申上げるのですよ雪子が可愛想だ〳〵と云ふといつもお父樣のお目からうるむのですよあまり申上げて却て御心配をかけてもと思ふてはやめるのですよおッ母樣でも眞實だと少しはましなのだが私も良く〳〵察して居るの餘り思つて病氣にでもなるといけ

もせんよ。」
「でもねー、お姉様思はないで居られませんの、いつも〳〵片時も忘れる事は無いのですよ、それが こんなお手紙が」と手巾にてぬぐひつゝ云ひぬ。
「私に躰のいゝ事ばかり云つて實際は私をもうお見限り遊ばしたのか其で良きゐんを求めなどお云ひなさるのかと思ふと悲しくて〳〵、お姉様がどうかゐん付けと云ふ事だけは日はないで置いて下さいませんかお願ひですよ。」
「そんな事お云ひでもお父様が此事に就いては大抵の御心配でないのですからねー、」
「それでも此れだけはお父様に云ふて下さいませんか私も十分云ふつもりですがねー、この後獨身ではとても〳〵いけませんよ、末始終獨身はむづかしゐ却て人に噂しられるもとですからねー、それに此頃雪子は大層痩せたとお父様がやかましく云ふてお出でなさるよ。」



「あれ私はやせましたの人様に見える程私は不孝物ですね眞實に不孝物なぜこんな身の上になつたのであらふ」と襟に顔を埋める程にうつぶきて兩手を行儀よくひざの上に並べ深き〳〵ため息つく妹を見てはそゞろ悲しくやなりし「眞實にお願ですからそんな事云はないで活潑にお嫁さんに行くまでの樣な雪子さんになつて下さゐ一人の妹のこんなに毎日〳〵涙ぐんで物思ひにのみくれて居るかと思ふと淋しくて嫌な嫌な氣がするよ明日は一番でとお云いだからもうおやすみ」と云ひつゝ出で行く姉の後姿を見てまたも涙ぐみぬ。

（下）

私もう、どうしたらいゝだろふ考も何にも出ないで只悲しくて〳〵はかなゐ心持がすると手紙を置きし机に伏して泣けどはや誰慰めるものも無き夜更おりしもすごき〳〵鐘の音山里などは淋しかるべきをされどかゝる身にはその鐘の音の

淋しくおりしも時計は二時をうちぬあまり夜更けに一人起きてあらんにまた母君にあらぬ事思はるゝもとかゝる内にも義理の母君そとそのまゝふしどに入りしも少しもまどろまれず。獨忍び音に泣きて〳〵悲しみぬ。はやくりやの方には下男下女の姦しき聲きこゑぬ朝の準備されればとて起き出でぬ。

今日は頭の重きも強いて美しく粧ひ共に停車場へ行きぬ。折しも西行列車の着きし所うしほの湧くが如き中を「プラットホーム」迄行きぬ。

汽笛一聲西行は進行し始めぬ三等の列車次ぎは二等と下女のさわがしく云ふに。ふとあふぎし折りしも窓によりしはたしかにわかき陸軍の士官なりき。

汽車は用捨なく進み行きぬあとに殘る烟のうらめしさ今やたをれんばかりの身躰を姉君に持たせし雪子の顔の色は眞青、あまりなるにお父樣雪子がと思はず大聲に呼び立つるに。驚きし父雪子のあまり急に容躰の變りしに何をしたの〳〵取りあへず歸宅せねばと引返したりき

その明くる日より間なく時無く義郎樣〳〵〳〵何故私をつれていつて下さらぬ何故〳〵私を無殘です誰がこんなにしたのでしよふ罪もなきにと云ひては泣き悲しむまくら下に父と姉とは無言にて、といきつくのみ朝より狂ひ〳〵しかばやゝつかれしと覺しく午後一時頃ね入りたりき

しばしとて父も姉と居間に次の間には下女のゐねむりを始めぬ

＊　＊　＊　＊　＊

雪子〳〵と姉の三聲四聲呼ぶも答は無く、そと蒲團を取れば中はもぬけのから

お父樣大變が〳〵と立さわぐに父も走り來りぬ時しもピストルの音は前栽のかなたの一間より皆こかけ行きし時ははや蕾の花は枯れてあゝ無殘〳〵

(おはり)

すみわたる月のひかりのきよければ
さもよびかはし千鳥なくなり　　喜多山　孝

さえわたる月の光に遠かへり
友よびかはしちとり鳴くなり　　珍田　貞子

選秀

板ばさみ

東京市牛込區牛込東榎町廿飯田氏方　千野やす子

（一）

萌え渡る柳の色も一つにて、霞ながるゝ早稲田の小川の、水のおもてに羽打ち觸れて、飛び行く燕のかげより影に、やう〳〵暗うなり行けば、菫つみつゝ遊びてありつる、里のうなゐの唄こゑも、いつしかとなうほのかになりぬ。

夕日の影は高田の岡の、杉の梢にたゆたひて、名殘惜しげに黄金の糸を、我がたゝずめる元赤城の森の、倒れかゝれる欅木の上を掠め、遠く音羽の岡より遠に。

あゝ我が戀ふる人いまは何邊ぞ、思ひ出づれば彼の少女子と契りしも此の元赤城の森、泣きて離別を惜しみつる所も此處ぞ元赤城の森、忘れめや此の欅木のかげにて、別れし時に固く誓ひし言葉のすゑを。

妾が父の、此度信濃なる何がしの郡の郡長となり侍りて、彼の地に旅する事となりしに付て、妾も共に行かではかなはずなりぬ、夫に付ても君に別れまゐらす事の心苦しさよなど、涙ながらに語り出でゝ、我が膝の上に聲も惜しまず、よゝと泣きけん其折しもを、いかで我わすれめや、彼の地に着きなば直ちに玉章聞こえまゐらせん、別るゝとても心は放れじ、君も亦など彼女が誓ひし言の葉、何時の世にかは忘る可き。

別れし日よりして數ふれば、今日はしも三月ばかりになりぬ、されど戀しき彼の少女、玉章をだに送さぬは偖よな、秋の空とは今ぞ知つたる。

思ひ出でたり、一家こぞりて信州に行る事となりしとは空言なりけむ、別るゝ事の悲しと云ひて、我が膝の上に倒伏して、聲を限りに泣きさけびしも、我をうとみての空淚にやありけん、腹だゝし腹だゝし、今はしも思ひ出づまじ、かく我が心に念じつる折、無にあらねど、中々に忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりも苦しくて、煩惱の犬追へども去らず、煩惱の犬追へど去らねば、たゞ懷かしき元赤城の森を、夕な夕なに逍遙ひて、昔を忍び今を佗び、少女を思ひ、我が身をせめき、かくて今日も一日を仇に過ごしつるよ。

あらはに見ゆる目白の寺の鐘樓に、今しも寺男の登り行くは、日も暮れぬ、捨がぬ共に三つを敲たんとや、いざやかへらむ、翌日ぞまた來て見まし。

いざ歸らむと立ちあがりたる折しもあれや、後の方より乙と叫びて、我が脊に手を置く物のあるに、膽を冷して見かへれば、驚きつらむと言はぬ斗に、打ちほゝ笑みて兄さま兄樣、是御覽なされ、此の電報がと告ぐる言葉も斷絶がちに、呼吸ざしの いと忙しきは馳せ來りつる證據と知れぬ。

何と〳〵電報とは心もとなし、去にても何處よりぞと審しみつゝ、取る手も遲しと緘押し切て、若しや戀しき人よりのかと讀み下せば、是はそも如何にあら何ともなや、父危篤すぐ歸れ母よりとは怎麼なに事ぞ、夢ならばさめよさめよと、我は思はず手に持てる電報をば取りおとしぬ。

（二）

上野の岡に消え殘る有明月を後になして、汽車は靜靜と動き出しぬ、弟は未だ幼なき者ゆへ、父君の危篤をも我の告げぬがまゝに、唯々故郷に歸らむ事を、心の中に嬉しと念じ鐵道唱歌など、間なく時なく謠ひつゝ、それ電信柱が飛んで行く、木の間を朝日が驅けて行くなど、いと心行く狀なり、我は夫には引かへて、悄然として眼をふたぎ、たゞ父君を眞幸くと祈る。

やうやくにして住み馴れし故郷の家に到りつけば、脊助老爺は先より門邊に佇み居りて、目にせきあへぬ涙をたゝへ、やよ遲かりき、はや旦那樣は歸らぬ旅に出でましぬるよ、兎にも角にも早ばや奧にと云ふに、口惜しや偖は後れしかと、胸に苦しき手を置きながら、奧の襖を押し開けて、閉しもやらず父君の、御なき骸に縋りまゐらせ、伏し沈みつゝ聲を限りに、父上よと號びしと見て驚き醒むれば夢なりけり、夢なりけるかあゝ夢よ、去にてもこゝろもとなしや、心にかゝる夢のたゞちや。

夢の直路の心にかゝれば、いかで我、一と刻も早く歸りてしがと、足ずりしつゝあせにあせ、はやりにはやれど翼なき身の、夫はかなはぬ悲しさわびしさ、遲し遲し此の汽車、何なれば今日に限りて意地わろく、速力遲きぞ此の汽車、もどかしや此汽車、もどかしもどかしあら如何にせん。

（三）

上田の停車場より汽車に別れて千曲川を渉り、奈良本など云ふを過ぎて、沓掛の里に着きつる頃は、さすがに長き春の日も、霞を深く暮れ渡りぬ、今日はもとより夜通しをなさんと心に念じ置きしが、か弱き弟の何となく心地すぐれぬなど云ふに、心は先方にあくがるれども、せん方なく、明朝の都合を胸に刻みて、立花屋と云ふ温泉宿に足をとゞめぬ。

一日の疲勞を洗ひ流せし二人の身體を、部屋の欄干にもたせつゝ、明日こゆる保福寺峠の峯を望めば夕べの空の雲の波　月の行くへに騷ぐと見る／＼、霞につゝく松原の、松の隙より嵐になりて、四邊やう／＼物すごく、物すさましくなり行くなべに、明日の旅路を心もとなくあやぶむ折しも、四十歳ばかりの優しげなる女性、いとしとやかに會釋をなしつゝ、我が目前を遮ぎりて、やがて隣の部室に這入りぬ。

嵐はやう／＼烈しくなりつ、夫につけても心に掛るは父君のいたつき、車中にて見し夢の名殘なり。

欄干に身をもたせつゝ、末より末に、枝より枝に、さまぐ／＼くさぐ／＼に由なき空想を書き出でて、しばし茫然たりし我、不圖われに返りて振りかへれば、朱塗の盃に肱をもたせて、一人の女中の座り居たるに、是は姐さん失禮と、鹽引御に椎茸の玉子とじをあしらひたる膳に向ひて、お隣室も御客さんだねと何心なく問へば、はあ最早先日からいらッしやいます、何でも當家の御主人が、大層お世話になつた御方ださうで、御病氣の爲め御保養に、今しがた此處を御通りなさつた、いえ彼のお方は御病人の御母様でと、恐る／＼差し控たる樣にて、隣の氣をば兼ねるがごとく、いといたう小聲にてさゝやきぬ。



一杯の飯を畢りて代を受けつゝ、其病人は男かと問へば、いえ／＼其麼いたしまして夫は夫は、おそろしい程お美くしい、何お孃樣？何の病氣だと、我にもあらず

眼を見はれば、女は愈々こゑを細めて、委細事は存じませねど、狂氣とかいふ御病氣ださうで、何でもとうからお心にお掛け遊ばしたお方が御座りましたのを、御両親様は御存じがなくて、つい先達の事ですとやら、お厭がり遊ばすのを無理に勸めて、他人へお嫁なされたのが、その御病氣の源因だといふので、何しろ誠にお氣の毒様な、はい御病氣の御容躰で‥‥夫はあの‥‥晝間の中は眤として、人氣も無いほどお沈默う御座んすけれども、ひよつとかすると夜中などに、お部室を飛び出し遊ばす事がと 話の裡に箸を下ろしぬ。

なんにも御構ひ申しませんでと、靜かに膳をおろしつゝ、部屋の敷居をやをら小またに女中の刻みし折から、「一と聲きいと腸を絞りたらん様なる號泣、隣の部室の中より洩れぬ。

嵐はいよ／＼烈しくなり行く様子なり。

(四)

此の物語を聞きにし我は、そゞろに同情の涙にむせびぬ、只世の人なみの人情にて、哀れを催しつるにはあらず、繰言なれば多くは言はねど、我も亦夢路にだにも忘れやらぬ戀人の爲に、心を狂はし身をせめき、朝な夕なに浮世の戀の自由ならぬをば、悲しぶものぞ、さればわれ、今の物語をば胸に刻みて、我が身の上に思ひ合すれば、いかでかは、萬斛の同情あふれざりける。

あはれこの、はかなき戀の衢に逍遙ひつゝ、音に泣く狂女は云ふも更なり、その少女子と契りし人の心の中やいかならん、夫につけてもいたましきはその母人よ、黄金にも玉にもまさりて、いつくしみつゝ育て來しわが娘の、うつ蟬のもぬけの殻をかき抱きつゝ、悲しき淵に沈みて歎くその母人よ。

その母人の心の中、いといたう思ひやられて堪えがたければ、よし／＼さらば、母なる人を音なひて、せめて一言なぐさみんとは思ひしが、いやとよかゝる若き身の、老翁がましと念じ止めて、そのまゝ枕を引きよせつ。

弟はいと能くねふれる様子なり。

旅まくら、かたしく間も無きところに、がたりみしりと棹子の開く音きこえ、續きて廊下を人の走る響に我は圖らず夢を破りて、四邊をいたく窺がひたれど、其後は絶えてあやしき音も聞こえず。

外面は雨にやなりぬらん、軒の玉水いと〻淋しく打ちつぶやきて、一としきりごとに吹く夜あらしの風、雨戸を敲く音いと物すごう。

部室の中に點されたる五分心の燈火の、ぢい〳〵と鳴く淋しき聲を、便なう呢つと見つめし我は、何時とはなしに眼さえ〳〵しうなりて、今までは意にもとまらざりつる懐中時計の響、あり〳〵と耳につきて、寢られねばこそあら物すごしや。

帳場の時計あわたゞしげに、三つを敲きしその折しもぞ、傍に伏したる弟の、いと苦しげなる聲して、腹がいたしと告ぐるに、さらば藥を得させんと、印籠など取り出しつ〻、四邊を見ればあやにくにして、部室の中には湯も水もあらず、さればとてか〻る眞夜中に、女中を呼ばんはいとびん無き事と思ひ、つと起あがりて水呑を片手に、やをら室内をば抜け出でぬ。

客間々々は今しも夢の最中と見えて、氣味わろき鼾の聲も聞こえつ、歯ぎしりなんどの音も響きつ。

嵐も雨もいと〻烈しうなりまさりぬ。

薄ぐらき廊下の燈火を、脊にわびつ〻、階梯を降り行くわが足の音、靜にと念ずれば念ずるほど、ねたきまでいと高く響きて。

湯殿の傍邊の筧の水をむすびて、階梯に足を掛けんとせし時、我は圖らずはつと思ひて、水呑の水を半分こぼしぬ、こはそも如何に、現か偖も幻か、降り來し折には塵一つだに見えざりし、二階の上の欄干の邊に、立てるは正しく人の影なり。

疑心暗鬼を生ずとやらん、心の惑ひかさはなきかと、しばし心を沈めて見わけしが、人影は尙ほその儘にして、動きもやらず消えんともせず、我方に脊を向けしま〻、欄干にもたれ掛りつ〻、立てるは正しく女の影なり。

此の折しもぞ我は圖らず宵の間の、女中の話を思ひ出だして、そよ〳〵彼こそ哀れなる狂女ならめと、初めて疑惑を晴し〻が、更に一種、云ふに云はれぬ不氣味を感じて、如何にかせんと心なみ打つもどかしさ、何となく歩行す〻まずなりぬ、さりとては我いつまでか、動かで此處に佇むものぞと、滿身の勇氣をば絞り出だして、たゞ何氣なき樣をよそほひ、靜かに梯階を上りぞ果てぬ、されども狂女は舊の儘にて、動きもやらず、立ちもえ去らず。

俯向けるその島田髷、がつくりと後の方に轉び返りていと物すごく、おどろに亂れし鬢の後れ毛、すき貫らんばかりなる青白き頬のあたりに振りかゝりたる、あら淺ましや。

糸織などにやあらむ、いと〳〵太き棒縞の寢卷に、緋縮緬の帶をば斜めにだらりと結びつけたる有樣、物すごくまたいたましく。

急かに頭をもたげし狂女は、我か顔面に物すさましき視線を集めて、何思ひけんにやりと笑みぬ、にやりと笑みぬ、この折しもに我が膓は全く割けて、倒れんばかりに驚ろかれつ、そよ物すさましき闇の夜に色青ざめし婦人に逢ふばかり恐ろしきもの はあらじ、されど今わか倒れんばかりに驚きたるは、さるはしたなく心弱き事どもにて驚きたるにはあらず。

わはれ〳〵今の今まで、仇し少女と思ひつるその狂女こそ、夢路にだにも忘られやらぬ、いとなつかしき戀人なりけれ、三月のむかし、元赤城の森にて別れつる、愛しき少女子なりけるよあゝ。

（五）

弟に藥など得させ寢せ付け終りて、胸に苦しき手をば置きつゝ、我にもあらず悄然として床の上に胡座せし我の眼の前には、先つ刻逢ひ見し戀しき少女の、しどけなく萎れし姿あり〳〵と見えて、いと堪えがたき苦痛を、さながら我に告ぐるが如く、妾は斯くも君を思ひて、氣を狂はしつゝある物を、察し玉はずや憐れみたまはすやと泣き號ぶ樣したるが如くも思はれつ、赤城の森にて別れしまゝの姿とも見えつ、情迫り感いといたう溢れし我は、胸の中より湧きあげ來れる苦しさを、ひしと前齒に噛みしめ噛みしめ、遂にはえ堪えずなりて夜具の袂に、顔おしあてゝ涙をせきぬ。

一つ一つに此世をば、葬り以て行くらん心地せらるゝ雨だれの音ぶりきの樋に聞こえて。あゝ。

折から又も斷腸の號泣と共に、けたゝましく梯段踏み鳴らす響のするに、五躰おほえず粟立ちて、生ける身とも思ほえぬまでになりぬ。

足音はやう〳〵此室に近づき來れり、あゝ彼の少女、かの欄干に佇みつかれて、今はとばかり自身が室内へと歸るならむか、否とよ〳〵先つ刻、狂女ながらも我が面影に意をとゞめ、偖こそ淋しく笑まひしならめ、されば我をば尋ねつゝ、此の室内にこそ入り來るならめ、若

し來りなば何とせん、定めて我が此の膝の上にすがりてよゝと泣き號びかき口説らむ、來しかたの心づくしを、かきくどかぬ事よもあらじ、我は怎甚これをば何と慰さみん、何と云ひつゝ慰みん、あら何とせんなど小胸に波を打たせつゝ、取りとめもあらぬ由なし事どもおもふ其まに、足音は我が室屋の前にばつたりとまりて、唐襖こそさつと開かれたれ。

いよ／＼烈しく打ち寄する胸の皷動を左手に押へて、はつしと夜具をば引かづきぬ我は。

最早お仕度が出來ましたれば、と、聲かけられて始めて我はつと起きあがり見れば嬉しや、いゝあんばいにお天氣になりましてと呟きながら雨戸を開くは、宵に見し例の女中なりき。



（六）

お駕籠が參りましたとの女中の知らせに、われは弟を携へて部室をば出でつ、出づると共に夜の間の有さま、あり／＼と又も眼の前に現はれぬ。

痛はしさに又戀しさに、見るともなく少女の部室を覗がへば、室内はいと／＼淋しく陰りて、あるか無きかの燈灯の火影、たゞほの赤く障子に映れる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

二階の火かげは松原並木の梢をかすめ、消然たる我が姿をば、屠牛場のあたりまで、ほのかに乍らも送りたれども、峠にかゝれる折しもは、はしなくも松のこずゑに遮きられつ。

背には限り知られぬ情煙を負ひ、言ひ知らぬ心痛をば前途に控へて胡座せる我は、たゞ悄然と駕籠のすだれに額を當てゝうづくまりぬ、心も知らぬ駕男の歌ごゑぞいと勇ましき。

『峠六里は腕でも越すが
　越すに越されぬ戀の山』

秀逸

親心

仙台市南町四一　菊池たね子

春とし云へば人の心も、それとは無く浮き立つめるに、かてゝ加へて榴岡の名櫻も、一輪二葩咲き初めしと噂する昨日今日の、世の騷々しさは又とあらじ。殊に平素だに、肩摩轂擊の大通は、其亂かはしさも一層にて、誰が貴人の口吻にも、或は下司の噂にも、遮迦堂に、躑躅ヶ岡よ、と言ひ出でぬも無く、市内の景氣さへ打ち連れて引き立ちぬるよと、商人達までも甚く欣び合へり。それも流石、心なき草木だに眠るてふ、夜も三更を過ぎぬれば、今は按摩、辻占賣の聲さへ絶えて、遠く近く寄せ來る金棒引の響も、何時しか幽かに消えはて、更け行く春の短か夜は、いよ〳〵森閑として、屋外は微との風だに動かず。寸時以前に鳴りつる警察署の大時計は、所察十二時半を覺ゆるに、終日病ひの床に臥せる身は、つゆ眠氣も萠さず、強いて眼を打ち閉づれば、思ひは胸に躍つて端てし無き有想無想の絶間も無く、病み細れる狹き胸の中をぞ駈けめぐる。宵の間は店の番頭小僧の遠慮もなき大騷ぎに、心を紛らして、病苦もそゞろ忘れ勝ちなりしが、夫も何時しか鼾となりはてゝは、臺所に掛け置くめる掛時計さへ、手に取るばかり近く聞へはたりて、冴えたる眼はいとゞ冴へまさりぬ。と共に、思ひ絶ねば絶えねばと思ひ乍らも、いつかな忘れで、思ひ起さるゝは昨夜里兒にとて遣はせしお蝶坊の上なり。晝のうちは世のさはぎにつれて、忘れたるが如くこそ有りけめ、人も世を定まりたる折柄、かくと一たび思ひ出でゝは、抑さへし戀情のむら〳〵と胃窩の邊にせめ來りて、あはれ此身だに叶はゞ、いかで拔け行きて、取り返しもせんと思ひ煩へど甲斐なしや。

妾身宿世いかなる罪障を重ねたればにや、子と云ふものに緣薄くて、生るゝ者は皆育たず、辛く育で上げしと思ふ此度は、我が身まづ病に臥して、愛しの者は、むざ〳〵他人に奪ひ取られぬ。病つきの身には、日每、乳吸れたらんには、なか〳〵に惡しかりなんと、くすしも良人もせちに言ふめれど、産れしは女の子なり、女の兒は男とは異にて、吸收も荒らからず、牛の乳など吸はしてだに、腹をも痛めぬ他人よりは、いしく養ひ得なんに、

と思ふなるに、男と云ふはさまで愛情の薄き者にや。さるにても、なとて我れは二豎などの襲ふ所とはなりけん。扨も甲斐なの身には有る。とそゞろ身悶へすれば、をのが側に臥して、低き鼾に眠り玉へる良人は、そと寢返り玉へぬ。

眼さめ玉へてや、眠り玉へてや、若し眼さめて在さば妾が胸の苦しさを、つぶさに聞きてたびてんや、と心のうちには呟けど、さて口にせん勇氣も無く、妾が斯くまで懐かしく戀ひはたるものを、善うも君には氣強く思ひ切られけるよと、それさへ羨しき樣にも覺へて、はては、よも妾かかくまで戀ひ詫ぶるを知り玉はぬ事はあらじ知りて猶ほかく知らず顔なるは、もし心有りての事にもや有る、と、有らぬ事まで思ひ僻めて、すや〳〵と眠り玉へるさへいとゞ恨しうも思はるゝ。夫婦が並び臥す枕元には、圓笠の臺洋燈据ゑ置かれ、不時の用意にもとてか、非ずか、有明の光りいかめしう輝き渡れり。燈火は今しもパッと瞬きぬ。風の吹き入る隙有るにも非ねば、こは夜のいよ〳〵更け渡りて、天地の氣ひたと靜り返へれるによれるなるべし。病める妻は此時力無げに弱々と臥床の上に起き直りたり。

櫛も入れねば黒髪は、をどろとばかりかき亂れたるが、結び廻せる紫の切布の上下を洩れて、鬖然と蒼白き頬に零れたる、いと痛々しきに、日常だに肥えたりとには非らざりし細面の、いよ〳〵痩せ細りて、鼻聳へ、頬立ち、眼窅然とくぼみたるさま此世の者としも覺へず。厚綿温くこそ來たれ、肩のわたり欹ちたるにて、身の痩せ細れるも著しく知らる。されば面わのいと長けては見ふめれど、心つけて見なばよも三十の上は超へじ。

『如何したのだ、未た起きてるのかい、ウ、惡いぢや無いか、未だ朝夕は餘寒が料峭しいのに、病人が此深更まで起きてちや、非常に惡いや、ヱ、如何かしたのかい、ナニ如何も爲ない、然者横になつてるが善いぢや無いか、最早一時だらう。』

と、たゞ心地善く眠り玉いてとばかり思ひ居し良人の、さは無くて、却つて優さしの慰言に、妻は涙も差し組まれ、いつに變らぬ温かき夫の情實の最とも忝なく。さては此睦じき夫婦の間に、かの愛しきお蝶坊もありて、歌にも謠ふ川と云ふ字に寢ねもせば、と、猶ほ〳〵我が兒を懷ふ戀はつのり増さるなりけり。

『ヱ、眞實に如何したつてんだらう。』

返答なきを心憂くや覺えけん、夫も、やをら臥床の上に起き直りぬ。頬は豐けく肥え太り、眼細くて長く、わくまで優さしき相好を具へたる、こは四十路ばかりの薄禿頭なり。

『だッて到底眠られあしなんでさ』

思はずゝ胸の千情萬緒の口に溢れ出でゝ、妻は答へもはかゞ〵しからず。

『エ、如何して〵。それが惡いんぢや無いか、寢られないと言つては、左樣して起きてちや、猶の事寢られあしまい。』

優しの夫は、一向に妻の病のみを案ずるなりけり。そを又妻に恨しくも、甲斐なくも思はれて。

『イ、エ、其事ぢや無いんですよ、妾、あ……お蝶坊を思ふと、……妾あ、到底……眠れあしません。』

一言もお蝶が上に言ひ及ばぬ夫の氣強さよ、と思ひなしたる妻は、投げ捨てたらんが如く、斯く言ひ捨てゝ顔を背向けたるなり。

『ハヽハヽ。』

と低く、されど底重げに笑ひたる夫は、言葉を續けて。

『何んの事つた。それでかい。ハヽハヽ。お蝶坊なんざ和女、今時分はあの優しい叔母さんの懐中に添寢して、暖かく眠つてるんだらう。和女も見た筈、年が若くて氣質はよし、それ計りか乳も多く出る。活計は善い、此樣な善い事づくめな事は亦と無いんぢや。夫にの、亭主までが大の兒煩惱で、やれ蝶ちやん、それお蝶坊やと、な、今日も店の喜藏が坊の寢着を屆けに行つた時、見て來たが、夫は一通りで無いと云ふことだ。何も長い間ぢや無し、二年か三年と云ふ定約。それとも和女さへ速く、醫師が許す體になれば、明日でも直ぐ取り返へすに可い事情になつてるし、の、案じるにも及ばぬいや。和女だつて、其身體で吸ひ立てられた日にや、耐つたもんぢや無い……、一體左樣慽々思ふのが惡いんだて、……何も音信不通と云ふでもなし、知己でこそ無けれ、同じ市内の小田原の人、折〵は顔つて連れて來て貰ふにも善いと言ふもの、の、餘まり心配しないで速く善くなつて呉れないぢや困る。』

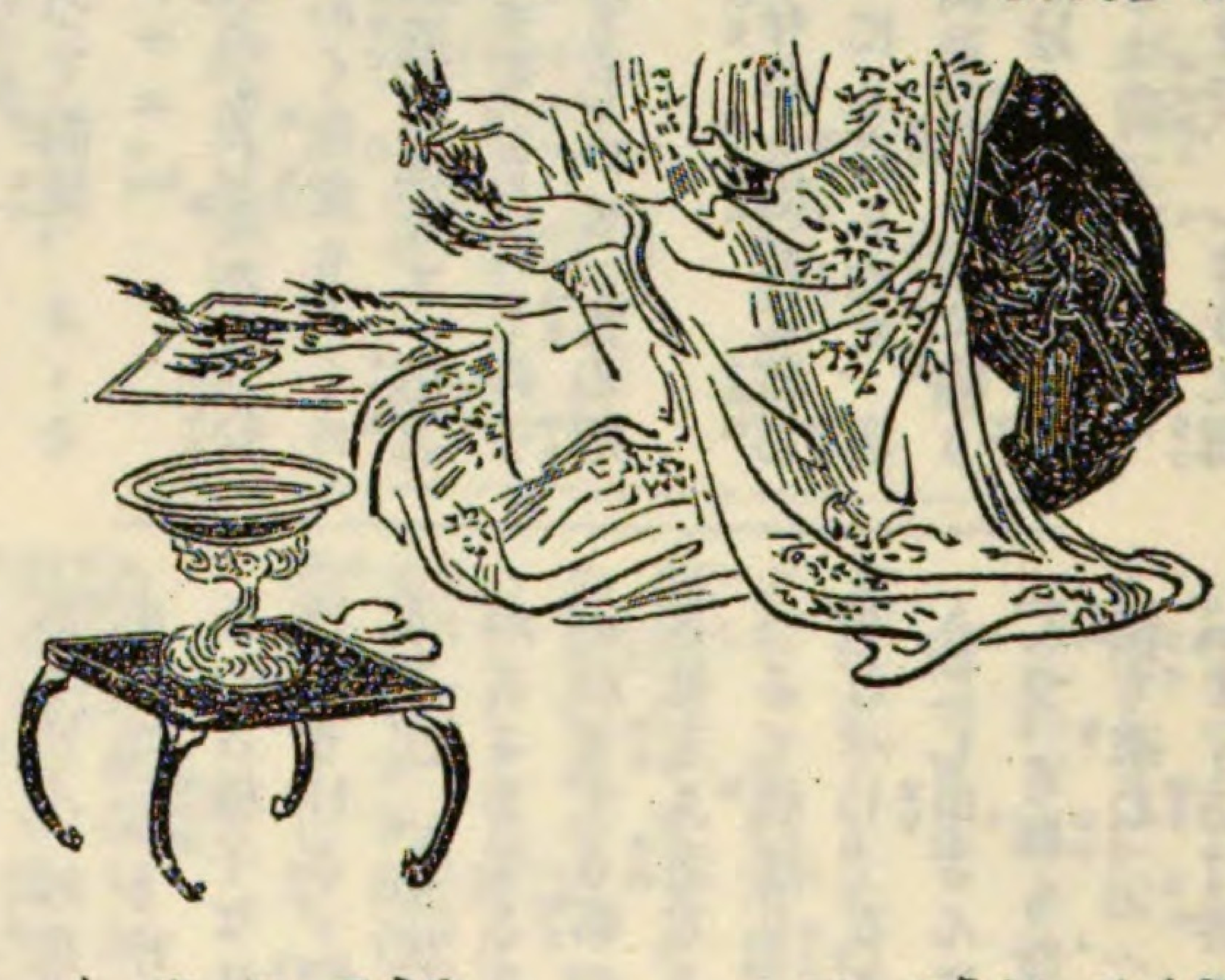
四十にして珍らにも設けたる愛子の、我とて、などか戀しからざらん。まいて生れて子の數多きが、皆育たざる中に、いとも健やかに育つべく見ゆる者を、我は日毎、かき抱きても、貧くらしても、めで明さんと思ふ心は、ゆめ汝に劣らねど。いかにせん、汝は重き病に臥せるに

あらずや。病める身の乳吸ふ子とても、まして乳吸はるゝ身とても、いかで後すこやかに肥立つべき。世には乳母と云ふもあなり。されば乳母雇はんと思はざりしにもあらねど、斯くては浮世の口さが無き噂もいかゞと思へば、心強くも里見にこそ遣はしけるなれ。恨み玉ふな、汝だに快くなりなば明日なりとも人して取り返し申さんものを。と心に思ひつゝ、夫は氣強くもかくは言ひるなり。

かくと悟れる妻は、かくても猶ほ夫に訴へんとはいかで思ふべき。されどされど其戀しさのみは、以前にも増して、いとゞしく添え増さるにぞ有りける。

『然し子貴郞。自分の實子で無いと、如何しても可愛さが違んですと子。』

『左樣でも無いさ、小兒は天眞爛熳だもの、全で神樣だもの、誰人だつて可愛くない事は無からう、だから惡戯盛にならん間に引取りさへすれあ理ぁ無いさ。で、猶の事、和女が速く快くなつて呉れないぢや困る、と云ふ理屈にもなる。』



『左樣子。』

妻も流石に其言ふ事の道理なるを知れり。されど猶ほ飽かず覺ゆるふしも多かれど、さまで呶々言はん事のうしろめたくも覺へければ。殘るは只息太のみ。

此時しも警察署の大時計は鏘然として二時を報じぬ。

『アッ最早二時だ、サァ横になつたら善からう。布團は被けて遣るから、サァ靜かに。』

あくまでも忝なき夫の言葉に、妻にほゝゝ、ろ〳〵として、斯くては、いかで。如何にもして、病つきをのがれて、健やかにならでは、と、思ひ返されもするなりけり。

* * * * *

『坊や、坊はよく歸つて來てお呉れだ子、母ちやん幾何待つてたか知れないの、オゝ泣くか、善し〳〵誰がよく泣くな〳〵、坊やのお傅は何處へ行たァ。』

と、力も無き口調にて、傳歌唱へつゝ、夫がせめてもの心散りにもとて買ひ與へたる人形の、三ッ四ッの小兒ばかりなるを、病み細れる腕に抱きて、妻は此一日、ふたひ、餘念もなきさまなり。

『坊は大きくなつてお歸りだ子、笑つて御覽。オ、それ〳〵笑つた〳〵、ほんとに可愛い子エ。』

さながら生けるに物言ふが如く、他人のもし見なば心もや狂へる、と想ふべし。眼さめてはかく他愛もなくめで暮らしつ、疲れては又そを、己が細腕に載せて、添乳などしつゝ、をかしき計りに、心を散りて、まことの子の上は、ほと〳〵忘れんばかりに、なりしかど、妻の病ひは、いつ癒ゆべしとも見へず。

榴が岡の花も、一夜の嵐に携はれて、今は一瓣だに紅ゐを梢に留めず、と聞きしは、昨日今日にも有らぬに、妻の病は未だしるし有らず。山にも野にも、緑り新に織りなして、妹背鳥さへ啼きはたる、と聞けど、なほ妻は床を得離れざりけり。

如何かしけん坊樣の、昨夜來、泣き止まで、しきりに欝悶り玉ふて。と人して言ひをこせたるに、良人は甚く驚かされつゝ、取る者も取り敢へず、妻にはわざと告げで、里親が許ひ馳せて見れば、難有や一座には醫師も有りて、今し診終へたる計りなるが、聞くも憂や、愛子は肺炎のいと重きなりとか。實親の驚愕は、げに一方ならざりき。

里親夫婦も共に眉打ちひろめつゝ、いかなる故よしやありけん、昨夜寢んとて臥床に横はりし折りより、泣き止まで、ありけるが、曉ばかりに辛くすや〳〵と寢ねつきぬる樣子なれば、我らとても、かくまでとは思ひも設けざりける。預らせ玉へる者を、もし、不意の事なと有りなば、いかにして我らは言ひ解き侍らん、と、甚く心憂がるさまなるも、道理なり。

いかでする事の侍るべき、人の命はもとより神の定めさせ玉ふ者なるを。忝なさには、くすしの君にも診せ玉へると覺ぼし。かくても猶ほ命なからんには、そは定命なるべし。など慰めて、更らに。猶ほ費用は幾ほども送りこし申さんに、いかで心行くばかり、はごくみたびてんや。とねもごろに賴み聞こへて、良人は心を痛めつゝ歸り來ぬ。

『オ、坊は善い兒だ子。……寢んねんをころり、をころりろやあー……。』

奥には病妻の斯く共知らで、一向に人形を己が子とかしづきつゝ、狂ふ計りに愛であやなすが聞ゆ。

良人は。不思はら〜と一睡の催されて。

* * * * * *

『ほんとに、坊は、今頃は如何してるんでしやう、エ、貴郎。』

ゝむしが知らすと云ふは是か。今し、そのが側に寢ねんとする良人をとらひて、妻はかく、うら問へるなり。

『オ、坊か、坊は それ〜〜和女と同處に寢てるんぢや無いか。』

と妻が添寢せし人形を指して、笑ひ乍らに、夫の答ふれば。

『オホヽヽ。イヽエ、此れぢや無いんですよ、此坊やはいつでも靜粛くして居るんですが、小田原の坊やは、ほんとに如何してるでせう。今頃は非道く暴れて、叱られてなぞ……。』

『アハハハ。左樣速く暴れる樣に、なつたら、可いだらうが、アハハハ……。』

夫は打ち消し乍ら高く笑ふなりけり。

『イヽエ、眞實ですよ、然し、今頃は餘程大きくなつたでせうネ、エ、何の位、此の人形の位、?、オヽ見たい事!。』

かれは、無ぞ福やかなる頬に、笑窩打よせつゝ笑ひやすらん、鈴を張れるが如き眼ざしして瞠るにぞあらん、或は蕾に似たる唇して、ワ、など廻らぬながら舌動かして物や言はんさては楓の如き小さき手して、乳などかいさりてん、など、樣々に想ひめぐらして、妻はいとも戀しさに耐へぬなりき。

『だから速く快くなつて呉れ、和女さへ快くなれあ、幾何でも自……由……なんだ。』

されど〜〜その愛子も今は風前の灯火に似たる身ならずや。もし不慮の事など有りもせば……そは確かに醫師のくすりもて癒えもすめれど……もし、……の事のあらば、いかに妻は慟げき伏さん。かくて妻の病のます〜〜募る事など有らばいかに、……夫は密かに暗涙を飮みたるなり。妻はかくと悟りしか、非らざりしか。

* * * * * *

あはれ此後いかに曇り行く空ならん。さらでだに降る涙の雨はいとしげきを。

兎ても角ても、親心の、それにつけ、此れにつけ、偲ばるゝは、なべて兒を思ふことの、それなりけり。

（完）

懸賞小說披露に就て

二十三階堂

本號定期增刊『壺すみれ』の懸賞に應じて參ッた小說は都合三十五種で其中やゝ選者の眼を惹くに足るほどの作は僅に四五種に過ぎなかッたのである。勿論妙齡の婦女子に小說を課するといふは聊か無理でもあッたらうが、併し小說の結構を筆の上に仕組むほどの力量と見地とがなくて、どうして此錯雜せる世の中に立つて、一家を經營し一家を維持して行く事が出來やうかといふ、頗る放膽的な女子教育意見を主持する記者の微志であッた。扨て寄稿の小說を一々檢じて見るに、文章の幼稚と結構の單純といふ事は一般に通じた病で、若し此の二點を捉へて云々したらば、今回の小說に一として選に上るものはなかッたらう。又偶々文字と思想に聊か見るべき處があるとしても、事柄は大抵支離滅裂で、話しの主題が那邊にあるか殆んど其の要領を得ないのである。のみならず又本文に不必要なる冗文、冗句の多いのには何とも閉口の至りであッた。中に就て『女優』は選者の最も面白く讀んだ作であるが、飜譯小說として其の文の躰を得ないのは疵の大なるもので、あれだけの結構あるものを反譯して世に示さうとするには今一しほの文藻と字句を精煉するの用意がなくては叶はぬ事である。『浮沈』は唯俗受を主とした作である。俗にいふ際物小說である。決して佳作とは言へない。然るに是れをしも甲賞に入れねばならなかつたといふのは他に好作がなかつたからの餘義なさである。三種の中で『無情』は落想と言ひ、筆の運び方といひ、如何にも優美で凄婉で、よく其の境を寫し、情を巧みに言ひ顯はしたる點、讀者の同情を惹くに足るべく女流の作として品位の勝れたものであッた。

扨て玆に選者の希望を述べんか、應募者は小說を作るといふよりはまづ小說をものするといふ考へで遣つて頂きたい定期增刊に割愛する小說の紙數は三四十頁に限られてゐるそれへ假りに十種の小說を載るとすると一篇に就て三四頁に過ぎない。這の些少の頁の中へ一小說の因緣結果を排布するといふのは非常の手腕であつて實はむづかしい。それ故應募者は唯或る事の側面を一寸面白く或は眼前の小景を捉へてそれを詩化するだけで事は足る、そして多くの人が面の小觀察小觀念を寄與する事にしたらば面白からうと思ふ。

國文

特賞

獨愼といふことを

兵庫縣城崎郡西氣村大字塚本　和多田文子

世には人の見る所と人と見ぬ所とによりて行ひにけぢめある人いとおほかり、人の見ぬ所にてはよからぬことすとも知る人なけんと思ふにや、あさましき心にこそ、古き敎に暗き所も神はいと明に見ますといひ、又德ある人は獨を愼むともいへり、むかしかのことさへぐから國の楊震といへる人ある所の太守になりける時、其愛を得んとてひそかに道ならぬ金など遣りて知る人もなければ、是非に受け納めてよとて强ひたる人ありしが、楊震は聲あらゝげて知る人なしとは如何にぞや、天も知り地も知り我も知り君も知るをといひけりとぞげにいはれあることなりけり、さるを今の人日といふ日に月といふ月に、守るべき道をとほざかりのみ行くぞ悲しき、あはれ心あらむものは楊震がこの言葉を聞き、其志のきよくはたいさぎよきに見習はでやは、いかに人の前にてのみ行ひを繕ふとも、獨を愼まざる人は錦もて穢れたるものを包めるがごとく、いつかは人におとしめられずあらんやは。

評　これといふめづらしさもなくさしたるあやもなけれどおしわたしてとゝのひたるをめでたしとす

甲賞

夜汽車の旅

福岡縣京都郡豐津　岩田てい子

久しくあはざりける友がり訪づれしに物語りつくる期もなくておぼえず時を過しぬればうたてや苅田といふ驛より我居村豐津まで夜汽車の旅をなさで叶はぬ事とはなりぬ心細けれど今はせんかたなしとて出でぬ空は打ちくもりて雲足いとはやく日は西に落ちて午後

六時といふに停車場につきぬ、かんだと記せる瓦斯燈の光寂漠たる場内をほの暗く照らし黒き白き兩様の掲示板は朦朧としてねむたげなり待ち合せの客のおのれの外に二人一の行橋に一は曾根にといふ多くのかけ人なき倚子はいざ休息といはぬ計りに斜なるあり横なるあり數脚算を亂して一入の無聊をそへたり

六時三十五分出札口は開かれぬ多くもあらぬ客とて札を買ふにいと易し

改札する人の小學時代の同窓生なりしには驚きたりき男女性へだたれはたよりもえせでありしを四とせへたる今日互にはからずつゝがもなくて人となりし様を相見てはさすがに其の上の事どもおもひ出でられてなつかしかりしに彼の人もしかやありけん笑かたむけて禮せられたる折柄とてことさらに感深かりきまつことと五分計り一刻も千秋の心地して車の來るといふ方をのみぞみる漸く遠雷の如き音はひゞきぬ暗を破りて進み來る二個の燈光なほ微なり轟々の音漸く大となれば煙筒を出づる煙の下方は赤く緣邊は薄灰色に彩れるがトッ トッと音して空にのぼり長く後方にひきて終りは暗と同化するも見ゆる様になりぬ

停車しつれど下車する人はなくのるものは先の二人おのれは急ぎて人おほきところに乗らむとす忽ち目に映ぜしは中學生の帽子うれしくて此處にと入れり

あはれ友とする人もなくて月もあらぬ前途なほ數里をたどらんとするおのれにはかれの前額に黃金色をなして車中の燈光を反射しつゝ輝やける豊津中學の徽章は如何にたのもしかりしよ年齡は十二三才逞ましげなる好少年なり何地をさして行くならん萬一われと同じき道にはあらざるか問はまほしかりけれどさすがにつゝましくてやみぬ他は農工商の人皆珍らしげにはたいぶかしげにおのれを見る理りなればはづかしくて窓にのみ向ひぬ

車は軌しりはじめたり車外は暗又暗時に一きは黒き物の往き去るは森にやあらん山にかあるべき速力は次第に加はり暫くにして又やう〳〵に減じぬ汽笛一聲餘韻をとゞめて長く音波のきゆる時白光燦然として我が眼を射ぬ中空にかゞやくアーク燈あはれ行橋には着きしなりき此の驛の夜景白晝を欺むく電燈五個青白色に地上を照らし幾條の軌道縱横に走せちがひ昇降の客奔走する驛夫驛員いと多し豊州鐵道の起點の地なればなるべしピリ〳〵車掌の吹きたる呼子の笛はいたく我が耳をさしぬいて今十分を出でずして我豊津には着せんな

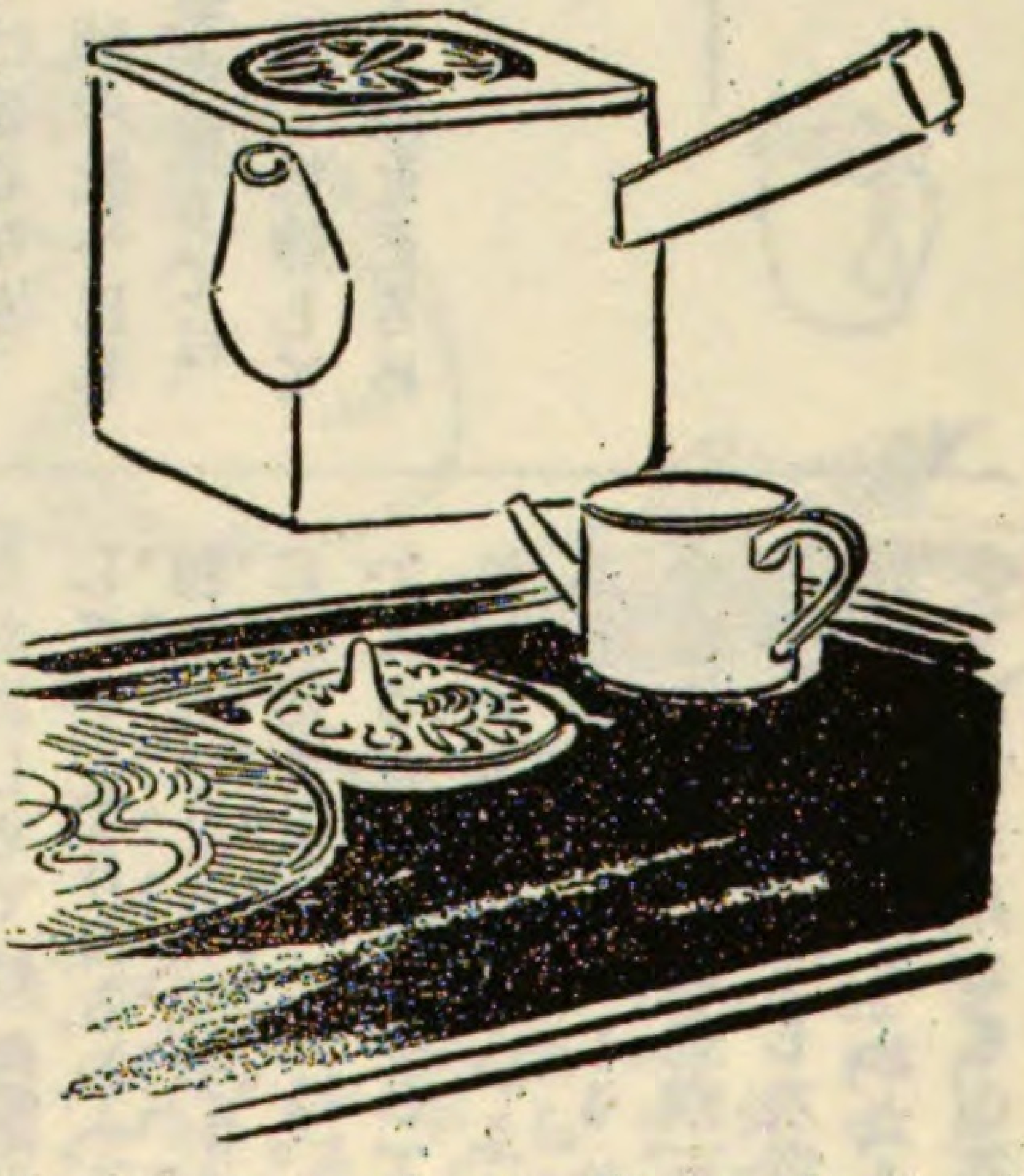
り
暗の中にも我が居村は近づきぬつゞきたる竹林破れたる小家はげたる山一として腦裏に彫りつけられたる物ならぬはなし

をりよと告ぐる汽笛に卒忽として車に別れぬ先の少年は今何處へかゆきし影だになしたまく雨さへふり出でぬればいとゞ心細さいはん方なしさはれ車の行くべきところにもあらねば心ふり起して闇を幸ひに裾高くかゝげて足のかぎり走りつ門邊にたちて唯今といへば家人のや歸り來しかと計りあきれたまへる宜なりけり

頃は十二月七日のことなれど汗しとゞになりぬ心を專一にして歩みし故なるべし時に十時なりけり

語らひし友ゆくりなく逢ひし友及びかの少年もはやねむりにつきたるかあらずやなどおもひつゝ寢につきぬ

評　かゆき所に手のとゞくこゝちしたる文なり



乙賞

女子の本分

東京本郷區丸山新町二番地竹内せき方　木村花香

女は身躰のつくりよりはじめて、よろづにかよわきものなれば、すべて、ものいひたちゐふるまひしづかに、ことばすくなく、何事もひかへめなるこそ、よけれ。さるを、今の世の女子は、やゝもすれば、たゞわづかにても、ならひ得たることをば、人にほこり、ひかへめにせば、ものしらぬものよと、人やわらはむと、かへりて、はづかしく思ひなして、道を行くにも、所せまげに歩むを、よきことゝこゝろえ居るぞ口し惜き。そもく、學校の物學ひは、人にほこらむためか。さはあらじ、行末人の妻となり、母となるは、女子たる者の本分なれば、其の子を敎ふるに、何事をもしらで、いかゞすべき。殊に、いわけなき小兒のうちの

善惡賢愚は、ひたすらに、家庭敎育の如何によるとこそ聞け。夫は日々外に出でゝ、務めを爲すものなれば、かゝる世話の、なし得べきやうもあらず。されば、家に在る母の役目こそ、いと〳〵重きものなりけれ。夫にかしづき、人に交り、あるは、事にあたりて、物のよしあしをわかちさだむるにも、學問なくては、かなはざるなり。されば、年若き時より、よく心にかけて、師の敎へにしたがひて、おのが智をみがき、德を修め、家に在りては、よく父母につかへ、兄弟の中むつましく、又人に嫁しての後は、よく夫を助け、子をはぐゝみ育て、家をさためんことこそ、女子第一の務めなるべけれ。

評　論旨はふるめきたれど文に疵なきをもて

丙賞

春やすみ

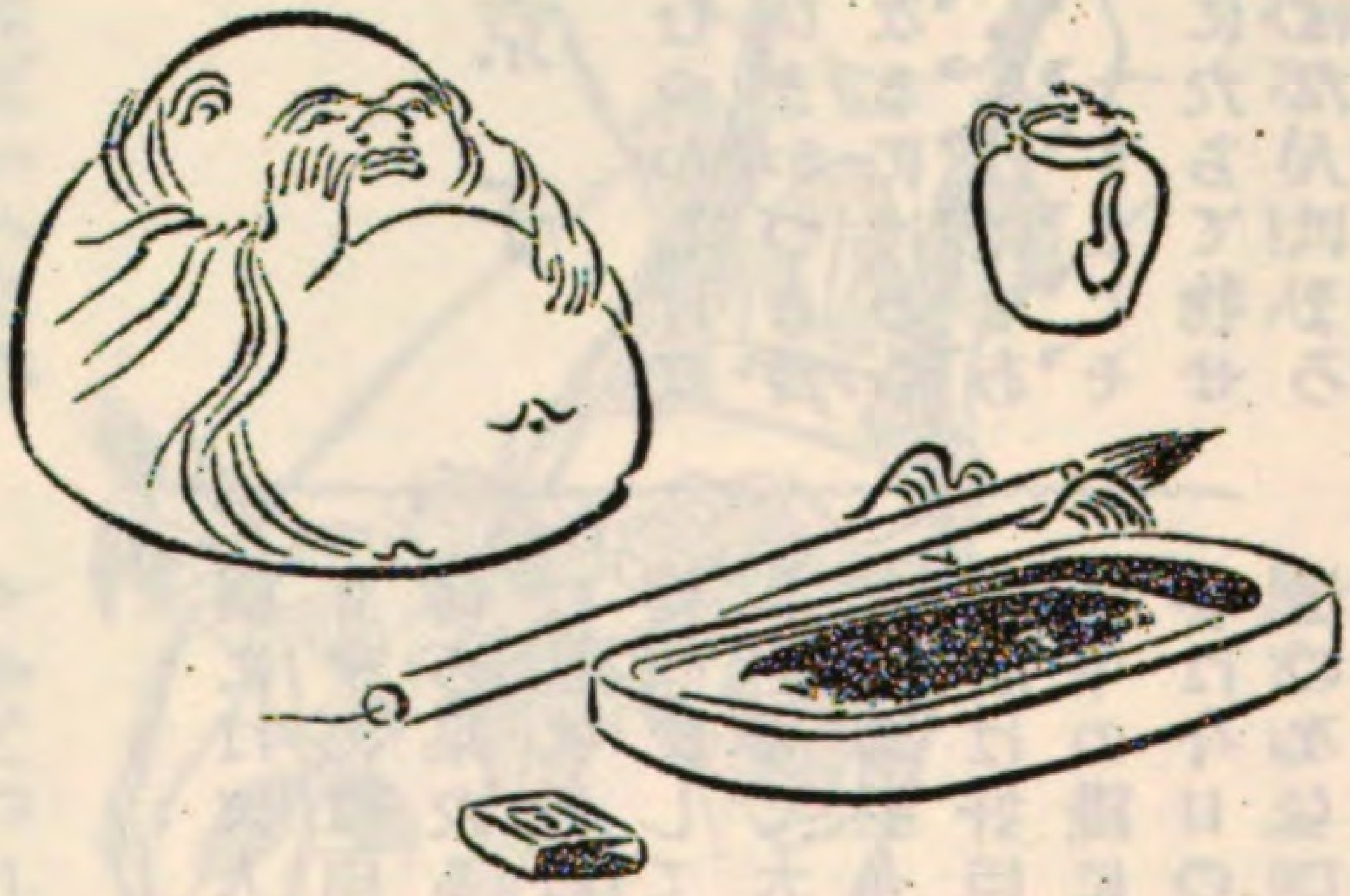
大和福住む鄕　はぢらひ女

試驗の海やう〳〵渡り終へて、今日たちかへる故鄕、あはれうるはしの故鄕のけしきや。流れそめし淸水は、こゝに舊苔の鬚を洗へり。吹きそめし春風は、かしこに新柳の髮を梳れり。山のたゝずまひ川のすがたも、ありし昔の樣にして、鳴く鳥の聲、萠ゆる若菜の色だに、見しに變らぬ大御代、實にや世に遠ざかりたるこの山里にも、み惠のつゆはくまなかりけり。枝もならさぬ時つ風を身にしめては、流石にうれし淚に袖しぼらるゝに、ましてや、今日たちかへりみれば、たらちねはすゝやかに務めおはせり。はらからはた事なうおひたちて、嬉しげに門邊に打迎へたり。あはれ、妾は何のさちありてか、かゝる世に生れあひて、このらうたき族の中に育てられにたる。樂しといふもなか〳〵に言の葉なくてなん。ふし柴の只しばしも、住まるべくもあらぬ蓬生の宿も、今はなか〳〵に金殿玉樓にも勝りて覺ゆ。井の中の蛙と妾をのゝしりし友垣は、共に語るに足らぬものなりけり。飢に泣くかたゐとわらはを笑ひし友垣はなか〳〵に世を見ぬものなりけり。しかくはかなきものと、何しに今迄したひむつびにけん。思へば口惜しき限なりけり。

妾の家は元より富めるきはにはあらず。さるからに、父は日ねもす野に耕して、うからやからのいきの緒をつなぎ給ひ、母は夜もすがら裁ち縫ひはきすゝぎて、家

政をとゝのへ給ふに僅の暇もおはせぬなりけり。さばかりいそしみ給ふ中にありながら、いかに休なればとて 妾ひとり浮れ遊ぶをえんやは。やめねとの給ふふた親の大御言葉をよそにして、手馴れずながらも業を助くるこそ、受くる恩愛に報いまつる片端なりけれ。あはれ、とる梭に手は瘠せぬれど、かしくいひに顔ばせはあせぬれど、いかで露ばかりもいとはんやは。心の中は神こそしろしめすらめ。たふとき師の君もしかく敎へ給へりけり。口の端のおん敎を手づから身に行ふこの春やすみ。あはれにもうれしきかな。

さはれ妾もみやひこゝろはいさゝかもたり。吉野と聞き初瀬と耳にしては、いかで遊興の心の起らではあらん。さなり、美しき花のかげ、香ぐはしき花の吹雪の、常に心の小琴に通はでやは。しかはあれど、女の道だに覺えなばたれりと、わが親わが師は敎へ給へり。國のいしずえとしもなるべき益荒男をし設けなば又足りぬべしと、妾は覺ゆるぞかし。さるからに、程近き花の名所も今によそにし侍るなりけり。これこそ侮ゑ受くる一つの基なれ。さるにてもあさましの人の心かな。



たまく〜三吉野の友は文をおくりぬ。初瀬の友垣はた玉章をよせぬ。うれしきは水莖の跡にくきは其の心ばえ、あはれいつに似ぬやさしき此の言の葉は、何たることどもぞや。妾はゆめこたへまつらじ。妾には兩おやのいますを知らぬにや。はらからあるをも知らぬにや。うつろひやすき花染心に從ひて、やさしきやからを苦しめては、あゝ又何とかせん。むしろ、むぐらの宿におきふしても、其の業を助けて、こよなき樂の境にあそび、なつかしき故園に、心の花を眺めては、日頃のうさをやはらさん。罵らばのゝしれわが友、笑はゞわらへわが友、妾はおそれじ。心動さじ。あはれ、花を愛づるは、身の務を遂げし曉にこそ。匂をたゞふるは、みの責を果しゝ暮にこそ。草木もまた心あり。今に色香

のうすべきものならんやは。あはれ赤き心に匂ひいでよや、敷島の大和心の山櫻花。』

評　おもふ所を十分に述べ得られたるもの

秀逸

不倒翁

神戸市中山手通五丁目　青木京子

あはれこの不倒翁よむくつけきそのまみむつかしけなるその類などいとおやしげなるに赤き衣ひきかづきつゝものおそろしきさましたるなつかしげなるにはあらねどなほをかしまろばせども〱はらだゝしげにもあらずさりとてほゝゑみもせでおきかへり〱することそ心にくけれあはれことわざしげき世の中にたちて物せんにはおのれとつまづきたらむをりにもはた人にまろばされたらむをりにもこの不倒翁のごとひたすらたへしのびつゝたわまずはげみなばいふかひなき身も思ふ事はたさでやはとてこれをしもむつまじきものにもてはやすもあながちならずかしあはれこの不倒翁よ

秀逸

菅公

石見國邇摩郡大國村　中原道子

朝には位人臣を極め萬民の生死を掌の中に左右せし人も夕には雨もる茅屋のあるじとなりて遂に深山の土と朽ち果たる例は世の中にいと多かるが中に菅公の如きは實にあはれとやいはんはたかなしとやいはん君もと博學にして政務に委しく加ふるに誠忠世に並びなかりしをもて大に用ゐられ讃岐の守より累進して從二位右大臣に至り政權專ら君の手にありしも忠臣恩寵せらるゝ時は奸臣之をねたむは世の常にして君の如きも一度時平の讒にあひてにはかに太宰府に貶せられ昨日の榮譽は今日の悲みとそなりにける素より一榮一落はうき世のならひと知りつゝも君が誠忠より湧出る涙は幾百千行なりしならむ恩賜の御衣都府樓の瓦色觀音寺の鐘聲幾度か袂をぬらしけんかくて三年の月日を空しく憂悲の中にすぐして東にかへりし雲にも似ずつひに筑前安樂寺を千代のすみかと定め給ひぬることそいとゞ悲き

限りなれ御空行月の光はよし清き心を照さずとも曇らぬ君が心の玉こそ千代にもくちぬ後人の龜鑑なれ着てし濡衣などかわかざりけむ思ひやるだになげかはしき至りにこそ

仰ぎけん月は涙に曇る共すめるや君が心なりけん

秀逸

久能まうで

靜岡市吳服町壹丁目矢入方

矢入その子



その景色のすぐれたると、その廟社のおごそかなるどにて、名いとたかき久能の山へ、ひごろ行かまほしと思ひ侍りしに、一とせきさらぎの中ば頃、うた子の君、志ん子の君、などいへる心あへる友どちとうちつれて、久能まうですることを得たりき。

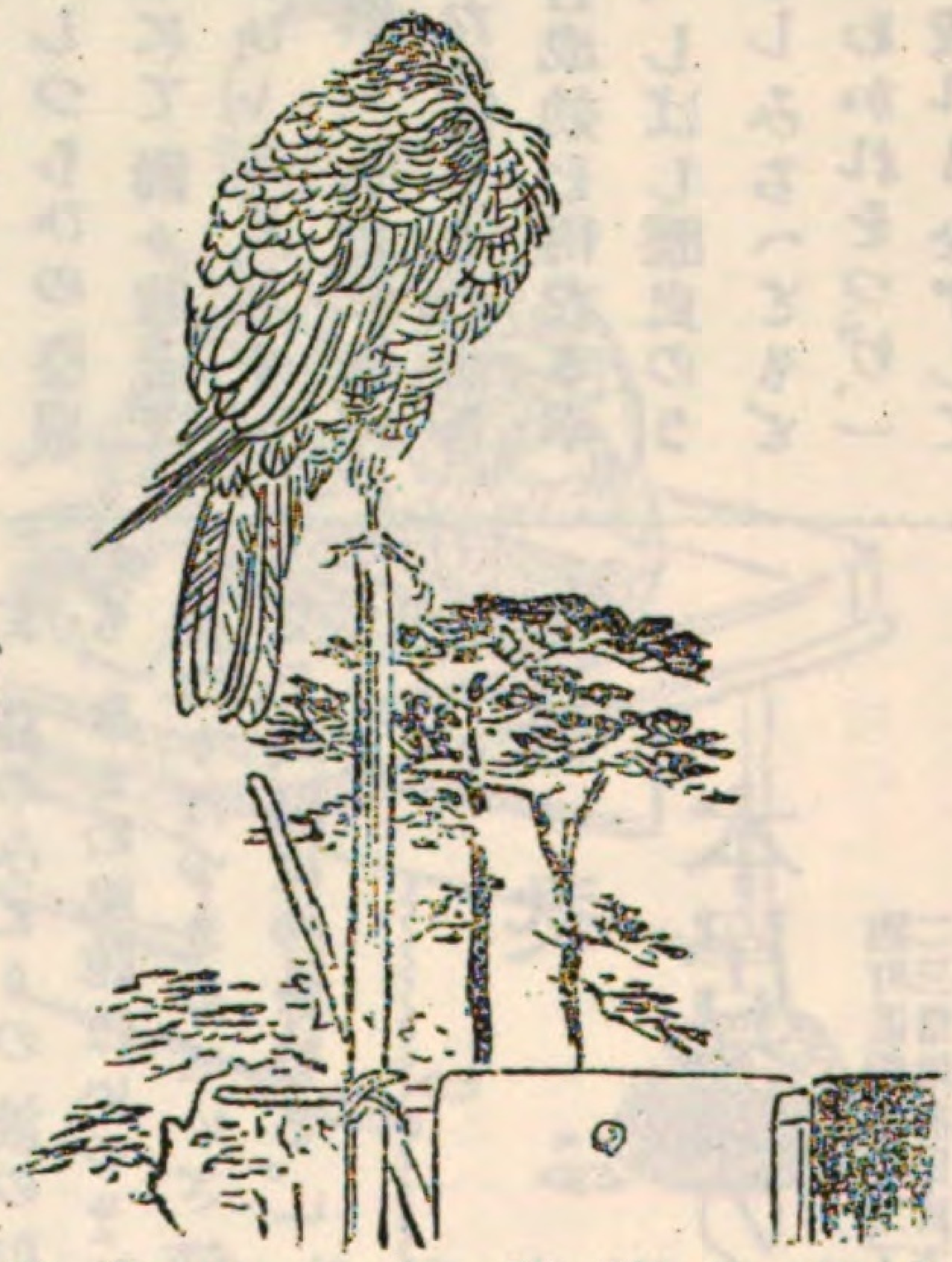
あな尊ふとしや、日光のはじめとしもいふべき久能山頭に、家康公の御たま祀れるおくつきの、いかによそほしく神さびておはするか、千あまりの石段とき〻たる坂みちの、いかなるたゞずまひにかあらむ、などゝ道すがら語り合ひつゝ行手樂しさに足のはこびもはかどりて、いつしか久能山の麓、根古屋の村につきぬ、とうふ屋といふに入りて、しばし休らひつゝ、いざ行かなむと、いよいよのぼり路につく。

山は根古屋の海べにそばたちて、その三面はさながら壁をたてたらむ如く、南の一面わづかに道をとほすのみ、道は「く」の字なりに十あまり六を、つゞらをりせるげにけはしきみちなり、あへぎ〳〵上りゆくに、一歩は一歩より景色ひらけて、あたりいと靜かに、耳に聞ゆるものとては時々おとつれくる松風の聲と、かすかに響く波の音のみなり、名におふ千あまりの石段なれば、足疲れ息せはしく、年ごとに脚氣になやめられつると聞く、志ん子の君にはたゞさへはかどらぬあゆみの、えたえぬさまいとほしかりき、かたみにたすけ合ひつゝ、やうやくのこと

にて一の御門に達し得たり、のぼり得たるうれしさに、われしらずあゝなつかしき久能山頭の眺めよと、うめきつ、かへりみすれば駿河灣の大うなはらは漫々として波いと靜かに、空よくはれたれば波間にきらめく日光のうるはしさ、伊豆の山々はおきふしゝつゝ海中に横はりて、むらさきとみどりとを調合せしかと思はるゝ色合をあらはし、遠州の御前崎はうす墨もてのしたらむ如く、はるかあなたに淡く、燒津和田岬は松の形もよみ得べきまで色濃く、そが前につきいで、その配合の巧みさ、よも自然ならぬばえかき能はざるべしと覺ゆ、さらに大崩の斷崖は虛空藏の森を背にして、藍より濃き海水に腰をひたし居るさま、そゞろに淒き心地す、見下ろす根古屋の村には、せど近く白波のうち寄するさまもあかぬながめなり、かゝる自然の大景にまのあたり見ゆる妾等の身の、いかに樂しからまし、はや心も空にて、飛びかふ鳥の翅をも奪ひたらむ如き心地すなり、もし三五の高秋、月まどかなる夕、この山門にたどり來らむにはその景色いかならん、海原たゞよふ月影のくだけては合ひつ、こがねのいとのきらめくさまの、さぞやひとしほのながめなるらむ。

門を入りて何氣なく見上ぐれば、一もとの杉樹矗々として天に聳え、しかもその幹の剝けたる落雷のあとあらはなり、やをら數段の石階を登りゆくに、いづこよりともなくめでたきかをりするに、ふとめてを見上ぐれば、數十株の梅樹今を盛りと咲きそろい居たるさま、苔おく古木ならねど、さむさを厭はで百花に魁せる心のをゝしさ、いとも尊し、まいて園のうちには、畏くも東宮殿下御手ふれの梅をはじめとし、常宮、周宮兩殿下の御休憩御袖ふれの濃染梅など、色も香もうづろひゆけるさま、わきて見ばえするも、竹の園生のいよいよ榮えゆきまさむしるしにや、いとめでたし、偉人のみたま祀れる神の庭の、氣品おのづから高げなるこの梅園に、芳しきかをりをめでゝ、しばし世のうさをも忘れてけり、かゝるをりしもうた子の君の、かしこに車井戸見ゆるにと先きたちてゆきたまふに、えん子の君も妾もつゝけば、これぞ音に聞く山本晴行の穿ちきといふ勘介井戸なり、井戸きはに近づきてなかを見下せば、いく十尋の深きにや、しばし見つめ居らねば底の水知れぬほどなり、梅園の東にあたりてさかおとしせるを、語るもおそろしき地獄谷と稱へ、西にあるを土器谷と云へり、

士器谷の嶮岨にかざしつはびこりつ生へる一ともとの古松あり、即ち物見の松と云ふ、おづ〳〵そが岨きはににぢりいでつ、見下ろしゝ刹那、妾等三人は云ひ合せたるやうにおとぢさりして、あなおそろしの谿よ、よも妾等三人を吸ひこまむとするにもあらさるべし、と身ふるひしつゝつぶやきぬ、それより進むこと數歩にて社務所あり、正面の石階の上には樓門ありて、後水尾天皇の御宸筆になれる東照大權現の五大字をしるす、樓門をすぎゆけば左甚五郎のきざみたりといへる神馬を左手に見て、唐かねのとりゐをくゞるに、右手に大鼓樓あり、五重の塔のありきといへるそのあとには、今蘇鐵を植ゑあり、また石階をのぼること十數段にて、神樂殿、神饌所、などいへるあり、神庫のかたへに高野槇のかげくらきまでにおひ茂れる、石碑の立てるかたへに實割梅（みわれ）といふが苔つきたる枝に花のひらける、いづれも家康公の手植なりとや、ふみゆく敷石のみぎひだりには、諸侯よ



り奉納せられたる燈籠多かり、神庫には徳川家歴代將軍の用ひたる、鎧、兜、その他兵器、馬具、古書、古畫、古器物などくさ〳〵の實物、かずかぎりなく收めありと、それより神官にあないたのみて、廟內の拜觀をと、さらに正面の十あまりの石段をのぼれば、即ち御唐門にて、世にたうときこがねしろがねの巧にちりばめられよそほはれてし見る目もまばゆげなる美しの御門なり、そが扉のうちには紫縮緬に葵御紋染めぬける幕のはられあり、丹精のきはみになりたる御堂の美しさ、云ふもおろかや、三人は神官の導くまゝに御堂に入りけるに、まづ身を淸めてうや〳〵しく御拜をはれば、御酒（みき）と御札とを賜りぬ、見上ぐれば天井は合天井にてめぐりの鴨居の上には極彩色せられたる三十六歌仙の額位置よくならべられ、柱かまちなどみな呂色のつやけし塗にていといかめし、神官の語らるるを聞くに、もなかに家康公を、右に秀吉公を、左に信長公をと、三公を

一堂のうちにならび祀れるなりとぞ、この静けき神さびたる御やしろに、あないせられたる三人の心はそもいかなりし、しばしはそのかう〳〵しさにうたれて、身の久能山頭にあるをも忘るゝほどなりき、御堂の左かはに唐戸あり、そを入りて神廟に達しき、廟は高さ一丈七尺あまりの石よりなれるもの、そのしつらひの堅固なるよも他に比を見めや、あたり老木にて欝々枝をまじへ、聞ゆるものとては、山彦の返へすひゞきと、かすかに傳ひくる波の音のみにて、いともの淋し、あはれ徳川氏三百年の大平を謠はしめし偉人はたれぞ、この永きまつりごとの基をかためたる傑士、否成効を得たる幸運の人はげに家康その人にてありし、しばし歴史のうつりかはりに思を寄せて、再びもときしみちへともどり、寶物など見をはり得たれば、神官にわかれをつげ、一の御門より石だんを、こたびはさのみ疲れもせずして下りつくしぬ。

とうふ屋に入りてわりご開きつたうべをはり、何氣なく障子あけて有渡ヶ濱の海景色を見やりしに、一艘の汽船は今しも斜陽を背にして、南豆の一角石らう崎のかたへと走りゆくなり、海はひろく、風は淸らかなるに、いざり舟の帆なかばおろしつかへりくるもの、二三艘見ゆるなど、妾等はあまりの心地よさに、ひごろ隔なき間からとて、たちまち聲うちそろへ『舟にはたえぬ友のうた、海にはかはるしまのさま、あさひの色も興そへて、たのしきなかに匂ふなり。友のひたひにてりかへす、島のみどりの波のかげ、あゝけふの日はながれても、きえぬ記憶はいつまでぞ』とうたひつゝまた語りつ、なごりはつきねどいざ歸らむと、夕暮ちかくに車驅りてぞ家路につきける。」

秀逸

本居翁の墓に詣づ

麹町區飯田町三丁目二三番地前田氏方　河村君子

俳優に身をおとし給ひし平田大人のかなしさやいかなりけん。にぎれるきらずにひだるさをいやしゝ荻生ぬしのくるしみやいかなりけん。これもかなしく苦しくはあれど、神ながらの道をあきらかにし給ひし本居翁の苦學いみじかりきかし。この翁の御墓は伊勢の國松

坂の里をさる二里ばかりの山室山にあり。おのれ一度はこの御墓にもうでんと兼ねて思ひつゞけたりしに、をりなくあまたの日數をへにけるが、ことし親しき友の同じ思ひをいだくものあるよしを聞きてその友がりおとづれしに我れもそれのぞましかりきと友のいふにさらば明日こそよからめと誓ひてかへりぬ。その夜は枕につけど此の事のみ思ひ出されて夢なりがたし。あくる朝とく起きいでゝ山田停車場にゆきぬ。汽車ははやいでんとす。いそぎ赤き札もとめてのる。老いたるあり。わかきあり。男あり。女あり。窓にもたれて涙をおとすは父に別れ母に別れてかたしく袖の露けきをなげくなるべく、顏さし出して行く方をのぞむは妻にあひ子にあはんと早き車だに牛の歩みとかこつなるべし。同じ車にのりあひたる人にも早きをつれなしと恨むもあらん。樂しと喜ぶもあらん。山とながむるまに川となり、川と見るまに田とすぎて、なか〳〵にわれには窓にうつ



りゆく景色のはやきをこそうらみらるれ。かゝる程に松坂驛にいたりて車より下る。こゝよりひろからぬ野路をへて山室山につきしは晝すぐる頃なりけり。この山おもひの外にけはしくてあへぎ〳〵のぼる程に妙樂寺てふ寺あり。案内を乞ふにうちよりにこやかなる男いで來りよくこそ詣で給ひたれ。いざ御墓にいざなひまゐらせんとてさきにたちて行く。小高き處にいざなはれぬ。これぞ本居翁の御墓なりける。碑石は自筆にて本居宣長之奥墓とかゝれたり。そのまへに小さき櫻をうへ。翁は春の櫻を世にめでたきものにしたまひて、われみまかりなん後も奥都城のうへにうゑよと殘し給し敎をまもりて子孫のかくはなせりとなん。傍に平田大人の碑あり『なきがらは何處の土となりぬともたまは翁のもとにゆかなん』と云ふ歌を彫れり。あたりは近頃皇學館生徒の献櫻會てふものを起して年々たえず櫻をうゆればながめいとよし。男はさも

ほこらしげに笑みをふくみて翁のいさをしたゝへぬ。あはれ。翁はわかかりし時より御國學びにこゝろざし深く歌よむわざさへ世にすぐれ給ひ、筆陣の中軍は古事記傳となり。玉櫛笥となり。直日靈となりて九重の御垣をまもり、その一軍は玉鉾百首となり、玉の小櫛となり、旭に匂ふ山櫻なす大和心をちらさんとしたりし西風をふせぎ給ひしいさをしを思ひやりきこゆらすべし。いつしか日も西にかたむきぬれば心のこして、

咲き匂ふ櫻の花よ心あらば　この山ばかり墨染にさけ

とかき流して、かたへの櫻の枝につるしけれど、墨染こそかへりて翁のかたきともいふべき佛にゆかりあれば本意にはあらざめりと、思ひかへしてまたやみぬるぞげにをかしきや。

秀逸

おぼろ月

牛込東榎町二十番地飯田様方　千野やす子

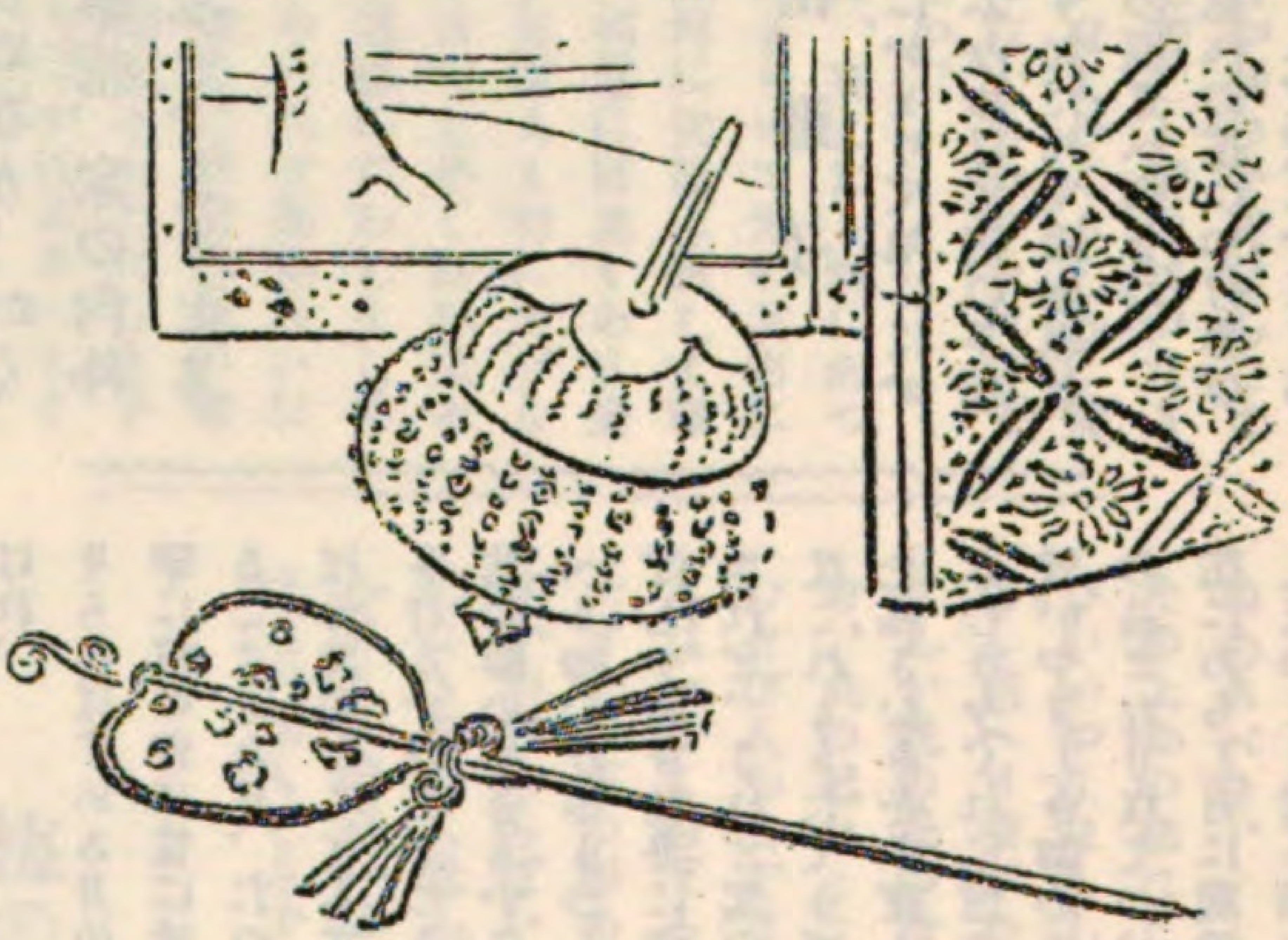
照りもせず曇りもはてぬ今宵の月に、花の木かげをあくがれて、おなしかをりに霞むとめづるみやびをも、あるは高殿のおばしまに、ともし火けちて寒からぬ吹雪をうたふ歌びとも、偕はわらびに根芹になんど念ずる酒客も、またいかで、はらからの骨うづめけむれうとうの野邊なんと思ひやるますらたけ雄もあらでやは、あな世にある人はおのがじし、今宵の月にあくがれて、めでつたゝへつ歌ふらんを、われは夫には引かへて、むかしを忍び今をわび、なげきのみこりまさればや、ながむる月も何となう、ぬるゝがほなるぞ佗しき。

あはれやげにいにしへは、十あまりの三つの糸の上に、ましろき指をはしらせて、妹がかなでしつま琴の、琴柱におつる聲のほとりに月のかげをもさぶらはせつゝ、歌よみかはしむつひかたらひ、浮世のうさも思ひ忘れて、たのしけく遊びあかしゝ春もありしを、あはれその妹が調へし歌ごゑは、月かげのごとおぼろながらも、今尚ほ耳に殘れるものを、あはれその、妹がかなでしつま琴は、さく花のごと塵もさはらでさながらこゝにのこれるものを、まいて軒近き花のひまより、おとつるゝ月もむかしにかはらぬものを、春やむかしの春ならぬこそかなしけれ。

あはれいづちよりぞゆかしき琴のねきこゆなる、あはれ斷腸の音や、想夫の曲ぞいと〳〵妙へなる、こぞ此のつぼねにての妹がしらべは、我に露ばかりも涙なかりしを、けふは將たいかなればあやしき露の降りくるやらむ、さるにても月の光のたゞはしけんと、花さくら木のかぐはしけむと、たのみこしめでこし妹こそしのばるれ、その月の雲にかくれて入りにしがごとその花の風をいたみて散りにしがごと、はかなく消えし妹こそはいと忍ばるれ。

かすめる月よなれもいま、あともろ共にみしよの春をしのびやいづる、光おぼろに眉ぬれひちて、雲のあまがさかざしつ西に流るゝ影いといたう哀れなるは。

おもひ出でたり、流れながれて末つひに、なれは行くらむ西の都に、そよその國の中にこそ戀しき妹はあるらめや、淋しき閨をたゞひとり、まもり侘びつゝねをのみ泣きてあるらんか、よしさらばその淋しき妹を、われにかはりて慰めてよ。



あなせきあへぬ涙たゞへて、こしなしごとゞも思ひいでつゝ、歎かひわぶるわが心、そもいつの世にか世にある人のかずにまじりて、のどけくも又樂しけく、こよひの月を見んものぞ、去るにても妹しありなば在りなましかば、あなゝつかしの吾妹子や、あらなつかしの吾妹子。

懸賞文をえらひをへて

坂　正臣

修辭の疵無きを取らんか、意匠の巧なるを取らんか。文を選ぶに當りて、胸中に横たはる疑問は、まづこの二つになん。修辭の疵有るは、直し繕ふことを得べし。意匠の巧ならぬは、いかにとも爲ん方なし。たゞし意匠の如何は、題にもより時にもよるべし。修辭の疵有るは、其人の素養乏しきしるしにて、事柄のよし面白からんも、文といふ資格を備へぬをいかゞはせん、そも〳〵こたびの懸賞は、大

の字さへ冠せられたれば、驚くべき傑作もやいでんと待たれしを、さのみ敬服すべきが見當らぬは、飽かず怨めしきわざかな、作者の君たちよ。特賞を得たりとて、甲賞を得たりとて、心驕りなし給ひそ。そのふみのすぐれしにあらず。他のもの丶なべてよからぬなり。かくはいふもの丶、選者も亦、憂へ悲むべき事情、家の内外におこりぬれば、腦の損はれ、眼のくらみて、よきをもよしと、よく見かねたるにもあらんか。

賞外

春の夜

和歌山　藤田進子

おぼろにかすめる春の月さきみだれたる庭の梅の樹にか丶りて地にはかすかに花の影うつりぬ、いづこよりか散らぬ花をばふみわけて花の下なる根かたに腰うちかけめでなふところにさし入れ首うなだれて深き思ひに沈めるひとりのうら若き乙女あり目にはかなしみの涙さへ輝きぬ、思ふまじとは思へども昔しにかはらぬ月につけ春を忘れぬ花につけ思ひ出づるは、むかしのたのしかりし事どもよ思へばおもへば實にかはり易きは浮世のさまや過ぎしむかしは、花わらひ鳥歌ふ春の野には共に手を引きて花にゑひ鳥の聲にさめ散りゆく花とともに暮れ行く春をおしみつ丶戯れ遊びしこともあり、降るもうれしき春雨互ひの袖をしぼりつ丶心のそこの誠もてかへじかはらじと深くちかひし昔の葉も今は丶や仇にしてれられぬま丶の夜半思ひ出していたづらに涙の種とのみなるぞ是非なかりける、月日の小車めぐりめぐりて元にかへり花はむかしの如く梢に登り鳥は昔にかわらぬ聲もてなく春とはなりぬ、されどされど變りはてにし浮世のさまの花鳥のそれにもならはで再びかへらぬこそ實にうたてけれ、

そらにはすめる月の夜は秋の哀れをよそに見て二人互にそでつられ妾は琴に彼の君は笛に泣く虫さゞめふたりのたのしき天地となし終らしめたることもあり、たのしき景色に狂ひ居たりし二人をてらししその時の月は今又同じくてらすなり、されど今は昔しのたのしさうれしさいづち行きけんかなしさつらさの思ひに沈める姿ひとりをてらすを如何にせん、其の影のあきらかにさへぬは若しや彼の君の姿が今の身の上を哀れみ給へる御かげをうつしたまへるにはあらざるか、あゝ、うれしさもよろこばしや廣き世界に君ならで慰めたまふもの又いづくにもなかりしなりされど、されど其のみかげ見るごとに涙の露のいとしげく降りまさるは又これもうたてき浮世やな、

北風さむき冬の夜ふくるもしらで窓際にあみものせしは誰が爲ぞ、秋風さむき夕ぐれに燈つけず東の椽にたちぬひせしは誰が爲ぞ、これ皆かの君がやさしき御心にむくいんが爲めなりき、されどそのもの徒にかたみの品となりはてつ、

花にあらし月に雲浮世の風はいづくも同じく吹くなれどわきて妾にひとしほつよく當る樣なる心地して果てはあらぬ神をさへに怨みぬ、

いとし夫には殘され恩愛の海山もたゞならぬ父母には不孝の子とあつかはる丶妾が身なれば神にのみすてられす其の御助けを受け得ることのあるべしや、天にも地にもすてられて何處をすみよしと思ふ里のあるべし

や、

さればさても此の世にあらん望みなき身の塵の浮世を今宵かぎりと見限りて一と思ひに淵川へなりとゝ身を投げて死にたや、今頃は彼の君も賽の河原にさまよひて過ぎ來し空をながめつゝ妾の來るを今や遲しと待ちわび居たまふらん、思へば戀しきあの世や、彼の君や妾の今死なんことといとも容易き業なれど老たる父上母上を如何にせん若しも妾のはかなき最後を遂げたらんには如何にしたまふべき定めてかなしみくるしみに妾の後を逐ひたまはん程のいたづきにかゝり給はんもはかられずそれにては親を殺さん程の心にひとしき不孝のつみおそろしや、

此の程も母上妾を呼び給ひてのたまふ言葉をきけば、死したる者に向つて操とやら女の道とやらを盡して何にかなる早くあきらめて元の其方になられよその方が如何にそちの身の爲めになり又如何に父母に對して孝行なるか計られず又この度の緣談とて先方をきくに相當に財產もあり金もある家の息子にて數多の持參金もあるべしといひ又當人も村にめづらしき才智あるものと聞きたれば此の上こさんよき口はなし早く心を定めて親々の言葉に從ひ初孫の顏なりとも見せて妾等の老後をたのしましめよ妾等二人の力とも杖ともたのむ者は其方ひとりのみなれば無理はいはぬぞ心靜かに熟慮なし早く返事をきかせよあまりの執念は皆妾等親の苦ともなりぬべし父上とてもあれ程にのたまふものを何程きゝわけなき子といへ親の言葉とききくならば子たるものゝ從ひまつらでやはあるべきとといと靜かにさとし給ひけれども其の間妾れにたゞ袖を顏におしあてゝ何のいらへもなさゞりければいとも御不興氣にあゝ聞きわけのなき此の子や勝手にせよとて奧に入給ひぬ、あゝこれほどまでに仰せらるゝ溫き御言葉にそむきまつることとの出來得べしや死せんなどゝは思ひもよらずおそろし、

さればとて、女の道にそむき操をやぶり心にもあらぬ夫に、此の身をまかせんくやしさよ、綠りの黑髮年ふりて霜に降りなんことあるも、我世のきはみ身のをはりまで共にありなんと誓ひてし彼の君と妾れ、よしや現世の夫婦のえにし短かしとも、なぞて、われの君のこころにそむく事のあるべき、

その上心の枯れしなきからのみをもて父母の心に從ひたりとて後日の禍ひいかやうならんも謀られず、

あゝ惑へり妾が心、親の命に從はんか此の思ひを如何にせん、思ひを通さんか親の此の命をいかにせんあゝ惑へりな惑へりな、いかにせん此の命、此の思ひ……、

むせび入つてぞなきにける、あはれ、

月はいよよおぼろに此の哀れなる乙女かすがたを憐み顏に更け行く光りかすかに花の影あはし、少女かしらをすこしあげつ、あゝ、此の月此の花かの君あらばいかにたのしからんされど今は妾れひとりかなしさたへぬこゝろもて見んことのかなしさよ、と又もやむせぶ聲かすかなり、をりしも東風一陣花の影ゆらぐとみれば枝をはなれしさくらの二ひら三ひら行方もしらずさまよひぬ。

梅の花を見ておもひを述ぶ

東京　林喜代子

今は早五年の昔とはなりぬ、已れいまだ十年あまり二といふ年の春の始め、師の君に伴はれて、日頃はらからも只ならずむつびける、すみ子の君もろともに、大森の八景園に遊びき、海のけしき殊にうらゝかに、い

はん方なく、心地よきに、得ならぬ梅の匂ひいでたる、此世の外なる心地なんしけろ、其折あはれその折なりけろよ、君さおのれさ、其花をもて興しつゝ、あはれこの花のかく色も香もいさ淸くうろはしう咲き出で、世の人にめではやさるゝは、雪霜の寒さが中をしのぎてこそ、いでわれらもこれより、此花を學の道の栞さなして、いよ／＼勉め學ばましさ、かたみにかたくちかいし後、いく程もなくて、つれなき風の西さ東に吹きわけてよりは、文もて互にはげまされつはげましつ、あッばれ學の業をなし終へたらん折にこそ、二度君さ袖つらね手曳きかはして、かの梅を眺めばや、其折こそ如何にうれしからめなど、樂しき望少さき胸にしるして、やがてかたり合はん折には、いかで君をばおどろかしまゐらせんものをさ、あけくれひたふるにつとめはげみにけれど、あはれおろかなる身の長くは得つゞかず、やがてはうみもてゆきて、春の花秋の月にのみあくがれ、何すさもなくひれもすあかしくらしぬる、軒端の梅にだにおもはゆくてなむ、さるをすみ子の君來ん年には、都にかへらるべう定まりぬさか、あなうれしの事よ、さはれいさもはつかしうかなしきかぎりよな、君には今年高等女學校終へ給ふなるを、まして行正しく、學びの業はいつも人に、おくれさせ給ふ事なく、師の君の御覺えもいさめでたく、御友垣もみな御徳をしたひ、校中の鏡、皆人の摸範さなり居給へりさか、來ん年にはあッばれ錦を飾りて來ますらんを、いく度春を迎へ、いく度秋を迎ふれど、吾身ばかりは元の如くにて、今更に口惜しさやる方なく、まして彼の梅は如何に本意なく思ふらん、彼の螢を集め雪を積みて、學びし人の事なさ思ひいでゝは、なか／＼たらちねの君の、あつきみめぐみもて學びの窓に高き費をもいさはせられず、入れて給はりしを、甲斐なき我身のおそれ多くも、御身を勞して得たる貴き金、又さかへりこぬ貴き月日を、徒らに費したるこそ、げに不孝のきはみなれ、あはれ君よ、君は樂しくうれしげに、かの梅を見給ふ事を得させ給ふめれど、あはれわが身がひなき我身は、なげきつかこちついかでかの梅を見る事を得べき、あゝ後の悔はかひなき事よ、さらばこれよりぞ、ひたすらにさ思へさ、いかにせむ、此心あな心もさなの我心や。

秋夜の夢

麴町　井村延代

今宵しも望月なれば空淸うすみ渡り鳴き渡る雁の數さへ見えつ前裁の梢ども色もをかしう其けしきいはむかたなし古人の月見ればさよみにし如くをのれもそゞろにすきこしかたあるはあはれなる友の身などちゞに思ひ起して窓のもさのさりもやられずなんされど夜のはじめて長きこのころをいたづらにやはさ窓打さざし讀み殘したるふみくりひろげしばし讀みてあるほどにいつしかひるのまのつかれも出できて物も覺えずよむ書の文字のみは見ゆれど心はいづくさまよふらむ。月はますますてり添ひて利根の川波に影くだくるさまえもいはれずわが乘れるふれは絶えず流れに從ひて進むなりかしこに霞むは常陸の山からゝにみゆるは下總の岡ならん戀しきわがたらちねは今いかなる夢をかむすび給ふらむなつかしき友はらからは待わてび明日はわれを迎ふらん妹さたはむれつゝ植し楓は丈高くなりて我が業卒へてかへるを喜びの色に迎ふるならんなさけ深き師の君の膝下に樂しく學びし時のありやうなどまづたらちねに聞こえて御喜びの樣を拜せむ友には御國の女の地位を高めて外國人の笑さならざらんことを語りて共にはげまんなど思へば嬉しさに前後もわかず俄にかたへに人の聲すさみればあなあさまし身は文机に開きたる書の上にぞ伏

したりけるあはれ夢なりけり嬉しき樂しき夢なりけりなとはれいかなれば戀しきたらちねはらからにあはぬまにさめはてしぞさてはをのが業を一としほ勉めよとのいましめか窓を開けば月の影も不見今しもたらちねより一とひらの文はとゞきぬ

福澤諭吉大人

東京 吉澤清子

あはれ三田の聖人と仰がれ玉ひし福澤諭吉大人は、今年二月三日名ある醫師たちの力も及ばで、行く冬の日と諸共に人々の心づくしをあだにして、現世をかんざり玉ひぬ、さればうからやからの方をはじめまゐらせ親にも増して大人を慕ひまつれるいくその教へ子等のなげきは更なり、、御齡と共にいや高かりし御名を聞き知れるかぎり惜みまゐらせぬはなく畏ては年久しく國つ民を教へ導き玉ひたる功績聞しめして、帝より御賜物ありたるばかりか、御病あつしかりし時には御見舞の品賜りつ、今度みまかり玉へりと聞し召してはみけかづけ玉はるなど、庶民にはたぐひなき榮譽を受玉ひ、國つ會に集ひたる議員たちの國つ民にかはりて吊詞さゝげましゝも、たゞ人にはためしなき事にて、この三十年あまり教への庭設け玉ひたるあたりの心なき商人もなげきかなしび、おもひのしるしとて軒毎に黑き御旗かゝぐるなど、御德の如何に高く、御教への如何に世にあまねきかを知らるゝになん、妾が御名聞き知りまつりたるは、兄上のまだ慶應義塾に通ひたまひける折にて、冬の夜のまとゐ、友垣の集ひましたる時など折にふれては大人の德の高き、西の國の學びの道に廣くわたらせ玉ひたるなど、くさ〳〵の事ども語らひ玉ふをゆかしとは聞きつれど、婦人の身の御顏ばせ拜しまゐらする折もなくて過ぎけるを、「福翁自傳」といへる文見まつりて、如何なる艱難にもたゆみたまはず、世のそしり笑ひをも顧みたまはで、學びの道、其ほか何くれの事どもに後れ居たりし御國に、新しき道を教へて倦み玉はざりし御心の人にもましてめでたきを知りつ、「新女大學」を表はし玉ひては、開け行く御代に生れたる婦人の勉むべきふし、いましむべきかどなどくはしく教へ玉ふのみならず、あるは御詞あるは御筆に古の狹き、偏なる教をのみ守りて、世の婦人をたゞ玩具物の樣に思ひ卑め居たるたわれ男をこらしめ玉ひ、御家庭の淸く安らけく治りて、世のしめしともなりぬべきよしなど聞きまつりては、御德のいとなつかしく、影ながらも御顏ばせ見あげまつらまほしく思ひ居けるに、夏はじめにやありけむ、學校にて運動會を催ふし玉へばとて兄上に從ひまつりて初めて音に聞きし慶應義塾の庭をふみ往き來はげしき市街の中に思ひもかけざりし眺めうるはしき岡の上に、品川の沖を望み、海に陸に行き交ふ船、車などのあかぬながめに、まづ胸の淸らになりたる心地しつ、百千の生徒たちの勇ましき遊戯に心うかれて、長き日影のかたむくをわすれける時よ、別の棧敷に教員の方たちと共に居たまゐし御姿を、兄上のそれよと教へ玉ひたるに、他所ながら拜みまつりし面影は今もわすれず、福よかに肥り玉ひて柔和かなる御顏笑ましげに、競爭に勝ち得て誇りがなる教へ子らに賞品かづけ玉ひける御姿今も目にあるを、學びの道は日に開け行けどいく藥はなく、冬の名殘の筑波おろしにつれなき風の吹きそひて、つひにむなしくなり玉ひ、いつはた尊き御影拜むべき折のあるべしや、かなしさもかなしきかぎりにこそ、かゝるすゞろごと書いつけ侍るにも、そぞろ涙の催ふされて、折からそぼふる春雨のいとしめやかなるに、袖の雫のいとゞぬれまさる心地になむ

蜘蛛を見て自ら誡む

米澤　藏田光子

晴れわたり長閑けき空にそこはかさなく心うきたをよみいでたる書どもふりすゝてあすこそあれささながら軒近うゐざれば小さき蜘蛛今しも巣なむかくろめるあないみトやさまもり居たるに初はふさやかなる糸七八本ばかりわたしつぎに細き糸あまたかけなどして外目もせでつさむめりさる程にしばしありていみトき巣つくりはてぬげに其身はむげに少さけれども賢なる哉蜘蛛やたゆまず勵みて妙をいたしぬあはれ明日を待ちて事やさるさるを虫ならなくに些々たるこさに奪はれあまさへあすをたのみし愚さよあゝ今吾蜘蛛にさされ落花の枝にかへらぬを流の淵にさまらぬをふりにたれどかしこき斷機の教さへ忘れたりやなあをこの業やさあれかくありてこそなかなかに良き師も得たれむげにさやはさがむべきあなうれしさひさりごつ程ささふくこちゆらゆらさ妙なるあみ打ゆるがすもゑありげになむ

清少納言

横濱　戸倉信子

文の林のいや茂りみどりかはらぬ常盤木や色香妙なる花の咲きそろひきさきく一條天皇の御代には歌に文にいづれをそれさわかぬまで秀れし女房達の數多ありしがわけて後のけふまでも紫の色床しき式部さ並び稱へらるゝは誰ならむ梨壺五人の中に數へらるゝ清原元輔が女なる清少納言こそ其人なれ

さるは敷島のやまと言葉は更なり遠き唐國の事までに通ト才學世に秀れしかば上げられてきさいの宮に仕へしが其雄々しき心ばえ其床しき筆のあやに御覽へ殊に深かりけり

枕の草紙は今も猶物學びする人のかゞみさなりて清少納言が霞棚引く春の朝露しげき秋の夕そこはかさなき筆のすさびよりなりしものなれば其輕き筆つき誰か目出たしさ仰がざらむ殊に卷き上げたる小簾のひまより は香爐峯よりもいや高き才のほども知られてなむ

まことや卯の花のうき世の中さいひしもうべなりけらしかくも御覽へあでたかりし才女も君の雲隱れ給ひしより移り變る世につれていたく其身を落し侘しき片山里に草の庵を結びてありしか門過をすぐる若うど達のいかに清少納言の無下になりしとよさいへるを聞きて小簾の内より如何に駿馬の骨猶千金の價あるを知らずやさ罵りかへしきさかや實に雄々しかりけるとにこそあはれかくも才人に秀れ學の道にも深かりつれはそな誇りがに人をないがしろなる樣に見おさしたるまた其行の正しからざりしとは彼の才も德も目出度紫式部には及ばざりしこそあかず口惜しけれ實に彼は緑かはらぬ常盤木にして之れは色香移り易き花さやいはまし嗚呼惜みても猶あまりあるは少納言の行にこそ

十六夜日記をよみて

米澤　大熊信子

あはれかよわき女子の身を持ちて枯れ果てむさせし細川の流れながらくも汲み上げし阿佛尼がいさをのほどこそ幾千代をふるも絶えせトななさなき子等をもふりすてつなつかしきふるささもたちはなれをみなの身にてたびひさりならはぬ旅にたちいでくるしきことにもあまたたび出逢ひ

あまたの月日をへてやうやう望をとげ家名を起したること世の常のなみならましかばいかでなし得べき今は明らけく治まる御代のしるしとて汽車汽船の便あり百里の間もたゞひとはしりに行くを得れど尼が鎌倉に下りし時の如きいかばかりうかりけむ。道すがらありし事ども記せる文も一字一句尼が心情より出でざるはなしましてふるさとの子女におくりし歌のごとき云ふべからざる趣味あるを覺ゆあはれ阿佛尼のたぐひなきいさをは十六夜の月の光りと共にてりかがやきて其の名は千代も朽ちざらむ。

母の心

砂戸 佐伯りやう子

夜はやゝふけゆきて窓をもれくる風も身にしむ五十路あまりの老女なり
あるじはなきにや多からぬ髪を根元より切られてみじかき茶[illegible]にむすび
たり燈火の光をたよりにて眼鏡ごしに見つむる手先衣縫ふ針のいとほそ
きなりはひも誰が爲
あはれ遠き旅の空に物學びする子よしばしもだにな過しそ汝が業終へし
るしを得て歸り來ん日を樂みに慈母はひとりさびしく故郷に待ちつゝ
暮せり思へ母の心を

春の半日

赤間關 福田よし

そらは山の端より天心まであを〳〵とふかみどりのいろを展べて、そよ〳〵とふく春風いひしらずあたゝかなり、菫、たんぽゝ、その他のちいさきうつしき花毛氈をしきたる様に一面に咲きみだれて、紐紅きかごのそこにすてたるは花つみにこしをとめ子のおきわすれしものなるらむのさかにめぐる水ぐるまのをときゝつけてゆけばはたして川あり、春の水はしづかに紺碧のいろをたゝへ、汀には七才ばかりの子ふたり征ふれなかしうれしげにあそびをれり

おのれは水に沿いてますぐにさかのほりぬ、あやうく架けたる丸木橋をわたれば向いは一帶の長堤、わか草ところ〴〵に萌えてあさみどりのいろなつかしく、蒼松いく株、あるは地に這いあるは水にのそめり

松の切かぶにこし打ちおろし向いをのそめば、うちつゞく森に二三軒の藁葺見えかゝれして紅き桃の燃ゆるばかりに咲きみだれたるに鷄二三羽餌をいろをれるがいいしらずをかし

みんなみのかたは靑田目もはるにひろごりて、鍬かたげてゆく人、牛追いてかへる童いづれかうたらぬ

川そいの松が枝にさへづる目白のこゑをともとしてたどりゆく、かなたこなた竹藪こんもりとしてその竹藪つくるところ、さゝやかにとりむすばれたる小家見えて漁網たかくさらされぬ、石がきのもと蘆荻そよくあたり、ふれよこたはれるは釣する人のかへりたるなるべし、ふなばたにれむれるかもめの夢いかにあたゝかなるらむ。

みどりふかき松林をめぐりて、うれ〳〵とめぐりゆけばうぶすなの社あり、なほもゆけば松の並木やうやく絶ゆるところ、一帶の竹藪あり、竹やぶをくぐれば、まへは信田のつゝみなり。

漣よするみぎはに、よごれし草履をそゝげば、すかのれのながき春日は西の山の端にしづみて、なごりをとゞむる夕はえの雲紅く、野も丘も森も家も晩霞のうちにつゝまれむとす。

春の野遊

山口草賀きくの

玉たれの。をすのゆらぎも。しめやかに。空燒の。かをりも。打ちしめりたる春雨。名殘なうはれ。見わたしの野には。若草あを〳〵と生ひ茂り。をちかたの山の端には。霞うら〳〵と打ち棚引きたり。庭もせに咲く花を見るに付ても。何某の野も。はや花咲きつらむと思はれて。こゝろさへいとうら〳〵と浮き立ちける。をりから。隔てなき友垣の。二人三人おとなはれければ。いとうれしうて。なにくれとなく。ものがたりなさするに。一人の友のたまふには。かううららかなる空のけはひを。たれこめてのみやはあるべき。いざたまへ今より何某の野に遊んなさすゝめらる。さらでだに。遊まほしく思ふ折なれば。さりあへずいて立つ。今日しも。空の景色いとうらゝかに。久方の春日は。野つら山つらはら〳〵ときらび。行手の杜にさへづる鶯の聲も。廣きひろ田を心さして。雲井はるかに舞ひのぼる。雲雀の聲もあはれに。立ちつゞく柳の糸の。やさ風にふきみださるゝさまも。いとあはれなりや。道すがら。けふの遊びの。いかにみやびに、たのしからんなど、かたらひつゝ。菫、たんほゝ、れんげ花、など。今をさかりとさき出てたる。あるは名も知らぬ。小草の花の。かず〳〵さきみちたる中を。辿りつゝ、やう〳〵にして。志す岡の邊にはつきぬ。見返れは、こし方は、はや霞につゝまれ、薄墨もて描かれたらんが如く、見出さるゝなど、さながら大きなる油繪を見るこゝちぞすなる。まのあたりは。みなをしなべて、花ならぬはなく。遠つ方に咲ける、花の梢は、白雲かと思はれ。はた緑したゝる松杉に、枝かはしたるは。ひとしほゆかしくて、おなじ花とも思はれず。ことに。下行く川水に、かげうつれるは。水底も香る心地して。さきものこらす、ちりもはしめず、今をさかりの花の色。げに今日こずば、あすはちりなん、夜半の嵐にと、いはぬ計りなり。さるに、なほ。とりつくろへる樣もなく。をのづからなる、木々のけしき。山のすがたこそ。ひとしほのながめなれ。あくことを知らぬ、花の木かげにざをしめて。かたみに、異國々に幷びなき、花の姿をめで。榮えに榮ゆる、大御代の、めでたきを。ことほぎつゝ。いつまでもと思ふに。永き日かげも、やう〳〵に暮近うなるまゝに。木の間にひゞく山寺の。入相つくる鐘の音も。いとうらめしうてなん。さはれ。今はとて。かへらんとするに。まつとしもなき朧月の。かげ靜にのぼりて。花の梢にかゝれるけしき。いはん方なく。友もわらはも。いと立ちさりがたくて。花や今宵のあるじならまし。との言の葉さへ思ひ浮ばれてなむ。

あはれ樂しきことは。世の中にさはなれと。背の根の永き春日を、花鳥の。色音に心長閑く、くらすほど、樂しきはあらじかし。ことに内にのみこもりがちなる、をみなの身としては、ひとしほになむ。今日しも麗かなる空に、嬉しき友垣さへありて。ひねもすあそびくらしゝ樂しさ。げに、よろこはしき、きはみにこそ。

我が家

米澤馬場はる

我家はあたり山なる米澤市のまなかにありて町の名を明神堂といふ町のはしに老杉枝もたわゝに神さびて白子明神おはしますにこそ町の名なかくはいふめれ家の數十ばかりなる中にいとやれこぼれたる家ありこれなむ己が住居なる今こそ涼しき國にものし給ふれおほち君七つばかりにたてしとかや數ふれば七十路に三つ二つやあまりぬらむ時雨や月は心のま

ゝにもれどもさすがにすまふにことたれば玉の臺もうらやまじなか〳〵
にのどかなり年たちかへれば數ならぬ垣根の中だにのどやかに川の音な
ひきよらなり虫とすまゐをおなじくする秋のあした落栗窓をたゝくなど
いとおかし軒の末のぶに三つ二つ螢とびくる夏の夕やれたる板びさした
ばしる霰の音さえてすびつちかゝう打ちよる冬のあしたいさあはれなり
さいつ年まで鎭守の森に狐どもすみ居て夜さりおちこちあさりありきお
ぼろげならず人々のおぢにけるとかされど治まれる世のためしとて今は
たさることいさまれなりかゝる住居をしもたのしと住むは住めば都のな
らひにやあちむさあれ折ふし毎にたのしびおほかりさるを二三年來滊車
どもかよひしよりそこはかさなくいそがしき心地してのとかならぬこそ
いみじううたてけれ

花下思昔

伊勢　今井久米

さし櫛の曉かたの鐘の、間遠に聞ゆる音も、うち滿るまゝ、有明の月や
かすむらん、庭の櫻や咲きぬらんさ、板戸おしあけいづれば、よべより
ふりつる雨は、なごりもなく、いさこゝちよけに晴れ渡りて、うらゝか
なる霞をこめて匂ひ出たる花の色香は、げにいひしらぬながめなりけり、
かゝる折には、白雲ならぬ、人の心も、そゞろにうきたつものぞ、我は
わが親しうまじはりし人の、いまだ世にいましし時は、此の庭の花咲く
ごさに、必ずいであひはべりて、今朝の空のごさ、ちりたにむれに雲の
へたてなく、いさ心晴れ〳〵さ語らひつゝ、和歌あるは俳句なごさりど
りに、よみかはし、互に心をなぐさめたりけるが、今は共に愛でなかめ
つゝ、花よりも麗かなるゑみをふくみて、物いはぬ花にまで、物言はし
めんばかりに、琴なさかなでて、いさおかしう一日を暮ししこそありき、
其の友垣は、へたてぬ中をへでてゝそ、鳥は古巣に、花は根に、歸る頃
しも、かへらぬ黃泉におもむき給ひぬる、あはれ時來りて、花は昔にか
はりもなう、咲き匂ひて、語るかごさくまれくやうにて、友ほしくおも
ほはしむれど、其の友今は呼へど招けど來ますべうもなければ、今日は
誰によりてか、心をなぐさめん、何によりてか世をへん、けふこの咲き
にほふ花をなかめずば、親しき友のあはれも、いやまし思ひ出でんにさ
思ひ出つれば、千々のかなしみなけき、胸にみちせまり、おど〳〵しう
なりもて口をひらかんすべもなく、壘りはてたる我か胸さ、しばしは其
處にうち伏しぬ、をりしも通ふ春風に、梢の露の玉ちりて、あはれ我か
袂をそぬらしける

梅をめづる詞

富山　淺田こと

四時をり〳〵に、さきいづる、花のかず〳〵、いさ多く、うるはしう、つ
ややかなるも、また少からざめれど、菅原の大臣の、めで給へりし梅こ
そ、いさもすぐれてめでたけれ。
まことや、俗にうつらず、塵にそまず、凜たる威厳、雄々しき貞操、温
たる仁惠、めでたしさもめでたしや。あはれ此花よ、雪にしたしみ、霜
にむつみ、百千の草にさきがけて、年の中より、まづ春めきたつは、つ
よき益良雄の貞操の如く、風にたゆます、雨にあせす、高きけはひ、え
ならぬ匂、是や此花の威厳さやいふべき。或はやむごさなき、玉垣のほ
さり、或はいぶせき茅屋の軒端、野邊、山あへ、のへたてなく、時めく
は是や此花の仁惠さやいふべき。げに梅ばかりゆかしうめづらしきはあ

らじかし。」

夢

廣島市　平山みどり

あささけべる、わが聲に驚きて目さむれば、あなかなし、こひしき父のみすがたははや消えはてて、むれのさとろきいさはげし。うれしかりつる今ははかなき夢にてぞありける。あなあはれ、こひしさも忘たはしさも思ひまいらする父君はまたいつの世にもかへりきまさぬか、いつのなりにもまみゆる事のできざるか、あなかなし。そもや父君病の床におはせし時、日毎にほゝゑむ梅のはなをながめ給ひてのたまいき。此の白梅のはなさきみつれんその時は、わが病もいゑなんに、花の木かげにむしろして、祝ひのさかもりひらかんさ。花は間もなくほゝゑみぬ。さはれ、めでにし父君は、かへらぬ旅路にいで給ひぬ。あなかなし。日毎になりてみほさけのまへにさゝげては、父君こよひはいかにおはします、かくも忘たひまゐらする心根をあはれさ思し給ひなば一度の夢にだに、さひきませさ。れんじつるも、いくそたび、思ふ心のかよひてや、こよひはからず、かへりきましぬ。あなうれし、ほゝゑみておわするぞ。あなうれし。なさけもふかきみこゑにて、我子さめしたまふぞ。うれしさも、うれし、かへりきませしか、あなうれし、何よりきこゑまつらんか、思ひにむれもふたがれて、きこえまつらん言葉なし。からくも、父君いかにして、死出の山路を越え給ひし、いまはいかなるみ國におはしますさ。さひ奉つれば、父君は、あはれにほそきみ聲にて。なれが男の子にてあるならばさ、ほつさ、さいきをつなたまひぬ。やがていさもいさもほそきみ聲にて、恙なふありやさ、のみのたまひき、あわれ父君みまかり給ひてより、たゞ泣きあかし、なげきくらし侍りで、よろづのわざも、ものうくおぼへ侍りぬ。あはれ父君姿なも、ひきつれたまひてよさ、み細にさりすかれば、こはいかに、今を限りさみたてまつりし時の、みすがたさはなり給ふに、あつさ叫びしは此時なりき。あなかなし。うれしさはつかのまにて、名殘のはかなさよ。かなしさよ。ながれ出る涙は袖にみなきりぬ。あわれみ聲はなほも耳にのこりけり。あなかなし。あなうたて。

涙はふるとなりぬらんあなかなし

おもひ川流るゝ涙せきかれて
　わがふち衣かわくまもなし

哀れなるもの

米澤　大熊信子

世にあはれなるもの多かれどめしひばかりあはれなるはあらじかしなつかしきたらちれの笑める顔ばせも見えわかずうつくしくにほへる花も形すら見えればまいて其色などは云ふまでもなし只杖のみをたよりとして一生を暗の世に終ることそいさいさほしけれ。夜の風寒く白露したたる木の下かげにやれ衣一つをしされさし繁れる木の葉は雨を凌ぐ傘にもやすてし母親の乳こひて飢になくおさな子の聲あはれ。

雪の一ひら

岐阜　長瀨二三

稚き頃雨は天の川の雫にやさ母に尋れて笑はれしこさ幽かに覺ゆ今は海河の水の日に蒸れて昇れるが雨霰雲雪さなれる事は數られしも雪のみは

偷疑はるゝ節多し衣の袖に受けてよくみれはいづれ〳〵も一ひらの集れる花の如く正しく美はしくて又其ひら〳〵の各を偷よくみればさま〳〵に文なされて六つの數こそ違はれ同じ形したるは稀なり水晶金剛石より鹽綠礬のをのづさ固れるは各定れる形する如く雲は雪の形に凝るべきものにや然らば雲雪の原なる水の凍れるはいかに山陰の池の面の氷板屋にたばしる霰のいづれを解て鏡に照すも六つの正しき様は認めらるまじ是は蓋し鹽綠礬の細かに碎かれしは同じ鏡に定れる形の窺ひ難きさひさしき理りなるか

男は外に女は内に細かき事は女にかなへる業さぞ雪の何故にかゝるべきか等いみじき筋を窮むるにもなざて男にのみ任すべき物は僅なるも極れば世のため國の爲に大なる力を現はすものなり船車を走らす蒸氣の鐵瓶の湯氣より起り電信電話の紙鳶の糸より繰出るゝか如く雪の凍れる理も强ちに捨去るべきにあらざるべし

鉢などにはれる氷を日向にて靜にさりて反し見る時は雪の形を見るこそあり即ち雪は水の定れる形なるかそれにしても是より何か人のため國の爲になるべき大なる事は見出されずや雪の一片につき思ふ儘をかくなむ

元旦の記

石見　大達きよ子

曉告ぐるくだかけの八聲に驚かされて、やをら起きいづれば、しのゝめの空、あからみそめて、明かに治まる御代の、三十餘り四年の、一月一日の、日かけいさうらゝかにさし出でぬ。久方の雲井の御ありさまは、かけまくも、いさかしこし。御代萬代のしるしさ立てつられし松竹は、君か千歲の色を見せて、みざりいさ濃やかに、君か威稜の光さ揭げつる、日の御旗は、空高くひらめきて、御國の光をあらはすか如く、谷の戸いづる鶯の、婚しけにさへづる聲も、園の梅の、春をもまたで、二ッ三ッほゝ笑みそめたるも、いづれか芽出度ためしならざるべき。されば、人々の姿形心さらにつくろひ、家々には屠蘇もちひなざものして、御代の萬代を祝へり。童子等の凧をさばし、獨樂をまわして、うれしげにさわぐ、花やかに身つくろひしたる小女子の、鞠をつき、羽子を追ひて、面白げにあそふ、いさつぎ〳〵し。老も若きもうちまじりて、骨牌もてさわぐいさをかし。あはれ、明かに治まれる聖のみよのおほん惠は、大八洲の津々浦々に、いゆきわたり、いたり到らぬ隈はあらじ。されは、はるかに東の方を伏し拜み、聖壽の萬歲を祈るさ共に、一年の計は、一日にありさ言へば、今より、綠竹のなほき姿にならひて、たゆまずうまず、學びの道をいそしみはけみて、大君のあつき御惠に、むくい奉るべく心掛けなむ。

梅

埼玉　中川よね子

我宿に梅ありけり幹いさ太う苔むせざもほつえさへ軒端をすぎず物ふりたるさまなり花は在明の月の如く匂ひはもろこしより傳へてし名香も啻ならず咲きの盛りはせまからぬ庭にも香はあまれるを外よりおそきならひはさめくる人もなきかなしさよされとこの花のさかりそむれは鶯のゆかしき初音おとつるゝこと年每に變らすされは人のそしられおそき色香の中々にうれしくてかの晩きは櫻に咲きあひてさいひけん法師に見せかやさおもほえすひとりごたれてなん

冬の山家

群馬　原澤玉子

紅葉は枝をはなれて名殘を止めず、庭の黃菊白菊僅に其面影をとゞむ。萬山死せるが如く、鳥の鳴く音も跡絕えたり。さらぬだに山里はさびしきを、今は一入思ひまさりて只親しき友の音つれのみ待たる。机によりて古き昔の書とも取りいでゝ、なき世の人を友とし、或は歌詠み文綴りて慰めり。夕方より北風いとはげしく吹き荒れだれば、門閉して燈の下に例の文ひろげたり。夜ふくるまゝに益はげしく、ともしびも消えむとせしこと數多度なりき。爐の火も殘り少なうなり行きければ、いざ浮世の外の夢を結ばんと、裏戸口に出づれは、六の花は吹きくる風にさそはれて、いと繁く散りかゝれり。されば堪へかれてなすへき事もそこそこにして、ふしどに入りぬ。されど折々風の音に驚かされて、短き夢だに結びもあへず。壁の隙間より吹きこむ雪は寢顏にかゝりて、そのひやゝかさは云ふはかりなし。さる程にいつしか風の吹きやみぬ。雨戸も音もせず、筧の雫の音だに打ちたえて、浮世の中もいよ〳〵靜まりぬ。鷄三度ないて華胥の旅衣破れたり。東雲の方白う見ゆれば、やをら起き出てゝれまきのまゝながら園の戸開きながむるに、ゆうべの嵐のなごりにや、おびたゞしく降り積り、行きかう人さても絕えてなく、見ゆるかぎりは一面の銀世界、園生の竹も雪に伏したり。日頃見えざりし村々谷々まで遙かに見渡されて、常はおかしともおぼえざりし山川の岩かど早瀨の石など、黑き頭に綿帽子被むれるが如くおかし。まして小鳥の餌求むとて、やぶかげに囀りつゝ飛びかふさまは一入なり。あかぬながめは惜しけれども、庭の面のみは童に掃とらせぬ。かの木にな觸れそ、此石になあたりそ心せよ、などつぶやきつゝ指揮せしものから、我ながらおかしくぞおぼえし。いかで友はかゝる日には音つれはせぬいとれたましと、うらみかこちつゝすびつとりよせて、晝すぐる頃まで待ちわびたり。遂に音なふ人もなかりければ、あまりうたてさに宿を立ちいでつ。折しも山寺の鐘かすかにひゞきて入相を告ぐ。鳥もなきて塒にいそぐなり。雪の上吹きくる風はいと寒く、黑き影の白きが上にうつれるに、あやしみてふと仰げば、綠なす大空にほのめき出づる嫦娥は、吾が世顏に照り渡りて、群星さへさだかに見ず四方のながめ云はん方なし

冬の山里

信州　小岩井佐吾子

淋しきを常なる山里も冬の淋しさこそ一入なれ冬のあはれは何處も同じと聞けど山里こそなほいみじけれ

高嶺の雲の往來早しと見るまにはや時雨そめ時雨そめぬと思ふまに鎭守の森も色づき色づきし葉も風にちり散る葉の下にたえ〳〵に鳴く虫虫の心も知らでおく霜霜かれの庭にうつろふ菊の花さり〳〵にあはれなることのみぞ多かるまして冬深くなりぬれば人めも草も枯れ果てゝ庭に散りしく木の葉をば踏み分けて訪ひ來る人もなくたま〳〵おとなふ者とては峰の嵐か松風かさなくば夜更けてなく猿の聲のみなるぞ淋しさもまた一入なる殊に風すさぶ夜は空行く雲のあし早く星も走らんばかりにて空のけあひも物凄きに枯あしの淋しく立てる古沼に水鳥のこゑのいとかなしげなるも冬の夜寒をわぶるならんと身にしみてわびし夕ぐれひとり門への橋にイめば谷川の流れは落葉の下に埋もれてたえだえなり山寺の夕暮つぐる鐘の音のいとゞ身にしむ心地してあはれにも淋し

さはあれ村とも云はす森とも云はず只一面にみ雪の降り積りて晴れ行く

曙の眺めはかゝる山里こそ一入まさりてめでたけれ小夜ふくるまゝに今まで吹きすさびし風のやう〳〵靜まり折々軒の小笹にさら〳〵と音する外はあたりいと物靜かに更け行くもいぶかしければ勉めて朝とく起き出で見るに思ひがけなくも白妙の雪の降りつもりぬるも眺をかし軒端の竹むらになく村雀の聲も埋もるゝばかりにて見渡す限り只一色の銀世界なり彼方に見ゆる幾村々の賤が伏屋より朝けたく煙の細々とたち昇るも紅葉たくらんと思はれてなつかし折柄さッと吹おろす山おろしに向ひの岡の松並木は恰も琴瑟を弄するが如く梢の雪は枝をはなれて亂るゝさま春風にひるがへる落花に似たり山の端に立迷ふうす雲の隙より藍にも似たる空の色の見え初めたりと思ふ程に旭日うらゝかに照りわたり雪に映じて目もまばゆき迄に輝きたるいひしらぬ眺なりあはれ心ある友に見せばやと思はるゝよ

されど訪ふ人もなきに只たれこれめでてのみ打過ごし埋火かき起し梢の雪の花とも見て來ん春を待つのみあわれ淋し冬の山里にこそ

秋の田舎

周防　松田茂枝子

ものゝあはれは秋こそまされと、實にさることにて、ことに田舍の秋はすぐれていみじ、四方の山々は殘りなく紅葉して錦の艶をきそひ、見む人の來よかしと待つものゝ如し、囗子のますらをの効見えて田毎の稲は實のりよけれど、左ばかりとは思はぬ又人情の常なりかし、晨は曉に起出て夕は星を頂きて歸り、雨といへばいたみ、風といへば憂へ、とりいれの多かれ、誰かれに後れじ、など競ふも農夫の心なり、小夜更けてさびしく聞ゆる砧の聲、何方にか吹きすさぶ笛の音、心細くこそは思はるれ、澄わたる月を眺めては菅公の昔も忍ばれ、人の行末ばかり覺束なきはなしと聊たるゝになむ、あゝ秋を樂しといはんか、うしと呼はんか、

紫式部と清少納言

尾張　村瀬胤子

一條の天皇の御代には優れたる女房たちぞいとおほかりけるそが中にも紫式部と清少納言の二人には立並ぶ人こそなかりけれされど世の人紫のゆかりの色の上をこよなきものゝやうにもてはやし源氏物語の筆の花をのみほめそやし春の曙はから〳〵と言の葉の花のたくひなき枕の草紙の上に云ひおよほさゞるはいかなる事ぞやそも清女は常に定まれる眞人なく青柳の風の吹くまに〳〵なひきおのれの才に誇りたるなと其あらはしたる文のさまにも思ひしられて女の龜鑑にするにたらすとはた亦漢字書き散らしはへるほともよく見ればいまだいと堪へぬこととおほかりしなど紫女かいへるをもて無下におとしめんとするがごときは誠に理由なきものといふへしかくも紫女が清女を見下し評したるが如きは故なきにあらずそも當時の中宮彰子は藤氏にいでいと盛りにして皇后定子あれどもたゞ空位の貴きを守るのみにて寵愛はひたふるに中宮にうつれるのみならず人々のほめそやす紫女仕へまつりてしきりにこれをありがたきものゝやうに書きなし書き立てたる燈火の今しも消へなんとするはかりの皇后にはたとへ才氣あふるゝ淸女ありていかにかきたつるも流るゝ水の再ひ歸りくるへきかはかく紫淸の仕へまつれる君と君との間に於て隔心あらんにはいかてまた兩女の間に隔心なからさらんやはこれ人情の常にして今更論ふへくもあらすされば兩女がうはべこそかはられ心はいたくへだゝりしをしりうべくなんされど淸女が修身の道に至りてはいさゝか完か

らぬ節ありしこそいさも〳〵口惜しけれされど人情輕薄にして淫奔盛なろこの時にあたりてかばかりの事に彼の女を退けはては國文學の上にまであたひなきものゝやうにいひなすはいまだしも當時を知らさるものさいふべしおもふに清女は優柔にのみかたぶきたる女にあらずして活潑なる男子の氣象をふくめりしものなるべしそは年老て其住家のいぶせきを年若き男のあざけりしに駿馬の骨もて答へて屈せざりしを見ても老てなほ撓まず其心の盛なりしをしるうべくなんまして大御代の稜稜を筆鋒もて藤原氏をたをし天下に赫々たらしめんさせし詞つかひのこさきはかの草紙をよく〳〵味ひたらんにはその才學のほどゝ共におのつからしるうへくなんはた香爐峰の雪の如きゞやまさりて千歳の後の今日までもかゝやき渡れるなりされど紫の筆のゆかりの色よりも花にまかひて降る雪のたゞならぬに心ひかるれ心あらん人はいかにぞや

深夜燈といふことを

尾張　村瀬胤子

人の往來たえし片山陰にさもしびのほのみゆるは何さなうれしひるだにもをくらき森の木の間もりくる廣前のみあかしのたえ〳〵なるものすごしあるは夜深き雨のおさに寐覺して枕かみに影かすかにまたゝきたるいみしう心細しおきいてゝかゝくるに大きやかなる花のふさ落ちたるいさ口惜しうもおほゆるなさ皆みる人の心々にそのおもむきのかはるものそかし

春の山邊

高松　鹽野晴子

夜一夜吹きすさびし風もなぎぬふりしきりし雨もやみぬ山のかすみは一しほたなびきぬらん野邊のみどりは一際深からん殊に今日は日曜なりいでやそゝろあるきせばやさ思ふどち打ち連れて近き山邊にさまよひぬ、げにのどのどゝかすみ渡れる田面いさおもしろし。鈴菜すゝしろ咲きみされたる中道にこき紫のすみれ草さては土筆たんぽゝ嫁菜などいりましりたり。たどりたどりて漸く頂にのぼりぬ何處も春の光のみち渡りてかすみも匂ふばかりなり。松が根に腰打ちかけて見渡せばあな心ゆくけしきかな。浪は靑し眞砂は白し。果てなき海原波はさながら天よりよするかさあやしまる。三ツ四ツ二ツ白帆の風をはらしてゆきかふ漁船眉の如き遠山がけを漁船の出沒すなどいさ面白し。目を轉じてかたへを見やれば老木若木の差なくほゝゑみそめたるもありうつろいかたなるもありて目もあやなるうくひすの聲いさはなやかに人來人來さなきいでたる一入うれし。しばし打興ずる程にながき日かげもやう〳〵うすれゆきて今日も暮れぬさ告ぐる鐘の音にいざやさて歸さに着きぬ。あゝうらゝかなる此夕其夜の夢はのどかなるかの山邊をめぐりけり。

四季の評

みどり

四季折々のながめこそさり〳〵におかしけれされど見る人の目に各心しらひを異にするなるべしいにしへより物のあはれは秋こそ勝れさいひはやせる據けに秋ほど哀なるはあらじかしかも亦さる物なれさかのなにか

し法師ののたまひけん條やよひの頃の花やかなるも亦一しほのながめにこそ秋そよ吹く風ゆるうくまなく晴れわたれる空いさのどかにたの面にひばりうたひ花のこかげに蝶まひ戯るゝさまいさたのし中に取りわきおかしきは四方の山がすみたなびき雲か花かはた雪かさあやまたるゝ清くあてやかなる花の盛になんう月許うの花のさながら雪かさ見まがはれてまがきをおほひ咲きたる藤なみのゆかりの色深きこさなうおかしくれ行く空にほさゝぎすのれ待ち出つるほどはるかかなたの山のはをさやかに名のれるうれしさ云はん方なしさなへ取る頃のにぎはしさよ秋のみのり思ひやらるやがて時は人を待たずいさつれなくて咲き滿てる枝頭の花いつしか散り黄金なす山吹もつかのまにいろ香を失ひて靑葉茂り合ふ夏の始めさもなりぬれば何處を見ても梢のうつ〳〵たるを見るの妙なるも四季の眺の一つぞか

梅

東京 久代さく

雪の降る日は埋火こそ賴みなれ火櫃を友さし文讀む等に餘念なかりけるが不圖雪景色いかにさて前なる窓開き見れば野も山もさながら皆白妙の帛しけるが如く浮世のちりも埋れて遠近の枯木に時ならぬ花を咲かせぬ誘ふ嵐に花さ散るさも雪ならば匂ふまじきにいさなつかしき香の送られくるはいづこぞさゆかしきままにおり立ちて玉しける庭面の白雪ふみわけてさめ行けば松の木陰にいさ妙なる白梅の雪まぢりに笑ひ初めぬ嗚呼白梅が香りをわが學びの窓までおくりしよ「さめこかし梅盛りなる我宿」をさ某法師の詠みけんも實に情ある風情かなあはれ梅は朝の霜夕の雪を堪へてさばかりかくはしき色香に咲き匂ひ百花の魁さたたへられ君子の姿ありさ賞美せらるるも實にこさはりにて彼に林逋我に菅原の大臣ありていたく愛でられしも亦宜べなるかな人もよろづたへ忍びておひたちて後にこそ芳しき名をあらはすべけれ

筆のすさび

札幌 椎野讓子

春の暮

曉つぐる鳥の聲に半ば渡りつる夢の浮橋さだえして起きいづ未だ僕のきよめせぬ昨日散りし花びらのかづかづ泥の中に混じりて殘れる雪さなん見ゆる。

旭の三竿ほど昇りたらむ迄暮春の朝景色の見をさめせばやさ葉櫻の下蔭にやすらへば鶯ならぬ雀の花を夜の間の主さ宿しつるが今朝は例にもあらずさく夢さませしか驚きたつ羽音に殘れる花びらの香ひふくめる白露さ共に二三片はら〳〵とかたさもいはず袖さもいはず春の名殘に香さめたるぞあはれにまたなくうれしき。

夏

樂しさ花の野山にあくがれて香とめし花の衣も脱ぎ更へ今はさて見ぬ世の人を友さして獨り樂しむ折からいつさはなしにひるれの夢を貪らんさするに庭の梢に蟬の一つ聲高く我の夢を驚かしたるはいさあいらしくかはゆきに今宵こそはさゝすぎの一聲きかばや轉寢の間のきゝをさしてはさ晝の間に枕からんさする折蟬のなきたるうらめしうもはらだゝしく思ひなさるゝは蟬こそふびなれ。

夕風涼しきまにはし居して文讀む折しも茂りあふ小笹の中より螢火二つ

三つ飛び出でそこともく輝くに昔の人の目に見ゆるがごとく慕はれ文よみてあかぬ心地するも理なかんかし。

秋の暮

秋もやう〳〵深うなるにつれては浮しさかこちしも只其折の口のすさびにて今更惜まれてあはれにおぼゆるもゆりくなくあやしき。已れ一日親しき友がり訪づれしに秋の日のくれやすき西の天赤うかすみて遠山寺の入相の鐘の音かすかにひゞき鎮守の森に夕鳥の一つふたつさはぐころ鍬肩にかける男牛ひく里の童の過ぎゆきし山路の間道をいそぎ家路につく食にやはぐれたる名も知らぬ鳥のかなたこなた枝より枝にうつり風の月兎れたる木の實の殘りをあさりつゝ鳴くもあはれに物さびしく行手を急ぐ道の傍の落葉の積りより何に驚きてか黒く少さやかなる者一疋右手の黄なる草をかざれる本の陰に逃げ入りしを栗鼠とは思はるゝものゝ女の身の弱き我ながら早速め後ふりかへらばこそ横をもみずに家の門くゞりてのちはぢめて汗ぬぐひぬるもはづかしくくちをぢぬ。又ある夕暮伯母たる人の子供を遊はせつゝ庭の中をそゞろありきしつるに取殘りの澁柿二つ三つ霜にあいけん葉がくれに赤う見ゆるに鳥の一羽迷ひてひれもすも知らづとまれるいとおかしき。小供の杖をさいふによきもの折らばやと草押あけて搜すにさゝぶに姫の餌物を得んとて尾花をつゞりたる網にやせたる蝴蝶の一つかゝりてうごかす行秋と共に玉の緒のつきたるあはれふかし。

冬

霜がれして見にくかりしすゝきなんど雪の下に伏してたひらけくひろびろとなれるいと心地よきに園生の竹の雪を載きてたよ〳〵とふしもせず御國のすがたをしめせるに松のいよ〳〵緑をまして雫のしたゝらんばかりに常盤の名を守りて操を正せる何れ劣らずけなめしがたきに木枯になやみはてし木木の香はんばかりに花をさかせたる梅をも思ひやられて殊更ながめあかずめでたけれ。

野遊

野村かつ子

軒端の梅にうぐひすの音つれそめしあしたより長閑にわたる春風に野山の雪のあとなく消えしきのふけふ野べのけしきはひとしほならんとそゞろに心うきたちただのみ過ぐさんもいと口惜しければひと日へだてなき友どち二人三人いざなひ野べにと立ちいでしに空には雲雀のさへづる聲も床しう見渡す限り青々と萌え出てし若草の中にすみれたんぽゝつくづくし其外名もしらぬ草花などおのもおのもきほひあひて咲きたる美くしさにしきをしきたるごとく彼方を見れば人のむれゐて若菜つむもあり學びやの一むれにやあらんをさめ子の聲をそろへてふし面白き唱歌をうたふもあり蝴蝶はよろこばしげに花よりはなにあちこちとまりつ飛つあそびけり花の香をそふ春風のそよふく長閑けさいはん方なしげに春のけしきはたのしきものとうちかたらひつゝ遊びける程に永きをたのみし春日のはや暮方近くなるにおぼろき心ならずも袂を分ち家路をさして歸りけり

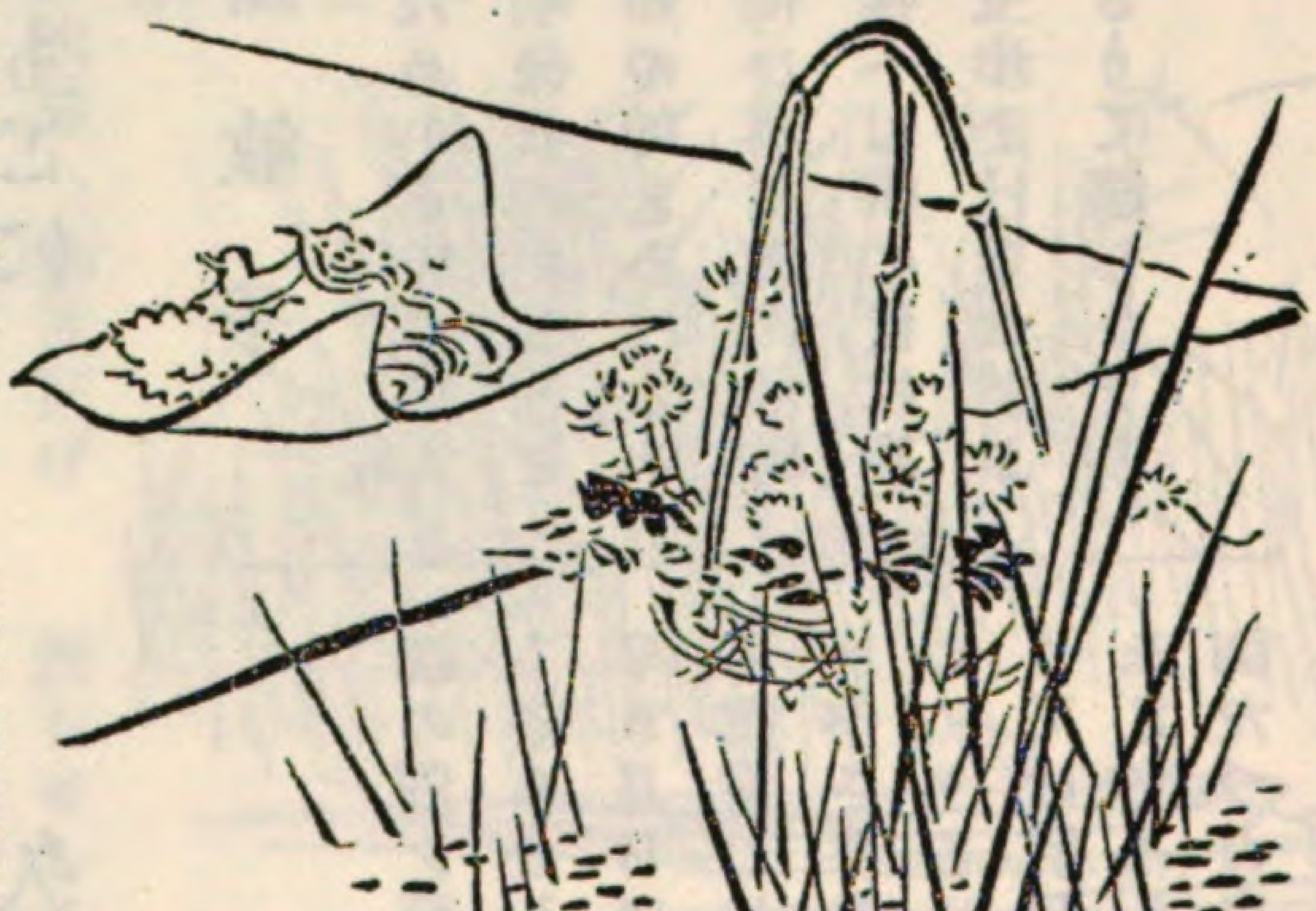


甲賞

長壽を祝ふ文

栃木縣宇都宮市　北山つね子

御祖母君にはいづくより不老の藥を求めさせ給ひけん人生五十の月花もいとやすらけくめで來まして。ことし六十路の春をへ迎させ給ひ千年を契る姫松のみどりの稚子を立ちかへりいとゞ御すこやかに渡らせられ候へはこたび。そが御祝として御よろこびの。うたげを御別邸にあげさせ給ふよし其節は龜雄様鶴子様にも丁度試驗後の御休みてはる〴〵吾妻の都より御歸りなされ候由いかばかりにぎはしき事におはしまさんと今より御察し申上參らせ侯かゝる祝は誰



しも御あやかり申たきをわざ〳〵御招にあづかりいかでかたゆたひ申べきまして明後日は日曜にて。ひねもすの外出をさへゆるされ候まゝ。御存じの寄宿舍にのみとぢこもりつる身は。いたつて禮儀作法等も不調法にて。とても御間にはあひ申まじく候はんが身にかなふ御用事も候はゞ御手傳ひも申つもりにて朝とくより御邪魔仕るべく久々にて御孫樣がたにめづらしき花の都の御物語り承る事もいとたのしくてはやく其日のこよかしと御まち申居候就てはこの腰をれ一つう〳〵しさのあまり口ずさみ候を。この道には殊に秀でさせ給ふ鶴子樣の御まへ誠におもはゆく候へども御笑ひぐさまでに參らせ候猶さむさも去りやらす候まゝ御たつしやとは申ながら御老體御いとひ遊はされ今を千とせの始めとしていやさかえにさかえ給はんことと松のみどりの末かけて常盤かきはに祈り上參らせ候先は御祝まで目出度かしこ

評　祝のことばゝかきにくきものなるを漏落つる所なくねんごろにこまやかにあらはしいでられたるかな

乙賞

歌會を催すとて友のもとに

金澤市雨町　森川敏子

啓し上まゐらせ候餘寒やゝゆるみ候ためかきのふけふ庭前の梅花やう〳〵咲きかけ候まゝ明後日の紀元節を幸ひ歌會催し度そんし候かねて御承知の如きあはらやに候へばかゝる折なくてはと御都合伺ひ奉る儀に候御まねき申すは例の親しき誰彼の君に候へは御心置はあらせらるましく候何卒午後早々より玉歩まけさせ給ふべき御返事下されたく鶯の初音にまさりて嬉しうまちむかへ參らすへく候かしこ

評　簡潔なる中に愛敬こもれり

丙賞

久しく音づれぬ友の許に

東京本郷區丸山新町二番地竹内せき方　木村貞子

涙の露を形見にとゞめて汽笛のこゑにをしき袂をわかち參らせしはきのふの如くおぼゆれど飛鳥川の流れて早き月日はやがて一とせにもあまり候かな其の後は更に御音づれもなきはさら〳〵御心にへだてありとは思ひ申さず共に娘の程は物學びの事のみにて世の事には心にもとめざりしを君もわれもかく子を抱き候身となりては乳母下女のみにも任かせがたく御手の暇なきゆゑとすゐしまゐらせ候へどもあまりの御なつかしさに御たづね申上げ候定めて御孃樣も御成人なされさぞ愛らしき御事とぞんじ候私子どもゝやう〳〵數へ年二歳に相成り候へばもはや一と足づゝ歩み出し候まゝ祖父祖母の悦び一方ならず候扨又御友垣の内尾村清野の二方は何れも緣談とゝのひ落合ぬしはかねて御承知の志をかへず遂に米國へ留學せられ恩田氏は父君の病ひに

よりて本年五月歸縣せられ候其の外は別にかはりもなく月花につけて往きかひ致し居り候何れも時候の御様子伺ひたく草々かしこ

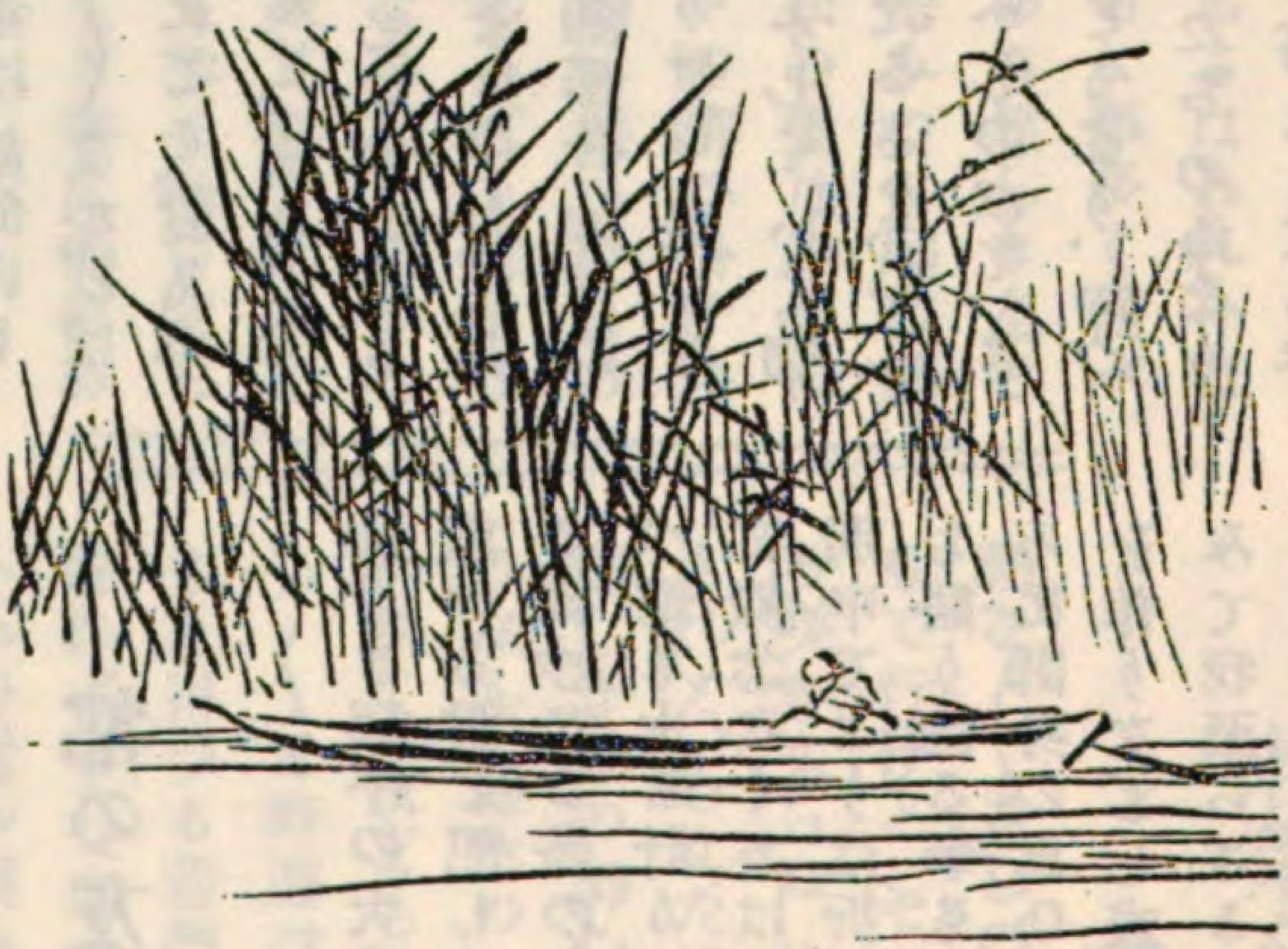
評　親友への音づれげにかくもあるべくや

秀逸

紀元節に人を招く文

島根縣高等女學校　大達喜志子

今日はしも、動きなき大御代の御柱たて給ひし、芽出度嘉節にしあれば、例の心おきなき、友垣うちより、いさゝかことほきのむしろ、開かまほしう、思ひ立ち候、先約の御有無は存じ侍らねど、みいとまも候はゞ、午後一時頃より賤が伏屋へ、御車抂げさせ給ひて、今日のまとゐに、一きはの興をそへ給はむ事を、せちにねぎ奉り候。さりとてもてなすべき品も侍らねど、餘興として、音樂の合奏をもと存じ居り申候。



日頃兄君ひざうの何品も、今日ばかりは、貸しわたへむとの事にて。御前様御出でなくては、庭の一本の梅の花の香さへ、あせぬべき心地し侍るを、いかで〱かして倚ゝ、御かへりの、夜になり侍らむには、下女をして、御送りまゐらすべうこそ

秀逸

梅見に友をさそふ文

東京市牛込區東五軒町十一番地　林喜代子

日に〱寒さいやまさり、折々六ツの花ふりいで候て、一しほ身にしみおぼえ候、折柄御わたりには御さはりなう渡らせられ候や、こなたおのがじゝ冬ごもりして、ひねもす火桶にのみむつまじきものから、久しう庭のさまなどながめざりしに、けさゆくりなくもひまもる風の、得ならぬかをりおくりければ、うちおどろかされてお

り立ちて見候に、早五ッ六ッ軒近き梅のほころびそめ、鶯の初音床しく候へば、いかでかの小向井の梅は、如何ばかりをかしからんなど、思ひめぐらす折しもあれ、梅園のあたり近うすめる友より、年毎に必ずまだほころびそめ候はずやと、度々おこし候君の今年は如何にし給ひけん、御さはりにもや、さらずはやう／＼なかばばかり、咲きほころびたる、こよなうとき時にこそ、鶯も人まちかほになきわたりゐ候にとく來ませと、文おこせたり、いとゞ尋ねたうおもひ侍れど、一人にてゆかんも興なければ、何子の君も何子の君も、御さそひ申上げ、明日午前より參らん心ぐみに候間、君には御都合如何に在らせられ候や、かの梅園はいつの頃なりけむ、畏くも帝の行幸あらせ給ひける處とて、殊に神々しくいと物靜に、老いたる梅の木立の皆白き莟つけたるさま、一しほ床しくまして此の寒き日にもよくたへしのびて、さき出でし梅をながめ候は、よき心の敎へともなり、かつは學ひの業をいと／＼う勉め給ふ、御身たちのあまりに、たれこめてのみ文よみ給ふは、御身の害ともなるべければ、かの床しき園に友とち打寄りて、樂しくあそび又しきしまの道をたどり、文などものしなば學の業の助ともなりて、益ありて害なきこの梅見、是非ともうべなひ給ひてよ、まづは御さそひまて、あら／＼かしこ

秀逸

都の友に遣す文

すみれ記

靜けき夜半の大空にさえわたれる月は庭のつきが枝に積ける雪を照して白妙に氷りて塵なき庭に影をうつせる樣妙なる畫の如くに存じ候げにも此頃の寒は手に持つ筆も氷る計りに覺え侍るにたゆまず御壯かに御勉學に餘念なくおはしまし候事と存じ候思へば去年の秋御別申てよりは折々の文のたよりの外は絕えて親しう打ち語り侍る事も叶はず候ひしがたま／＼月を仰でそゞろに御身の思ひ浮れて候去年までは親しう月を賞し文を作りなどし或ははらからの如くに打ち語り又は文讀みて我至らざる處は互に尋ね合しが今は一人り言かはす友もなくさびしう只むかしの忍るゝにて候田舍も都も變りなき月にはあれど見る人の心によりて愛しとも悲しとも又樂しくも面白くも見え侍らんあゝ親しき

友は都にありて此月を見て如何に思ひたまふらん遠く古里に離れ慈愛深き兩親に離れ年月親みし友と離て知らぬ都に學の道をたどる御身は秋の夕冬の朝はさぞや古里の事共思起して悲しき事もおはせんさはあれ今は新たに親き友どち多く侍らん程に慰まるゝ事多く候べし只何に就ても心細かに御行も遊ばしゆめ惡しき友と親しみたまはぬやうさては行く年月を惜みつゝ師の御敎へをあだにせず學の道をいそしみて松の操月の心に劣らぬ天晴なるものに成らんものと常々の御心掛け片時も御忘れ遊ばされず一意學の業をお勵み候へかしあな慕しき友垣よ雪に犯れて操かへぬ松のみどり氷にうつる月かげ見るにつけても我友は如何におはするかなど思ひ出づるまゝに孤燈の影に拙き筆取て斯くはきこえ候折にふれ故郷の事思ひ浮ばせらるゝ時も侍らばしたしき水くきの跡御遣しの程こそ願はしき事に侍れあなかしこ

秀逸

若菜を贈る文

伊勢國四日市市西町三鍵屋方　今井久米

朝な／＼さしのぼる日影は、うら／＼とのどかになりもて行けど、そよ吹く風の、いまだ袖寒うはべれば、むろ咲きならぬ、梅のさかりは、いつかしかと待たれ侍る、されど、あなた樣には鶯の御手かひもあれば、とくより樂しき春の御心もて、すぐさせ給ふらんと、いとゆかしうなん、池水のぬるみにもえいづる青柳の糸に心をひかれて、友どち三人四人、袖うち揃へて、朝霞と共にうら／＼と野遊びに立ち出て、枯れにし芝生のまに／＼、もえ出づる若菜をつみもて來し者なれば、かばかりに侍れど、まづ春の野の、つとのしるしにと捧げまゐらす、いかで鶯の飼ひゑの、かたはしにもせさせ給はゝ、摘みのこされて、たけ果てなんよりも、嘸かし喜ばしうおもふらんと、一言そへ參らするになんかしこ

秀逸

故郷の妹に

靜岡　賤機花子

餘寒とは申ながら御寒さきびしく候處御兩親樣はじめ御許にも御變りこれなく候や久しく難波のよしあし承らず誠にこゝろもとなく候私事は相變らず日々勉强致し居り殊に近頃は試驗前の事とて何かと心掛りに存じながら御無沙汰致し申わけこれなく御許よりよしなに御詫び下され度候あゝ思ひ出せば去年の今頃ょ吹く風も梢ならさぬ靜岡の馴れし里を西に見て汽笛一聲に限りなき恨みを殘し黑き煙に盡せぬ名殘を止めて轟々たる車の響に心は碎けん計りの思をなしつゝ此都の見も知りもせぬ人中にいでしはげにうれしさあまりてかなしみの極みなりき山おろし吹きすさびて梢を拂ふ木枯の物音凄きよべ燈火の影暗く埋火消え果てんとして身にしむ寒さ堪へがたき一室の内一人机に向て徐ろに過ぎ來しかたを思ふ毎に故郷の慕はしく今頃は父君母君御許には何事をなしつゝあるらん嘸かし御兩親樣方には妾の身御案じあそばされ候はん御事と思ば是非とも御傍に侍りて御孝養致し度思へど如何にせん學びの道に志して海山へだてし他鄕に住む身のはか〳〵しき御孝養もなさんによしなし嗚呼靜子よ妹よ而かも最愛なるたゞ一人の妹よ妾がかく御兩親を御案じ申すまも御兩親は妾の身を御心配下さるなり愛妹よ今御身は朝夕父上母上樣の御そばに侍る身なれば御孝行申上んはいと安き事なれば些なりとも父上母上の御心御言の葉に逆らはで萬づ孝の道をわすれず心つけ玉はりて妾侍らぬも御遺憾なき樣せられよかしもし父君母君の言心に染まぬ節あらば此の姉を思へよ此の姉は今までの不孝を改めて今や孝をなさんとしつゝあるを思へよさて嘸かし御兩親樣方には暑さ寒さにつけ空しく妾が身を案じ玉はん時には年老いたる御身躰に障り玉ふ事もあるべしさあらん時には妾が悲しみ如何計りぞやさればさる事のありもせばよく〳〵御慰め奉れこれこそ私の願又賴みにて候あな心無や吾が身の事のみ申文よむ御身にはさぞやあきつらんと存じ候さて妾も來ん年の春は學びの業終へししるし文を土産とし歸宅致すべければ今一年の處何卒よく御兩親に御かしづき下さる樣幾重にも願ひ候序を以て申上候此度女學世界てふ雜誌發行相成候故早速一讀致し候處片田舍に住む御許などの如

く物學ばんよすがのなきもの〻こよなき良師ぞと思へば今月より毎月御送り申候間家事の暇にはこを良友として御らんなさるべく殊に明年は御身も妾と代りて學び屋に入る身なればよく〳〵他の文共も御讀みなさるべく御進め申候此文書き終るや否や初雷の鳴りしに猶更家に居りし時の忍ばれてなん末ながら伯母君はじめ皆様によろしく先はあら〳〵かしこ

賞外

已か志望を述へて舊師に意見を問ふ文

長野縣諏訪郡上諏訪町　加藤ふみ子

南の窓の梅の花如月の寒風をしのぎて香はしくほころび初めしを愛づるに附けても師の君にはいかにおはすらんと御なつかしさも立ちまさり申候思へは妾か學びの園に通ひ初めしは未たいろはをさへ得知らぬ頃なりしを朝な夕な手をとりいつくしみ教給ひて今はかく文机によりてものかき文讀み燈火の許にて古人の書をてらしつ〻聖賢の教えをさくらんなどと心かくるに至りしは皆師の君の給物にこそ侍れげにや日頃の給へる如くに德を修め智を磨き身体を健康にし以て內助の効を全うし子女を教へ導く重きつとめを負ふ身まして日に月に開らけ行く大御代にうまれしからはすゝづかる信濃の奥の女郞花とてなと徒に過さるべきされば此度東

なる高等女學校に物せむと存し候へとも只々忍び難きは年老いたる一人の母を殘しおかん事に御座候さりながらまのあたりの愛にほたされて空しくすこしなば年月は流水の如くにて夢の間に人生の春なき秋をむかへなむ腰は梓の弓となり頭に霜を戴く時に至り如何にくゆともせんすへなからんかしあはれ心を鬼にして遠く東の都に學ひいそしみ行末笑晴良妻賢母となりてふ孝の罪を報ひなむと存し候へともおろかなる身の决心覺束なく候まゝひたすら御指教のほどあふぎまつるになむあなかしこ

都に遊學せる友への返し

和歌山市北田邊町三十九番地西村方　藤田進子

例のこゝろがけあさき者のつれとて去年のなつやすみのおり御別れ申してより何の音づれもいたさず打すぎ居候ところ今朝ははからずも御玉章をがみたてまつり君のみこゝろをありがたくおもひ參らすと共にひごろの音づれ怠りし妾がつみひとしほふかく感じ申候、御すこやかに朝な夕ないそしみはけみて學びの山を日ごと深く分け入りたまふうれしさ御祝ひ申すより外これなく候賤が身も何のさはりもなう霞は野に出でゝ父上の業をたすけ參らせ夜は進まぬ針を動かして母上の手たすけ致し日々つとめ居候まゝみこゝろやすうおぼしたまへ、君のふるさとにいましし時はもろともに花をめで月をかなしみたのしく暮し侍りしも去年の春君ひとり心の玉をみがゝんとて遠く遙けく東のみやこさして旅立ちたまひてより妾は共に遊び共に語らん友もなく日ごとたゞひとり心ぼそく思ふごとに君が身の上なつかしく都の空の戀しくなり果ては及ばぬ妾が身の果敢なさを嘆つ事さへ候ひしが今又都の事共こまかに御しらせくだされ候を讀み行く字ごと字ごと其の念いよいよます

ます高まり申候、
旅の空の心なぐさみにもとて珍らしからぬ古里のことども一つかきそへ申すべく候、
新玉の年たちかへりてより日ごと日ごと暖かになりゆくにつけましば垣根の一もとむめ一つ二つと笑みもてゆきてこのごろはいとめでたく咲揃ひ谷間を出でし鶯の去年のまゝなる麗はしき聲もておとづれぬ朝とてはほとんどこれなく候、
前を流るゝ小川のこほりも解けそめければ今すこし經ば嵐に散れる山ざくらを水のまにまに花筏浮べ申すらんと思はれていともあはれにおぼえ申し候、
麥田の面は青々とのびそろひてうらゝかなる日陰にひばりの青空高くさへづることゞもいとかしましくきこえ候、
なほなほふるさとに殘したまへる父上母上始め妹御様までうちそろひめでたくあらせられ候まゝ御心置なくひとすぢに御つとめなさるべく候、をりから御身躰御太切になされんことを祈りたてまつるになんあなかしこ、

故郷の父母に送る文

富山縣西礪波郡福光町　淺田こと

餘りのおなつかしさに、一筆申し上まゐらせ候。殘りの寒いときびしう身にしみわたり候折柄、御したはしき、父上母様には、如何渡らせられ候や。此頃は氣候不順なる故にや、遠近に惡しき病、流行致し候由、御地方などは、如何候や、いと／＼、心元なく、朝夕御案じ申し居りながら、日々の學びわざに、おはれつゝ、つひ失禮、御無音いたし、誠に相すみ申さず、何とぞ御ゆるし下され度候。私事はかれ／＼の仰せ言にしたがひて、養生いたし居候故、日増にすこやかに相成、此次の體格檢査には、甲の部に入らん事、疑なかるべしと、友人にいはれ居り候と、ひとへに深き御祈りにこそと、厚くよろこび居り候。まことに月日のすぐるは、いとはやきものにて、御慈愛深き御膝下をはなれまゐらせてより、はや一年の月日を送りむかへんと致し候間、土地にもなれ、朋友も、親しき方も出來、殊に師の君達には、父母のもとを遠くはなれたる身なればとて、一しほいつくしみ下され、忝きの涙にくるゝことさへござ候て、日々樂しく學び居り候まゝ。かまへて／＼御案じ下さるまじく候。されど御兩親樣の御なつかしきは、又更にて、咲き匂ふ花を見ては、父上のめでましゝ庭の櫻をおもひ、隈なき月をながめては母樣と共にかなでし小琴の音をしのび出でゝ、いつしか雨のたもとをしぼり居申し候。わきて昨夜は、久々にて、故郷にかへり、御二方樣に見え、おやさしきみことば給はりつる、嬉しき夢をみ候、扨さめての後は、いとゞ御なつかしされんとあへで、かくは御伺ひまいらするにて候、時節柄いよ／＼御身いたはらせられ度、是のみ御ねがひに候、まづはをしき筆とめ候かしこ
尙々此寫眞は、去にし紀元節の日、友人と共にうつしゝのに候、拙けれども、すこやかに肥え太りたるさま、御覽じいたゞきたさに一葉御送り申上候かしこ。

遊學せる弟に送る文

長野縣師範學校　有賀光子

板戸たばしるあられのおといとはげしきのふけふ異境のそらにたゞひとり物學び給ふ御身にはいかゞあかし暮し給ふらん定めて御つゝがもお

はせず朝な夕な御勉學の御事さいと御うれしく存じ候もはや學びの海のみなさも近く候へば一しを御はげみなされこさ三月は天晴はまれの花かざして故さとにかへり給はんこさをれんじ上げまゐらせ候私事いつもかはりなく學びの窓にすごし居候間御安心下され度候ふるさとなる父上母上さては幼き弟妹なども皆まさきくてあかし暮し給ふよし折ふしの文のたよりに申しなされたく候なほいつも同じ事ながらよく／＼御身をつゝしみて決して惡しき友だちにな交り給ひそよく世にある習ひなるが誠しもふるさと出づるその時は男子志を立てゝ郷關を去り學もし成らずんば死するもかへらじなどうたひつゝいさたのもしげに見えし人のやがて都に出で多くの人に交はるにつれいつしか浮薄なる風にそみはてはだ落して惡しき人のむれにいるも少なからずさかされば常に御兩親樣の御恩のほどわきまへて必ずさる風にしみ給はずたゞ一すぢに志ざす方に打ちむかひやがて身をもたて名をもあげ錦かざりて我がふるさとにかへり給はんやう御心がけ下され度候

こん試驗やすみにはさも／＼に歸省いたし度候間御地の都合御知せ下され度候かしこ

歌會に友を招待する文

山口縣豐浦郡長府村 今藤欽子

學ひの窓を離れ候ひしは早や三歳の夢の昔と成り侍りぬあはれ振り分け髮のその頃より姉よ妹と親身も及はぬ御慈しみは今とてもつゆ忘るゝ暇も候はれと互ひに萬づ事しげき日毎の營みに追はるるまゝ心ならずも疎々しうのみ暮し候事の口惜しうも亦儘ならぬとに存し居り申候さる程に昨日偶と豐子の君の訪ひ給ひ庭園の四五株の櫻この兩三日の暖氣に俄かに笑み初めしを御覧ぜられ素より深きゆかりもなく唯々山櫻に過ぎれと百の花の中の長とて何れにか得も言はれぬ妙なる姿を可惜知らず顏に見過さんも何とやら心なきやうなれば差しつかへなくは舊同窓の友垣共打ち集ひ歌の席にても開かんには日頃の疎々しさも打ち消えぬへくかつは花の心もいか計りならんとの一方ならぬ御勸めにそゞろに心勇み候ひて富子の君をはしめ親しき五七人に傳へ送り參らせ候ところ何れもの御贊助にいよ／＼取りきめ申候さりながらたと／＼數者共集ひ寄り辛うして呻き出候はんも餘りに言の葉の露の光りも映なかるべく就ては萬づ秀でさせ給ふ中にも別けてこの道に長け給ふ御許樣あはれ往時の御顧み思召し捨て給はず此の席に臨ませ給はゞ花の面目もさるとなから一同のよろこひいか許りかと存し上申候素より何の風情もこれ無く請じ奉らんもうら恥かしきあばら家なから一同の切なる御願御聞き届け給はり萬障御繰り合せの上明午前十一時御駕枉げさせ給はらば伏惟の面目此上や候べき先は御願申上度萬は對面給はり候折りにと、かしこ

春夜友を招く文

大阪造幣局十二番官舍 岡本ふさの子

やう／＼春ゝ景色立ち候につれて日頃はもの淋しき片田舍も數株の花に日毎杖ひく人の引きもきらず事繁き都の内にもまして塵立ち候へ共夜に入りては訪ひ來る人も絕てなく殊に此夜頃は月さへさしそひて一しほのながめに候只今の空摸樣にては今宵も春の本意にたがはぬ月夜ならんと推せられ候に一人あだに見過さむも心なき業なれば親しき友垣打よりて三十一文字に思をのべあるは箏など合奏いたししめやかに春夜の景色めではやとおもひ候若し御同意に候はゞ今日の入合の鐘をしるべに御來車

下され度待ち入候かしこ

遊學の友に送る文

松本　横田ゆき

目にはさやかに見えねとも風の音にと昔の人のいひけんやうにいつしう秋も深う相成候をいかに渡らせたまふらんみけしきうかがい申候こゝもとかはりなくくらし居候まゝはばかりながら御休神下され度候扨て御別れ申てよりは東京の文字を見東京の事を耳にする毎に先づ浮び出づるは御許樣の事になん都と云ふ字を見る毎に東の空をながむる度に思ひ出さるるは御許樣の事にて候月こそちがへば御別れ申しし日に逢ふ毎に先づ御許樣の面影は妾の腦裏に畫き出され申候殊に御玉章賜はり候時は恰も學びの園のぞ語らひ所る如き心地せられ候此心地すると同時に餘り御無沙汰に打過ぎたるの缺禮を申譯なき事に考へ一の罪を犯したる樣苦しく感じ候へども種々なる用務の爲なにとぞ御許下され度候げに月日の流るるは矢より早しとか昨日迄夏のあつき日も冬のふきすさぶ嵐もいとはで文の林に御共々にいそしみしものを御許樣にはしる年ますます進み文の林にわけ入給ふ思召しもて勇ましうも故郷遠く九重の雲のたなびく都にとは旅立たせ給ひてより身はやみよにともしびを失ひし如く誰をたよる事もなし淋しうくらし居候あはれ花の都に月花をめでさせ給君よ故郷寒ふ衣うつ妾の心の中察したまひてよ御許樣も來む春は定の業を卒え御兩親樣の御膝下に御立歸り御安心まゐらせ給ふ事なれば定めてたのしくおはすらんと推しまゐらせ候扨て風のたよりにきき及べば御許樣には此頃非常の御勉學にて多少御氣色御變られし樣子との御事打ちおどろき申候さては常健かに暮すなどとはいつはりにて只々妾の心地やすめんとおほしての御事と思ひあたられ候かくありては御身に御いたつきの入るやうに相成候ては妾はじめ御二方の御心勞はさこそと推し參らせ妾事もいまだ都に上りし事なければよきしをさいたし早速でむき御いさめ申さんと思ひたち候へ共此事御兩親樣きこしめさばいかならんと思ひ此度は止りかくは文もて申上る始末故拙なき言葉を侮り給はず何卒妾が愚なる心中をくみ給ひて今後ゆめしひたる事せらるまじく心長くたゆまぬによりてこそ學事もすゝみ候はめかへすがへすもしひたる事なしたまひそ追々さむさに向ひ候まゝ御身御大切にいそしみ給ひやがては月の桂を手折りて御父母君御兄弟樣とも並びて一日も早う花のかんばせ見せたまひてよ學びの道にすきもおはさばたまたま御玉章下され度餘は雁の便よりにゆづりまし

花見に誘はれし返し

栃木縣下都賀郡中村　田波秀子

此頃の暖さに遠近の花今を盛りと途のちまたの噂高く心もそゞろに浮き立ちて是非一日の花見もがなと思ひ居り候も一人にては面白からず且はたらちねの君もゆるし給ふまじさりさてかの花見ずて折すぎなむもいさ口惜しさやせんかくせんと思ひわづらひし折から君よりみるもうれしき筆のつご何事にかと取る手おそしと拜しまゐらせしにちりもせず咲きものこらぬ花の風情を日長のつれつれにながめばやとの御文とび立ほどうれしくて心も身にそはずあゆむ足さへ地につかず玉章を手にもちしまゝたらちねのへやにはしり行てすぐ樣伺ひしに君とならば何事も苦しからずと早速のゆるし妾はこよなううれしうてなむされどあまり勝手がましくは侍れど人出多きはこのましからず候ゆゑし

つかなる地をえらび種々なる事ども語りあひつゝ望むるも一しほなかしかるべしと存候まま左様御ふくみ下さる樣されば明日は朝日と共に御やごがりをもむきて御おどろかし申べければよきに御みちびき給はれかし餘はあすの御たいめにさかきのこし候かしこ

梅の一枝にそへて送る文

東京神田駿河臺　平田うのえ

一筆まゐらせ候皆々様如何が起臥しめされ候や春いよいよ暖かに友呼びかはす群雀のさえづり笹の葉のしげみにかしましくめでたき日のみ打ち續き申候へはさぞかし目黒王子の若菜若草も人待ちかほにや候はん妾きのふ鶯の我宿におとづれて初音しぼるを聞きはへり姿みたくて下り立ち候ひしに珍しうも妾幼き頃乳母と畑より二葉の時にひきぬききて妾が小さき庭のまなかにうゑし梅の年々に大きうなりて去年の半ばより蕾かと思はるゝかたまりの七つ八つ二所さへ枝につき候れがはくは花とも咲けがしと思ひしかひありて次第次第に蕾の形出來ゆくやうに見ゆるまこと蕾ならば早く早く花咲きれとまちわび候が今まのあたり二つほころびてしなうぐひすの姿よりとく見つけてうれしげに數なき枝の彼方此方と渡るにてなん今年初めて咲き候ふなれば見る程の假ひもはべられどいと小さきが中々にあいらしく又半ふくらめる樣の得もいはぬにあたら雜木と枝交らすることのほいなくていつかは家の庭の日あたりよきにうつさんとも思ひはべれどいまは時候あしくて其れもなりがたくはべりさは申すも又此やぶかげにかわゆの梅の花を見ん人なくてあだに過ごさせんも猶さらに忍び申さず其が一枝は今暫しして好き頃になり候はんか朝な夕なの勸めにいそがはしき父君が机の上にかざし候はゞ心なき花もいくか父の心を慰めんとて他の一枝は今日あすの見頃なるを日頃此花めで給ふおんまいさまにも小いさしとていかで愛し給はさるべきとつかひしてまゐらせん程に妾先日參上の折から床の間のかざしの花に白椿のいと美しきを見まゐらせ候とても椿の花などに及びは致されど其へりになどそなへ給はんには猶さらに椿もいきいきして見へはべらんかと思ふばかりにやくなきむだぐちはき候事罪深くはは へるも何とぞ此花思ひやり給ひてよかしこ

北國に在る友に送る文

いざよい

時節柄さは申しながら日ごとさ〳〵の寒さにはほと〳〵こまり入り〳〵扨てさや常々の御文にも思ひしよりも寒さ嚴しく流しもとの水迄もこと〴〵く氷り果ていさたへ難しとの御たよりなりらいしが此頃の如く日々深雪降りしきり候ては御身のつらさ如何ばかりなるらんと思はずも涙をもようし侍りきあはれ御兩親樣の御そはになわしまし候らひし時は水仕の業など手つから遊ばせし事もなき御身なるに如何に浮世のならひとは申すとも埋火の許に侍りてさへ忍び兼れ候雪の日になかしもとの御はたらきさぞ〳〵と思ひつゝ早く雪のとけよかしと存じ候に諸人のいとも重々しくめて候がうらめしく候になんあなかしこ

花に添へて贈る文

信州松本町東之丁　小岩井佐吾子

使を以て申し上げ候此頃は日に増し暖氣相催し候處御病勢如何に候哉伺

ひ上げ候兼て參上御伺ひ申すべき筈に候處何分學びの業の繁くして兎角御無沙汰勝にのみ打過ぎ候段惡しからず御赦し下され度候偖て私庭の梅日頃の暖さに漸く二三輪綻び初め候いつもならば御許樣と共に眺めんものを今妾一人して賞せんも口惜しく覺へ候まゝ一枝手折りて差上げ申候間枕べの友ともなされ御慰の片はしとも相成り候はゞ此上もなき喜びに候一日も早く御全快して共に此庭に遊ばん折の待たれ候かしこ

卒業を祝ふ文

伊勢四日市々四町　本多ひろ子

此程はいつかしき姫松の敎へのにはに桂の枝を折りて故鄕に錦を飾り螢雪の勞しるしありてやう〳〵に世に光り出でたまふ御身特に品行拔秀學力優等の賞與をさへ得させられ敎の庭の撫子の花に成りぬる世を見る事君たちの御よろこびは更なりたらちれの親御たちのみ心にも加何ばかりうれしく思ひ給ふらん何卒今より漕ぎ出で給はん舟の取り梶心して世を海の荒ましき波風に障らず學びの道の光りを明しにかひある浦に到りつゝのせられ候はん事を只管祈りまゐらせ候扨御喜びのしるしとして粗末ながら懷中時計一箇進上致し候是は時計の針のたゆみなく御勉强遊されしをことほぎまつゐ寸志に御座候先は右御祝詞に代へて斯くゝだ〳〵しく聞えあげ候も隔て無かりし友垣のもとの心替らぬばかりをと御汲みとり惡しからず思召下され度候目出度かしこ

習字の紹介を乞ふ文

金澤市川岸町二十六番地　熊谷文子

梓弓春とは名のみにて空のけしきはまたも冬にたちかへり嵐げの風は身にしみ渡りほと〳〵堪へがたき心地せらるゝを御許樣にはいかにすぐさせたまふらん年の初めつかたまうのぼりてよりはいたづらに世のいさなみにのみ追はれて心ならずも打すぎつるなめげのつみは幾重にもみゆるしあれ世はなべて戰後よりは人の心もみやびにおもむきて和歌の道にともなひて手かくわざも上つよりはじめあまざかるひなのはてまでもきそはるゝことゝはなりぬ御承知の如く妾は日頃より學びのわざのくさ〳〵あるか中にも手かくわざは拙くて兩親はいふもさらにて己が身ながらいと〳〵うらはづかしきことになんいかにもしてよき師の君をえて學ばばやと思ふ心は矢竹にはやりつれどさるかたをしらぬみのかなしさにけうまであだに打すぎしを昨日しも梅子の君の訪れきたまひてくさ〳〵のはなしのすゑに心の中をあかしけるに御許樣の親戚なる安木田先生には持明院流をば敎へさせ給ふよしいとうれしく天にのぼるも只ならぬ心地せられ母にねぎつるにゆるしはえぬかく年たけての物學びは古の小野の道風をまねぶとにはあられども一すぢに思ふ心はなどか石金にもとほらぬとのなからむといへる言の葉もあればさてたゞ心のみさきだち申候誠に申上兼候へども何とぞ御許樣には妾が赤き心を硯の海のそれならで汲みてつゝ先方の君に御紹介下されまじくやいづれ近きにまう上りてよろづきこえあぐべくまづは亂れがきをもかへりみず要用まであなかしこ

花に添へて送る文

周防山口町字今道
中村好五郎方　松田茂枝子

はや今年は雪降らずして春とやならん、梅の花の咲くも遠からじと待ち詫びしを、天はそれとも知らせ玉はでや、にはかに怒れる雲起して、肌さすが如き六出の花をしたり顔に、隣にも行きかひ難きまで降らせに降らせて見渡す限りもの凄く、梅を慕ふ心そいやまさりいと切なる、されど如何にしてか求めらるべき、心うくしぼみかゝりし瓶の水仙を梅ヶ香になぞらへて書讀む友としつゝも、いつか又うらめしの雪やと卿ちつ窓押して外山の方をながめ居し折こそあれ、面包み雪沓はきたる人の我家をさして來るあり、見れば其かざしたるは確に梅なり、あな嬉しや早くこよかし一枝求めむと、小錢携へ表に出つれば、雪はらひてよと呼ふ弟の聲す、其聲こそ梅もてる主なりけれ、此の寒きによくも梅を尋れし事よと、いたはりつゝ仕度解きやれば、凍えし手を温めんともせず瓶持ち來りて、いけよといふまゝに、拙き藝を耻ちもせず床に供へければ、廣からぬ伏屋は梅ヶ香に滿たされて、唐人が桃源にあそびしも斯くやとばかり思はれて氣長う心樂しく、いけ殘りたるを送るとは餘り心よからねど、御許樣も定めし此雪にては梅探り給ふこともかたからんとおぼえて、持たせ參らせたり、もとより弟が手折りしものとて枝ぶり杯も御氣にそはざるべけれど、雪消えんまでのこゝろなさにもと、麗はしき御瓶になさめ玉はらば獨り妾のみかは梅の共に滿足すべくなん、あなかしこ

梅見誘引を辭する文

信州松本
町東之丁　小岩井佐吾子

文して申上げ候明日は山邊桐原に梅見御催しの由にて妾まで御誘ひ下されﾞ候御なさけの程うれしうて存じ上げ候私事も兼てより其名を承り居り候好き伴もあらは是非一度遊ばやと思ひ居候折柄願うてもなき御誘ひに預り是非御供仕りたくは存じ候へとも折あしく母上事昨夜より少しく發熱の模樣にて床につき居り別に御心配下さる程には之なく候へども人手少なき事とて何分手放しかれ候故誠に本意なく遺憾には候へども此度は御供いたしかれ候間惡しくな思ひ給ひそ尚御歸りの上は委細御話し下され度たゞ其れをのみ樂しみ居り候尚此上の願には梅花一枝の御惠に預り母を慰むるを得ばこよなき幸に侍り候かしこ

東京之友人に送る文

甲斐　霜田ひさへ

陽氣漸々暖和加り凌き能相成候御許樣には不相變御機嫌克く御勉學被遊候由誠に心嬉しく存候私事も幸ひ無事に暮し居候間乍憚御心休め被下へく候却説昨年の春は御承知の花子樣と御同道致し村社稻荷樣の縁日に參詣の節互ひに買ひ來りし盆栽の紅梅は拙宅後園の座敷に飾りて花の滿開に打ち集ひ茶を飲み歌を詠みて日の西山に沈むを忘れ愉快に樂み申し候最早一年と變り移りて復た東風吹き黄鳥囀る時に立ち到り御許樣と釜無川の渡場に袂を分ちてより指を折り數ふれば既に八ヶ月の光陰をすごし候又力と賴みおる花子樣は師走の月半ば御目出度事にて甲府柳町へ御引移なされしより掌中の玉を奪はれたる心持して月日を送り唯々東の窓を開きて山の巓殘雪の消ざる邊りを遙に望て御二人樣の御健全を祈る斗りの外は手習ひ裁縫の餘暇盆栽の培養に心を打ち任せて慰みつゝありける折柄三鉢の紅梅も唯今漸く滿開の樣に相見え候間花見旁々快く樂まんと思ひ回らせば御許樣は三十六里の遠き東都に在らせられて御勉學中なれ

ば中途御歸郷も出來難く花子樣さて四里離れたる御商業の緣家に歸られ居り候へば私の思ふ樣匕の氣儘に御出で被下る譯にも參らす去りさて美き花の色香を空しく散らせ落すも心惜しき儘獨り室內を淸く酒掃致して御席を作りて侍り居り候も何やら心淋しく物足らぬ心地に文箱より取り出ししは御二人樣の御書き染められし短冊のお歌を讀み餘香の薫るを拜みて以上もなき悅びさ存じ今春の花見を卒り候餘は暑中休暇御歸省の節は御面會を褧り色々の御噺しを仕度さ今より樂みおり候先は拙き筆迄あらあらかしく

醫師を賴む文

保野わさ子

日ましに寒さに向ひ候處御家內樣無事御きげんよろしくゐらせられ候御事と御めで度ぞんじ上まゐらせ候さて先達は妹事御治療を相受申居候御かげさまにて全快いたし此頃にては日々學校に通ひ居候つきては皆先生の御かげと兩親はじめ喜び居候ことにて厚く御禮申上じ〳〵またまた御厄介の事御たのみ申上候へ共本町の伯母事先月來より少々心地あしく御弟樣に御治療受居候處俄に腹痛致しくるしみ居り候へ共折あしく御弟樣は今朝より御遠方へ御出のよしにてまことにこまり居候につき先生に御願ひ申くれたきやう只今申まゐり候まゝ遠方の處甚だ御苦勞樣ながら何さぞ一應御往診被下度御承知被下候御事に御座候へばありがたくぞんじ上まゐらせ候病家は此使の者より御きゝ取り下され度右御ねがひ申上たくあら〳〵かしく

花見に友を誘ふ文

信州下高井郡倭村大字柳澤小林春之助方　小林春子

御別れ申してより、はや一年にあまり候ふに、打絕え御音信も申し上げず、御無沙汰の罪おゆるし下され度候。長閑なる春しも、いかゞ渡らせ給ふらん、時もはや春のなかば四方の花もひもどき初めんさ、思ひやる計りにてこそ候らへ。あはれ都あたりにては、たぐひ嵐の山櫻御室など、年々見てしも飽かず候。三吉野の花の盛はいかさまにかあらん、えしらす候ふは、こよなき恨みにて侍るかし、うらゝかに晉の根の長き春日をいたづらに送らんは、本意なきことに侍るかな、願はくは暫らくなりさも、花のあたりにまじり居て、君もろ共に見參らせたく思ひなり候。あはれわらはを何處にまれ、御心に叶ひし方へ召し立ちあらせられす候ふや、君ならずしてまた誘ふ人さても、あらず候まゝあたら今頃の日和を、むなしくすごさんはさすがにて御誘ひ申上まゐらせ候ふ、嬉しき御返辭あらまほしく候めでたくかしこ



普通文

特賞

女流文學者をおもふ

北信の山家にて　ふじ子

征清の役にいくさ勝ちを得て、將士勇しく凱旋したる翌年は、女流文學者にとりて、最も悲慘なる時なりしよ、番町のなにがし館にてうら枯れたる若松女史、今は染井の墓地靜かにねむりて、魂樂園に遊ぶらん、再びこほろぎさらきの月、靜かに梅か枝てらす夕べは、三人のわすれ形見、いかに無き人のこひしからんとそゞろにあはれなり。一度は世人に、輕薄淫亂のやうにあやされて、而かも容姿秀麗なりし稻舟は、この世の緣も薄衣、口惜しき三々九度の盃は、この人いひしらぬ涙の淵に身をまかす始めにて、遂には故郷羽前の露と消えぬ、千代のよかひの鶴岡某の寺に骨を埋づめて、淨德院眞如妙覺大姉といへるは、この薄命なる佳人が戒名なり。夏子の君一葉女史は、天才ゆたかに筆力すぐれ、社會の涙を身にうけし人なれば、書きいだすおらん樣お町樣、おぬひお新のそれらより、「經机」のをさなき人、さてはお力の性格美どりのおもひまで、あらゆる世のつれなきをうつして、遺憾なからしめたり、「十三夜」「大つもごり」の諸篇は、今世に傳はれども、秋の夕作りし人は霧にもろくも消えて、世は益々寂莫くれ行く空のさびしさは、ひとり菊紅葉の上のみならで、實に天才のゆけるなりけり。

而して賤子は、御齡卅路の上、二つ三つこし給ひし程の最後なりしが、きん子は漸く二十三、一葉の君また二十路を六つ重ねし命なりしとかや、されどもこの三女史の外に、小金井きみ子、田邊花圃女史の筆、老練なるあり、田中夕風梶田うすらひの君など、世人の記憶にのこれるありて、聊かこの道の爲、同じ性をうけしもの丶我等、ひそかにほこる所ありしが、霜月の空、時雨あやなくふりそゝぎて、薄氷またかのよの人となりしをきく、皇天うたゝ我女流文學者を遇する薄きをうれひ、且つはこの君の半身となり給ひし人の不幸、母そばの母に別れ

し撫子の上、思へば傷ましさにわか袖まづ露の白玉いと深し。あやしきは死の陰よ、汝はいかなれば貧に泣き餓にさけび、かなわぬ戀に泣く、老女の枕べ、處女がねやにおとづれで、かくは才女の身をくるしめ、家庭の和樂を奪ひ去る、汝いかなれば半死半生の、獄屋にうめく四人の靈をばうけで、花によみ月にうたひ、黄金の光にうきとしらぬ美人が齡を奪ひ去る、汝は無情なり、汝は苛酷なり、汝罪なき笑顔にほゝゑむ慈母のふところより、最愛の寶をうばうて、猶いまだあきたらず、連理の枝をさき、比翼の一つをもぎ、翠帳のうち、紅閨のなか、涙海のごとくならしむる、皆死よ汝か罪なり、公にまします法官は、殺人罪の四人を捕へて、恣に死刑の宣告を與へ給へど、形なき死に一筋の繩、一條の刑すら處する事能はず、我が尊敬するかし子夏子きん子をころして、こたび亦うすらひをとりたる罪かろからざるなり。死の神おもむろに曰く、先きの世より紫少納言の諸姫、天にましまして、明治の女文學者をまつ事しきりなり、かしこは永久の春ありて、百花さきみだれ、百鳥喃々しほまざる花の梢になき交はし、玉をちりたる高殿の欄干には、數多の詩人聽客うちつどひて、歌よむたのしさは

このよのもの、いまだ嘗つて知らざる所、いさゝかなる人情の、まこと紙よりもうすき世に、さりとて我をつれなしとうらむ、御身が心の愚かさよと、いひ殘してけふは我をばとらへざりき。

中島湘烟女史からうた承はりたく、この人今はいづこの閑地に、風流を味ひ給ふらん、新聞傳へず、雜誌また消息をのせざるなり、齡や老い給ひし、病やおこり給ひしか、嘗て京都劇場にて、花の紅唇より政談演說をこゝみ給ひし勇氣は、いかに、はた天の一方に美人をおもふて、心欝々慰むすべなき、厭世の人となり給ひしか、きかまほし、

三人四人のお子持に筆とり給ふ暇はなけんも、もとより貧しき家の主婦ならで、乳母に、下女に、萬づの御用仰せつけ給ふ奥様の身、折ふしは泰西の美文兄君に御相談なされて優しき和文のそれとなし紙上に現はれるゝをねがふなり、紅葉露伴そは皆殿方の作者。秀才ならなき御身にして、近頃お筆に不忠なるは、これまた詩神に不忠のそしりはまぬがれざるべし、なめげなれどもいはねば腹ふくるゝおもひあり、穴掘る力なければ、一言かくなん。

わがしれる猿樂町のさる人、數學和學唐文字のいかめかしきは無論。花と茶の奥をもきはめ、ことに和琴たくみにて女子には必要なる針の道すらくらからず、文學材藝の趣向深くして、[illegible]一枝の葉よく花鳥をも畫がき、山水の妙をもつたへ、歌に文に、せざるところなく、手はお家流のうつくしきとかきて、當代第一流の女子なり。この人衣服の摸樣、襦袢の襟、いつも濃淡美術とやらに叶ひて、富貴の身はうらやましき程の趣味なりき、常に花圃女史の作をよろこびてよみ一葉は貧苦に生をうけし人の、いかで上流の氣だかきを知らんや、されば「われから」の奥樣が、園遊會のいでたちも、唯新調の三枚重ねに流行を示してといへるのみ、こゝの所女史ならば羽織の紐、帶の織りかた、腰帶の色まで細記して、洩らす處なからんにと評し、嘗つて花圃君が國民の友附錄にて「空行く月」のお手かけが、一擧一動のそれより、お女中共の物語、とても、一葉にはかけぬ筆のあや、紫紺絽のひとへ派手やかなりしお須摩の姿、眼に見る如しといへり、まことやこの夫人三宅氏、上流のお交際になれ給ひ、ゆきゝの人は八百屋豆腐屋のそれならで、今を時めく政客上官、園遊會懇親會の花やかなる、慈善音樂會の高尚なる、むべこの人の筆にかゝりて、終りは悲慘なる夏子のそれと異り、圓滿はたつ子の君が得意とせらるゝところ、才子は佳人をめとり、迷ひ子は母にかひり、惡は善にうつる、なべて隨喜の涙にあふるゝべし。近頃太陽に御名見えぬは、御良人と旅の空、わたゝかき湯のわたりにやおはす、將た師走の風寒く坊うちやま、御不快などにはあらぬかと、うち案じらるゝ、蓋しこの道の爲なり。



嘗て「くれゆく秋」の短篇をものされ、又「濱ぴさし」のこゝろたかきを作り給ひし、大塚楠緒女史、この頃の御すさびはいかに、この君また榮華の高殿に、うきよの風、外にきゝなして優なるピヤノ、奏し給

ふは何の曲ならん、妙音は丹唇に發し、哀聲は皓齒に激して、纖指を樂のあなたこなたに飛ばし給ふ、御ゆかしさ、國文英詩研究は、日に月に進みて、異鄉の窓にものまなびし給ふ御方樣、やがて目出度く御歸朝のあかつきはと、推しまゐらすを、いたづらなる我が筆とな、おほし給ひそ、あはれ沙翁に得給ひし御詩趣、近松にてさとり給ひし人世觀、御心の糸にひゞきて美くしき衣と、我等が眼にふれんはいづれの日ぞや、待つ間をおそきこの年は、つひに何の消息もなかりき、初春のあしたを唯またんのみ。

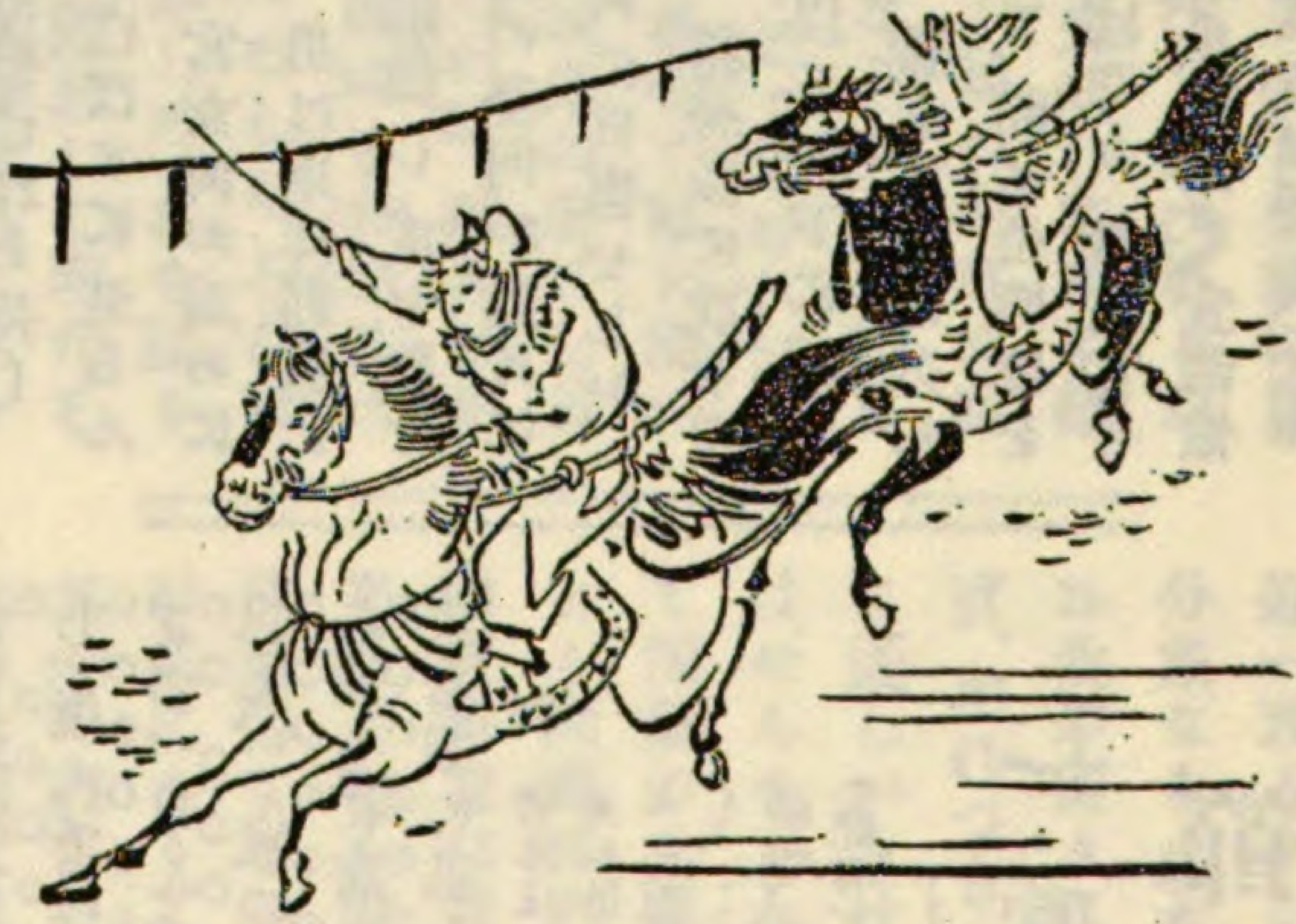
神田は小川町の裏通りときく、竹柏園主佐々木信綱氏夫人雪子、嘗て某校卒業式に論文「女流文學」を朗讀されて、まれなる才媛とたゝへられ、後かの閨秀小說に「手匣のうち」をかゝげて、幸福なる家庭の令孃と、よむ人毎にゆかしがられ給ひしは、六歲程前の事なりき、雪子は楠緒子と同じく、和漢の學をきはめ、御手また上手にて、嘗て短冊にかゝれたるそれ拜見せしが、さすがは賢明なる父母君の許に養成せられし故かと、限りなく目出度うおぼえたり、まことや世に美くしきは、家庭の圓滿なるより外なく、後歌人佐々木氏に天緣むすばれて御輿入れの日は、これかの君が益々文學に幸福多きを豫想せり。作者としての技量は知らねど散文家として又この君の右に出づるものなけんと、世人の希望相當たりしや否や、靜けき高殿の中、文机に向ひ給ふ御姿、あはれさびゆく女文學者の、復興をはかりて、滿腔の生血これへそゝぎ給はずや。外に田中夕風、藤井ゆかり、女京都の紫琴女史、今健全なる世を經給ふてか、嘗て其かみ女學雜誌の「こわれゆびは」は、紫琴女史の作なりときく、願ふは續々傑作をものされて、我等女性が、いさゝか世にほこる料となし給はらずや源氏物語は一朝一夕の作にあらず、苦心經營幾歲かを經てなりしものなり、英の才媛エッオット夫人とて、一夜に名聲得しものに非らず、卿等がいまだ世に著作の知れざるは、今や苦心經營の中なる故かときかまほし。

嗚呼一葉女史ゆきて、世は再び「大つもごり」の可憐なる罪人が心の苦きく能はず、「空蟬」のもぬけのから、「行く雲」のかへりきたらざる、「埋木」のおてふ行衞はいづこ、「雪の日」は我文學界にて一葉女史の名を知る始めなりき、お町お關おらん皆世の無情に泣く人ことに我十三夜の一篇をあげて傑作となす、筆のつかえもなう

さら〳〵とおせきの涙、母のいかり、父のなだめなど、一々よみもて行けば、いひがたき味あり。我きく薄氷女史、よはひ漸く二十五、人生五十の半ばいまだ終はらずして、幽明ところを異にす、君が父母たり、夫たり、又いとけなき子の、如何に口惜しくおぼすらん、我はこゝに女史の死を悲しむは、ひとり家庭の爲のみならで、わが女流文學者の爲、不幸不運を歎くなり、茗溪のほとりに通ふ幾百の令孃のうち、今後の紫女やたれ納言はたれ、一葉の後をつぐ人やある。

（昨臘の作）

評　普通文の數も少きにあられど、これはと思ふ作を見ざるを憾む、この文は、萬綠中の紅一點ともいふべきもの、文中に述べたる感想は、いかゞとも思ふ節なきにあられど、文章はさら〳〵として些の苦を見ざるは、老練の筆といふべし。（記者）



甲賞

奢侈の感

山梨縣甲府代官町　伊藤うた

富みて奢らぬは聖賢の道とかや、凡て一家にまれ、一國にまれ、其盛衰は衣食住の儉と儉ならざるとによる、されば、驕りをしりぞけ、己れをつゝまやかにし、財をもたず、世に貪らざらんことこそ、いみじかるべき。

夫子曰く、桀紂は其身を忘ると、眞なる哉、苟も天より命を受けて、世を撫で物を酬ゆるの身に非らず、而して猶酒池肉林の娯樂に耽り、忠を斥け奸と語ひ、あたら忠臣をして、黍離麥秀を歌はしめしも、畢竟國を治むるに儉ならざりしにあり、舜の道を獮童に問ひたる、禹の世を撫するに眷々たる、何ぞ錦繡をまとひ榮華を貪ぼるの暇あらんや、褒似一たび笑つて幽王國を失ひ、阿環一たび媚びて

明皇天下を傾く、嗚呼佳人一片の笑媚は、以て堅城を傾け、社稷を亡ぼすに足るか、然り佳人一片の笑は以て其心を奪ひ、一滴の涙は以て其神を魅す、其心神己に非なり、何ぞ傾城を咎めんや、勅語に、所謂恭儉己れを持し、治國の任に當らば、何ぞ城を傾け國を亡ぼすに至らんや、阿房宮何が爲め天を衝くか、三千の宮女何が爲めに畜へしか、豐臣氏尊王を以て稱せられ、勇は東洋那翁を以て稱せられ、而して一旦緩急の際人離散し、貳を嗣ぐ何ぞ二世より久しからざる、蓋し聚樂の邸何が爲めに天の一角に聳ゆるか、千の利休何が爲めに自害せしか、是卑より起りて身を寥郭の上に致し、稍奢侈に耽りたるの誘も免れざるなり、北條氏逆賊を以て天下に稱せらるゝも、天下之れが爲にめ用をなし、職を九代の久しきに傳ふ何ぞや、他なし事成り志を得て、而も位四位を越ゆるも、世々節儉を守りて惰らざればなり、實に古今東西其軌を同ふす、孔子曰はく、與其奢也寧儉と、宜哉儉より奢に入るを安くして、奢より儉に入るは難し、されば、古より小大の事儉に始つて奢に終らざるはなし、羅馬埃及は往昔文化の根原たりし、而して彼等は一時の榮華を貪ぼり、笑眉の裡、琴を春花に彈じ、所を秋月に弄す、ピラミッス、サーカス天を摩し、其壯觀人目を奪ふ、然ども之れ一時の美觀のみ、内に元氣消耗し、瓶裏の花、何ぞ其能く久しきを持せんや、今は茫漠たる荒野共に昔日を語るに足らず、噫奢や個人としては其身を亡ぼし、進んでは一家社會一國一城をも傾くに至る、豈恐れざるべけんや、國亂れて忠臣を思ひ、家貧くして良妻を思ふ、一家の貧は一國の貧なりと、されば、能く家を整へみだりに奢らず、入るをはかつて、出づるをなし以て國家富強の基を心かけでやあるべき。

評　奢侈ほど恐るべきものはなし、國を亡ぼすもの、家を失ふもの、身を敗るもの、多くは不相應なる奢侈に基するもの也、されば、人生戒むべきは奢侈にして、努むべきは節儉の道なりさいふべし、この文、瑣々たる小文字に過ぎざれさ、能く此等の感想を述べ、世道人心を戒むるに足る、文章また簡古にして見るべし。（記者）

乙　賞

節女お政

東京芝區琴平町十三、伊東方　宮本しげみ

お政は筑前國宗像郡赤間村の酒商、大黑屋松尾七兵衛の次女にて、今より百二十年ばかり以前、天明四年四月

十五日に生れぬ、七兵樹は性質至つて温和にして慈愛の心深く、召使ひの男女共をもあはれみ使ひけるが、如何なる故にやありけむ父は七左衛門と云へるを養ひて宗家を繼がしめたれば、己れは分家して同じ生業に豐に暮しけるも、始の妻は一女を生みて死し、再び娶りたるにこれも次女お政を生みて間もなく失せし不幸に續きて、お政四才の時おのれも亦明日をも知らぬ重き病にかゝりければ、宗家の主人及び叔父なる多左衛門を枕邊に招きて己れなからん後は男の子とてなければ、後妻の弟嘉右衛門を迎へて長女千代に娶せて家を繼がしめ次女お政は本家七左衛門の男長次郎の妻とし玉はれと呉れ〴〵も遺言して失せたりしかば、兩人は先づ嘉右衛門を迎へて家を繼がしめ、お政はまだ幼なければ姉夫婦の娘として養育する事とはなしぬ、七左衛門は長三郎と云へるを養ひて家を繼がしめ、名も讓りけるが間もなく死に失せ、多左衛門も隱居して明作と云ひしにこれも程なく病に臥し、家主多左衛門に呉々も故七兵衛の遺言に從ひてお政長次郎を結婚さすべき旨を諭して死したりける

お政のいひなづけなる長次郎は性質温良にして、義兄長三郎を助けて生業を勵みけるも不幸打ち續きて漸く家産を傾け、世々營み來りたる酒造さへなす能はずなりて辛くも其日を送る有樣となりければ、迚もお政を迎へ取るべくもあらざりける

分家なる嘉右衛門が家にても家運次第に傾きけるも、お政が便りなき身をあはれみて懇にいたはり育てしかば、生れつき容姿美はしき上に心ばへさへひなには稀に優しかりけり、かゝれば田舍に置きて卑しき業見習はせんも心憂しとて、お政十一才と云ふに福岡に出して同藩の大家明石行憲が家に奉行する事となり、それより同家にありて淺菜といへる優しき名を呼ばれぬ、明石行憲は當時納戸頭をつとめ藩主にも重く用ひられ、文學を嗜み詩歌を能くし本朝の烈女の事を記したる三烈婦傳など云へる著書もある人なりければ、お政もそが家にありて朝夕に月花のやさしき談話を聞き、論語其外の經書の講義なども蔭ながら聞くに勉めしかば、生來怜悧なる女の能く古今の美談をも記臆し、裁縫の業を勉めつゝも古へ今の文を讀むを樂み、手さへ美はしく書きければ行憲夫婦は深く愛で慈み、賞めたたふるは更なり出入する人々も淺菜を歎美せぬはなかりし

かゝりければ福岡の由緒ある家の人々より我娶らんと云ひ寄る人も多かりけれども、お政は亡父の遺言ありとて從はず、只管に己が才藝を磨くに力め、益世の人の嘆賞を増すのみなりき、されど滿ればかぐる世なりけるよ、嘉右衛門夫妻は日に増すお政の容姿の美しさと何處の姬君といはんも恥かしかるまじき才藝とを以て如何に亡父の遺言なればとて零落果てたる長次郎に娶はせん事の本意なしと思ひそめけるぞうたてき、

美はしき花は手折られ、隈なき月は蔽はるゝ塵の世かな、あはれ誰が爲めに磨きにけん其才貌は見よとて願ふ人の眼には映らで、他し人の心を引く種となりしぞ是非なき、茲に同郡勝浦村に世々大庄屋を勤め、富貴の聞え高く郡中に勢力ある半五郎と云ふに源五郎と云へる男子ありて、良き妻をと諸所を尋ねけるにお政の才色を傳へ聞きて迎へまほしく思ひける折柄、嘉右衛門の姉婿なる赤間村の馬醫萬助と云ふ者所用ありて來りければ、好き折なりとてお政を貰ひ受けたき旨話しけり、萬助も近き親類なれば己れにも便り宜しかるべしと喜び勇みて此旨嘉右衛門に話しけるに、同人も兼ねて好き婿をがなと思ひける時なれば、これも喜びて急ぎお政を福岡より呼び還へしぬ

多左衛門及び七右衛門の兩人は此噂を聞きて大に怒り、二人して共に嘉右衛門を訪れ亡父の遺言に背くを責めけれども耳にも掛けず、されば七左衛門は我家零落の折なれば强て長次郎に娶らん共云ひ兼ね、嘉右衛門の都合よきにしてよと云へど、多左衛門は押し返へしておのが父死亡の時呉々も人々に代りて七兵衞の遺言を實行せよと云ひ置きぬれば、お政を勝浦に嫁かせんこと我亡父の靈にも不孝なりとて承知すべくもなく、お政も故鄕よりの急の迎ひに長次郎と結婚の爲めならんと歸り見れば、前約を破りて勝浦に嫁くべしとの義父の詞に驚きながらも、亡父の遺言によりて旣に定りたる夫あり、さるを今其家の零落れたるを見棄て他に嫁かん事如何にも利を好みて義を知らざる樣なりとて從はず、媒酌の人々も己れの爲め家の爲めなりとて詞を盡くして頻に勸めけれども從ふべく見えざれば、嘉右衛門は怒りて斯く利害を說きても我等が詞に從はざるは必定長次郎と密かに通じ居るが故なるべし、此上は兩人共逐ひ出して腹をいやさんといきまけども、お政は只泣くより外に詞なく、人々も其志の動かされぬを

見て此事暫時沙汰止みとなり、早や夏も過ぎて秋の初めとぞなりぬ

されど半五郎は詳しくお政の風評を聞くに付けてこれを得たき思ひ益深く、遂に萬助とも談合して赤間村の大庄屋を媒酌人に頼み其外近傍にて勢ある人々をかはるがはる遣はして嘉右衛門夫妻に說かしめ、果は村の役人なども役儀の權威を借りて只管に家の爲め後のため悪しからず、且は此縁談を斷りなば後難知るべからずなどおどし勸め、親戚の者共迄も己が利害を謀りて說き勸むるに至りしかば嘉右衛門夫婦も止むなく承諾し、お政は如何樣とも說得して我意に從はせんと約束を定め、其年十一月十二日こそ吉日なればとて此日を以て結納を送る事となしけり

お政は早く兩親を失ひて姉夫婦を後の親とも思ひかしづき、いたはられて田舍には稀なる容姿、敎育を受けたるが身の仇にて、人々の詞に從ひ勝浦に嫁かん事、父の遺言に背きて心苦しくさてては本家の零落を見棄てて富家に行かば義理を知らぬ者との嘲もはづかしくて一旦は否みけるも、此頃の姉夫婦の身に掛れる累を見聞きては、行かじとすれば權威に誇り心曲れる人々の如何なる事をや仕出來すべき、今は此身の味方とて語ふべき人さへなく進退こゝに谷りて涙も枯れん計りに泣き悲しみ、果ては堪へぬ思ひに髮さへあげず食をも取らで打ち臥したるまゝ日數たちても起き出でず、なげきに沈むのみなれば、姉夫婦は不慮の事もやあらんとて、常にお政の起居を見守らせけり、かくて數日を經けるにお政は心地よしとて起き出でつゝ、髮をも梳り顏色さへ美はしく姉に向ひてこれまで人々に心づかひさせける罪を詫び、快く勝浦に行くべしと云ひ出でしかば夫婦の喜は更なり懇意の人々をも招きて祝筵を催ふし、お政も紛粧して其席に出で客人をもてなしければ、皆々心を安んじ笑ひさゞめきてぞ歸りける

跡に姉は忙しとて急ぎ機を織り居けるに、お政は何氣なく出で來りて管竹の足らぬ樣なれば妾伐り來りて參らせんとて、くりやにありたる先の尖りたる庖刀を携へて裏の方へ急ぎ行きけり、あはれ同胞のため伐りに行く其管竹は何なりけむ、祝ひの筵に我に着せんとて織り呉るゝ人の情もあだにして、やがては變る死出の旅衣、今日集りし人々の祝ひて酌みし盃も、生別離苦の淚かくせし酒むしろ、勇み笑ひて何氣なく、姉上の顏も

これぎり見納めかと口に云はねど胸の中心の内に打泣きつ、時は霜月紅葉葉の霜に飽ては散り來る袖の村雨しぼりつゝ未だ盛見ぬ蕾の花、惜しくも散りしあはれさを知る人更になかりけり

姉も初めは心付かでありけるが餘り久しくなりても歸り來らねば機の上より高聲に呼べども答へなく、隣家を尋ぬれども知らずとの事に人々を呼び集へて家内を搜し見れば、物置の中に端坐して形も亂さずうつ伏し居れり、側に庖刀ありそれにて突たるにやあらん深く咽を刺し、四邊には血汐流れてすさまじく死樣丈夫も及ばず潔かりしとぞ、かゝれば人々驚き騷げども早やこと切れて詮方なく、姉夫婦は今更悔み歎けども其甲斐あるべくもあらず、なく〳〵其旨庄屋藤吉に屆出でければ大庄屋其外の役人共も驚き己等に罪あらん事を恐れて狂死の躰にもてなし、嘉右エ門其他近隣の人々の口書を添へて郡奉行天野彌一郎に屆出で、陰に賄賂を贈りて事なきを得たりけり、時に亨和元年十一月九日とぞ聞えし、遺骸は驛の南なる佐屋の峠と云へる小丘の上に葬りぬ、人皆其貞節に感ぜぬはなく盛りも待たで散り失せし心根をあはれとは思へども、お政の事を噂して役人の耳に入りたらんには如何なる咎にあはんも知れずとて、口に出して譽むる人とてあらざりしが、菩提寺の僧繼譽お政の情を憫みて凝香潔操信女と諡し、又俳士眼鼻は其事跡の埋れん事を惜み陰に常盤草なる書を綴りて其事實を書き傳へける

世は利にのみ馳せて德の尊きを知らず、人は不義の財を積みて榮えありとなし、日に進み行く學びの道は押しなべて不德を行ふ道を敎へつゝ、正しき道に貞操を守る人は迂愚なりと嘲らるゝ世の樣是非なしや、秋の野のませに離れし菊の花便らん方もなき身をば、憎くや嵐の吹き添ひて霜に枯れにし心根の其あはれさを知る人なきのみか、狂氣して死にたるなど死後の汚名を負はされて寃枉をのぶる事さへ難く知る人心になげきしが、紅葉の錦赤間村赤き心を世に示す折は來りて、文化十四年國學修猷館の敎師竹田定琮節女の詩と題しお政の事を詠じて藩主に献ぜしかば、藩主いぶかりて其事跡を近臣に問はれしに、青柳種信がものしたるお政の傳を覽に供する者あり、それより吏を派して取調べられ遂に實を得て大に其貞節を賞せられ、當時の大庄屋等を罰し、嘉右エ門を召し出して銀十五枚を賞與せられ、且つ時の郡奉行森長可に命じて墓を修め寺田を

寄附して法會を營ましめ、尙墓側に碑を建てゝ藩儒井上周盤に碑文を撰はしめらる其銘は左の如くなん

寧死不辱　苟竇其倫　天之未定　譏夫哆脣
旣克有定　靡不勝人　恩被枯骨　宿寃以伸
於粲洒掃　墓間無塵　凛々遺烈　刻文貞珉

これお政が死せしより十七年の後にて、叢雲に蔽ひ隱されし月影も眞如の光表はれて永久に村の光と仰がれつ、其貞節は後の世までも語り傳へて人の心を導き、後には孝子正助の出るなどお政の義心に感化されしにや此郡の人心今も淳朴なりとかや

九州鐵道赤間驛の西五丁、佐屋峠の頂き常盤の松が枝色かえぬ操を守る下、一基の碑こそお政の靈を祀れる所にして、それより東一里ばかり武丸村なる孝子正助の墓と共に、今も世の人の鑑とたゝへられて香花の絕ゆる時なしとぞ

評　是れ筑前の節女お政の傳記なり、その傳著く世に知れざれども、この文を讀まば、誰かその節義に厚きを賞せざらん、叙事評密、文章流麗、叙事文の上乘といふべきか、(記者)

丙賞

阿藤の傳を見て

永井きち子

豐太閤の淀君、鎌倉幕府の政子の如きは多からんも、をみなとして公け事に與り、始より終りまで能く民の心を心とし、寛嚴其當を得たる稀なるべし、多くは心ざまのねぢけたる臣どちの言を用ゐ、民心をはなれしめ、禍を貽す事近く西太后の如けん、妾偶々阿藤の傳を見、妙齡の一女子にして禍を未發に防ぎ、一藩の民をして能く愁の眉を開かしめし者は、其能く確固たるまごゝろを以て一身をいけにえとなしゝ所以なるを深く感じぬ夫れ言ふは易く行ふは難し、といにしえ人もいひけん如く、堂々たる、さむらい人も多き中に、能く果斷之を行へし者げにますらをもおよばざる所なり、始め侯、丈夫主計の言を容れて、若山を黜けしも、全く諫言耳に逆ふの諺の如く、主計を心中大に惡みしならん、未だ飯田に至らざるに、早く旣に其の官をはぎて、留守におとしめつ、剩さへをぼれし夢のさめ兼ねて再び之を召す、若山なる婦人一たび退けらると雖も、敢て其心を改めんと

もせず、益々妖術を逞ふし、才學をたのみて、公け事にまで與り夫人あるをも忘る、是れ即ち阿藤が己れの師たりしにも拘はらず、申し請ひて師弟のえにしをもたち、一意之をのぞかんの心を强ふせし所以ならん、其匕首を懷にし侍女をしりぞかしめて、若山の前に至り之を詰り、其如何にするとも又到底改しむべからざるを見、決然心をはげまし おどりかゝらんとせし一刹那、當番なりし父人に抱き留めらる、然も抱かれながらにして之を倒し、其わきはらをさしゝ時の心は、如何に口惜しくも、又其手ごたえありし悦びは寫すに言もあらざるべし、心なき劊手も之を斬るを拒みたりしを見ても、一藩の士庶の其行を悦びしと同時に、其如何に若山を惡しみしかを知るに足らん、况して抱きたりし父の心こそ、實に斷腸の思ひなりしならん、其己れの斬に處せられんとするに望み、父の身をのみ愁とし、遠からず其舊に復せんと聞き、快く刑場の露と消えにし心の內、其雄々しく勇ましきにもまして、やさしくも又ゆかしかりし行ひぶりは、實によみ去りしるし來りて、うたゝ時ならぬ時雨に膝を霑すを覺えざりき、嗚呼いまだうら若き一女子にして、身を殺して以て一藩の士庶の憂をのぞき、いまだ夢現つの內に迷ひ居る侯をして、幸ひに過ちなからしめし所以の者、引矢たばさみ戰場に譽れをのこすをのみ忠烈とはいはざらめや、以て此侯及び其藩のみにはあらざるなり、萬天下百侯を戒しめし其いさを又大ならずや、啻に婦人のみならず、亦以て公け人の鑑となすべき人ならん、大に感ありて玆に之を記す、拙なきかきぶり能く江湖の姫たちに見ゆるは得て能はざる事ならんも、阿藤につきての感の切なるに任せ、をもてを包みてかくはのぶるになん。

評　阿藤は稀有の烈婦なり、一命を犠牲にして藩主の禍を絶つ、身は刑場の露と消えたるも、その義烈の譽は永へに世に存す、作者其傳記を讀みて、いたく感嘆したるあまり、この文を成せるものか、人をして覺えず三讀せしむ、(記者)

丙賞

希望

東京　佐々木松野

希望は人に生命を與へ、絶望は人に死を與ふ、希望若し妾等にパンを贈るものならば、絶望は將さに毒藥を捧

ぐるものならん、希望は天國なり、絶望は陰府なり、惱めるとき、悲めるとき、病めるとき、貧しきとき、人に捨てられたる時、友に賣られたる時、最愛の人を失へる時、唯一の慰藉者、唯一の親友は彼女なり、希望てふ名を有する彼女なり。

思へ、妾等涙と共に苦き麵包を食し、涙の床に眠り難き夜半を明かす時、暗黑なる世を憤りて心やる方なく、はふり落る涙二の袖に熱き露を綴る時、忽ち未來てふ玉冠戴ける彼女は妾が側に來り、其温かき双手もて妾を抱き、嫣然たる笑を其薔薇色の頰に浮べて、徐ろに耳語して曰く、明日の事は明日思ひわづらへよ一日の苦勞は一日にて足れりと。

思へ、妾等さみしき病院の病床に臥して、昨日迄親しき人々と打ち戯れし事など想ひ浮べ、一盞の藥呑むに物憂き時、光明てふ花環携へて、妾が病室を訪づれ給ふは彼君なり、其黃金なす髮をそよがせ、其秋水の如き明眸に眞情こめて妾を勵まして曰く、

君よ、悲み給ふな妾茲にあり、

些かなる事にも心を傷め、思を惱め涙多き妾等を、神も憐れみ給ひてか、其愛に富める御手より希望てふ優しき女神降り給ひき。

史をくりひろげて、少しく偉人の勳、大事業の跡に意を留め給へ、暫時心を數百年の昔にひそめ給へ、

見給へコロムバスを、船を進むる幾週幾月、眼に觸るゝ物は只空しき水平線のみ、双眼鏡手にして艦橋に立てる彼は、空行く雲と白波凄まじき太洋を眺めたるのみ、一片の山をも見出す能はざりき、船員は其無効を信じて怒と不平に充されぬ、然れどもコロムブスは遂に其船首を西に廻らさゞりしものは、必ず新大陸を發見し得可しとの希望を有せしを以てなり、見給へ十字軍を夜は仰で凄然たる小亞細亞の星を眺めて明日の戰を思ひ、晝は炎熱やくが如き砂漠に輕裝駿馬のサラセン人と戈を交へ血を迸ばしらせ十年の長日月、熱と戰ひ、敵と爭ひしもの、只橄欖樹香ばしくベツレヘムの星清きエルサレムの聖地を踏まんとせし希望ありしを以てなり、見給へ南阿の杜國を、其領地世界に跨り、其商船旗五大洋に飜る、北歐の大英國を敵として毫も恐れず、國民を舉げて銃を執り劍を握りて健鬪するものは、正議は終局の勝利なり、との眞理を信じ必らす自由獨立の彩旗、椰子樹の陰に翩々たる可しとの希望を有すればな

り、渾身悉く創傷を受け鮮血淋漓たる裡、猶母國の萬歳を叫びて冥するもの希望の先明に照らさるゝを以てなり。

やめ給へ〳〵、御身の嘆聲を、捨て給へ〳〵、御身の絶望を、御身が心の苦痛を去り給へ、御身が双眼に滿つる涙を拭ひ給へ、今より新しき人となり給へ、仰げエデンの樂園は其所に開かれたり、望め、理想の黄金世界は其所に建てられたり、希望の光は天と地に照り輝けり、

評　作者が希望てふ趣味ある文材を選みたるは、思ひ付きよけれども、その理想未だ充分に描き盡されざるを憾む、文章は洋文直譯躰を摸倣せるが如き痕あり、さりながら、その論意の歸結即ち希望は人の生命なり、希望なくんば生命なき也さは、否定すべからざる言なり、文中に描める引例面白し。（記者）

秀逸（上）

悲觀の價値

陸奥　椿窓女史

奇しき哉、此天地人世、冥々の生命の現象こそ、飽かざる歡樂と傷ましき悲哀との影なりけれ。或者は其眩き光明の面に感激して、美に醉ひ快に耽り、離るまじき親愛の樂土として娯樂嘻笑し、生を盡して此世をば歌はんとし、或者は其陰なる暗黒の裡を直觀して絶對の悲哀を掬み、生命を呪ひ無情をいたみ、無下に厭忌すべきの穢土として、沈痛煩悶、泣いて現世をば脱離せんと望めり。嗚呼此水火相容れざる絶異の影を止むる心鏡の、将して孰れか能く、此不可思儀なる乾坤の蘊奥眞髓を寫したるものぞや。

目を擧けて悠々たる宇宙の大畫幅を見よ、深碧麗はしき九天の蓋ふ所、動かず際なき大地の載する所、散ては花と薫じ凝ては玉と潤ひ、流動しては千變萬化の象頃刻だも息む時なく、不動にしては千古も變らで幽玄なる神代の恣現せる森羅萬象、何ぞ夫れ美にして奇なるよ。仰げは高く廣がれる大空の幃帳燦爛として月懸り星斗宿る、望めば無邊の地極杳として際涯なく、渺たる滄海は汪洋として萬頃の白波を湛へ、茫たる陸地玆に泛ひて、或は透迤たる奇巒をえがき或は溶々たる流水を文る、玆に陽光澤々として春神の一度見舞あれば、花雲靉靆として天地に爛熳し、かくて四時は循環して或は雄壯、或は幽邃、或は清麗榮を競ふて變じ、其生命長へ

に盡くるなく、其活動永久に停止するなし。此力ある靈活こそ奇しき無限の生產力にして、此山野と此四海と、實にや無盡の寶庫たり、其戶口の鑰もなく其門扇の番人もなく一に吾人の收拾にまかされぬ、其耳目の欲求する所鼻口の嗜好する所天地何處にかこれなき。斯くも豐榮完美なる邸宅に安じ、而も神聖高妙象りかたき勢力こもれる愛情の裡に生活す、如何に快樂の限りなき哉。かくて智慧なる靈泉は混々として社會にそゝぎ、孜々として其大原理を尋ぬ、其眞理を開拓し其秘密を發見し其眞美を闡明して止まねば、世は刻一刻進化推移して步武勇しく、眞理は眞理を生み、智は智を闢き、高大の自然を利用し有ゆる萬物を使役し、斬新又奇異、駸々乎として高き理想に近きつゝあり。何ぞ雄壯偉觀なるよ、思ひ見る此世界、如何に望多き觀樂極りなき一大樂園にあらずや。

然れども又顧て其視線の方向をかへ更に其裡面を觀察せよ、何ぞ其表の光明赫々たるに似もやらで此裡のしかく黑闇々たる。榮盛の影は枯衰なり、滿盈の步みは虧て陷欲の谷にして、活動の底ぞ恐るべき狂爛の宿なりき。花は遂に久しく香はず、月は遂に長く圓かならず、順流將に逆濤を起すべく、是ぞ天地の動かぬ原則なりける。昨日春風の裡に樂しき世觀を歌ひしもの、今日は秋風齒殺の冷に驚き、朝に愛の懷に溫き夢を貪ぼりし者、夕は酷薄の傷に覺め、先刻嬉々として笑に耽りし者、今は愁傷の涙止めあへさらんとす。傷ましい哉幾多の人類、かゝる魔力ひそめる運命の濁流に浮つ沈みつ、其手掌の上に毬の如く玩弄せられ、或は起き或は臥れ、笑怒悲泣、くさ〲の劇を演じつゝある中に、空を走る「時」てふ車輪は無上の速力を以て早晚冷々たる死蔭に送らんとせり。我等が旅路の好侶伴として、憂愁を醫する慰藉者として、苦難を洗ふ別天地として片時も離れず、親み且慕ふ愛の家も却て罪惡の根元となり、憤怒怨恨爭鬪、忽にして平和の神は飛去り惡魔の住居となりはつるうれしさよ、稀には圓滿の美を保つとあらんも、無情のねたみ如何で之を離散放別せずしては止まん。智慧の手の賜つきせず、世の文明をかざり、一見眩惑すべく謳歌すべきも、あはれ物質上に於ける皮相の見なるを如何にせん。其生命の根たる精神界に至りては、恰も霧中のそれの如く、眞理の光明次第に殘光を收めんとし、迷路を辿りて知らざるあり、岐路に直進して

願ざるあり、其智の進む處は偏破、其能力の延ぶるところは奸邪の指揮にあり、道德は腐敗し僞善は公行し不義は滿延し、名狀しがたき修羅場を現しつゝあるならずや。此の如くにして其外觀進歩を裝ひつゝも、其內實時々破壞を意味しつゝあり、嗚呼實に歡樂と悲哀とは人世の二面なり、之を笑ふものは如何に、之を泣くものは如何に。

（三）

悲觀と樂觀と、其孰か正しく何れが邪なるやは今言はんとする所にはあらじ、只聊か悲觀の價値をのべんとはすなれ。之を聞く、古來最も幸多く快樂圓滿なる人の其眞情にさけびし述懷を、彼等其智よく世界を蓋ふに足り、其力よく山を拔くべく、有ゆる娛樂盡さずといふことなく、快なる歡喜味はずといふことなく、局外の觀察をもてすれば、如何に其得意快樂思ひ知らるべきを、奚ぞ圖らん、其圓滿は無味にして世事悉く空なる哉との呼びを聞かんとは、是れ如何なる故ぞ

夫れ人は無限に理想を追求して止まざるものなり。何をか理想といふ、希望なり、快樂なり、滿足なり、我等が前途に隱見して、眩き顏と美しき溫容を以て招くものこそ、これ理想の美神にあらずや、而も吾一歩進めば彼亦一歩進む、走れば又走る、經營辛じて追及し之を抱くと見れば、これ只敢果なき其幻影にして、其實躰また遠く去る、げに彼の天上の星の如く、又は空中の蜃氣樓の如く、光彩現然として其形のしるきも遂に其本躰をば捕捉する能はじ、徒に喘々焉として生を費するのみ、而も之を追求して止むなきは人生ならずや。これ何人も遂に現世に滿足するなき所以なりかし。血氣充盈銳氣欝勃として胸をみたすの時遙に理想の美影を認むる時は、如何に血おどり胸動くか、恰も勇める駒の如く、快心滿精、只直進これ一呼して之を捕へんとす、而も進めば荊棘なり幽谷なり斷崖なり、忽にして齟齬、忽にして蹉跌、玆に於てか逡巡し周章し、挫折し失望し自棄し、此もだへの中に限なき恨を殘して、果ては朝露と跡を等しうするならずや。嗚呼これ只空しき影に醉ひて空しくうめき苦しみ悲みて消滅に歸する者、何ぞ之を傷まずして得あらんや。

然れども、これ又只外觀の見のみ、此無情と此殘酷と、豈しかく空しく偶然にして無意味なる、故なき人生の障害物ならん、天地の大原理實に此裡にあり、人生の意義また實に玆に存す。かるが故に、人生るれば玆に使命

あり天職あり義務あり、之を行ひ之を成し之を果してこそ眞の人間たるなれ、徒に無情に泣き悲酸を啣ち、故なく人世を離散せんとするに至りては其價値如處にかあらん、例へ其觀念界の如何に眞美にして、其理想の高尙俗界を卓越せるものにもせよ、之を以て大に賞讃の辭を呈する能はざるなり、況や估息の私心に滿されて個々一身の不幸を嘆き、逆遇を痛み、不平怨恨天を怨み人を咎め憂悶依々として送るが如き言ふにも足らざるなり、其不幸の聲は私利に飢えたる悲鳴にして、卑劣の聲のみ不義の聲のみ、只其薄志を表はし弱行を鼓吹するもの、世に抵抗するの勇なく世に勝つの能なきによるなり。されど世斷の如きもの丶多きこそいと嘆はしけれ。

我言はんとする所は、大悟の悲觀なり、無我公明の悲觀なり、能く人生の意義を解し、飽くまで其使命をつとめ、苦(にがき)に勝ちて其天職を果し、萬難を排して其義務を終ゆるものをいふ、無情と不遇と苦難と災禍と彼元より甘受して憂となさず、その悲むところ泣く所實に他にありて存するなり。そも彼が眼底にうつれる世界は如何に。其心中造徹玲瓏として些の塵垢一點の墨をも宿さず、譬ふれば明鏡端然として天地に對するが如し、其鏡面よく其美を寫すと共に其醜をも多くうつせり、而して彼が銳眼其美の大をうたはんより其醜を悲みて萬斛の淚をそゝげり、其淚は熱し其血はもえたり、以て起ち以て進み、眞理の靈光をもて之を救濟せんとし、其醜を知る事多ければいよいよ之と親み且つとめて止まず、其辛苦と疲勞とにて、目は悲哀の露をおび容(かたち)沈痛のあはれを裝へども、而も安心立命して限りなき慰藉を失はず、あゝこれ眞に天地と生命を共にする者、人間としての價値如何で此上にかあらん。古來世に憔悴して悔なき聖人君子とは此謂の人をいふなり豈又他あらんや。

評　題して悲觀の價値といふ、されど、其文意殆んと要領を得ず、文中の前半を埋めたる宇宙小觀は冗長に失せり、さりながら、文章は修練せば、前途の望なきにしもあらず、努めよ、(記者)

秀逸

鱒淵てい

栃木縣河内郡富屋村郡區上篠井常次様方寄留　塚野恭子

世に孝子と呼ばれんこといと難し、況んや貞節をかね

るをや。栃木縣河内郡吉田村に、鱒淵ていといふ女ありけり、上野喜代藏の三女にして、生れながら心優しうしとやかなり 年十六の春、同村なる鱒淵廉兵衛の許に嫁ぎぬ。

鱒淵家はもとより生計貧しく、ことにていの嫁ぎたる折には、そが姑となるくには、數年の長き月日を病の床に過しゝため、日々醫藥の代のかさみたるすらあるを、舅義兵衛は七十一歳の高齢を重ね、とりいでゝ働かんこともえず、朝夕たつる烟もいと細やかなりき。ていはもとより孝貞の志あつき女なり、こを見てなとか心の奮ひ起らざるべき、いかでわが背の君と心を協せて、病みゐませる母上を一日も早う癒えしめ、傾きかゝれる鱒淵家をもとの如くかへさんと思へるなるべし。さればにや大方の世の少女子が、よき衣かひてよ小櫛もとめてよと、垂乳根にむつかる二八の妙齢をもて、朝は雞が音より早うおきいで、夜は星眠れども、猶孤燈の下針はこぶ手忙はしく、少しの閑あれば姑の心を慰め、其歡ぶを見て樂みとしき。さるからに夫廉兵衛との間もいと睦ましく、一男二女をさへまうけたれば、貧しき中にも子の愛にしかれて、世の春風はこゝにのみ吹くよと思はれけるも、思へば夢の世なりけり、一年廉兵衛は惡しき友にそゝのかされてより、心の駒のくるひそめけむ、ひたぶる酒と色とに耽り、兩親の憂ひ、妻子の愛情をも顧みで、日々花柳の巷にのみ足を通はし、ていが細き腕もて蓄へおける少しの黄金を奪とりてわか身一人の快樂をのみぞ極めける 兩親の嘆きは更にもいはず、ていがこの時の心やいかに悲しかりけむ、思ひたのみし夫はかゝるさまにて、家にはまた幼き子の飢に泣き、病みふせる姑の憂に沈むを見ては、定めて心もきゆる思ひしつらむ、されどもていは聊も夫をうらむる色だになく、ひたすらに神にいのり、佛にねがひて、早く夫の心をもとにかへさしめ玉へ、姑の病をいえしめ玉へと、夜もえ眠らでいそしみけるも、傾きかゝれる家のなどか一木をもてさゝへえらるべき、今ははや烟だもたてかぬる計りになりぬ、さればこを見る人の多くは、ていに向ひて、まだ女のさたさへ過ぎぬ身をもて、かゝる苦を見んよりは、寧ろ富みたる人に嫁ぎて、樂しき世をば送らずやなどいへば、妾は知らせ玉ふ如く、文字一つ學びしことなければ、世の理りはえ知らねども、妾が此家に嫁ぎたる日より身は夫にさゝげたるものとおもひ居り

侍り、さるを今夫があつき情のきえぬればとて、病みませる姑と、いとしき子とをおきて、いづこにかえ行かるべき、再びさることとはの玉ひぞと答へて、ひとり小さき胸に、家計挽回の策めぐらし丶こそ、いみじくも亦けなげなれ．姑はこをきゝて、ていに向ひ、あはれいかなる縁あればにや、親と呼ばれ子とよびたる許りに、わが爲にいましのかく苦むを見ては、餘命いくほどもなき身の、よし一度いえぬればとて何かせん、寧ろ早く死りて、いましが苦しみをも免れしめたしや、惜からぬ命長らへんとて針灸藥餌の料にあたら多くもあらぬ黄金を費さんは、いともやくなしなどうち佗ぶるを、ていは、さなの玉ひそ、人の妻となりて姑に事ふるは、女の務めとこそきゝ侍るを、さのみみ心を痛め玉はで、たゞ何事も安らかにおぼして、ひたすら養生の道にのみ御心かけさせ玉へなどいひ慰む．それより後は、ていは亂れし髪を結はんともせず、結びし帶をとかんともせず、晝はひねもす、夜はよもすがら、幾おり糸紡ぎて己れは三度の食を二度にへして、兩親のため身をくだきてぞつとめける、されば四隣の人はいふも更なり、夫雁兵衛も木石にあらざれば、いつしか妻の眞心の身にしみて、おのづと心疾しく、遂には感化せられて、家業に手をつくるまでに至りぬ、こを見たるくには、いかに心嬉しう思ひけむ、いとあつしき病をもうち忘れて、歡びの眉をぞひらきける、ていはこれに力をえて、いよ丶いそしみ勵みければ、光ある玉はこ丶にあらはれて時の縣知事にさへきこえつ、いたくていが孝貞の志あつきをめで、昨三十三年八月褒狀に黄金をそへて、其善行を表彰せられき。あはれ、德義の光きえうせて、文字學び書よみつる人の心も、名利の雲にとざ丶れて、日に月にあらぬ方にのみくだち行く今の世に當り、ていの如き目に一丁字もなき女の千辛萬苦、病める姑に仕へ、良人を助けて家道を治め、其志をかへざる二十五年の久しきに至る、げに人の龜鑑とこそいふべけれ。

親のため紡ぐや糸のひとすぢに　盡し丶人ぞ世のかゞみなる

評　孝と節とを全うせる婦女の美行を叙するに、綺麗の文詞を以てす、眞に愛讀するに足る、

秀逸

秋宵の想

伊勢宇治山田町中之切横地方　鎮東國子

天の河原は澄また澄、月船は清く靜かに浮游しぬ。都の吾友は何如にこの月を眺めつゝある、露冷けき羈客の窓下、かの白龍踞る如き雲の峯を越えて、なき渡る雁を故園に飛ぶかなど果敢なき想にや沈深しつゝあらむか。

互に訣別の袖袂を執へ、後年を契りたりしは、かの鎮守の杜蔭、彌高の麓、蓼月橋の袂一本松の蔭、忘れもならぬ九月五日の宵なりし。

吁、九月五日而も今月今宵、我長く忘る能はざるの夕なり。空は湍に曇り、利鎌のやうなる片破月影淡く、尾の上に生ふる大杉の枝にかゝり、その光こぼれて、おぼつかなげに影を蹈みつゝ悲腸泣語、蓼月橋袂に至れば、いづこまでとて名殘りは盡きじ、君よ君の心は我よく知れり、送らるゝだけつらきわが心察してよ、夜も痛う更けやしつらむに、これにて別れむ、君早や歸り玉へと、友ふるに、さらばこれにて別れむよ、寒さ肌に通る此の頃隨分氣を付け玉へ、玉章は必ずよ、さらばさきくあれ君よと、あとは咽びて言ひ得ざりき。友は父なる人と腕車をかりて去りぬ。其の双眼の裡、粟一杯を溢らせつゝ。

川の面吹き來る夜風はいとゞつめたき顔を撫で、後れ髪を拂ひ、千鳥さへ聲哀れ、とぎれとぎれに、瀬音の絶間にきこえて、一入に我が涙を繁からしむ。佇みてなほも友の後を見やれば、車の響は稍々に遠みゆき、松暇の間に灯影ちろめきつゝ、幽かになり行きつ、吾は思はず、君よと叫びて追はむとしき。折しもなき亘る千鳥は、吾前を横り、青き星一つ東より西に流れて、彼方の丘上に落ちき。あゝこの時の吾が想、抽かんとして能はざるなり。

そばの花白くさき亂れ、田舍の秋も早やくれなむとする比、白き蝶よ、黄なる蝶よと、走り廻りたりしは、かゝる秋なりし。月まろやかに蓼月橋をてらし、千鳥なく頃、遠き水車の廻る音をきゝつゝ、讃美歌を唱和したるもかゝる夜なりき。

あゝ蝶をくるしめ、水車に唱和するは、また能はざるなり。

友はわれをおきて、何處へか趣し、遠く東路に上り、都の

さる方に、笈と遊べりしなり。それより、九月三日の宵、鎌の細りたらむ如き月影を脊におびて、倶に輿にと、誓ひたりき。

さるを母君いつかきゝ知り玉ひて、懇ろに家庭を告げ、家情を述べて止み給ひぬ。吾は遂に友がり走りて、こを訴へし時、友もまたわれを止めき、共に契りし身よ、倶に誓ひし心ぞ、われは深くも怨み、また罵りぬ。あゝ君よ友よ、許し給へ。

蓼月橋の詰袂、川風冷く吹き、片破月は松の枝にかゝれり、今宵またわれこゝに來れり、面して千鳥をきゝぬ、松暇を見つめし、されど、されど車響はきこえざり、車灯は見えざり。

四年の後ぞも、君が錦衣綉服リボンを、かざして歸り來んとき、君が丸髷姿に接せんとき、われは君が婢となり、奴となりて、君に相親まむかな。

評　秋宵の景を借りて、想戀の情を紓ぶ、讀者をして同情を表せしむ、(記者)

秀逸

野外に梅を観る

播磨揖保郡誉田村　松本こいと

梅は月瀬難波津こそ名にはおへれ、道の程遠くして、えゆくべくもあらず、亀井戸杉田は花こそ哀れなれ、世の塵むさぐるしくして、なかなかに香もうすき心地す、まいてなまめきたる女の茶よ酒よと强ふるなど、花にはうしろめたくおぼゆ、さはいへ日頃閉ぢこめてのみ物學びせる身には、月花の心さへ知らで過ぎつるが常なるを、けふしもつとめて起き出で、冊子など、くりひろげつゝありしに、ふと窓のあたりとおぼしくえならぬ香のすれば、顔さし出して見まはすに、庭の梅か枝今を盛りと開きぬれば、うとうとしくてありし事のいと口惜しく、我にもあらで宿立ち出で、雲井遙かにうたふ雲雀の唱歌を聞きつゝ、道ゆく蝶を友として、そこはかとなくあくがれ行程に、ふくとしもなき東風のそよとかほるに、こゝろときめきて覺へずふりむけば、かなたの川の邊に消え殘りたる雪かとまがふばかり白く見ゆるあり、小走りして行きて見るに、一つの庵あり、梅の盛りは

やすぎにたる様なれど、袖にしむ香の今一入にしるく覺へて、ひら／＼と散る花びらの浮び流るゝ様、えもいひしらぬ景色の面白さに、水涯近く下りたちてながれ來るを掬ばんとすれば、內より媼出で來りてこなたへ入り玉へかしと云ひければ、物よりうれしくとなむよめる古の歌も、思ひ出されてゆかしともゆかし、柴の戶おしあけてまづ見渡すに、白くさては紅にさきみてる花の、いとしも淸らに日かげにかゞやきあひたる色に香に、げににるものなく、木立いと物さびてこち／＼しき枝に、なよびかなる花の咲き出でたるもいとおかし、こゝにまた木の間にうたふ鶯の、人く／＼となくもゆかしく、いみじうしづかに心ゆく木の下なれば、人もわれも皆のむしろにおりゐて、いひたうべなどするにいとゆかし。

あはれ、此花よ霜の夕雪のあしたをもたへしのぎかばかりゆかしき色香にさき匂ふは、大丈夫の如き操あるものぞかし、うべ菅原のおとゞがいたくめでさせたまひけるもと、そゞろに感じぬ、かくて日影やう／＼かたふき行きて、夕暮つぐる鐘の音かすかにきこえければ、東風ふかばとにはあらねど、おのれも別れ難き心を三十一文字にこめばやと

うつくしくさけるこの花今日來ずば
雪とやちらんあすのやま風

となんよみ、とある枝に結びつけ、媼に謝し一枝を乞ひ手折りて家つとにしてかへりぬ、あはれ花又情ありやなしや

評　婉麗

秀逸

春の夕

栃木縣宇都宮市　北山つね子

旗立つ山の夕暮は更にもいはず、春もまた中々に淋しきものなり。よし入相の鐘は響かずとも、山里の花は散らずとも。

雲雀のうるはしき歌も、うなゐ子が笛のうなりも、きこえずなりて、文の文字見えわかぬ迄になりし程、庭の飛石傳ひ、打開きて佇む柴の門にたれかゝる柳の糸、風靜まりて一筋も動かざるに、新月の影いたうやせて、掛りたる淋しさ、哀れ何にたとへん物もなきこの景色よ。日

ねもす麥生に草を刈りし賤は、ふし立つ麥のうれしくや、笑ひ興じ合ひつゝ、田圃の間を横切りて、菜の花陰にかへり消えたる。野邊よりかへる牧童が、浮世に何の苦もなげに、吹きつゝかへる麥笛の漸く遠くなりたる、何れか淋しからざらん。まして遊客去りし花の谷ぞこをや。あゝ靜けきかな春の夕暮。佐保姫は何が故にかくは春てふ名にもそはず、淋しき境をばつくり出し、問はまほしきは姫が心にぞありける。折柄あやつる羽袖もおぼつかなげに、何處ともなく飛び來し蝶一つ美妙の聲に歌ふらく、

戀とげてつばさ休めんいざさらば
　樂しきものは春の夕ぐれ

といひすてゝ、小き身を菫の花にかくしたるなつかしさ。紅雲は早西の山のはに色うすれて、田家の燈火のみ遠近に見渡さるゝに、何事ぞ天地も狂ふ音あらゝかに、鼓膜もやぶれと打ちとゞろく汽車の響、黒烟月を掠めて軒に櫻の花ぞこぼるゝ。

評 措辭流麗、

梅を見る

はる風

春立ちてより未だ程たゝねど今年は暖き故にや遠近の山々霞こめて日陰さへ長閑なる樣におぼゆれど今日の日曜もかにかくと送りぬれば來む休みには何方にもと思ひつゝひなの眺めの淋しけれど近きあたりそゞろありきせんとて出で立ちぬ華やかなる夕日かげ山の端近く靜かなる空にかすめる新月のかゝれるなどいひしらずおかしきに眺め入りつゝ歩むともなくたどり行く程に東風に送られて得ならぬ薫りの床しうおぼえぬればあなやとかたへを見やればおぼろなる林の中に淡紅梅のひと本けだかう差出でたる南の枝今を盛りと咲き匂ふ樣なか〳〵に何梅園など云ふあたりよりははるかにまさる眺めならむねぐらに急ぐ鳥の三つ四つ二つと群れつゝ飛び行く樣また畑作くる男の家路にかへり行くなどいとしずかなる春の夕ぐれよあわれ青葉にまじる花よりも珍らしくもなつかしう思ほえぬゆくりなく袖に薫りをうつしぬるげにますものもなき家づとにこそ

田舍の四季の眺

遠州小笠郡池新田村　篠田松枝

見渡せば廣々として限りなき野もせに香ふ梅の花まだ肌寒き田舍道往き來ふ人は不風流の田舍人金衣公子のみ花に訪づれ柳に囀ず里の子たちの學の庭咿唔の聲と相和し遠山小野に初霞靉き靑ばはづれの山櫻煙か花かはた雪か雲井の空に朝雲雀いとゞのどけき田舍家に軒端花咲く桃すもゝ黃金色なす菜圃に蝴蝶の舞あり實に天然の景色よき春もなごりなくすぎされば門田にそよぐ早稻靑々と涼しき蟬の聲團扇手にして沖の方水天

髣髴限りなく眞帆や片帆のいさり船東西に馳せ違ふ樣得も筆に盡されず涼しき小川其夕べ螢飛びかふ夕立の雨も一夕ながめあり秋は殊更山々も錦織なす立田姫虫の音繁き夕べには妻こふ鹿の鳴くこゑを友として月も其まゝ見らるべし冬のあしたの雪げしき賤がふせやも白白さ見渡かぎりしろ金の世と變じ木々の梢時ならぬ花を咲かして源々さ小川に殘し水車又一倍の眺めなる見なん田舍四季の景天然自然の風致をば拙なき筆には盡されずたゞあらましをかくなん田舍育ちのしづの女がみやこの人々にほこらんとす

春の野べ

信州下高井郡倭村大字柳澤小林春之助樣方にて　小林春子

春とし云へば、梅の花、櫻の花などをもて、こよなき眺めさのみ思ふ人こそなかしけれと、云ふ者もあるぞかし。げに春日の眺め程さま〳〵に、樂しく面白きことはあらずかし、霞みたなびく野べ見れば、つゝじたんぽゝ花すみれ、色香たづれて蝴蝶まひ、雲雀は住なるゝ綠の床にあくがれて、そこともわかぬ雲間にしば啼くも、いとゞ人の心の空になる業なるに。黄金ささきつゞく菜の花の何所をはてとも見えず、そが間には麥のいみじく青きが、きは立ちて交れる、佐保姫の織りて給ひし錦かとおぼゆ、里の童の肩の程より下の花にかくれたるもをかしく、追はれ行くこさい中のよりよりふつゝかに泣くこえさへおかしくて、あるはそよ吹く風に、赤きもすそをひろがへして、小女子の若菜つむも雄々しくも又ゆかしげに、長閑かなる春の野べにこそ。

若菜つむ小女の袖に風見えて
長閑にかほる春の野べ哉

田植を見て

俣野わさ子

晴れまだになき五月雨をたのみて賤女等は赤きたすきなど花やかによそをひして門田に折立ちて歌うたひなどしてたのしげに早苗取るあるはおきなの早苗をあやしきものに入れて運びなどする之は此雨のはれぬ中にさぬるゝもいさはでものするなりけりかゝるは之れ來ん秋のゆたかにみのらん事を一すぢに思ひてぞかしたなへもの作るはいさもむつかしき業なりさはきけど早苗さる樣は苦しげにも見えず歌うたひなどしていさおもしろげになん



和歌

天賞

春季雜題

牛込區若松町　安田かず子

温泉の宿暖かに日のさして
　湯煙白う桃の花さく

地賞

春曙

山口縣吉敷郡山口町伊勢小路吉富方　井上武乃

咲にほふ花の梢にぬる蝶の
　夢をのこして夜は明にけり

入賞

故郷春

赤坂區丹後町七一、中眞一方　中はる子

母いますわかふるさとの春いかに
　蝶よ羽かせ行きて見て來ん

入賞

桃

神戸市永澤町二丁目　水越秀子

牛を飼ふわらやも見えてにひばりの
　山はたつゞき桃咲きにけり

秀逸

水邊梅

播磨國龍岡町一八三　高森なみ子

舟窓のいつれによらん川きしの
　右もひたりも梅さきにけり

海上霞

淺草區馬道町八丁目三番地　清原治子

漕き出てゝ沖より見れはともつなを

解きしあたりも霞なりけり

春季雜題　岡山市野田屋町　加藤經子

くならふとたはむれうみて櫻ちる
木の下かけにねむる犬かな

胡蝶　相州小田原萬年町二丁目　鈴木たま子

すがのねの長き春日をうつくしき
花にやどりてあそふてふかな

月前柳　下野國小山町　田村恒子

まとのとにしたりやなきのかけさして
月おもしろき春のよ半かな

春色　小石川區江戸町一番地　古谷東世子

夕煙柳のかけに立つ見えて
桃の林に日はおちんとす

待花　但馬國城崎郡三椒村　河野貞子

櫻ばなにほふさかりはみじかきを
花と待つほどの久しかるらん

春季雜題　信州松本町東之丁　小岩井佐吾子

荒れ果てし花の屋敷の跡とへば
一本櫻たゞ春の風

春季雜題　石川縣金澤市油車六三　永山豊子

おもしろくまりつき遊ぶをとめ子に
ましらぬみとはいつなりにけむ

梅　信濃國松本中の町　石川れん子

髻華に挿し襟に飾りて見はやさな
脊子かたまひし紅梅の花

春雨　信州下高井郡倭町大字柳澤、小林方　小林春子

青柳に舟はつなぎてわたし守
かへる夕べに春雨の降る

佳調

◉餘寒月　伊勢　宮尾せん女

春きても尙風寒し久方の
月のかつらに雪やふらん

◉春風　長崎　山下つた子

去年の春いとし妹の失せしより
春風うらむ我心かな

◉春野散策　千葉 郡司文子

ゆく鳥のこゝの春ならぬこの春を
　翼ある身のたのしかるらん

◉浦春月　麻布 河村鉄子

まかちとる音もきこえて大淀の
　浦見のとけき春の夜の月

◉つばめ　備前 難波久亘子

人こゝろうつりゆく世にうれしくも
　かたらすきなくつはくらめかな

◉春月思昔　下野 沼部林子

うかれつる昔の春もおもひ出てゝ
　影なつかしき夕月夜かな

◉春夜看月　丹後 林文子

さほひめのかすみの袖につゝまれて
　花にかゝれる春の夜の月

◉餘寒　下野 春子

はら〳〵と霰こぼれて咲く梅の
　花の香さむしきさらきの空

◉名所霞　仙臺 高山文子

てつしてもみまほしきかなふてのやま
　うすゝみいろにかすむけしきは

◉園中鶯　安房 雪葉女史

尋ねてもきかまほしきを我國に
　朝夕きなく鶯のこゑ

◉雲雀　三重 東瀬きぬ子

菫さく春野の床をおこかれて
　何をひばりの空になくらむ

◉梅見にまかりて　本郷 大澤てふ子

凪かをる礒わにつゝく細ながれ
　しほ尻見せて梅の花ちる

◉春野　赤坂 下村けい子

のどかにも笑ふ聲こそきこゆなれ
　かすむ春野にわかなつむらん

◉春旅　日向 北郷あき

花鳥に心うかれて行く旅は
　道遠しとも思はさりけり

◉鶯告春　廣島　市川とみ子

梅か枝に鳴く鶯のこゑきけは
　春來にけらし賤が伏屋も

◉月前梅　金澤　村上機子

靜なるなかめにもあるか春の夜の
　月をあるじの梅の花その

◉梅花　渡島　山内千歲

なつかしきたよりにそへて梅のはな
　都の友のおくりこしけり

◉田家早春　熱田　内田とく子

雪消えぬ山田か里のやふかけて
　春來にけらしうぐひすのなく

◉夕雲雀　下野　田邨かず子

夕やけのそらにひばりはみえなから
　あしもとくらし野邊のほそ道

◉梅花を見て亡友を思ふ　松山　越智信子

ひと枝はをりてたむけんなき友の
　殊にめでにしはなとおもへば

◉春の駒　伊勢　鈴木けい子

ふりすてゝゆかれさりけりのるこまの
　すゝな花さく野邊の細みち

◉山家聞鶯　岐阜　山田雲子

世を捨てつ世に捨てられつ此の山に
　わか身知りてか鶯の鳴く

◉月前梅　大阪　石澤よし子

梅か枝をおぼろに照らす月かけは
　花かあらぬかつきの匂ふか

◉田家梅　伊勢　岸田ちゑ子

藁火焚くけふりの末も匂ふまて
　賤が軒端の梅さきにけり

◉立春霞　武藏　保谷華香

春立といひしはかりに武藏野や
　秩父の山はかすみそめけり

◉旅春雨　攝津　中島倭文子

我やどの花の梢やいかならん

思ひなやます旅の春雨

◉早春　群馬　原澤義子

春されは消ぬへきものを赤城山
　峯の白雲ふりまさるなり

◉夜梅　三重　鹿兒島富士子

いつくとも花咲里はわかねとも
　朧月夜に梅かをるなり

◉池邊柳　伊勢　吉竹はな女

青柳の糸の緑や添ひぬらん
　池の鏡のかけのくもれる

◉故鄉花　日向　伊東直子

故鄉の母のなさけの玉章に
　そへて送りし花の一ひら

◉春のはしめ山を見て　神奈川　澁谷さい子

あふり山みねのしら雪きえなくに
　春をよそひてかすみたなひく

◉春　信州　瀬黑きく子

前の山うしろの谷もおしなべて
　かすみのはじをかけ藏しけり

◉春季雜詠　石川　永矢いく子

夕月のかけおもしろしあをやきの
　みどりのかみにとてなしつゝ

◉春日讀書　長野　きん子

梓弓はるの日永きこのわろも
　文よむ業になほそせかるゝ

◉待花　讃岐　黑川しづ子

人皆の心にかゝる糸櫻
　ひきしりよせて咲せてしかな

◉うくひす　伊賀　服部かつみ子

うめさける山田の里は春めきて
　かきねつゝきにうくひすのなく

◉春のうた　靜岡　佐塚秀世子

土橋ゆけば小さきはつきはてぬ
　向ひの岡にすみれ咲くみゆ

◉春詠十首の内　岩國　小河内綾子

散る花を拾ひつ捨てつ笑ましけに
梅の下道ゆくうなゐかな

◉元日　相模　石田よし
人は皆神の心になり果てゝ
千代をことほく今日にもあるかな

◉柳　俣野わさ子
我が門の老木の柳春くれば
若かへるらんみとりそふなり

◉初春　安房　山口じん子
ふりつもる雪の中にも梅の花
さきいづるみればあはれなりけり

◉春川　下野　はるさ女
ま菰生ふる利根の川波のどかにて
水上遠く霞むころかな

◉里かすみ　山口　草賀きくの
打ちむれてよめなつむ子のこゑのみを
のこしてかすむはるの山里

◉春夜月　長門　草賀はな子
ふく風の音もかすみてみねの
松かけくらし春の夜の月

◉曉鶯　千葉　小川ため子
我宿の竹にねくらやしめつらん
有明の月に鶯のなく

◉岡霞　佐賀　植松あい子
雨晴れて朝日てりそふ岡のへの
木立おほろに霞む春かな

◉はるのあかつきかたの月をみて　金澤市　森川敏子
もゝとりはまたおきいてす山のまの
花の木のまにつきはしらめと

◉春田家　淺草　大羽里子
みゆひをはさくらかさしてくらす日を
あらすきかへす小田の賤の男

◉春季雜題　松本　小岩井佐吾子
籾をひく音もきこえて桃赤き
藁屋の軒に雞のなく

◎春　詠　　宮城　島田林子

此まゝに此花かけを繪となして
　その繪の中の人とならはや

◎春　月　　本郷　桐谷藤子

櫻花さきて匂へる世の中を
　いかに見るらむ春の夜の月

◎野　邊　　神田　佐々木慶子

鳥うたひ花さきみてる春の野に
　毛糸あみつゝうたつくらむか

◎海上かすみ　　名古屋　林千代子

青海原八重の汐風いつのまに
　春のかすみと立ちかはりけむ

◎春　川　　越後　芳野はな子

うなゐ子がすさびに流す笹舟の
　ゆく／＼靜けき春の里川

◎春　風　　名古屋　淺野梅子

富士のねはかすみの裡におほはれて
　風のとかなり三保の松原

『つほ菫』の選につきて

佐々木信綱

明治の世に至りて、文學藝術の大に發達せし事は、今さらに云はんも更なり。小説の如き、繪畫の如き、はた彫刻音樂の如き、之を明治以前と比較するに、殆ど霄壤の差ありと謂ひつべし。さるを我國歌の有様は如何にぞ。平凡陳腐なる思想を、繰返し／＼歌へるが故に、試に明治以前の歌と、明治以後のとを並べ見るといへど、其想も其體も些の甲乙無く、何れを何れとも別ち難きにあらずや。是れ數年前より歌の道に志ある者の、新派を起して、自ら新しき歌を詠みいでし所以なりけり。如何にして歌を新らしくするぞと云ふに、想を新ならしむるは論なく、調をも詞をも新にし、又時としては古き調をも復活せしむる事ぞ必要なるべき。次に題を撰ぶ事はた必要なるべし。古き題目も新らしき思想もて詠みゆかば、新らしき歌は出來べけれど、狹き詩材もて綴り、あるはありふれたる物を配合して、詠み出でむには、いかで新らしき

歌のいでくべき。故につぼ菫の募集歌には、殊更に課題を設けず、ひろく春季雜詠とし、諸孃の如何なる名作かあらんと待ち居たりしに、こたび其あつまりたる歌を見て、選者はいたく案外に思ひぬ。そはあつまりたる歌の大方は、皆古き題を古き想もて綴られし故なりけり。さて總ての歌を、甲乙丙秀逸、それにつぐもの、又佳調と別ちつれど、選歌の中に、際だちてすぐれたるものなかりしはあかぬ限なり。さばれ、こは選者が、諸孃をして歌の道に進むの早からしめんことを思ふが爲の苦言なれば、是より後の應募者は、よく心して、一回〳〵に陳腐なる道を棄てゝ、新らしき林に入りたゝれん事を望む。又こは歌よむ方に關したる事にはあらねど、今より後の應募者は、字躰をさだかにしるして、半紙半枚、若しくば端書に歌一首、はた二首を認めらるべし。固より道の爲め、歌の多きは選者の喜ぶ所なれど、一枚の端書又半紙半面の中に、十餘首を細かに認められ、あるは亂りがはしく記されたるは、選びもてゆくにあまたの時間を費す事なれば、以後はかゝらんものは凡てとりすつべし。其心しておこせられん事を。

水雞　　男爵夫人　末松生子

ほと〳〵と叩く水雞のこゑはして
人はとひこぬやまのしたいほ

梅雨のころ

梅雨はあとなくはれてみわたしの
よものむら山みどりしたゝる

霧ふかきあした

うちむかふ山もさ霧につゝまれて
しばしかぐらき庭のおもかな

泉水遶家

夏しらぬこの山ざとのすゞしさは
のきばをめぐる庭のやりみづ

新躰詩

天賞　小野川

信州松本町東之丁　小岩井佐吾子

日ことにぬるむ川水の、ゆるく小草を洗ふとき、
裳裾かゝげて岸のべに、根芹あさりし跡はこゝ、
やゝあたゝかき春風の、かろく袂をはらふとき、
清げき手よりさゝ舟を、はなち流しゝ跡はこゝ、
摘みにし根芹籠にして、家路をさして歸るとき、
我等はいつも連立ちて、こゝなる橋を渡りにき、
影もさやけき小野川の、清き流れにうつるとき、
ゑめる我等が面わには、如何なる色か宿りけん、
あゝ草萠ゆる川のべに、遊びゝ野路の暮るゝ迄、
謳ひき野邊の樂しさを、わが世の春のたけぬ裡、
あゝ其夢もさめ果てゝ、身は徒らにとしふりぬ、
小がはの水よ語れかし、昔の野邊のたのしさを、

評　着想新らしとはいひがたけれど、靜に流るゝ水に對ひて過し樂しさをおもひ、今のうつゝをかこつさま、見るが如し。こたひ應募の中にては、秀逸のはしめにおく價あるべし。日毎にぬるむも日にぬるみゆくとあり。改めつ。又放ち流しゝの次に昔のまゝに殘るなり。如何なる色かの次に水の流れにきかまほし。昔の野邊のの次にいさ物語れわ我きかんとありしを、すつとはぶき去りつ。さて小川の水よ心あらばとありしを、小川の水よ語れかしと改めつるなり。

地賞　夕の歌

仙臺市東九番丁畨四十一、戸田方　佐藤志げ子

乳房ふくめる稚兒のごと靜かに眠る大空も、
いつか淺紫にしみゆきて夕日かすかに落ゆけば、
打渡したる山々に炭燒く煙長うして、

けぶる彼方の森蔭に立てる社のかげ淡く。
爪あげやめて家に入る少さきうなゐの手に逐はれ、
羽ばたきしつゝ鶏は背戸なる高き巣にとまる。
一日を花にあこがれて菫の床にぬる蝶や、
小鳥は歌の音を止めて樂しきねやにつれ歸る。
夕炊の仕度はや終へてせこが歸りを門にいで、
待つ少女子の黒髪をなぶる夕風なよくして。
菜の花がくれ夕づゝの影をふみつゝ鍬かたげ、
若者急ぐ森の邊にうれしき燈火の影も見ゆ。
半ば破れし椽の上罪なきことを語りつゝ、
親子同胞まどゐして酌む手つくりの酒いかに。
やがて垂れたる夜の神の神秘の幕に天地も、
覆はれゆけば里川の堤つたひに牧童が。
調ぶる笛の音もたえて流にうつる月清く、
かすむ大空靜かにて眠るか里は音もなし。

評　一日を花に夕炊の支度やがて垂れたる等の三節作者の再考を待つ

入賞

少女懷舊

山口縣周防國吉敷郡山口町伊勢小路吉富方
井上武乃事　紫水女史

往來の人のかげたえて、雨にくれゆく川のべに、
暫し居て見つ立て見つ、少女は一人かこちけり」
しづの麻環くりかへし、くり返せどもゆく水の、
かへらぬ世とは思へ共、猶忍ばるゝむかしかな」
をよびを折て數ふれば、早も四年となりにけり、
卯の花くだしふる雨に、一夜にまさる川のみづ」
あゝ汲もしつ飲もしつ、なつかしかりし川水に、
このかは水に住家さへ、奪はれんとは思ひきや」
あゝ梅の實の熟をのみ、待ち喜びしさみだれに、

その五月雨に住家さへ、　失はむとは思ひきや」
底つ岩根にこもり居て、　時をし得ればある金の、
つちをもゆする過神も、　これを思へば物ならず」
むらがる雲を城となし、　篠つくあめを兵となし、
轟きわたるいかづちも、　これを思へば數ならず」
あゝ戀しむかしのいへ、　はゝ上姉上まとゐして、
昔やいまのものがたり、　かたり明しゝ夜も有き」
春はのきばのすみれ草、　秋は川べのをみなへし、
かたみに摘て思ふどち、　まゝ事したる日も有き」
あゝ哀れ花となづけて、　美衣着せつかしづきつ、
抱いてさへ寢し人形は、　いかなる浪に溺れけむ」
産土まつり有りしとき、　叔母が手づから裁縫て、
給ひし衣はわたつみの、　御衣とや今はなりつ蘭」
やよなさけなき川水よ、　いな情あるかはみづよ、
もしも花子に行あはゞ、　我にありかを語れかし」
なれ又沖にいづるとき、　かの海神のそでにだに、
もしもふれなば立歸り、　我にゆくへを告よかし」
かこち〳〵て只ひとり、　たゝずむ程に日は暮て、
眞珠のごとき一しづく、　少女が襟をうるほせり」
ねぐらにかへるむら鳥、　なきゆく方をながむれば、
なかばくづれし築山の、　かたへにのこるいと柳、
昔ながらにあめもふり、　昔乍らに露もこぼるる」

評　くだ〳〵しき辭つゞひ今一きはさおほゆ

秀逸

百合花

信濃北安曇郡大町　河原まさ子

かしは千歳の齢あり　されど仆れて薪となる
百合は一夜の花の露　あすの命も志りかたし
されど園生に咲きいでゝ　あはれと人にめでらるゝ
限りある世に生れてし　我は學ばん百合の花

評　いひさま猶あるへけれさ簡にして意をつくせるをもて撰ひつ

秀逸

山中孤村

東京　濱荻女史

おどろがもとの通ひ路は、
つきなむとしてまた開け、
危橋幾たび谷こえて、
雲よりいでゝ雲に入る、

咽ぶ溪韻斷崖の、
松吹く風とよびかはし、
奏づる樂の音はとほく、
天つ少女や誘ひこむ、

はつか二つの茅の檐、
いまもむかしの民ぞ住む、
青草萠えて春を知り、
紅葉亂れて秋を知る、

山中たつきやすらけて、
生涯の夢まどかなり、
うき世はなれしこの民を、
自然の人とわれはいふ、

秀逸

白露

東京市神田區南神保町五番地鈴木テツ方　古澤えふ子

下駄の音さむく月冴えて　柳さびしき廣小路
終りの馬車の影遠く　半ばゝとざす町の家。
天の川原に流れ行く　按摩の笛の一聲は
湯島のかたに跡たえて　今はた夢か夜の空。
窓のともしび心あてに　戀の辻占召しませと
少女哀れや幼なきに　戀ならずともいざ買はむ
かぼそき影を地に蹈みつ　恨むか聲の末長う
忍ぶが岡に露落ちて　星も涙の眼を拭ふ。

おやにく多き髪の毛の　つめたき風にほつるゝよ
元結にかゆる紙こより　むすぶは心ばかりかは。
長屋の窓に秋たけて　山茶花散りし夕べより
いたづき重きたらちねは　光も薄き床のうち。
藥のしろと賣りあるく　その辻占の紙よりも
薄き情のつれなさを　翠すむ軒に知りしとや。
結ぶ島田もくづほれて　窓にかゝれるうたひ女の
戀か情か知らなくに　妹に似けるとばかりを。
怪しむなかれ少女子よ　あした我世の白露の
雲井に高き森よりも　野の草花になど茂き。
さらば急きね鐘のなる　夢ゆめさめしたらちねは
やれし障子の月の影　吾子の歸りをまつらむに。

秀逸

待春

東京神田區淡路町二丁目九　青山きん子

歌へかくひすはるの曲、　野山の草木枯れはてゝ、
木枯寒むく吹きすさみ、　かけひの水も凍るてふ、
あはれ悲しき冬の日に、　閉ぢ込められし此世をば、
春の景色になきかへせ。

吹けよ吹け／＼春の風、　曇り勝ちなる空の色、
北風寒むく吹きすさみ、　共にふりくる雪あられ、
下界は霜に被はれし、　哀れ悲しき冬の日を、
東より來て吹きはらへ。

ゆるく流れよ春の川、　岸邊の柳えだまばら、
魚も氷にとざされて、　深淵の底に身をもそむ、
哀れ淋しき枯野をば、　細く寒けく曲り行く、
冬の景色を流し去れ。

幕引きそめよ春霞、　野山は雪に埋もられて、
木間に巣くふ百鳥や、　野山に走しる獸の、
哀れ淋しく餌をあさる、　なく聲悽きありさまを、
早や幕下げてとぢこめよ。

秀逸

夕の懐ひ

長崎市大浦梅香崎女學校　松川さだえ

野邊の白菊色あせて。
　蝴蝶の心ひかずとも。
香をだにせめて手枕の。
　君が夢路に通へかし。

吹く風白くもゝ草の。
　ほゝゑむ春に逢はぬ身は。
心細くもさゝがにの。
　糸一すぢを頼みにて。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢より淡はき星一つ。
　聲なき空にまたゝきて。
つまをや戀ふる旅鳥。
　還り行く手の雲塞むく。

秀逸

浮世

下總國印旛郡成田町　石井仲子

君は浮世をのがれ出で。深山を分けて入るといふ。
我れは浮世を打ちすてゝ。塵の巷に出でんとす。
何れまことの浮世なるらん。

新躰詩の選につきて

佐々木信綱

のどけき春の大空を我世と爲して、舞ひ亂るゝ糸遊に曳かれつゝも、霞こめたる野邊に杖をひけば、種々の若草は皆一つ緑にぞ萠え出たる。この若草よ、今は只一つ色と見ゆれど、秋さりくれば、萩に女郎花に薄に、皆とりどりなる花を着け、とりどりなる色に出でゝ、野邊の錦を織り爲すべし。今『つぼ菫』に寄せられし新躰詩を見るに、恰も春の若草と同じく、何れも一つ色にて、際だちたる特色は無けれど、諸嬢が研究に

研究を重ねて絶えず進まれなば、秋の野の萩女郎花、はた桔梗刈萱など、各とり〴〵なる花を開きて、とり〴〵なる色を競ふに至らん。すべて詩形の長短を問はず、内容に重きをおかんか、はた形式に重きをおかんかと云ふに、そは人々によりてさま〴〵なるべけれど、要するに、内容と形式との二つは、須く相俟たざれば其當を得たりとは云ふ可らず。さるを、あるは詞遣ひを朦朧にして、乏しき内容を優かに見せんとするものあり。あるは措辭に心を用ひずして、若しくは其法を知らずして、意を用ひ想を練ること深からざるが故に、幾度讀みても其意を悟りがたきものあり。こは現今の新躰詩の通弊といひつべくや。諸嬢の作の、其想は朦朧にても神秘にても、其措辭は明瞭ならん事を望む。猶新躰詩につきての希望、其他記すべき事あまたあれど、筆硯多忙の折からとて、さまではえいはず。更に稿を替へて記さん折あるべし。終に一言すべきは、次に掲ぐる新躰詩なり。

いつもやさしき姉君の　など此ごろは物とへど
いらふる聲も物うげに　沈み勝にておはすらむ
いとゞ親しき彼の君の　來ませしころは朝夕に
もらし給ひしほゝゑみを　又見るすべは非ざるか
よし彼の君は來まさずも　外にも友は多かるを
わが姉君はいつの日か　元の笑顔にかへるらむ

可憐の作、幼き妹の心をかりて、よく其情を寫し出でたれば、あるは秀逸に選ばんかとも思ひつゝ、集まりたる數百篇をつぎ〳〵閲しもてゆきしに、いぶかしきかな、辭句全く同じき新躰詩今一葉ありき。始のは千葉縣香取郡某女史の作にて、姉のゑがほと題し、後なるは神戸市某女史の作にて、姉君のおもわと題したり。詩歌の暗合はいにしへよりまゝある習ひにてみだりに之を剽竊とは定めがたけれど、そは十七字もしくは三十一字のものならばこそあれ、三節の長さにして、只題の異なるのみにて、其他は一字だに變りたる所なきは、あながちに暗合とも定めがたかるべし。斯道に志す諸嬢よ。漫りに人の口吻を眞似る

事なく、はた自らの心に問ひてよからずと思ふ事を
なし給ふ事なかれ。

佳調

夜の嵐　　かた糸

月のひかりも星かげも、　暗のとばりの奥ふかく、
かくろひはてし大空は、　下界の人ともろともに、
深き眠りにつきしとき、　嵐のかみは夜叉どもを、
呼び近付ていひけらく、　日ごろ年ごろ人の子の、
なす業をしも我見れば、　憤ほろしきさまなりや、
さはさりながら強き此、　かひなも神のみ前には、
力にぶりてふるはれず、　胸にもえたつ我が怒り、
はらすに期なく黒雲の、　高殿ふかくたれこめて、
もだえ／＼し月や日は、　つもり／＼て今霄しも、
天使の目てふ星もなし、　げによき時ぞ我が時ぞ、
ふたゝびあらん夜ならず、　いでや者共荒れあれよ、
垣をば破り木をば折れ、　ゆゝしめかして誇りかに、
立てし高殿ふきたふせ、　そは穢れたる黃金にて、
作りなしたる物ぞかし、　利に集ふなるねぢけ人
位におごるをことびの、　安き眠りをよびさまし、
驚きさわぐさまを見て、　ドッと一時に笑へかし、
あらしの神の云がまゝ、　荒びに荒さぶ夜叉共の
おめき叫びてもの凄く、　下界の夜はふけわたる。

評　看想かの露伴氏の五重の塔に全く同じきは口をしからずや

妹の嘆き　　東京　四婦

都へ旅は近けれど、
むぐらさびしき秋の日を、
よべまがつみの手にひかれ、
消えにし君を戀ひしたふ、
あゝ情ある妹かな。
星か、つぶらのその眼さへ、
いまは春見る月のごと、
涙のかすみおぼろにて、
のぞみの光うすらぎぬ、
せめては好む菊の花、
それに笑がほを見てましと、
一日山べをかけめぐる。

やがても得たる一もとも、
人のかひなに堪へかねて、
あしたも待たずしぼむかな。

花に笑まひしかんばせも、
花と共々うつろひぬ。
われ氣もくるひふるふ手に、
あたふる水のかひもなや、
花はうなじをあゝたれぬ。

その名も「露」よ妹は、
花を命の置きどころ。
それさへ今はおとろへに、
ゆうべも待たずなりにけり。
あゝ花守る神なきか。
あゝ妹守る神なきか。

ぬむれる兒

そる風

静かにねむる幼兒よ　なれの心は白ら糸か
かたほにゑみを浮ぶるは　如何なる夢か結ぶらん
ばらの蕾にさも似たる　其の唇開くとき
母とさけぶかあなうれし　双の紅葉の其手もて
めでいつくらむ人形は　いかにうれしと思ふらん
さはさりながら汝が身を　生し立てゝし其折は
世に名をあげて父母の　あつき恵に報へかし
速く學び舍に通ひつゝ　人の道をば習へよや
わが兒の末をおぼしては　しがたらちねは朝夕に
むね安からずおはすなり　ねむれぬ夜半もおはすなり
されどねむれる幼兒は　母の憂ひも父の苦も
知らで夢路をたどり行く　あふ罪なきは幼兒よ

花菫

仙臺　志げ子

明星淡きあさぼらけ、　戀しきまゝに唯一人、
草ふみわけて春の野を、　彼方此方と逍遙へば
去年に變らで花菫、　色うるはしく匂へども、
袂つらねてもろ共に、　つみし人や今いづこ。
「あはれやさしの花菫、　いとなつかしき我妹を、
かくしやしけん汝が床に、」とへど答は有ずして、
たゞ朝風の吹がまゝ、　かうべふる也右左、
いとも清けく濁りなき、　露の涙をこぼしつゝ、

花の宮居

鳥取　三浦とし子

ミューズの神の手ずすみを、下界の上に求めんと、
美にあこかるゝキュピットの、衣や紫色こゆく、
袂は錦ふりかへり、御輦空をかけり來て、
舞ひ出で給ふ此の朝、唄ひ給はん此の宮居、
雲のみかよふ奥山の、宮居は妙玉を秘めたりや、
尾の上の松の有明の、色こそ見ゆれ花はなほ、
神の息吹に包まれて、のこんの月の影淡し、
あるか無きかの糸遊に、舞ふや胡蝶の袖かろく、
霞のはてにかすかなる、山ぞ女神の山ならめ、
山のかひよりほの見ゆる、白雪こそは美の神の、
みけしの裾にあらざるか、うるはしき哉錦繪の、
繪の具の樣の色どりは、いかに妙なる畫工も、
繪の具をすていうなねつき、鬼神泣かす詩人も、
うつすに玉の文字なくて、筆をばなげていぬるらむ、
あゝ美はしの此の宮居、春の司の神とも、
思ふは宮の神なれや、口紅奇しき女の神と、
結び給はん此の神の、いかにあえかにをわすらむ」

わかれ

塚野恭子

盡きぬをしさにイみて、心のそこはかたれども、
しのびもあへぬわが涙、ながれてしげき思かな。
若草もゆるはるの日は、はなにつゞきて花遠き、
野邊の景色にあくがれて、共に歌をばうたひしを。
蟲のねしげき秋の夜半、さやけくてらす月影に、
樂しみ合ひし歌がるた、今年もかくと思ひしを。
みずや追ふ蝶ゆく蝶の、心ある身はこゝろなく、
分つにたえじあゝ君よ、分ちがたしや四つの袖。
夕川邊にたゞずみて、かゞやく星は仰ぐとも、
君ゆきぬればあすよりは、何をたよりの我身ぞや。
世にも幸なき我身をば、せめて哀れと思しなば、
學びの業はしげかるも、度々ふみはよせよかし。
きみよ首をあげみずや、松のこずゑの二つほし、
二人がうへをその一つ、心ありげにながれゆく、

花やどり

熊本　間宮あさ

霞も匂ふみよしのゝ、吉野の奥の岩まくら、
花の木陰に一よさの、旅寐の夢をむさぼれば。

月の光はおぼろにて、　静かに通ふ峰のかぜ、
谷まに咽せぶ水の音、　共にうき世の外ならし。
暫し浮世をよそにして、　心も清くまどろめば、
花も夢をや守りけむ、　月もなさけをもらしけむ。
衣のそでに散る花に、　こち吹く風もかをりつゝ、
はら／＼おつる車には、　空行く月もやどるなり。

絶望の曲

富山　藏本つた

おぼろにかすむ櫻花、　その影なれや我姿。
世の荒波に掉さして、　運命の神の持てあそび、
身に災難のつきまとふ、　愁悲このふたつ。
神の射ります強き矢の、　痛手わなゝく此胸に、
湧くや血汐の紅も、　しぼるにつらき思ひ哉。
この身にまとふこの心、　たへたる思わきいでゝ、
かよわき小さき胸の内、　色さま／＼に亂りけり。

＊　＊　＊　＊　＊

さけれ希望のまたゝきに、　闇をしるべの燈火や、
心の駒にむちわてゝ、　うき坂路を辿りけり。
すぎし年月かゝなへば、　二つかひなの十の指、
僅にあまる二とせの、　つらき跡をも忍びけり。
春の陽炎ゆめのまに、　つきぬ恨のかさなりて、
病ごとのくるしみに、　辛くつなぎしこの命。
世のさが行手いや遠く、　光ほそりてけはしきに、
亦も枕に眠む身の、　せん術しらに涙落つ。
希望の光消へうせて、　空しきからのこの身あり。

春の思ひ

東京　樋口あさ子

春の光りのうらゝけく、　若菜もえづる我心、
花と胡蝶のきみとわれ、　若菜の花にあらね共、
我れは胡蝶と身をなして、　狂ふ心をきみしるや。
やさしき花にたはふれて、　舞ひつゞかれつ花の上に、
うれしき春の夢を見て、　醉ふては又もひら／＼と、
二度三度五ッ度と、　狂ふ心をきみしるや。
春はほゝえむ梅か枝に、　谷の戸出でゝ耻かしく、
未だ春なれぬ黄鳥の、　やさしき花にさゝやきつ、
うれしき事と思ふなる、　鳥の心を知るや君。

梅の花がさ春のきて、　綠の羽根のうぐひすも、
ゆめ靜かなる春の日の、　調べも高くうたひつゝ、
色も香に醉ひて去りかぬる、　鳥の心を知るや君。

少女が歌

栃木　北山つね子

知るや君
春の花くもちりゆけど、　香はいたづらに殘らねど、
霞の色は消えゆけど、　空の光にさそはれて、
つゝむにあまる綠葉の、　かげいと淸き水の心を。

聞くや君
天にやさしき佐保姬が、　心の琴の音は絶えて、
そこに姿をかくせども、　末だうらわかき織姬の、
天の河原のほし近く、　その宵々に淸む櫻の音を。

見るや君
ゆかしき風のあとゝめて、　朝のつゆのちる玉に、
うれしや野邊の草花を、　靜にわけてゆく鳥の、
翼もなつのかげうけて、　自然のあやに醉へる姿を。

幼兒

近江　齋藤すぎ子

あなうつくしの幼兒よ　情あたゝかき垂乳根の
母の乳房をふくみつゝ、　安けにねむるなが顏に
暗の夜たどる世の人の　道のしるべを示すべき
美妙の星はやどるなり
坊やのものと母の乳を　隱すやさしき汝が手には
玉散るつるぎぬきつれて　御國に刃向ふ奴はらを
うちなびかさん力あり
夜な夜なともす行燈の　火影を守る汝が目には
長く隱れて世に知れぬ　神のひめごと探るべき
奇しき光ぞ見ゆるなる
あなうつくしの幼兒よ　未來の海はひろくして
望はふかしあなあはれ　神より受けし汝が心
誰かはめてん汝が容貌

眼白鳥

佐賀市　中島ひで子

綠の錦かゞやかせ、　かざる兩つの羽はそも、
いともやさしく淸き眼の、　眶にしろき圈はそも、
愛の女神の人の世に、　「天降り給ひしみ姿が」
さえづる聲のやさしさは、　くゝ〳〵ならす羽たゝきは
愛の女神の人の世を、　「歌ひ給へるみうたかも」
樂しからずや汝はしも、

春は色濃き紅の、
椿の花を尋ね來て、
自然の母の乳を吸ひつ、
しきり鳴く音のうるはしや、」
燒くるばかりの夏の日は、
緑したゝる山奥の、
清き流に涼しくも、
平和の園を飛び遊ぶ、」
秋は梢に熟れ殘る、
色美しき木ざらしの、
柿つぶしつゝさゝやぐは、
秋のみ神に祈るかも、」
冬は降り積む白雪を、
少さき足もてはらひつゝ、
窓の外近き梅の木に、
春待ち顔にしきりなく、』
あゝ春夏のへだてなく、
あゝ秋冬の定めなく、
自然の園を友として、
汚れがちなる人の世の、
塵にもそまで樂しげに、
暮らす目白の愛らしや。

春

和歌山　藤田進子

池のみぎはの芝生なる、
一もとさくら咲そろひ、
にほひめでたき花蔭に、
しづかに眠る少女子の、
罪なきすがたしほらしく、
夢や何處をたどるらん、

小川の岸のつゝみには、
すみれたんぽゝ咲亂れ、
色香あらそふ花の上に、
春風かろく羽うちして、
たはむれ遊ぶてふ二つ、
夢のこゝろのいとけさよ。

曇りもはてぬ春の夜の、
かすめる月の朧ろなる、
光りに匂ふさくらはな、
影もかすかに庭のおも、
夜目にはそれと見え分ず、
そことしもなく迷ひ入り、
散り布く花をふみわけつ、
木立の下にたゝずめば、
夜風にそよと花の香の、
香ひこぼるゝ花びらは、
行方もしれず二つ三つ、
たゞよひまよふ影淡し。

あか井の水

神戸　細永りつ子

無明の闇の底よりぞ　清き姿にわきいづる
あかゐの水よ聞ねかし　無限のうれひある人の
心をくみてあかとなり　亡たま祭る花の枝の
露の命もいましにて　獨さびしくありそふる
たゞ亡たまをやすめんと　思ふ心のひたぶるに
法の御庭のあかくみて　命の水と語ともに
たむくるならんおくつきを　戀しとたつね祭りする
あか井の水よこの庭に　かゝる清けき姿にて
あつき心の人のため
たえずいでこよとこしへに
折ふし移り變りてし　哀れを誘ふ秋の夜に
くまなくすめる月見れば　あか井の水よそのおもに
よな〳〵うつき宿をかし
汝のあたりに夜たゞなく　露を命の虫の音も
とめてうるほを弁立てる　悲しき種のおくつきを

闇のうち

佐賀　小林みつ子

あはれ此身の病みにしは、淋しき去年の秋なりき、
はやひとゝせを此闇に、ひとり過せし月日こそ、
世を轉寐にくらぶれば、夢見るひまといふべけれ
病はいよゝ重りきて、ねざめ冷き木まくらの、
きはに戀しき父と母、燈火くらくみとりする、
かゝるねざめの折々に、都の君を思へ共、
うたて幸なき忍び戀、あはれ幸なき此身かな。



赤蛙

泉鏡花

上

人の妻なりしよき君の世を避けて隱れ住みたまふよし、いつも閉したるまゝなれば隱家の門內を見たるものなかるべし。

門を潛れば古井戸あり。井げた、雨に朽ちて苔蒸したるに、ひしと蓋して其上を盤石もて壓へたり。こゝより見附の式臺までは半町ばかり距りたらむ。右には竹垣を結ひたり。左に小さき藁小屋ありて爐のふちに髮白き老夫一人、ゆたか胡座かきて柴折りくべつ。小屋の傍に一本の樫の大樹ありて、爐の煙薄く其梢を籠めたり。

樹蔭の開戸を潛り入れば、芝の園見ゆ。梅五六本ありて地の色すべて赤し。

井戸また一つあり。老木の楓井の頭を臨みてあたりを蔽へるなかより、弓形の石の橋あらはれて、筑山の岩にかゝれるが、水は涸れて芝はこゝにも生ひたり。

椽側少し見えて朱塗の欄干に二葉三葉いま散かゝる。

夏は白百合の丈高きが咲く柴折戸の際に、枇杷を植ゑたり。この枝折戸の外は見渡す限り、萩、薄の原とも見む。桔梗、萱苅、女郎花ひろ〳〵と咲き亂れつ。

月もこゝよりやのぼるべき。庭のはてなる森のなかには、風の音常に絶えず、恰も海鳴を聞くが如し。

中庭とこの裏庭とを隔てたる一帶の土塀につきて、左の方にめぐり行けば路四五丁があひだ竹藪なり。通り越せば樫と藁小屋とならびたる、其側にはあらぬ處一方の庭の入口に至りつべし。

眞闇く土臭き藪をもれて奧の方に人のものいふが幽かに聞ゆ。

「もうそんなに深い處へ入らつしつては恐うございますよ。私は、もう、恐いんですもの、あれさ。」

といふ〳〵きこえずなりぬ。折から花やかなる夕陽影の大樫の梢より斜に小屋の屋根を照らしたるに、曇りもせで大粒の雨まばらにばら〳〵と降り出でつ。ひとしきりさつと竹藪に音たてしが、時の間に晴れて茜さしたり。同時に、

「きいッ。」

と魂消る聲して竹の葉一齊に烈しくゆれつ。眞蒼になりたる腰元一人、取亂して藪の中より轉び出でたり。老夫は爐にいぶる煙のなかより窪みたる眼を光らして透し見つゝ。

「何うさした。これ何とさした。」

と怪しみ問ふ時、まだ十才ばかりなる美少年の續きて藪より走り出でつ。

「何う遊ばしたの。私や、ほんとに、まあ、およし遊ばせと申すのに、ずん〳〵奥へ入らつしやつて、はあ〳〵思つてる處へ、だしぬけに、わつとおつしやるんだもの。」

と胸をなでゝ身のふるひ止まらず。

美少年も息をつきぬ。

「あの中にお前、深い〳〵谷があつて、水が少し流れて居るの。其處にねお前、あれ。」

と井の上を蓋したる盤石を見遣りていひぬ。

「あれよりか少し小さな、赤い色の蛙が居てね、背中の筋が黄金の色をして光つて居たもの。」

老夫は眉を顰めて頷きたり。

「もう一足踏込むで見さらしやれ、危い夫こそだ。」

下

里の壯佼の一人は不意に頬を刺されて、苦と叫びて背後に退きたり。門内よりうち出す栗のいが霰の如く五七人群るなかへばら〳〵と亂れかゝるに、鷲破や天狗の暴るゝわと、あわてふためき、ひとなだれにどつと遁げぬ。

山中の森にハヤ日の入りつ。秋の日の暮れかゝる隱家の門前の廣場には、松の葉一葉の塵もあらで、うつくしく箒目立ちたり。

あたりは寂として もの靜かに鳥の鳴く聲も聞こえず、人けはひもせで、なほ栗のいがの縱橫に門內より飛び出でゝ、門前の此處彼處に落ち留まりては、二ツ三ツ、三ツ二ツ、おなじ處にかさなり合ふより、遠くそれて見えずなるあり、地の上にころげるあり、樹の枝に挿まるあり、入交ひ飛交ひて凡そ五分時ばかりの あひだ、絕ゆる隙あらざりき。

やゝありて其やみたる時、黃昏るゝ門の黑き色の、それかとも見えわかぬに、美しく少年の顏ほのかに白くあらはれて外の方をすかし見つ。

そのうつくしき顏を一目見るより、壯俠の一人のわなゝく〳〵門柱にひたと身を忍びて、密かに樣子をうかゞひたるが、わッと絕叫してばた〳〵と遁げ出せり。

不意の物音に彼の見驚きたる面色なりしが、こけつまろびつまろびゆく後姿を見送りて、につこと笑みぬ。



時に遙かなる森のなかより途絕え〳〵洩れ聞こゆる蹄の音せり。

少年は隱れ去りつ。

しばしありて盛裝せる武官の、從者一人も從へで徐ろに手綱を繰り、暮れ行く森を背にして、この門近く進み寄りぬ。

さやかに輝くは勳章なるべし。駒の進む每にきら〳〵と搖れて胸に鳴れり。

やがて近く寄りて大杉の下に駒の頭を乘り入れたる梢に颯と風立ちて雨の名殘雹の如くばら〳〵と亂れ懸りつ。

前足を空に斷ける。一聲高くじりゝと後にすさりたることも、

「叱!」とばかり乘りしづめて、又たしづ〳〵と打つて進め門近くに來りて、ふと其手綱を控ふるトタンにいがぐりの一個空を飛びて頰のあたりを掠めたるを、よけざまに右手に掴みて屹と見て微笑みつ。

駒はまた嘶けり。

將軍はひらりと身を輕くおりたちつ。たて髪を撫でゝ乘り捨てゝ、佩劍の柄を握るとゝもに、靴音高く近寄りて、ひたと門の扉に耳をあてゝ顔をば少し傾むけぬ。

裡は寂として音なかりき。

一足退きて、もと來し方なる山の端を仰ぎしが、再び耳をおしあてぬ。

靜かさは、さきにも增したり。

將軍はまた傍に寄りて身をすさらしつゝ、仰ぎて門の屋根を視めたるが、更に耳をつけてきゝぬ。

同時にけたゝましき足音の一人ならず二人、三人、鳥の立つらむ氣勢して、母屋の方に遠ざかりたる。其のちは葉の落つる音だもあらず。

暗くなる時、火の影ぱつと立ちて將軍のうつくしき髯、其光にうつりしが、既に馬上にありて、葉卷の煙四邊を籠めつ。蹄の音木精に響きて悠々と引返し、森を潜りて見えずなりぬ。

月の光梢をすべりて、落散りたる栗の毬ひとつ〳〵に影さしたり。　（完）

をさながたり

佐々木雪子

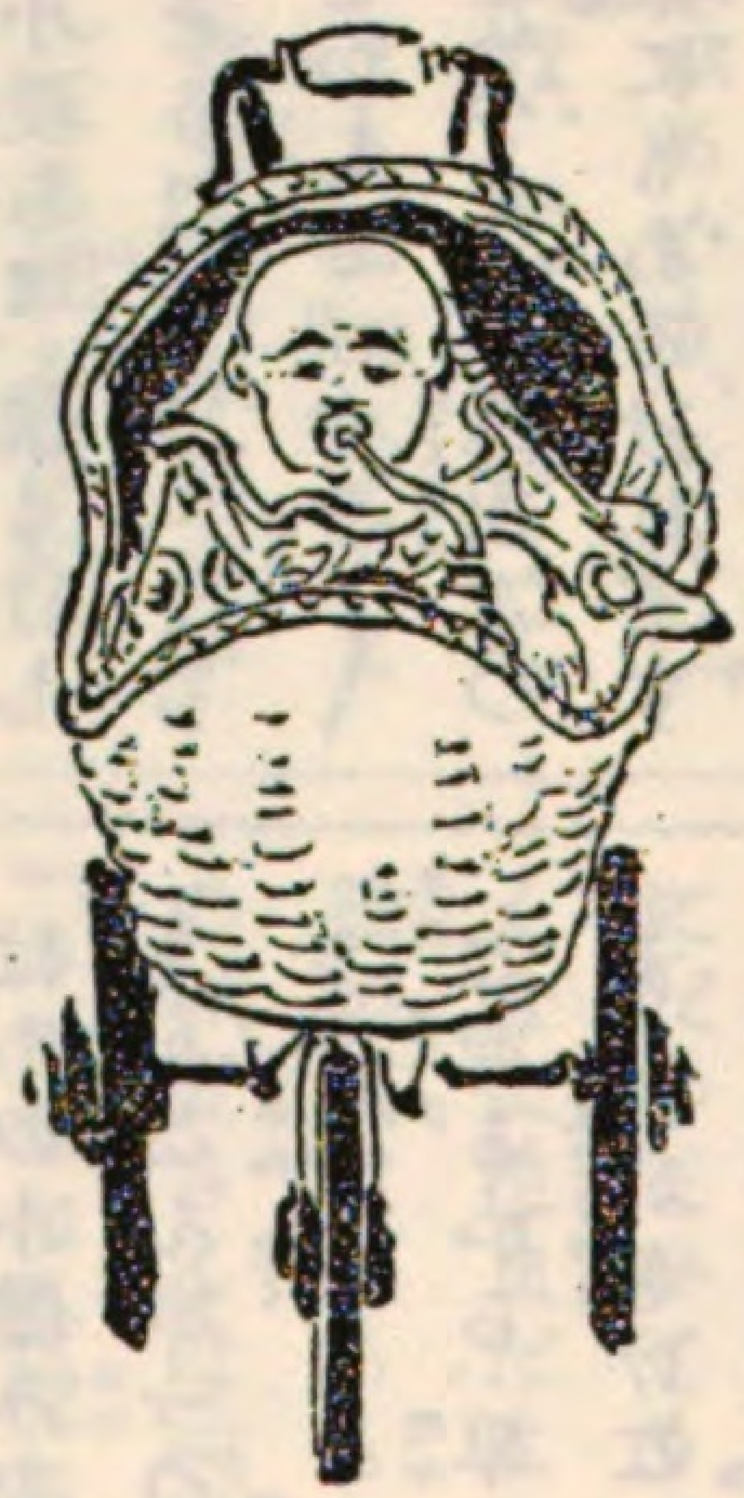
（一）風の神

時は正月の三日の晝頃、地上では、都も市も町も村も、門並に國旗がひるがへつて、松や竹が立つて居て、老人も子供もみんなの胸に、つゝみきれぬ嬉しさは其顔にあらはれて居ます。天上では、風の神や、雪の神や、雲の神や、霰の神や、雨の神が集會をして、地上の樂しい樣を見おろしてをります。誰にも親切な日の神は、此三四日前に、『折角世界の子供たちが樂しみにして居るお正月だから、雨の神や雪の神や霰の神は、こゝ十日ばかりさしひかへて居るやうに』と、お命令がありましたので、大そうしよげて、中にも雪の神は、『なんと皆さんわしや霰の神などは、こゝ二三ケ月がかき入れ時だのに、かうしてじつとして居るのは實につまらぬ、雨の神さんなどは、一年中いつでもふれる上に、梅雨だとか時雨だとかいうて、長く降れるから我慢も出來るだらう

が』と、愚痴をこぼしてゐます。雲の神は慰め顔に、『しかし、いやがられて降るのも氣がきかんではないか、僕などもお日さんの詞に從つて、此頃は毎日青い着物を着て居るが、毎朝〳〵下界の方で、子供たちが、やあ今日も空が青いといふて、喜んで居るのをきくと氣持がよい』と互に話をしてゐると、風の神は何を思ひ出したか、諸君失敬、鳥渡出かけるからと、皆に挨拶をして、ぶいと出かけました。やがて半町も前から、ぶう〳〵といふ先ぶれをして我家へ歸つてまゐりました。『こらこら開つぱなして皆んなは何處へいつたのだ。天上でも隨分不景色な此頃、物騒千萬な』と、ぶつ〳〵口小言をきいて居りますところへ、『お父さん〳〵』と子供がかけて這入つてまゐりました。『お母さんはどこにいつたのだ』と、少々かんしやくまぎれにあたりつけますと、にこ〳〵しながら、『井戸端でお洗濯をしてゐるよ。お父さん〳〵』と肩などへとりつきますのを見ては、ついつりこまれて嬉しくなり、『今日は急に考へついて、おまへを遠い下界へつれてゆかうと思ふが、おまへもだん〳〵大きくなつたが、其かはりに、おれは年をとつてしまつたから、少しづゝは何か敎へておきたいと、色々見せてもやるし、話を聞かせてもやらうから、早く仕度をするがいゝ』、丁度裏口から歸つて來た母親も、樣子をきけば、さても急な我子の初旅に、どうか道中で怪我のない樣にと心配をしながら、小ぶりな風袋のほころびなんぞをよくつくろつて、しつかりと背中にしよはせなどします。すぐ歸るつもり故どこへもしらせずにすぐ其儘出立をしました。袋の紐をゆるめたりしめたりして、けはしい山々も隨分と越えて。いよ〳〵音に聞えた天の川へさしかゝりました。折から水がみち〳〵て、橋はなし、もとより舟とてもありません。まづ此難所さへこせば、あとはらく〳〵と面白い下界へゆかれるからと、さすがは風の神、わが子によく〳〵秘術をのみこませて、自分の大きな袋へ小袋をつなぎあはせまして、『さあよいか、後から楫をとり〳〵吹くから、おまへは息の出來るだけ吹きだせ』といひきかせました。さしもの水の音も消されるばかりの聲を立てゝ、見る

まに渡つてしまひました頃は、大分もう日もくれかゝりました。一日路のところも、足弱の者をつれてははかどらず。其晩は早くから川のそばへ泊つて、翌日はまだ暗いうちに出かけました。昨日のこはさに引きかへて、『やあお父さん、あそこに横町の雲の伯父さんが來てゐるね』『なるほど横町の伯父さんが、昨日の集會に本家のばかり來て居たつけ』『お父さん〳〵、ずうと下の方で、へんな聲を出してるのは何だい』『あれか、あれはとんびといふての。向ふに見えるのが日本國の天子樣の皇居で、こちらの森が上野で、動物園といふ所には恐しい獸がゐるから、うつかり行くなよ』などいひきかせます。只もう驚くものばかりで、わけも分からずに、くッついて下りて參りました。そろ〳〵そこらの木の葉なんぞをばら〳〵と飛ばして、道ぐさをしてゐますと、『さあ〳〵手つだうんだ、そら此糸を引つぱりな、放すなよ、もつと〳〵、これ〳〵向ふ見ずにかけておつこちるな』と、聲をかけながら自分は幾つかの糸をそこいらぢうに綾つゝてゐます。小供心に、『お父さん、あれはうちの棚の上につんであるのね』。『そう〳〵、あれは紙鳶と云つて、お正月に下界の子供たちがあげて遊ぶのだが、あんまり我儘をいふ子のは、こらしめの爲めにさらつて來てしまふのだ』と云ひ聞かせた。風の子は下を見ると、幾つも〳〵、お父さんが糸を引はるたんびに、ぶん〳〵とうなり聲の面白い事、大勢よつて奇麗な着物を着て、うら山しいな。あのかぶつてるのは何だろうと、お父さんに聞けば、『あれは陸軍の帽で、士官と同じ風をしてゐるのだ。勇ましくて可愛らしいものだ』と話して聞かせます。『あゝ〳〵羨しい。あそこにいつて一所に遊びたい。どうかお父さんに引ばってもらつて、繪のついたあの紙鳶を揚て見たいな、ねお父さん』と、頻りにねだりました。『上から行つても、言葉は別らず、いぢめられるよりは、お父さんのそばで見物してゐる』と、とめられゝば猶更ゆきたくて、『そんならば一ぺん見てきてもよいでせう』と、とう〳〵一人やつて來ました。お庭だの往來だので追羽根をしてゐた少女子たちは、『あら〳〵羽根が飛んぢまつて、いやな風だね』と

つぶやく聲もかまはずに、ずん／＼近よつてまゐりますと、『オ、寒い／＼、君、外套をきて來やうか』と、男の子たちも紙鳶をたぐりおろして、ちり／＼ばら／＼にかけ出しました。『折角おりて來たものを、ね遊んでおくんな、一緒に遊んでおくれ』といくらさけんでも、別りつこはありません。そこに立つたまゝ、志く／＼泣いてゐますと、方々の子供たちは、どうしても家にじつとしてはゐられずに、みんな又集まつて來ました。が、驚くまい事か、氣味わるがつてそばによりつくものはありません。『何だ／＼、化物だ、ぶち殺せ』と石をほうる子もあり。長い棒をふりまはす子もあり。わい／＼と騒ぎ立てます。今は一生懸命になつて、命から／＼上つてまゐりましたが、悔しさに泣く／＼わけを訴へますと、風の神は、そうであらうとは志りながらも、あまりな仕方と腹を立てゝ、何の生意氣な、よしおれがかたきを取つてやるとおこり出した勢の凄まじさ。何もかもふきとばし吹仆して、大嵐ともなりそうに見えました。下界の天文學者はわけを探り得て大きに驚き、又天上の日の神もその事をきゝつけて大層心配をし、なだめるやら佗るやらで、そんならばお正月中はいふまでもなく、いつも仲よく遊んでくれ。おれもよく風を吹かして、紙鳶でも何でもよくあげてやらうからとの約束で、下界の子供たちも風の子と心やすくしました。それから後は、惣躰の子供の事を、風の子／＼と呼ぶやうになりましたとさ。



（二）ざくろの實

眼鏡ごしに笑ひかけながら、何事をか話してをるお祖父様のまはりに、今日の日曜で、そこ／＼の親類から遊びに來た三四人の子供は、今の話を、さも得心したらしい顔つきで、いづれもあどけない目をぱちつかせて、お祖父さんのするとほりに、口をゆがめたり眉を動かしたりしてゐまする。中には鼻をかむことも忘れて、もしお祖母さんであつたらとつくに叱られてゐそうな子

もありました。思ひ〳〵に樣々な質問を出しますけれどどれも能くわかるやうに面白く說き明して聞かせまするに『でもお祖父さん、僕あんまり奇態だと思ひます』といきなりさけび出しました。『ねお祖父さん、僕のお庭に柘榴の木がありましよう。いつかつから甘くなつたら上けましようつて約束をした、ほら赤い大きいのね』『むゝもう甘くなつたかの』『あまいの〳〵大へん甘いの』と、此問答を聞いてゐる小供らは、僕もほしいといひたげなれど、さすがに誰もそうはいはず、まぢ〳〵もじ〳〵と我を謹しむ樣子のをかしさ。やう〳〵豊ちやんといふ子が『どんなに赤くなつたの、澤山なつてるの、見たい事よ』そばから又『家にもあるけれどすつぱいから、君のとこの甘いのを見せてくれ』といひ出しました。『いけないや、もうちぎつちまつたもの。何處やらの小僧が先日二つくつゝいてたいゝやつを、塀から取つて逃げちまつたの』『いけないやつだね。君々、棹で叩いてやればよかつた』『ぶつよりかお灸すゑれば一番いゝ』と小さい聲がしましたので、思はすお祖父さんも吹出しました。『それから今朝また雨が降つてるのに、雀がいくつも來て、チユ〳〵つてやかましいから、ゑ、何羽つて僕かんじようしなかつたもの、それからいくら追つても又來て仕樣がないので、勝やがはしごで登つてちぎつてしまつたの、母さんが早く取つてしまうほうがいゝつて』『そうか、もう食べられるなら取つたがよい』『勝やはね、大變おこつてましたけど、僕、雀はあの小僧みたいにわりい鳥だと思へないな、ちぎつたりなんか一つもしやあしないものを、ね君、『あゝそうだ君、僕よく知つてるよ』『何を』『きつと小僧がみんな取るから、早くおちぎりつて、雀が敎へに來たのだけど、口がきけないから、やつはりチユ〳〵つてないてたんだろう』『お祖父さんそうですか』『そうですか』一同で念をおせば、『これは時坊のいふたのに違ひあるまいの』と答へまする折から、藪の中でチユ〳〵とどうやら雀もきいて居たらしく囀づりました。

（三）送別會の朝

今朝はいつになく早くから窓の戸をあけて、いつものやうにかわゆらしい聲で唱歌をうたふのが聞え初めたのに、お日樣も驚かされて、松の枝を急いで立のぼり、それは〳〵美くしい光を見せて、誠に樂しい空と爲りましたれば、藪の中の雀の子も、母にねだつて、あちこち友達を呼び集めて、戰のまねごとをする樣に、高い木にとまるかと思へば、青い空の中を飛びめぐり、それは面白そうに遊ぶ中には、又やさしい鳥は、かはり〳〵にお窓のそばにお相手ながら來て、チユ〳〵と囀つてをりました。やがて、さもつまらなそうな聲で、『ね玉ちやん、いやだね、一郎さんはもうどうしても明日はいつちもうんだもの、僕はほんとうにいやだ』。『あら兄さんびつくらしたは、ほんとよ、お悦ちやんも一所に行くんだつて、僕おばさんはあまんまりだと思ふわ。そんな遠い所に二人をつれていつちまはなくつてもいゝのに。此間私がお悦ちやんの袖につかまつて泣いたら、お悦ちやんも泣きだすんだもの。そしてお母樣に叱られたわ』。『僕はいやだなあ。困つたなあ。一郎さんが一番いゝお友達だのに。學校のおさらひももう出來やしない』『私だつて一人ぼつちで遊ぶのは、淋しくつてかなしい事よ。築山でまゝ事も出來ないんだもの。そうしていやなお舟に幾日も乘るんだつてね』『兄さんどうしたの。だまつて下ばかし向いてさ』。『仕方がないや。僕は男だもの。何泣くのんか。馬にだつて自轉車にだつてひとりでいくらだつて乘れらあ。級で一番くせに泣虫だなんてみんながいふと、僕は悔しいから、誰が笑はれるもんか。玉ちやんは何をおくり物にするの』『兄さんは』『僕、僕はあれさ、石盤だの海軍の本さ』『さう私はお悦ちやんの好なちよ紙とね、姉樣の針箱にしたのだから、今きりぬきで物さしやお鋏をこしらへてるのよ。でもちつとも私には出來ないから、こまるのよ』『いゝね、僕も何か自分でこしらへたものやらうや』『兄さん私お手傳してあげましよう、ね』晝近くなる頃には、乳母か手すきがけになり、小さいお座敷のお掃除を始め、お床の間から違棚のあたり、錦の袋につゝまれたお琴や、お人形箱のおかざりつけまで念を入れて、め

づらしい繪草紙もあれば、大きな手毬お手玉も、望むがまゝの遊び道具はならべられました。こゝはお玉樣のおへやなれど、お兄樣の墨だらけの御座敷には、何分にもお客さまが出來ず。終にけふの小宴會はこゝと極り、其眞中には丸形の脊の低いお机をすゑ、花の縫のあるきれをかけて、やはり赤い色のお座蒲團が、四つか五つばかりよい程に敷き並べられますと共に、かわゆらしいお湯さしおきうすの傍には、ビスケットに栗まんじう、紫色の露のたれそうな葡萄に、葉のついたまゝのお庭の柿の實、ほかにも澤山色々とお菓子を盆にもりあげられてあります。先程から兄妹は何度となくこゝを出たり入たりして、餘り騷ぎますので、丁度今お母樣にすこしお小言をきいてをります所に、遙か玄關の方に車の音が勇しく聞えますと、最早お廊下の所で、『あら兄さん、黃ろい蝶々がお先きふれに飛んで來ましたよ』といふお玉ちやんの聲が聞えました。さも嬉しそうに。

（四）雪の日

いつぞやから雪を催ほしてをつた空は、今日こそ思ひいれ降つて〳〵、どこでもこゝでも何でもかでも、眞白に埋めて仕舞はねば胸がをさまらぬともいふあんばいに、降るは〳〵、おまけに風まで誘ひ出して、手あたり次第、風のふくまゝつもつてゆきます。今日は朝からお父さまもお家においで故、お八つには暖かいお汁粉をこしらへてさし上げ、女たちにもやるとの事『そんなら、おかちんを燒いてお手傳しましょう』と、編みかけた毛糸を下におけば、母樣は、『どうか焦さぬやうに』と笑ひながらおつしやる折から、『只今田舍のぢいやの所から送つてまゐりました』と、さし出す箱を開かせて見れば、さても珍らしい、枝なりの金柑やら、彼地名産のほし柿の小さいのは、丁度棗としか思はれぬ程、それに蜜柑などいろ〳〵取りまぜて、一杯につめてあるを、『まあぢいやが、ほんとに何時も相かはらず賴もしい、老僕である』と、母樣がお喜び遊ばすのをきゝながら、はした女が今しもとりわけてをるを、一つ〳〵に手にとりわけて、『此一つの中には、どれほどぢいやの心が籠つてを

る事か、おろそかには食べられませぬ、』と果は又ぢいやの昔話となりました。『ね、母樣、ほんに蜜柑で思ひ出しましたが、照やもおきゝよ。ね、たれしも幼稚園から小學校にあがりたての面白さは、急にゑらい學者にでもなつたやうな心持がして、習字や讀本は、なか／＼たやすいものではないけれど、お家でよく母樣がさらふて下されば、いつも人の知らない字をよく讀んで、點數は大方一二番で、なほ張合になつて、風のふく日も雨のふる時もやすまず、喜んで通ふに、いつもぢいやが車にのせて送り迎へをしてくれたがね、ある日の事、丁度今日の樣に大雪でね、學校の窓のガラスに花かなんぞが散りかゝるやうなけしきが、あんまり奇麗で、誰しも早くお家の庭が見たくて、鐘のなるのが待ち遠しくて』『ほんに罪が御座いませんね』『やう／＼出て來る玄關の廊下で、みんながあんまり騷ぐから、何だと思つて見たらね、そこいらじう泥だらけにして大變なのさ』『どう致しましてね』『それがね、家の犬がみんなの袂なんかくはへやうとするもんだから、みんながこわがつたり汚ながつたりして、迯る騷ぎでね。お母さん、あのメルは困りましたね』『けれど獵のお供は大層よく勤めて、父樣のお氣に入りでありましたよ』『まあ奥樣、今のジョンも中々かわゆう御座います事、昨晩お使に出ました時、いきも歸りもちやんとついて來るのでございますもの』『まあお聞きよ、照はジョン氣違ひだとみんながいふよ。メルもね、面白い犬だつたがね、其時はほんとうに、あたしはみんなに氣の毒で、メルや／＼つて呼んだら、頻りときよろ／＼しながら、やつと見つけて飛びついた時のこわかつたこと』『オホヽヽヽ』と母樣もはしためも笑ひ出すを、『こわかつたともね、立つたらあたしの方が小さいくらゐなのに、ほんにひつく



らしたよ。大急ぎでぢいやの車でかへつて來てね、すぐお祖母様におねだり申して、あれのこれのとお菓子をいたゞいてね』『あら〳〵おかちんがこげてしまうはねおまへ、話ばかしに氣をとられて』『どう致しましようね、ついお留守にして』『照やちつとばかし手傳つておくれよ』『はい〳〵かしこまりました』。『そうしてぢいやがしゆろ繩をよつてゐる側にいつて、敎へていたゞいて來た唱歌なんぞうたつて聞かせるのが樂しみで、又いつでも色々のお話をするの。それはね、ぢいやが誰よりもまじめに、眞實感心して聞いてくれたから、子供心にも嬉しかつたのだよ、きつと』『ほんにいゝぢいやだつたよ』と、母さまもお詞をおそへなされた。『それからうしろの肩の所につかまつたりなんかして、あたまの白髮を何でもぬいてあげ樣つて、三四本ぐらゐ一時に引張るもんだから、顏をしかめてゐるのを、かわいそうに面白がつて、よくいぢめたつけ。其日は第一に、あしたの雪だるまをねだりにいつて、あぐらをかいてをる側に、鶴やらおかごやら、折ものを並べたてゝ、あたしがね、大さむ小さむと謠ひ出したら、ぢいやがね、をかしいんだよ、それにつれて、山から小僧が泣いて來た、なんで泣いてきた、密柑がたべたいと泣いて來た、といふのさ。あんまりをかしくつて』『まあ〳〵あのぢいやが申しましたら、どんな節で御座いましよう』『いやだね照、おまへこそこんなに眞黒にして』『おまへもお話をなるべく早くしておしまひよ。まだ照は用があるんだよ』『はい〳〵それでね、あたしがちがふよといひながら、自分の前を見たら、先きお祖母さまに頂いたのが三つばかりおいてあつたのに氣がついて、ぢいやあげ樣て出すと、にこ〳〵笑ひながら、御孃さま下さりまするかと、嬉しそうにたべるの。あたしも何だか嬉しくなつて、ぢいやあしたは雪達摩をこしらへてとたのむとね、なんでもこしらへてあげます。がよく勉強を遊ばせと親切にいふてくれるの、大急ぎで本を持つて來て、おんなじ所を二三べんよんで聞かせて、こんなによく覺えてゐるから、きつとこしらへておくれていつた事を今でもよく覺えてゐるがね、其あしたはいつもになく、

お祖母様のふところから急いでおきて見たらね、椽側のむかふにね』といひさす折から、『お照さん〳〵』とあなたより呼ぶを、はした女は、『はい〳〵只今、お孃さま何か御座いましたの』『照や呼んでるわね、早くいかなくつちやいけないよ』『椽側の向ふには、何時の間にか雪達摩の大きいのがちやんと待つて居たのだよ』『あらそうで。お喜代さん只今參ります。はい〳〵』とやをらたゝうとします。『おかちんが燒けましたらお早く願ひます。お汁粉はもうよろしう御座います』と喜代といふ小間使がまゐりました。

（五）今宵の夢

日曜日を幸に、まだ薄暗い内から、どん〳〵ばた〳〵と騷ぎ始めて、やうやつと暮方に煤拂も濟みました。天井の煤だらけになつたお庭の笹は、葉も何もばら〳〵に成つたまゝ、裏口にほうり出されて、此儘枯れくちてしまうのかと思へば、同し竹でも、門松と一所にいかめしい飾をつけて、人々から目出たがられるものさへあるを、誠にいたましい樣に思はれました。臺所では、ふとつたお三のをかしかつた事、箒で柏子を取りながら、此頃はやる唱歌を小聲に謠つたのを、奧樣に、千代やはいつ幼稚園にはいつたのとお尋ねにあづかり、又笑の種を增して、積み重ねたお蓄麥も、今は大方せいろうのみに成りました。奧では疊も青々と、床柱も鏡のやうに光つて見え、隅から隅まで奇麗さつはりとなつた其中に、美くしいあかりをかゞやかせて、孃樣たちは小集會を開きました。『花ちやんは何を母樣に願ふの』と、第一の姉樣が問ひ始めますと、順々に答へました。『あたし、あたしは羽子板にまありを買つていたゞくわ。』玉ちやんは何に』、『小姉さまとおんなじの。羽子板にかんざしに雙六に、それから』、『あら慾ばりだこと。そんならあたしもお手玉をおねだりするからいゝ』と、中の二人は丁度一つちがひの姉妹とて、何事も同じ樣にと爭ひまするを、姉樣は笑ひながら、『およしなさいよ、もつともつと好い事をきかしてあげるから、喧嘩なんぞしちやおいやだわ』『そう、どんな事、好い事て、早くさ』と末

の妹までが、躰をゆすぶりながら、『きつとお正月の事よ、ね姉様』と、聞きたさの餘り、『小姉様たちをさしおいて問ひかけました。すると姉様も急に其事を明したくなくなりましたか、あたりかけた的をわざとよそにそらして、『知らない事よ、誰でもあてたらゑらい』と、つんとすまして仕舞ひました。外の姉様たちは、そら見たことかと云はぬばかりに、横をむいてゐます。折角樂しみそうな話を聞きのがたしも、時ちやんのおかげと、口惜しい半分恨めしい半分に、つい意地わるがしたくなり、可愛そうに一人をのけ物にして、お話をつゞけました。やがてそばにあつた繪草紙を取りあげて、『一寸此お姫様はあたしよ、牡丹〃模樣がついて』、『ほんとにきれいね』『あら小姉様はそれ、あたしは菊の花のおちごに結つてるのが好よ。』大姉様はどれと問ひかけますると『源氏車がついてる此方が、御品がよくてあたしはいゝわ、お袖の花籠には何の花でもあつてよ、ほらおひきずりのお裾の上に、お姫さまも見えるでしょう』と、さすがに聞きかぢりの好みが年だけに違ひますもをかしく思はれました。頻りとのぞき込みながら、あたしもと云ひたげに、口ばかりむづ〳〵させてゐますを、相手にもせず、猶面白そうに、時ちやんばかりを羨せがらせてゐます折から、母様はふすま越しに、『もう八時は先きうちましたよ。早くお休み』とのお聲がするが早いか、たまらずに時ちやんは泣き出しました。奥様と話をしてゐた乳母は驚いて來ますと、猶々悲しそうに泣いてゐます。『又かへ、困るね』と靜にすはりながら、母様は姉様たちを見くらべますと、いつかみんな頭をたれてしまひました。『どうおしだへ、大層おとなしいね、みんな、時ちやんも姉様たちのやうに、靜にしなければいけません、あまりおしやべりをすると、誰からでも惡まれますよ』と戒しめ、『さあたんと寢て、嬉しいお正月にどこかで今夜あつて御覧、姉様がたもきつとあひますよ、姉妹は仲よくしなければならないものと、いつぞや父様が仰つた事を、みんなはおぼえておいでだろうね、何にも母さんは叱りはしませんから、よく御本を讀んだり、學校でのお話を聞いたりしておかねばなりませ

ん。自分の心に、わるいと思つた事があつたら、お正月が來てまた一つ年をとらぬ前になほしてしまはねば、樂しいお正月も何の甲斐もないものだといふ事を、今夜よく覺えてゐて、そして早くお休み』と、母様はあちらの方へいつてお仕舞ひなさいました。一同は一言もいはずに、乳母がお床をとつてくれるまゝに、ひつそりと寢てしまひましたが、小さい胸にも何だかおだやかでないと見え、薄暗くされた燈火のかげに、折々目を細くあけて、寢返りばかりをしてゐます。何だか音がすると思ふと、奥様が、乳母や〳〵と呼びながら、丁度枕もと近くで、『あした早く端書でもやつて見ておくれ、友禪はもうあれでよいから、仕立もある事だし、みんなにも早く見せてやりたいし、何分にも急いでもらふ樣にね』『はい〳〵』と乳母の返事が聞えて、跡はわからずなりました。けれどもうみんなは嬉しくて『あゝいゝ母様だ、よく仰しやる事をきゝましよう、みんな仲よくしましようや』と、姉様がわれしらず頭をあげると、あらといひながら、傍にねてゐた三人が笑ひ出しました。姉さまも笑ひながら、『母様に叱られますよ、靜に仲よくねましよう』といへば、口ごたへするものもなく、おとなしく枕につきました。長い夜中に、今からどんなお正月にあひますことやら。あしたは早く聞いて見たう御座いました。



日曜日

大塚楠緒子

秋の氣鋭く人の胸にしみそめてより、馴れぬれと幾日數、甘き戀人らの夢も醒めて、理想の的にはるかに遠さかれるおのれらは、身を驚きて顧みる時、舞姫の媚を賣

る扇にも捨てられし怨にまことの涙もかゝる頃、うしや薄の袖もやつれぬ。佐保姫のもすそ地を新らしうせん、嗚呼春は遠し、木枯の風しくれの雨の雲ちりしあした、殘菊の香しめりてのほる空は悲みの色を浮べて晴れぬ。あゝ知らず〱にして天地の靈氣に感し自然の力に打勝たるゝ人の身の弱さかな。斯かる頃かゝる思ゐて、我影とひとり夜深き燈に親しめは、かりそめにくり展けし一くたり二くたりの文字の内にも、あるは炎の如き力ありて胸やかるゝが如く覺ゆるあり、あるは石の如き重みありて穴の中に引き入れらるゝが如く覺ゆるありて、さては人の世物の世の限なき望の星の光追はんより、彼の何とかいひけん詩人の父母の如く、よろこひて慕ひける山の上の淋しき小屋、苔むす巖峯こす雪のゆきかひ瀧の音風の聲なと何となく戀しうたりて、身を其處にひきこめたらんにはと、ふと思ひいつるも餘りに動かさるゝ極みなり。今日は音樂會へと約しつる日なり。人多く集りたる所にいでゝ、さま〱の見聽に擊たるれは、稍靜まれる日頃の思も又更に苦しさを増してあたらしう燃えいつるは常なれど、それに伴ひては云ひ盡されぬ興味もそはるが常なるを、半は興を得に半は苦を得に、正午より立ち出てぬ、秋は暮方の淋しき音をたてし雨の、今朝より晴れたる上野の森、緩やかなる日の影はいまた乾かぬ地の上に梢のかけを薄く落して、殘る紅葉の何をかかこち顔なるも哀なり。此處に夕暮の雲を慕ひてさまよはゞ、いかはかりか深き想もうかべられんと思ふ、神々しき杉の村立の奧はや樂堂のいらか見えて、けふの演奏者の血の沸き胸の躍るところ、プログラムの花々しきと共に花々しく群れ集へる聽手は、廣き樂堂を殆んと埋めはてぬ。群衆の息にむさるゝが如き熱さを、朽葉の上を越えてそと窓より吹き入るゝ風心地よく冷たし。正面のピヤノの鋲いつもの如くおごそかに輝けるを、鬢の毛の優しき眉のにほへる瞳のすゞしき菫の香、かんばしき袂四季樣ちりはへる裳裾など、數へなは目もくらむへきに、並ほたゝ若くかゝやく君、衿飾につや〱しきを撰る人など、目にたちてまじらへるも一つの花園の色香な

るべし。華美なる姿質朴なる好みおほよそ人の心々もしられて、見渡せはめさましく並ひ重なれり。姫宮ひと所在しける御よそほひ、濃紫の御袂はひときは貴く見まつりぬ。何所の御はらからにか腰元に侍かれて、高島田に對の振袖すくれたる君清く素直なる御面わは、彼の箱に入れたる人形のふと取り出されたるに、塵もすゑしともてあつかはるゝ有様にも似たり。そゝろに懐かしき君あり　ゆかしき人あり。知れる人ともの來合せたるあるに、かにかくとけふの演奏の事も忘れはてゝ思ひ煩へる程、時を報する鐘あわたゝしくなりいでていつしか廊の靴音も靜まりぬれは、資性正しき指揮者の合圖の下に、男聲女聲徐ろに沸起りて、まつ「此御山」の唱歌よりプログラムの第一部は始まりぬ。例の音樂に疎けれは只おもしろしと聞くのみ。深き意味は解しえられぬこそ口惜しけれ。ピアノの獨奏輕く短く終りたるに、續きて「友」のうたはうたはれぬ。次の合奏は知れる君の彈き給ふなり。沈みたる君の指よりほとはしり出つる音と思へは心からにはいといみしう耳に響きぬ。琴はきゝなれたる六段のしらへなれど、小さき少女ゝ美しう居流れたる姿の罪なさは、爪音のとかうよりまつ愛らしかりき。單音唱歌爪音の調和、むつかしきよりかへりてうた聲さはやかに聽きぬ。いさましき「我國民」小學校の生徒にやふさはしかるべき。前の列、端にたちたる小さき少女、黒き正服に黄の帶上の映じたるに、無邪氣に指揮者の手うち見あけて歌ふ口つきいかに愛らしかりけん、そこに立ちなから猶父母の膝のもと、慕へるさまにも見ゆるや。

二部にうつりてヴハイオリンの合奏ありピアノの聯奏あり。次の唱歌の甲乙、隱士の靜なるすさひと、佐用姫のもえたてる涙と、それほとのけじめは確かに歌ひわけられぬ。ヴハイオリン聯奏ならびに伴奏の君たち三人、今音樂界に讃美の的となりて美しき花輪にぎり給ふ君共なり。熟したる音色はいかで人の心動かさでやは、クエベル氏のピヤノ、これは又若草の花やく野邊にひとり雪霜に磨かれし、松の葉の風のひゞきにそら高くうた聲もらすにも似て、ハスの狂ふが如き調はすべ

り轉びて、こまかきアルトに消えゆく變化、塵なき大理石の上を霰のたばしるやうに響き渡る。堂内に今日幾百の人の心をや奪ひけん、拍手の音の轟きわたる中に、靜に段を下りて、ヴハイオリン彈く君と握手せられたる、白き髯の中にかつ〳〵の笑の見えたるは、何をか意味しけん。やがて聲をもそへしオルケストラ賑しくて、天の岩戸ひらくると共に、演奏は全く終りぬ。今や胸やすめし演奏者の心々、あるは我輩の滿足に勝ちほこるもあるべく、あるは人しれぬ苦痛に泪しほるるもあるべきを、そを思ひやる人も、やらぬ人も、始めて夢より醒めたるが如き群衆は、俄にどよめき立ちて散り亂れんとす。時の間に空しくなりし廣場に、裸々たる椅子の列も亂れて、しは〳〵樂人のほまれを飾りし樂堂に、とこしへに無言の美を語る夕日は、まはゆくも輝きてさし入れり。上野の山をつたひて、鐘の音のいと靜けき所、しれる君たちとしはし休らひし間の物語りもいと興深うて、街の瓦斯燈の星の如くならふ程、我家には歸りつきぬ。あゝ今淋しき燈に向ふ胸の中あやしくも亂れぬるかな、妙なるねいろに心動されしは更にもいはず、靴の塵たちまよふ壁きはにゆきちかふ人の音、きぬの綾まほろしの如く、猶目の前をたちさらて、かの山の上の小屋と、斯かる都會の花々しき樂堂と、同じ世にいかばかりのけぢめはあるやなど、例の興味と苦痛と打まじらへる、こよひの夢いかで穩なるべき。

姬ざくら

木村小舟

花の頃なるに、一夜宵の程より、空は一面に曇りにけり、花曇にやあらん。さるにても、雨ともならばなど、姬君は早や打ち案じさせ給ひぬ、雪霜を、辛くも凌ぎ越して、明日や開きてんと待ちけるものを、おぞや此の雨、憎くやこの雲。

花の頃なるに、宵の程より姬君は、風氣にて打ち伏させ給ひけり、花故のわづらひにや、さるにても、永延かばなど、乳母なる人は、遉に案じ出しける。年月に、裝ひた

恰も世上の人類に、種々様々なる品位性質あると一般なり。女子の文に、男子らしき意趣は好ましからず。女子はどこまでも女子らしき意趣を立てざるべからず。女子らしき意趣なれば、何にてもよきかといふに、これまたしかいひきり難し。大人にして子供らしき意趣を書くは、いたづらに見る人の笑を招くに過ぎざるべし。女子は女子らしく大人は大人らしく、その人相應の意趣を求めざるべからず。また、下衆じみたるよりは、同じくば上品なる意趣を求むべく、陳腐なるよりは、なるべく斬新なる意趣を求むべく、平々凡々たるよりは、可成卓拔俊秀なる意趣を求むべし。かく、よきが上にもよきを求めて、これより外に、立越えたる意趣はあらずと思意する境界にまで進みきりて、我が心中に深く信ずる所を確立し、以つて其の文章一篇の意趣とすべし。自己の信ずる所、薄弱なる意趣を以ちては、決して、他人の同情を買ひ得るべきものにあらず、他人の同情を買ひ得ること能はざる文章は、何百篇起草するとも、たゞいたづらに白紙を反故にするのみにて、何の用にも立ちがたかるべし。故に、文章を書むとする時は、先、この意趣を確立すべし、其の意趣は、我が力の及ぶかぎり、上品にして、卓拔俊秀なるものなるべし。然らざれば斬新にして、奇想なるものなるべし。文章の功拙は、重に、此の意趣の如何によりて分るゝものなり。



第二　材料の撰擇

材料とは、彼の意趣を表すに付きての必要なる道具立をいふ。たとへは、寒意を表はすに、霜雪風雨を以ちて

し、あるひはあつぶさま、うつみ火を、かり來りて、その意をあらはし、若くは、燈影樹間に凍り、夜氣肌を刺すよしいふなど、皆寒意を表はさむとする材料なり。暑氣を表はすには、暑氣の材料あるべく、暖氣を表はすには、暖氣の材料あるべし。㊀寒暑病痒の感より、喜怒哀樂の情、若くは盛衰榮枯のありさまにいたるまで、皆、その周圍の事物現象ありて、その感情況勢を呈し來るものなれば、其の感情況勢を、呼起し來たる所の、すべての事物顯象は、悉くその意を表はす材料にあらざるはなし。此の材料に、直接のものあり、間接のものあり、繁に過ぎたるものあり、簡に失したるものあり、美なるものもあれば、醜なるものもあり、好材料もあれば、悪材料もありて、其の中に自然と其の意趣を呈すに適切なるものあり。又不適切なるものもあり。又適切なるものゝ內にも、古人が既に用ゐ舊るして陳腐に屬せるものあり。時と場合とによりては忌み嫌ふべきものもあるべし。これを能々撰擇して、尤、當然に、尤適切なる材料を使用せざるべからず。

材料の撰擇に就きて、尤大切なるは、作者の心中に取捨折衷の明を要すべき一事なり。廣く其の材料を集むるは易く、其の意中に集收したる材料を捨つることは甚難し。能くこれを集めて、能くこれを捨つる明斷を備へざれば、適切なる材料は得難かるべし。初心の間は、材料の收容に苦み、中成の人は、材料の割愛に困むものなり。材料を收容せむ爲には、心を萬里の外にはせしめ、思を天涯のよそに凝らして、あらゆる萬象の表裏を見透し、今我が述べむとする事柄に、緣故あるものどもを、有らむ限り拾ひ集むべし。さて、その收容したる材料中より、尤適切なるかぎりを撰擇して、他は悉くこれを放棄し、過ぎたること、及ばざることのなき堺に於きて、安心して筆を下すべし。かくいひ立つる時は、甚六かしきことの樣なれども、常に、この工夫を積む時は、慣習終に常となりて、一瞬時間にも能くこの手續きを踐むことを得べし。敢へて困難なる仕事にはあらざるなり。さて女子の撰むべき材料は、男子の撰むべき材料と、おのづからその區別あるべきは勿論のことなり。

こゝにいたりては、女子たるものゝ見識によりて、千狀萬態なるべければ、今此の僅々たる紙數の中には、そのあらましをも記し難し。

第三　敷置結構

敷置結構とは、一篇の組立方なり。彼の材料を、前後表裏に配置して、順序よく造り搆ふる工夫を凝らすべき手達なり。たとへは、工匠が家屋を建築せむとするに、先、その建築すべき家屋の模様によりて、材料の集收に從事すべし。その建築すべき家屋の模様は、官衙とか、兵營とか、學校とか、會社とか、あるひは官員の住居、百姓の住宅、商家の見世、職工工場とか、皆夫々のあつらへあるべし。此のあつらへに應じて、夫相應の計畫を立つるは、工匠が建築に從事すべき意趣を定むるなり。さて其の用材を集收して、棟梁となるべきもの、土臺となるべきもの、貫柱となるべき物、敷居鴨居となるべき物、各、何不足なく集りたりとするも、間取によりて、其の材料の遣ひ分けを考へざるべからず。あつらへによりて、柱の拔き指し、棟梁の組替をもせざるべからず。これ建築家の敷置結構なり。文章にもまた此の敷置結構をよくせざれば讀者をして不便を感ぜしむること少からず。此の敷置結構に、そのよろしきを得る時は、不足なる材料も充分に思はるゝことあるべく、惡材料もまた好材料となることあるべし。これによりて、波瀾抑揚も生ずべく、首尾照應も活動すべし。始に云ふべき事項を終りに云ひ、後に書くべきことを前に書き、あるひは順序もなく心にうかび來ること共を、筆に任せて書き續けなどして、此の組立に意を注がざる時は、その材料も無駄ものとなりて、意趣の徹底を傷つくること多かるべし。然のみならず。文章には甲を揚げて乙を抑ふることあり。甲を抑へて乙を揚ぐるあり。甲乙を抑へて丙を揚ぐることあり。甲を揚げて乙丙を抑るふことあり。あるは一事を、繁簡二つに分ちて、前後に記すこともあるべし。これが皆その適當を得ざる時は、いたつらに文章の煩冗を極めて、讀者をして倦厭の心を生ぜしめ、終に全篇を放棄せしむるにいたるべし。

此の順序の事につきては、實例につきて云はざれば、或は其の意を了し難きこと多かるべしと雖、今はさる猶豫もなければ、他日又重ねていふことあるべし。

第四　用語の適否

用語は文章の要素なり。否文章の要素にあらず。材料の元品なり。此の元品によりて、材料の形躰を造り出すものなれば、その元品不適當なる時は、その材料は皆不適當なる瑾物となるべし。故に、その用語は尤適當なるものを採用せざるべからず。適否を撰擇せむには、勿論その用語を多く知らさるべからず。用語を豊富にせむとには、廣く書を讀むこと尤捷徑なりと雖も、なるべく耳新らしき語、目新らしき文字は、これを避けざるべからず。殊に女子には女子相應の言語あり。上臈にそ上臈相應の言語あり。すべて、言語の扱方に依りて、いかめしく、しほらしくも、哀しくも、悦ばしくも、淋しくも、賑はしくも、たやすくも、くだくだしくも、樣々に聞きなさるるものなり。紫式部が、源氏物語の帚木の巻に、彼のものさための博士、馬が頭の口をかりて

女と言はむからに、世にあることのおほやけわたくしにつけて、なとかは、むけに、知らず、いたらず、しもあらむ。わさと、ならひまなばすとも、すこし、かどあらむ人の、耳にも、眼にもとまること、しねむにおほかるべし。さるまゝに、まむなをはしりかきて、さるましきどちの女ふみに、なかば過ぎて書きすくめたる、あなうたて、此のかたのたをやかならましかはと見ゆかし。心地には、さしも思はさめれど、おのつから、こはごはしき聲に讀みなされなとしつゝ、ことさらびたり。

と論ぜられたるは、女子として温雅柔順の美徳をうしなひたるを、難したるものなりと聞けり。今に

あらたまの年の始の御ことほき、何かたも同し御事に、千代八千代にといはひ納めまゐらせ候ふ

といへば女子の手始狀らしく聞ゆれど

改曆之御吉兆、萬里同風、千秋芳歲、と謹みて爰に恭賀し奉り候

て、花見をば待たせ給ひしものを、など吹くらん此の風、など出しや此の病。霞が岡に、一本の小ざくらありけり、老木ならねど、花うつくしく、高からねど、薫りゆかしし、胡蝶終日、こゝを去り敢ず、小鳥永き日を、こゝの枝に謡ひ暮らしぬ、姫君は此上なく、この一木を愛で給ひけり。折あらば、一人この木の下に寐て、胸の思ひを打ち明かさばや。など仰せられけん ものを、あはれや宵より春雨の聲、さては今年は開くをもまたで、蕾のまゝに散りゆくらむ、さりとては心なの雨風や、悲しむものは、胡蝶のみかわ、恨みんものは、鶯のみかわ。

　春雨は降りもつゞきて、三日となりけり、姫君の病も三日となりぬ、雨はゝげしからねども、雲足わがらず、姫君の病も、重りしにはあらねど、床拂ひせさせ給ふ、様子さへ見へざりけり、あはれ大方の櫻は、みな散りうせめ、霞が岡の小櫻、などひとり殘らむや。



　四日の朝、空は久しぶりに晴れぬ、かすみの衣糸遊の帶、名殘りは小枝に光るしらつゆ、泥にまみれし花のいくひら、あはれをば止どむといへども、さすがに春野の草は肥えけり、姫君の病もいゑけり。

　硝子ばりの小まどより、輝り射る旭日は、雨の前に、折りて挿なせ給ひし、さくらの蕾をば、綻ばしぬ、その花のいろを、硝子越しにしたひ來る胡蝶のかげは、姫がふとんに、いとも大きくうつりて、からくさの、それよ模様の如し。

　姫君は、いともゑましげに、ふし床をば起き出でながら、鬢のみだれなどとりつくろい、さくら小紋の衣服着させ給ひ、したはしきかすみが岡の、一本ざくら訪ひなましと、あくがれ出でさせ給ひけり。黄蝶みちしるべ仕うまつり、うぐひす便りつたへぬ、

さはいへど、みち〳〵の葉櫻など、大方は散りつくし〳〵を、姫君みそなはして、さこそ胸いため給ひ、御あゆみの程も、いとも覺束なく、見え給ふもかしこし。

さる程に、かすみが岡のひともと櫻、けさ開きけり、ふる春雨に、色香まさりて、雲まよひ、かすみ耻らう、今朝のすがたや、實にうつくしくも又尊とし。

姫君ひと目見て、おどり上りて、打ち喜ばせ給ひ、ながき〳〵袖うちふり、さくらかざして、櫻人の舞ひをぞなし給ひける、ながき今日の春、さても短かきを、うらまんばかり。

さるにても、ひともと櫻ながく咲きけり、これも此の姫君が、あつき情の、こもりし故にやあるらんと、むかしありけん、櫻町の、中納言のこと、など、たぐへくらべて、時の人々、もてはやしけるとなん、言ひつたへたる。

（完）

湯が島紀行

學海居士

明治卅三年九月十四日朝雨あり。されど漸く晴ゆくさまなれば。主人安幸（これは修善寺跡熊坂に北條氏の時より住居する菊池氏にてこの日頃余が滯留せし家なり）とゝもに出でたる。雨後の朝風山〳〵草木緑の色を添へて麗しき事かぎりなし。されど路滑りて石多ければ。車をやるにくるしむ。瓜生野小立立野本野の村〳〵をすきて。路は次第にのぼり。石多く坂もあまたありて。車を下らざれば。ゆく可からず。太平。松ヶ瀬青羽根月瀬門の原すべて狩野川を左にみて。溪聲石に激し樹影水を浸す。好景いはんかたなし時に秋雲むら〳〵と山の間より起りて小雨を降らす事あり又忽ち雲散じて日出づゆくと五里ばかり嵯峨澤ばしといふ新しき橋のもとに出たりこゝより湯島また程遠からず道幅いと廣きは近き頃開かれたる道にして天城山よりきり出す。材木運搬の爲と聞えたり。天城山は御料にてそ

の材木は船材となるよしはじめ筏に組みて溪を下り又は車にのせてこの大路を挽き下すといふされはかゝる山中にも道路を廣く開かれたるなるべし。

この橋をわたりて。眞直にゆけば。湯ヶ島村に出る本路なれども。路遠し右の小路よりゆけば。道狭けれども近しといふ。車夫の言に從ひ草いと深き路を車を挽かせてゆくほどに。狩野川の支流なるべし一條の小川あり。これに架したる。かりそめの丸木橋あり。二本の柱を繩をもてからげたるものにて。いとも危し下は大石礧砢とし溪流雪を噴く。されど。これを渡らざれば。路無し。已むを得ず。車より下りて車夫二人に手をとられ。腰を推されて。一足拔きにして。この丸木橋をわたれり。その躰の最おかしとて。安幸の見て笑ひしかば。余はむかし廿二三の頃妙義山に登り。又金洞の石門などに至りしとき。岩上を飛が如くに驅けゆき。溪水を一足飛にせしと幾度といふを知らず。その時と今とを比すれば宛も飛仙と蹇足の如し。年はまとにとるまじきものなりと歎息せり。

この行はもと湯ヶ島村なる足立氏の別莊に至るべき約ありしなれば。まづそこを尋ねむとこのあたりの。農家に入りてきくに。主人の娘にや頭に手巾を卷きたる十八九ばかりの女出來りて足立樣の別莊はあしこの山の根を廻りて一二町ゆけば狩野川の端にて立派なる家なり。直に知れまするど答しかば。又それより田の畔の細きを或は車にのり。或は歩行してゆけども／＼。その家見えず。やうやくにして。こゝらに見なれぬ塀を圍ひたるいと廣き別莊の如きもの見えたり。一條の道より溪間に下るに路のかたはらに。老人ありて。草をむしり居たり。人がら賤しからず。人の來るをみもかへらず。しきりに草をとるのみ。後にきけば。即ちこの別莊の主人にして。足立新二郎といふ翁なりけり。大きなる黒漆塗の門ありて。又石の坂を下ると二十間あまりにして。別莊の入口あり。その前に小流あり。淨きと玉の如し。門を音信ふに。主人の翁は近道よりやかへりけん。出で迎へしかば。かねて書をもて申せしごとく。今日訪ひまゐらせたりといひしかば。よくこ

そ來ましたれ。いざこなたへとて。客の間に請し入られたり。この莊は崖下を切り開きて溪に接して家を建てたり。その造搆は堅牢にして。且雅致あり。坐にいれば左は一間を隔て激湍に臨み。右の竹欄の外は即ち懸崖にして。飛泉一道絲を亂すが如く亂れ下ると頗る美なりその下には小池ありて。多く金魚を養ふ冷水に遊泳して透て見ゆ。主人出て午飯を供せらる。調理の妙東京有名の割烹店にゆづらず。殊に洋餐の風味を加えられたるは。かゝる山中には驚かるゝほどの美味にてありき。主人またこの莊に題せし諸家の詩文を示されたり。岡鹿門の天城泉莊の記ありて。よく勝景を寫し盡せりと覺ゆ。やゝありて主人余を案内して。浴槽に入るこの湯は即ち温泉にして狩野川の前岸の谷間より沸出るものを筧をもて引きたるなり。廣からざれども。頗る趣きありて。箱根熱海の客舍に似たり。又清泉を別に引て浴客をして自由に飲料とし灌濯に供せしむ。槽のかたはらに。小室ありて。休憩所とす。これは溪流にのぞみて。前山の樹木蒼々として好景いふ可らず。欄に倚りて四望すれば。目には綠葉の飽き耳には泉聲を滿たしめ。一身殆ど飛揚し羽化登仙の思あらしむ。實に塵外の洞天たりけり。

然るに忽ち三島驛より電報ありて。主人のもとに至る。こは小松宮俄に明日三島の邸を發せられて午前に着せらるゝによりその用意あるべしとの報なり。余等これを聞きて。他の旅舍に移らむといひしに。主人は固くとゝめ。用意とても。山中の事なれは。さしたる事もあらす。今夜は是非といはす一宿あれと止めしかは。その意に從ひぬ。夜に入りて。主人出來りて。さまざまの物語す。よりていふ宮のおはしますによりて。奉るものなし。よて河津に住居する我せがれに(足立の第二子は黑田重兵衞とて天城山の南なる河津に住り)電報せしは。午前の事なるに網を引て鯛數尾を得たり。よて今夜急飛脚をもて明朝までにおくるべしといひ來れりとぞ。湯島より河津までは。天城の嶮岨を越て八里あり。しかるにその便利なるはかくの如し。豪家の勢自由なるに感服せり。夜また一浴す。快きと甚し。

寢具その他皆清潔にして且至れり盡せり。主人の禮遇のあつき事喜ぶへし。

十五日といふにいよ〳〵宮の着し給ふなれはとて。主人の案内によりて。この家の西隣なる湯本屋といへる客舍にうつる。こゝはむかしより。溫泉屋にしてきはめて質撲なる家たり。家はひろけれとも。古く煤ひて。木材なんとも。細く薄かれは。樓上を踏鳴らす音ほと〳〵床を破るゝと思ふはかりなり。樓の前後はすべて樹木深くいかにも幽邃にして。昔の箱根玉の湯塔ノ澤わたりの客舍に似たりき。下婢なとも。田舍の女子なれは。衣服髮容も鄙ひたるか反て箱根あたりの。婢女よりもやさしく。深切なりと覺えたり。さて浴塲はと問へは。樓の下に在りと答ふ。ゆきてみるに。長き箱段の梯子ありて。溪の流の側らに下る左右は丸き石を疊みて。これを圍み。土石の崩れを防き湯槽は大なるもの二ありて。男女に分てり。前は狩野川をのぞむ。又湯槽外に一條の流ありて。淸き溪水を通し。身は湯槽のうちに在り。手を冷水のうちに浸すことを得へし。夜食の菜は葱に油揚を煮てすゝめ。外には玉子燒のいとかたきものあるのみ。火燈燈臺その他いつれも質朴にしてむかしの溫泉塲の姿を少しも失はす。余か若きとき遊ひたる箱根伊香保を思ひ出されたり。



小松の宮は隨從の人多く中には洋裝の婦人なるものあり。午前九時頃足立氏の莊に着かせ給ひて。しはらくこゝに休ませ給ふ。湯本の湯を御覽ずるよしにて。この湯本樓のあなたなる溪流に突出小島の岸石の側の從者とゝもに赴かせたまへり。湯の沸出るもとなれは極熱なるべし。白き煙たち登れりと見えたり。

かくて宮は三時の頃に歸らせ給ふよしにて。余か居る樓上より御共の人々の立騒くを見るに巡査なるべし。白き制服着たるもの六七人又見送り奉るものにや袴着たる村長めきたる男もそのうちに雜りゐたり。門には國旗を立てたる躰なれは。定めて村人等もあまた立つどひたるなるへし。

この夜は安幸とゝもに。湯本樓を立去りて。また足立氏に歸り晩飯の供にあふ。かの河津にて網せし鮮鯛を調理して。これを食す。その味の美なるといふ可からず。調理法もまたきのふの如く。洋風をも交へたりき。此夜は余主人の求に應じ。書數幅を揮ひ又詩を賦しておくる。明れは十六日早く起て又浴し朝餐を終り車に乘りて。もとの路にかへり。この日は修善寺の温泉客舍凝雨來樓に宿す。

日記の一ふし

片山廣子

近き頃築地にうつり給へる師の御許へゆく。道のほど、同じ都の内とも見えず、さびしう心細し。家はあれども我國ぶりの家ならず。ゆきあふ人はあれども我國の人ならず大空のみどりはさすがにかはらねど地にはなつかしげなる木立もなくあなたこなた立ちまふ筒の烟は賤がかまどのとは様ことにうとましげなり。道たづねん人もなければ橋を渡り又橋を渡りいづく迄もと車をやるに、川風身に志みて寒し、やう〳〵十四五なる少女の來かゝるにあひて、十五番館は此あたりにやといへばなれぬ身はようも知り侍らずかの高き家より猶さきにや侍らんといと遙かなる方を指さす程に、かたへの道よりおとろ〳〵しき音して走り來る馬車あり。金色のかみいみしうめでたげなる若き人打乘りたるを、かたへにのれる老人のかしづく様なり。むづかしう立ちまよふ土けぶりをマフしていとかるげに打拂ひつゝすぎゆくを此少女つく〳〵と打ながめつゝ、やがて太き息してあなたへと歩み去りぬ。羨しとや思ふらんあはれなる子やよし貧しくとも此國に生れたるをいみじき幸と思へかしなど想ひつゞくる程車はゆきめぐり行き

めぐりても猶さるべきあたりにもいでず覺束なきこと限なし一年友なる人の外國にものせし時の文に、寫眞の上にてのみ見し街のさまをまのあたり見るにつけても賑しき中に只一人すてられたるやうに覺えて更にこひしきは我國の空、きかまほしきは我國の人の聲といひおこせしが、誠にさも覺えけんかし。爰にてさへ我國人の顏見まほしう我國人の聲きかまほしうなりぬるをと思ふ程かなたの塀の邊に立ちたるは、まぎれもなき我國の巡査なりけり。十五番館はいつれと問へばかの蔦生ひたる家と教ふ。あなうれし。つひに見いでけるよと思ふ。中に入る程師の御聲のほのかに聞えたるまづ似るものもなう嬉し。暖かき火の邊にうづくまりて色々の御物語に耳を傾ぶけつゝ、身も心もあたゝまりはてたる頃、やをらまからんとするに、かの巡査ははや影も見えず。先には球を投げ輪をまはして道のほとりに遊びゐたる子供等も、家にや歸りけん聲もせず大路は人のゆきかひも大方たえたりと見ゆ。橋の許に只一人自轉車によりつゝたゝずむ女あり。わかうをかしげなる容したり人を待つにやあらん。なよやかなる髮を寒き風に吹かせたるもいとあはれなるに人やくるとかへり見すれども見えず。空やう〳〵薄暗うなりゆきて高きスパイヤの上に大きなる星の一つきらめきたるも何となう身にしみて覺ゆ。

昔がたり

橘糸重子

むかし神の代のうるはしき日和に、北風そゞろありきにと出でつ。其さがあら〳〵しものなりければ、花園に來し時、樂しげによそほひつれし薔薇さゆりなどをひき倒し、實のりたるアプリコーゼ梨子などをふりおとし、畠にゆきし時は、猶ひときはまさなきわざをぞしける。青く清き麥生を土にふさせ、赤く愛らしき林檎をもあらき手もて投げつ。林を訪ひし時は、木の葉みながら空にまきちらし、年ふりてかよわき木どもを、地に倒しなどしつ。

さればなやまされし者ども、風の王のもとにゆきて、ありし事ども訴へつ。王の君は北風をめして、いかなればかくなさけなき事をなしつるぞと問はせ給ふ。北風答へけらく。そは思ひもかけぬこと。我はあしき事なし侍らず。唯愛らしきさうびさ百合、さては其外の者どもと共に遊ばゝやと思ひしのみなるを、といふ。王の君打ちゑみて、いかでさる荒々しき遊あらむ。さらば今より花さき實のる春夏のほどは、深き谷間にたれこめよ。其折をすごして、花も實もなき冬の空に出でゝ、思ふまに〳〵遊べかしとのたまひつ。されは北風は、今も猶木葉もなく木の實もなく、霜雪の花のみ盛なる冬の空にいでて、そのかみ見たりしくさ〴〵の花、木の實などをいたづらに尋ねありくとぞ。

新撰女大學

本誌三月の臨時増刊に出したいから、何ぞ差上るやうにとのお懸合で御在ましたけれども。別に是ぞと申して差上る程の材料も持合せませんが。左の一篇は、實は先年新撰女大學の懸賞募集に應じて、存懸もなく其撰に預つたので御在ますが。今日になつて考へますと、厚かましくも、好くコンナものを出したと思ふやうですが。近年女子教育の聲が益高くなり、故福澤先生の新女大學なども出た程で御在まして、コンナに世間一般に女子の身の上に御注意下さるやうになりましたのは。私共婦女子の身に取り眞に難有ことゝ存じまするにつけて、夫れに勵まされて、不肖ながら先年來家事の暇に右の新撰女大學を少しばかり修正増補致してみましたが。此度の御懸合を幸ひに、兎も角も餘白を拜借致して、大方の御叱正を願ひたいと存じます。併し元來學問もない身で、唯心に感じた事をおそる〳〵書列れたまでのことで御在ますから。皆様に御覽を願ひましたところで、ドウセ完璧とならふ筈は御在いますまいけれども。何卒御賢さまで、煩を省き短を補ふことを得ますれば。第一自身の後學の爲になり、又自家の子女の爲に座右の友と致したいと存じまして。兎に角差上げてみますが、御採否は御隨意に願ひたう存じます。萬一お採上げ下さいますやうなれば、近日又是れの釋義みたやうなものを差上げてみたいと存じ升。

野中千代子

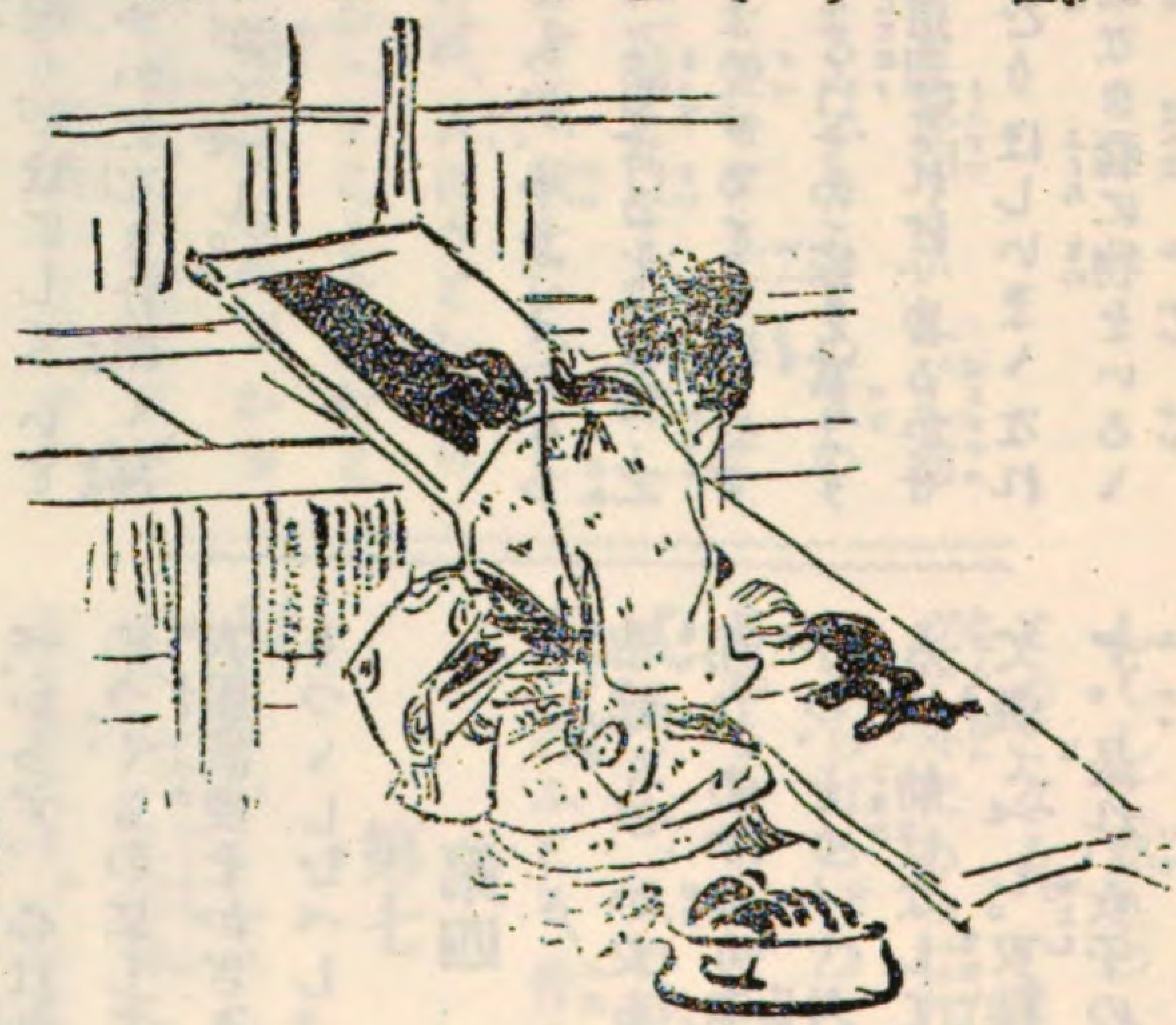
人の世にある、皆、身を修め家を整ふるを務とす。古き語に、國の本は家にあり、家の本は身にありといへり。身修らざれば家整はず。家整はざれば國平かならず。されば、身を修むるは、扇に要あり、車に軸あるが如し。凡女子の務は、家を整ふるにあり。故に、まづ女徳とて

心ざま正うして、善なるべし。たとへば、とげあるばらも、香あるがゆゑに、人にめでらる、されば、女子は顔かたちみにくゝとも、心ざま正うして、善ならんやう務めはげむべし、古の文にも、人皆その形をかざることを知りて、其の性をかざることを知ることなしと、見えたり。性をかざるとは、詐はりかざるにはあらず、心ざまの悪きところをあらためて、善くするをいふなり。怠らず善き道にならはゞ、などか、善き人とならざらん。

女徳とは、一に貞操、二に温順、三に倹約、四に恭謙、五に親切、六に寛容、七に仁愛、八に忍耐、九に和樂、十に勤勉をいふ。

第一　貞操の事

貞操とは、心ざま潔うして、堅く節義を守るをいふ。か



りそめにも、たはれたる行ひあらば、身をいたづらにすて、名をけがし、父母、夫、兄弟に恥をあたへ、人につまはじきせらるゝに至らん。眞に口をしくあさましきことならずや。萬づ、いみじくとも、塵ばかりも、かゝることあらば、玉の盃のそこなきに均しかりなん。されば、常に身をまもること堅きに過ぎたらんほどはよかるべし。人に向ひ、ざればみて、輕らかなるは、節義を失ひ、過を招くのもとゐたり。つゝしむべし。

第二　温順の事

にうわにして、憐みの心あるを、温といひ、すなほにして、猥りにさからはざるを、順といふ。凡そ事に當りて、言ふべきはいひ、爲すべきはなすぬ可なり。たとへば、大節に臨みては、父母の命を拒み、夫の所爲に爭ふことゝあるべし。温順

卑屈盲從とは、儉約と吝嗇との別の如し。混同すべからず。されど、温順を土臺とせざれば、心たけく、氣色けうとく、言葉擧動あらゝかにして、人と爭ひ、又は人をうたがひ、そしり、ねたみ、われ人に優りがほにして、いとおぞましく、にくし。されば、志とやかになさけ深く、萬づ、ひかへめにして、温順の德をみがくべし。

第三　儉約の事

儉約は家をたもつの道なり。おごらず、やぶさかならず、つゞまやかにして、ほしいまゝならざるをいふ。之を以て情慾をふせぎ、財用をほどよくするときは、必ず貧窮におちいらざるのみならず、よくその家を富ますべし。家を富ますは、國を富ます道理なれば、ゆるかせに心得べからず。女子にして、おごりほしいまゝなれば、得たる財はいつしかうせて、底なき嚢に物をいるゝに異ならず、終には產をやぶりて身を亡し、家名を瀆し世に立ちがたく、且つ國をそこのふに至るべし。されど與ふべきにあたへず、厚くすべきに薄くするは、是れ吝嗇なり。よく心を用ゆべし。されば、衣服、飲食、器具など、わが身の分にこえず、なるべく衛生の道に適へるを擇ぶべし。猥りにかざりをなし、分にこえたるを好むべからず。心は身の主なり、貴ぶべし。衣服調度は、身につくものにして輕し、心をかざらずして、いたづらに衣服調度をかざり、人にほこるは いやしむ べきわざなりつゝしむべし。

第四　恭謹の事

恭謹とは、かたち正しく禮義を守り、何事にも深く心を用ひ、あやまりなからんやう、身をたもつをいふ。婦女子の、をり〳〵外に出て、見聞をひろうし、禮節をつとむるは、妨げなしといへども、席の正しからざるは、力めて避くべし。又淫聲をよろこびて、淫樂をならふべからず。是れ、女子の心をとらかすものなり。恐るべし。凡身正しからざれば、家に禮義なく、風俗みだりにして、淫行多く、家風をけがし、禍におちいる、されば かねて、身をつゝしみて、惡事をふせぎいましむべし。惡事出來

てのちいましむるもおそし。古き語に、つゝしめば禍にかつといへり。身をつゝしめば、禍のおこるひまなし。つゝむべし。

第五　親切の事

人のために、心をこめて誠をつくすを親切といふ。凡病るをいたはり、苦めるを救ひたすくるは、まことの人のなすべきつとめなり。人もし、われを愛せずして誹りにくむとも、怒りうらむることなかれ、誠を以てかんぜしむれば、後は必ずその人の心やはらぎて、我をいつくしむに至るべし。もし、詐りあざむけば、人にうとむぜられ、世に立ちがたかるべし。天道はかへすことを好むといへり。善にはおのづから福あり、悪にはおのづから禍あり。されば、年を經て久しく善を行へば、積りてさいはひ來りなん。古き語に、積善の家に餘慶ありといへり怠るべからず。

第六　寛容の事

寛容とは、心ひろくゆたかにして、人のことばをきゝいれ、物事にせまらず、いからざるをいふ。凡わが心にかなはざることありとても、顔色をはげしくし、言葉をあしくして怒りのゝしれば、人々うらみそむきて禍のもとゐとなる。いましむべし。心やはらかなれば、其の色必ず外にあらはれ、内にいかりあれば、其の色、また外にあらはる。つゝしむべし。わが過なきを言ひたてゝさからひあらそへば、重ねて告けきかする人なし。されば、たとひ、人わが過を告げたるに、其のことばあたらずと思ふとも、皆うけいるべし。

第七　仁愛の事

人をいつくしみあはれみておろそかにせざるを、仁愛といふ。凡父母につかふるに、孝行をつとむべきは、言ふも更なり。あまねく人をよろこびたのしましめてこそ、わが心もたのしむべけれ。人のうれひをかへりみずして、我ひとりたのしむは、よからず。されども、愛におぼるれば、人おごりあなどりてつゝしまず。是れ、愛

するにあらずして、かへつて人をそこなふなり。必ずおごそかに正しく愛すべし。

第八　忍耐の事

忍耐とは、こらゆるなり、物事にかんにんするをいふ。凡世の中は、わが心にかなはざること多しと知るべし。之をかんにんせざれば、人と交はるにやはらかならずして、智識をひろむるにたよりすくなかるべし。まして、互に怒りうらみては、家內にもいさかひ絶えざるべし。萬づの業をなすも、苦勞をかんにんして、其のわざをつとむるより成就す、むづかしきをこらゆれば、天下のこと何事もなすべしと、古の人もいはれたり。守るべし。

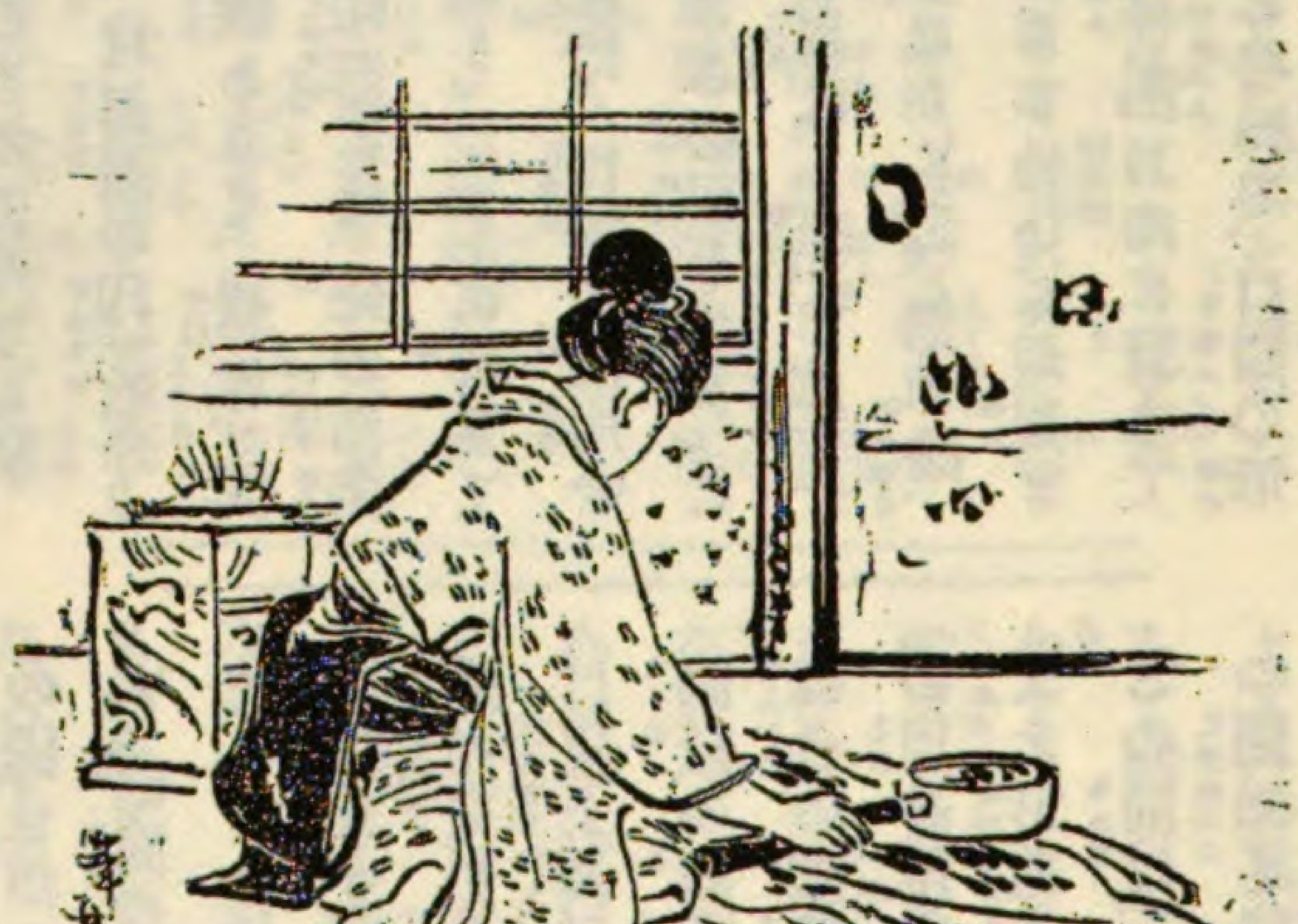
第九　和樂の事

女子は、和氣をうしなはず、心のびやかに、のどかなるべし。內に和氣あるものは、外かならず怡べる色あり。されば、常に顔色をやはらげて、言語をあらゝげず、人の心をよろこばしめ、さはりなき限りは、かくさず、つゝまず、家內をも調和して、春の日のうらゝかなるが如くならしむべし。喞ちがほなるはあし、腹たゝしげなるもあし。古き語に、父子したしみ、兄弟和し、夫婦たゞしきは、家のこえたるなりといへり。もし三親和せずんば、富りといへども家のやせたるなり。法とすべし。

第十　勤勉の事

凡物各つとめあり。犬の夜を守り、鶏のときを告るも、亦つとめなり。禽獸すら猶かくの如し。况人をや。女子の未だかしづかざるものは、交るに友をえらび、父母敎師の命を守り、女子の學ぶべき文と藝とをならふべし。暇あらば父兄に仕へて其の勞にかはるべし。時到らば夫をえらぶこと、是れ女子生涯の大事なり。ゆめ〱一時の情にかられて生涯をあやまることを勿れ。かくて、妻となりては、舅姑に誠をつくして奉養するはいふまでもなきことゝなるが、事情の許す場合は、必ずしも舅姑と居を同うせざるも妨げなかるべし。さて、

夫婦心を一にして、よく、夫をたすけ、夫も亦妻をいたはり、互に隔意なき、是れ眞の夫婦なるべし。もし、不幸にして早く夫をうしなはゞ、妻は其の境遇と事情とに應じて、志ひて寡居を守らざるも、そは心のまゝなるべし。凡妻としては、育兒、經濟、衞生、社交、其他家事をつとむること、極めて大切にして、是れ女子の天職なり。又進では、分に應じて社會事業に貢献し、國家のため、同胞の爲につくすの心がけ肝要なり。暇あらばなほ文よむことを忘るべからず。是れ世におくれざらんが爲なり。かやうにつとむれば、常に心に暇なくして、ひがことを行ふべきひまなし。女子の、行をけがし、身をそこなふは、暇おほくして、爲すべきわざ少なきによるもの多し。たとへば、はせ行く馬は人をふまず、たゞすむとき、かへつて人をふむが如し。是れ、足に暇あるによる、人のわざは、世と共に益々志げし、ゆだんなくつとむべし。



此の十ことは、婦女子の守るべき道なり。凡家はその家政のとゝのふを盛なりとし、みだるゝを衰たりとす。富貴なりとて盛なりとすべからず。貧賤なりとて衰たりとすべからず。されば、家の盛衰は、家政のとゝのふと整はざるとにあり。女子は、家を治むるを以て職分とす、其の責任甚だ重し。しばしも之をわするべからず。

（完）

文章に就きて

下田義天類

女學世界の記者、松原岩五郎君、一日書を寄せて、女子の文章に對する余か卑見を徴せらる。余、頃日來、校務取分けて多端にて、回答を呈すべき寸暇を有せず。荏苒として日を捗るうちに、遂に、君より餘告せられたる日限に迫れり。今更辭退せむも、餘りに責任を

思はさるに似たれば、不用意ながらも、こゝに倉徨として、先、筆を執る事とはしたり。

抑、文章とは何ぞ。余常に云ふ。文章は、吾人の口語を筆に移し、而して、それを紙に記したるものに外ならず。故に口語は文章の本体にして、文章は口語の印影なりと。而して口語には、浮沈緩急の音調ありて、常に、其の勢を助成することありと雖、其の印影には、此の活動の勢を細に寫すこと能はざるものあり。こゝに於きてか、助辭、助動詞、若は感歎辭等の、常に、口語に使用せざる所のものをも、代用せざる可らざる必要を生す。これ、口語と文章との間に、稍その趣を異にし來れる第一の原因なり。故に文章は口語の印影なりと云ふと雖、所謂言文一致にあらざれは文章にあらすとひふが如き論旨にはあらす。たゞ、其の大躰の法を、口語に資りて俗言をは雅言に替へ、俗調をは雅調に替へて、口語の形躰の儘を筆に移し、而してこれを紙に記すべしといふにあるのみ。

國民の語には、必其の國自然の語調あり。其の國自然の語調には、また必其の國自然の語法を有す。此の自然の語調と、自然の語法とを、其の儘に寫したるものを國文といふ。故に國文の法は、其の國自然の語調と、其の國自然の語法とより割出したるものならざる可からず。他國の文法をかり來りて、直に自國の文法とせむとするときは、先以て思慮分別を加ふへき事柄なるべし。然れども、我か國にては、中古以來、漢文を借りて上下の通用文としたりしより、中人以上の國民の言語は、なかは以上漢語を混合し語り、其の漢語の混合より、ひきて國語の語調をも、漢文語調に移し、近世以來は、遂に和漢混合の語調によれる一種の文躰をさへ創造して、自他の用を辨するに到りしかは、こゝに始めて、實用的の國文を形造りたる仕合せを得たれと、一般の國語と國文との間は、大に懸隔し、其の弊は、終に平生使用する所の國語とは、成り得るたけ、其の趣を異にせるものにあらざれば、上品なる文章にあらざるが如き誤想を抱かしめ、加ふるに近來歐米の語調をさへ混合して、彌口語と文章とを離隔せしむるに到りたれは、支那風の文章

論、若くは歐米風の文法を以ちて、我が國文を律さむとするが如き奇き怪々なる顯象をさへ呈出するにいたたり。

かくのごとくに、幾多の變遷を經來りて、混雜を極めたる我が國文なるが故に、その見る所の方面により、文章を論する人の意見も、亦銘々各々に異なる所あるに似たれと、余がここに云ふ所の文章といふは、我が國民の多數が使用する所の、自然の語調と、自然の語法とに協へるものをさして、いふ積りなれば、世間の所謂文章家のいふ所とは、或は異る所のあらむも知るべからず。

さて、口語の功者といふに、明辨と達辨との區別あるが如くに、文章の功手にも亦、文章の上手なるものと、文章の達者なるものとの、二樣あるべし。上手とは、言葉少にして意味の甚明瞭なるものをいひ、達者とは用語豐富にして意義の能く貫通するものをいふ。此の二者いつれがよく、いつれがわろしとにはあらされとも、余が常に好む所は、後者にあらすして前者にあり。即、用語豐富にして、意義のよく貫通せるものよりは、言葉尠にして、意味の甚明瞭なる方を以ちて、文章の上乘なるものと思意せり。これを、口語の方にていはゞ、滔々として數千言を、立所に漲らして、言理よく貫徹するものよりは、寡言にしてよく一場を感動せしむるものを以ちて辨舌の功者なるものとすべし。然れとも、又時と場合とによりては、縷々として數萬言を繰り出し、以ちて敵手を屈せしむる必要も有るへく、諄々として倦むことなく訓戒を垂れ、以ちて敵手を反省せしむる必要も有るべし。されば、多辨饒舌も、折に觸れては用なきにあらされは、時に臨みて、此の活動の資を有するものにて、大方は寡言にして能く其の要領を挈げ得る力あるを、眞實の辨舌家といふへし。文章の功手も亦これと異ならず。余は常にこの境を冀望して未其の域に到れるものにあらず。これ、たゞ、余が文章に對する平生の好なるのみ。

さて、この好によつて、古人の文章を熟視するに、古人の名文章といふものは、大方は、其の用語簡單にして、而して其の意味の能く徹底せるものなり。用語簡單に

して、意味の徹底せむことを希望せむとには、古人の書けるさる躰のものに付きて、其の方法を求めさるべからず。

古人の名文章に付きて、余が心付きたる要點に左の四項あり。

第一　意趣の確立
第二　材料の撰擇
第三　敷置結構
第四　用語の適否

これなり。以上は、男女に拘はらず、文章といふものに就きて、深く注意すべき條項なり。而して、女子には女子相當の意趣あるべく、又女子相當の材料、結構、用語等あるべし。今これを、各項に分ちて、前段に陳べたる余が好みに如何をは適すべきかといふことを記し試むべし。

第一　意趣の確立

文章は言語の印影にして、言語は思想の符牒なり。故に、思想なき言語はあるべき理なし。意趣とは、即其の思想の一貫したるものを謂ふ。先、此の一貫したる思想、即一篇の意趣確立せられて、如何に文章を書き試みむとするとも、一言半句も書き得らるべきものにあらず。我が心中に、深く感じたることありて、其の感動したる心が、一個の思想となり、他の觀念と結合して、始めて一貫したる意趣を造り出し、其の意趣が凝りて、始めて一場の談話となり、または文章ともなるものなり。故に、文章を書かむとするには、先、其の書くべき事柄につきて、自分の意趣を確立すべし。而して後、始めて筆を下すことを得べし、其の意趣の確立せざる先に、强ひて筆を下さむとすとも、そはたゞ、いたづらことゝなりぬべし。

さてその意趣には、男らしき意趣あり。女らしき意趣あり。子供らしき意趣あり。大人らしき意趣あり。上品なる意趣あり。下衆じみたる意趣あり。斬新なる意趣あり。陳腐なる意趣あり。平々凡々たる意趣あり。卓拔俊秀なる意趣あり。其の趣の千差萬別なることは、

など丶、書き續くる時は、何となくその義剛々しく聞き取られて、さる手紙を遣取りする、女子の顔付さへ思ひやらる丶感あるべし。さまでの事はよもあらざるべけれど、近來女子生徒の、論文などを見るに、往々これと類似したる文章を、見聞することなきにあらず。本文の意中には、さまで高慢ぶりて、書きなぐりたる積りにはあらざるべしと雖、讀み見る人の耳には、甚聞きくるしく感ずるものなり。女子には、容儀を愼むといふことも、一つの心掛けなるべければ、物云ひにも顔ゆかみ、口とがりなどする言語は、成るへくこれを避けて言はざらむとすることそ女子のたしなみなる可けれ。故に、往古より、女子には女子のこと葉遣ひありて、男子と同じからざるものあり。又男子と同一なる言語にも、宇音便伊音便等の、もの優しく聞ゆる云ひ方ありて、イキシチニヒミイリ井とか、ハヒフヘホとか、マミムメモとか云ふ發音に多少の容儀を變すへき音聲をば、悉く、此の宇音便伊音便に、呼び替ふる慣習あり。所謂さいはひをさきはひといひ、つきたちをついたちといひ、おきてをおいてといひ、おほきなるをおほいなるといひ、またはあつしをあついといひ、さむしをさむいといひ、さしてをさいてといひ、ほしてをほいてといふ類、皆これなり。此等の音便語は、元來女子の言葉なるを、後世堂々たる男子にして、此等の言語を使用し、絶えて怪しまざるやうになりたるは、平安朝以來、世上の文弱に流れたるより、男子にして眉を黛き、齒を染めて女子の態度を裝ひつ丶、得々たりし時代の遺風にて、男子の爲めには甚はた忌はしき宿弊なり。中古の文學に心醉せる國文學者や詠歌者流などに、此の風殊に盛んに行なはる丶樣なり。されど、これは男子の文章論につきていふべきことならにて、女子の文章論にはさほど要なき事なれば、さまでは言はざるべし。たゞ、男子が、常にこれ等の言語を、使用するやうになりしより、女子が、自己の言語なるこ



とを打忘れて、遂に其の分界を紊り、かへりて男子特有の言語をも混用して、怪まさるやうに成り果てたるを慨嘆するのみ。堂々たる男子が、口鬚いかめしく作りたてつゝ、猶恙ぼ口して女子の態度を装ふもをかしけれど、女子が自身特有の言葉を男子に奪はれて、かへりて男子の口眞似して得々たるは、また不思議なる現象といふべし。

さて、女子は、都べてもの柔なるをよしとするが故に、その文章にも、言語にも、物柔なるを尊ぶは、勿論の事なれども、又時と場合とに依りては、剛々しき言葉を使用すべき必要もあるべく、窮屈聱牙なる言語を、使用すべき入用もあるべし。定家卿か歌の詞づかひを論ぜられたるものに

又歌の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて強弱大小候ふべし。それをよく〱見認めて、強き詞をば一向にこれを續け、弱き詞をばまた一向に之をつゞね、如斯に案じかへし案じかへし、ふとみほそみもなく、なだらかに、聞にくからぬやうに詠みなすが、きはめたる重事にて侍るなり。申さば、都べて、詞にあしきもなく、よろしきもあるべからず。つゞけからにて歌詞の勝劣侍るべし。幽玄の詞に、拉鬼の詞などをつらねたらむは、いと見ぐるしかるべきにこそ。されば、心を本として、詞をば取り捨よてこそ亡父卿も、申置き侍しか。(衣笠状)

といはれたり。これは、歌の上の議論にて、文章とわ、おのづから區別すへき所もあれども、強きことを述べむとには、自然と強き詞あるべく、弱きことを述べむとするには、おのづから弱きことはあるべきは歌も文も同じことわりなり。歌は一首の上に、太み細みのあるを厭へど、文章は一篇の内に強弱大小の入交ることとも避け難かるべし。但一段の内即一材料を言ひあらはす間は、此の定家卿の教のごとくならさるべからず。その雄壯なる事實を述べむとするに、しとやかなる詞を以てし、その殺伐なる事態を書きあらはさむとするに、穏かなる詞を以ちてし、なとしては一向にその情うつり難かるべし。これにつきて一條の好話あり。左に記

し添へて此の章を結ぶべし。

いつの事にか有りけむ。舊幕の時、正月元旦に、拔身の短刀一振、殿中に遺棄し在りたると有るげり。天下の大小名、悉く登城して、新年の吉端を祝し、今や將軍に拜賀して、千秋萬歳を謠はむとする時に、忽に此の變事あり。立たしりする侍番のもの、これを見付けて色を失ひ、其の所置方を朋輩に謀りぬ。皆云はく。これ容易ならざる事なり。表向にして公邊へ訴へ出づべしといふ。よりて止むことを得ず。屆書を認めて老中の前へ差出したり。其の文に云はく。

御　屆

一拔身の短刀　一　振

右今早朝殿中に打捨有之候間此段御屆申上候也

正月元日　何　某

御老中何の某殿

としたり。こゝに於きて、今まで和氣藹々たりし。新年の式場は、俄に樣子變りて何となくあたりに殺氣を帶ひ來れり。一老中これを手に取りて云はく。此の屆書認め振甚宜しからず。今一度認め代へて差出すべしとて、躬筆を執りて添削したり。云はく

御　屆

一短刀　一　振

但鞘無之

右今朝殿中にて拾取候間此段御屆申上候也

といふ數文字を書き改められたり。之を見る者、皆、異口同音に如何にもとて笑を含めり。甲唱へて、乙和して、この事忽に殿中の噂となり、聞くもの皆、掌を拍ちて歎稱し、一時帶ひ來りたる殺氣は、忽に煙散霧消して、却りて一層の和氣を加へたるとありきと聞けり。

拔身の短刀一振といふ語は如何にも殺氣ある語なり。和氣藹々たる祝賀の席などにては厭ふべき言葉なるべし。然して、短刀一振、但鞘無之と記しても、其の意味に相違あるにあらず。事實に於きては毫も替りたることなし。然れども、試に、彼と是とを對照して見よ。人心に與ふる感情は如何なる差異あるべきか。これ實に、用語の如何によるものなり。然れども此の語を以ちて、

強盗などの闖入したる場合の記事文に換用せば、如何らむ。

手を縛し足を縛して柱に繋き、さア出せ、出さすはかくするそと抜身の大太刀鼻前に突着けて迫り掛れりとやうに記せは、すゞみも、みわみも其の間に生し來るへけはど

手を縛し足を縛して柱に繋き、さア出せ、出さすばかくするぞと、鞘なき大太刀鼻前に突着けと記しては、一向に剛けも、怖しけに見え離かるべし。用語の適否此の一事を以ちても察すべし。

以上は、余か文章に對する大躰の意見なり、今少し例證を擧けて適切に且悟り易く言はまほしけれど、さては僅々たる紙數の内にて、述べ盡し難からむと氣遣し、故に、唯その大躰の注意すべき事柄をのみ記し試みたり。

要するに、文章は、記事にまれ、叙事にまれ、論説にまれ序跋にまれ、先、第一に、趣旨を確立し、第二に、材料を撰擇し、第三に、數置結搆を工夫し、第四に、適當なる用語を求むべし。かくの如くして、平生の口語と懸隔せさるやうに即自己の、朝夕に塾練したる自然の語法と自然の語調とに依りて、易々と書きくたすべし。かくの如くして、次第に練習を重ぬる時は、彼の言葉尠にして、能く一場を感動せしむる名文章も、遂には書き得らるべし。



附録 名家談叢

幼年時代に於ける自己の感化

三輪田眞佐子刀自述

私は學校へ出ます數が澤山ございまして、學校から歸りますと直ぐに塾生に講義を致しますのですが、其中へ又折々の御客來でございまして色々お話などもございますから、晝間は殆ど何も致します餘閑がございませぬ、それ故夜分になりまして餘所樣から參りました手紙を樂むで讀みますので、雜誌の材料なども何か拵へて置きたいと思ひましても此頃は中々出來ませぬ、晝間私をお訪ひ下さいますお方は何時も私が留守勝でありますので、夜分に御尋ね下さると云ふやうな譯で、中々纏まりましたお話を申上げるやうな餘閑がございませぬし又纏まつたお話を致しますには多くの時間を要しますから、切角何か話せと云ふ仰せでございますが、今日は少し許り私の幼年時代に於きまして感じましたことの一つ二つをお話申上げて置くことに致します。

私は一人娘でございまして、父が儒者でございましたものですから、幸に幼少の頃から書物を讀むことが出來ました、其上に自分が好きでございましたから相應に漢文も見ましたし和文も讀みました、けれども今日のやうに女子教育と云ふものが盛であれば宜しうございますがさう云ふこともございませ

ず、勿論學校と云ふものも女子の爲に立つて居るものはございませぬで、實に不完全な時代で誠に學問を致しますに困難を致しました、それで私の父は梁川星巖翁の門人でございましたから、私も又星巖翁の晩年の門人となりました、詩とか文とか云ふやうな會がございまする と私も出席致しましたが、幼年ではあり女のことでございますから全く父の餘惠で出席致したのでございます、さう致しますると其處へ出ます學友は悉く男子許りで女子と云ふものは殆ど私の外にはない位でありました、今日のやうに學問が進歩して、女子教育と云ふやうなことが盛でございましたらどれ程愉快に學問が出來たらうと追想されます、それ許りは唯今でも私は生來の遺憾に思ふ位でありますが、併しそれが又一得一失でございまして、其時代に…皆が皆までゝはございませぬが、或る一部の人は聖人賢人などの書物は勿數古人の善言格言と云ふやうなものを聽きまするど一言一句と雖も心肝に銘してそれを遵守する心になりましたから、總て學問を尊び敬ふと云ふ意が大變强うございました、それ故に古への賢人君子の感化と云ふものを受けて居りますから時として特異の人物が出來ました、ちよつと申して見ますると吉田松陰先生などは、生徒に講義をする時に忠臣孝子の話を致しまするど、自分が昔日の忠臣孝子の心になつて說かれたと云ふことで、又生徒を伴ふて戰場で忠死した人とか或は學問に務めて死なれたと云ふやうな人の墓に參りまして、淚を流して其人を敬慕の意を表されました、松陰先生と私は至つて懇意でありましたから實際をお話するのであります。

さう云ふ譯でありますから生徒が其の敬慕の樣子を見まして自ら心を動かし皆其感化を受けるやうになりました、それで松陰先生の門人には國家に有益なる勤王心のあるお方が多く輩出しましたのです、所が今の人々には實地の感化と云ふものが極く薄い、何ぜかと云ふに他から餘義なくせられるので

自ら進むで修めると云ふ心がございませぬ、學藝としては隨分出來る人があるが品位が高まると云ふやうなことは少しもありませぬ、それで私が今日塾生を教育して居りますにも成るべく賢人とか烈女とか云ふもの〻行ひを說いて聽かせ、さうしてそれを尊敬させ又其傳を讀ませると云ふやうなことで其感化を受けさせるやうに導いて居ります、それはどう云ふ譯かと云ふと私が十一二才の頃でありましたが、母親に連れられまして大和巡りと云ふことを致しました、其時に近江の石山寺に參りましたをり母親が道々話して聽かせまして、此石山寺は昔紫式部が上東門院に奉るために源氏物語五十四帖を書いた所である、其時代には清少納言始め才媛輩が出ましたが、實に德操の正しい者は稀れであつた、けれども式部はそんな濁流には染みませなんで、それのみか、あのやうなめでたい文をものしたのは誠に世の女子の模範となる者である、斯う言つて敎へられました、其時に私は忽ち心中に紫式部と云ふ者を慕ひますることが切になつて參りました、そこで考へましたのに今の世に斯う云ふ君があつたならば、朝夕に斯のやうな人に侍き從つて學びたいものであると云ふ念を起して、實に止む時なく追慕致して居りました、それで又其話を母親より聽きました夜は大層空が冴えまして、月が殊に美しく輝きましたから、宛然人界を去つた心地が致しまして、幼心にも式部が五十四帖を書かれた時も石山寺の窓を矢張り此月が照したのであらうなどと、追懷の念が極めて切になつて來まして、幼年でありますから不完全ではありますが其時に一首の歌を詠みました、

今もなほ心にうかふみづくきのあとをさやかに照す月かな

それで此歌を母に見せましたら母が大層喜びまして、お前もどうか女德を守つて學問が好きであるからそれを怠らないやうにして、あの式部の氣質に似たやうの人に成れと、斯う敎へられましたので、そ

れからと云ふものは其式部を心中に懐いて少　も忘れませなんだ、私に教へて呉れました此母も今は故人になりました、私も唯今では老年になりましたが此時の母の教へが素因となりまして其後は專ら女德をどうか守りたいと思ひまして、此式部を常に理想の師として居りました、稍々成長しましてから音博士松苗翁を師としそれに就て學びました、此先生の持論は學問と云ふものは讀書許りでは實に効がないものである、世の中の務に就て實踐躬行すると云ふことが第一である、別して女子は女子の行ふべき行ひを務めなければならぬ、今お前が門人になるが、お前を門人にして唯外に許り心を注がせて、世の中で謂ふ所の學問をして片輪者になつたと謂はれては私が濟まないからと、さう云ふやうに申されました、それで聊か私も女子の行ふべきことを心得るやうになりました、今日家庭教育を致しまするにも、生徒を學者的に養成すると云ふよりは、一家の主婦になつて適當するやうな女子を作りたいと云ふ方針を執つて居ります、併し專門の學問で學者になる者は特別で、文學的に教育しなければなりませぬからそれは別問題であります、

で私の師星巖翁の夫人に紅蘭と云ふ人がございましたが此人が私と同說でございました、此夫人は經學者で詩も書も能く出來まして書も巧妙に書きました、然るに矢張り夫人の務も一通りは出來まして、裁縫なども心得て居られて衣服などは仕立屋へ遣ると云ふことはありませぬで、下女を置きましてそれにさせるやうにして居りました、さう云ふやうでありましたから自分の書畫の落款にも針線餘事と云ふ四字を使用されました、私も其印を貰ひまして尙ほ今日に至るまで私も針線餘事と云ふ印章を落欵にして居ります、此紅蘭と云ふ人は私とは・・・師匠の家内でございますから師弟と云ふよりは殆ど母子の情を有つて居つたのでございます、私が緣に着きました時にも他家へは遣らぬ自分の跡を取ら

せると云ふことでございましたが、父が辭退しまして名家の跡であるから、お前が跡を取つても萬一名譽を毀損すると云ふやうのことがあつてはならぬからと言つて強いて斷りました、それで私は緣に着きましたが矢張り近邊でございましたから毎日お辨當を持つて朝から晩まで師家へ參りました、それから又朝飯を喫べると紅蘭夫人が私の所へ來て、晝飯は私の所で上げるやうに致しまして、夕方になると私が送つて參りまして向ふで夕の御飯を戴きまして歸つて來るやうに致しました、それで良人に賴むでどうか紅蘭夫人を阿母さんと謂つて下さいと申して夫婦共に紅蘭夫人を阿母さん〳〵と申して居りました、それはどう云ふ譯かと申しまするど、斯う云ふ御話があるのです。星巖と云ふ人は維新の人物で勤王に盡力致しまして。それを深く心配致して遂に病歿致しましたが、其死にまする時に紅蘭夫人を私の父と（宇田淵）、江馬天江、賴復次郎の三人に賴むで――後事を賴むで死なれました、尤も其頃他に人物もありましたが、此時分には此三人が先づ學者で而も西京に居りましたから、それで之に後事を托したのであります、然るに維新の後此三人共皆朝廷に召されて東京へ參つて仕舞ひましたので、其後は大變皆心配を致しましたが仕方がございませぬから、是は眞佐子に賴むだ方が宜からうと云ふので。それから私が專ら紅蘭夫人の世話を致しました、其時分に木戸孝允と云ふ方が西京に居りまして其人が矢張り御弟子でございましたから大變に力を得て安心して居りましたが、程なく又東京に參られて仕舞つて、殘らず留守になりましたので其留守中は私が守りまして其頃は紅蘭夫人が病氣でございましたから、尙更參つて御世話を致しました、其頃の有志の人が師の星巖翁の門人に澤山ございましたから、其有志の者を保護することが多かつたのでございます、皆私が其頃御世話を致しましたがまだ私は其頃は十代でございました、

それから德川歸順の前の御話をちよつと申上げますが、薩長土の勢を連れまして表から德川を攻めやうと云ふので參りましたのが有栖川の宮樣で西鄕吉之助が參謀でございまして、裏街道から――關手から向つたのが岩倉八千丸樣に參謀が私の父(宇田淵)でございました、で德川歸順の後に父は八千丸樣に從ひ東京鎭撫で居りました、其時に西京から父に送り來ました詩がございます、それは

朝芳夕醜議紛々　世事變更眞若雲　李白桃紅春雨裡　碧紗窓下遠思君

又

日月旗翻東海濱　官家營裡幾征人　知君密領軍符去　號令能明兵自振

で私は總て前申したやうの人の感化を受けましたから今日では極く〳〵學事が多忙の中でも矢張り家庭などには注意致して居ります、其家庭の世話をすると云ふことは、及ばずながら自分の身を以て生徒を敎育する積りでおります、それから又私が此三輪田と云ふ家へ嫁入りを致しまする時に、良人の方から妙な條件がございました、良人の名は元綱と申しましたが、其注文に――良人が媒介の人に申しますのは妻が嫁して來る日に書物箱とか机とか云ふやうな物は持參せぬやうにして呉れと斯う申されました、所が私が嫁入り致しましてからは諸方より參りまする手紙の返書などを代筆致しましたり又は良人の日記を付けてあげるとか云ふやうのことは、總て私が手に適ひましただけのことは良人にさせませぬで私が致しました、それから又一家團欒の上から謂ひましても良人の友となりまして、或る時は歌を詠みましたり、又良人が書きものを致します時は故事などを捜してやりましたりして居りましたので後には良人の方から學問をして呉れ、己が國文を敎へてやらうと云ふやうなことになつて參りました、又書物を求めますにもお前の好きな書物を本屋を呼むで買へなどゝ云ふやうになつて、嫁しま

する前に書物箱机など持參は出來ぬと云つたことゝは全く反對になつて參りました、斯んなことより私が推考しますに世間で保守的の極端論者の謂ふやうに、女子はいろは四十八文字を書ければ宜いとか又手紙さへ書ければ女子は事が足りる、學問をすれば高慢になる、夫を輕んずるなどゝ論じて居る者もありますが、それ等は取るに足らぬことゝ思はれます、現に唯今でも斯う云ふことを申す人があります、今度設立になります女子大學は高尙過ぎると云つて心配して居る者があります、併し私の考に依りますると何は捨て措いても女子は精神的の訓練がなければ、自分の感情を制することが弱くなつて參りますから憤怒とか苦痛に打克つことが出來ませぬ、其憤怒苦痛に打克つて從順なる圓滿なる心を保つことが出來ませぬから、高慢になり卑屈になり而して女子の天職を全うすることが出來ないと云ふやうになります、詩經の中にありましたが宜兄宜弟と云ふことがある、是は嫁入りを致しまして總て家庭の平和一家の平和を保つと云ふことを謂つた詩でございまして、此從順なる圓滿なる、感情を制する心がございませんと、家庭の平和と云ふことも出來ず一家團欒をすると云ふことがなくなつて仕舞ひます、それで又普通の學問と云ふものが大切でございます、普通の學問がございませぬと事務に疎い、又家庭を作りましても其家を整理すること即ち其資格がございませぬ、舅、姑に仕へ或は兒童を導きます所謂良妻賢母となりまして內助の功を奏すると云ふことが出來ませぬ、勿論學問を藝視するとは一般に善いとは謂へませぬが、動もすれば今の人は學問をすると事情に疎くなるとか、學藝に誇つて徃けないとか、人を侮る心が出來るとか、斯んなことを申されますが、是は學問自らが惡いのではなく、學問に伴ふ弊害であります、そこで弊害のないやうに導びいて時勢に適ひまする高等及普通の――所謂文明の學問をさせなければならぬのです、能く考へて見まするに近頃は人が何れも學問と謂へは

專門實用の敎育を喜びますが、敎育の中で最も重きを置く文明普通の學問を忽諸にしては決して良妻賢母の資格を備へることは出來ずして却つて學問の結果が反對に歸するやうになつて參ります、又考へて見ますのに高貴の方は別問題としまして、相當の地位にあります人の娘には一般に平民主義の學問がなければならぬと思ひます、それは何ぜかと申しますると女子の本領は良妻賢母と云ふことになりますけれども、人の一生と云ふものは必ずしも良妻賢母の境遇に止まつて居ると云ふ譯ではない、事情に依りましては未婚の儘で居らねばならぬこともあり、或は良人に早く別れて寡婦で居る境遇もあります、尙ほ又一個人として働く義務的の境遇もあります、

尙ほ日本の今日は世界各國を隣の國として交際する時節でありますから、社會全般の進步上昔日のいろは敎育では女子一個の範圍が狹隘になります、是が狹隘になりますれば一日でも他の人々に交際することが出來ませぬで、さう云ふ點から申しましても道德學は勿論智識藝能の學問が缺くことは出來ませぬ、私は幼年より前申上げました如く一人娘で親にも愛せられまして其後三輪田家へ嫁しましてからも、良人が勤王の 志 を有つて居りましたから相應に名望もありまして何不足なく暮しましたが、中年の頃に良人か歿しまして其時極く幼少の一子を連れまして私は實に妙な境遇になつて仕舞ひました、(此時女史滿腔の感情に打れしもの丶如く見受けぬ)其折は實に妙な感じを有ちました、幼稚の兒を抱きまして故鄕へ歸るも意氣地がない……漢學一方の女でありますから極めて世事には疎い、去りとて良人は勸王家でありましたから家政に關係しませぬでしたので實に儋石の貯へもなかつた、實に其時は纜を絕つたる捨小舟の如く便りなき身の上となりました、餘りのことに容易に淚も出ませぬやうの有樣で、若しも此時分に學問と云ふものがありませなんだならば、如何なる生活をして居りましたか

分りませぬが、幸にも前お話申したやうに多少の感化を受けて居りましたから、……こゝが其の學問がなければならぬ所であります、で私は此感化の助けを得ましてそれでまア他の人さまにも聊かの御迷惑を掛けませず、故鄕の親にも格別の心配も致させませぬで漸く一子を成長させて、其子は幽冥の夫に恥を與へるやうなこともなく、相應に學問も修めさせまして大學に入學させることになりましたが、其入學試驗中に歿くなりました、で其子の名は元孝と申しました、實に往事の難儀を追懷致しまするど……(女史此時感涙に咽ふものゝ如く轉た聽者をして同情を催さしめぬ)今日の女子敎育に往事困難の經過を適用致しまして、或は世間一般の女子敎育にも此主義を傳播させて居ります、實に今日此往事のお話を致しまするど涙が胸に迫るやうな心地が致しますが一言で申しまするど俗に謂ふ藝が身を助けたと云ふやうなことでありませう、それで今申上げた通り學問とか敎育とか云ふことを女子がしなければならぬと云ふことになつて來ますと、將來此學問で如何なる家庭を作らしむるか、是が大問題で之に就て私の考を申上げまするど、家庭思想と家庭觀念と云ふことを女子の腦裡に注ぎ込むで置かなければならぬと思ひます、現今の學校敎育を受けた人には圓滿なる美はしい一家團欒の家庭を作ることが出來ない方が多いやうであります、其原因を探索して見まするど……現に統計上の話を聽きますると「現今日本の結婚者中殆ど三分の一は離婚をする卽ち一箇年で日本に十二萬人位の離婚者がある」と云ふことです、で是は單に夫婦間の不幸のみではございませぬ、離婚の妻が產むだ兒女を遺して離婚すると、其不愍さは眼も當てられぬ不幸でございます、漸く成長しましても一生繼子と謂はれて肩身が狹い又それを育てる繼母も大變な心苦勞でございます、さうして其子が成長しましてから性質が如何であらうかと思ひますと圓滿な性質はないやうであります、現に岡山の孤兒院で育てました者を

見ると、孤兒は性質がどうも圓滿でないやうであります、育兒者はそれが一番心配であると云つて居ります、此離婚の原因になることは澤山ありませうが、先づ第一舅姑の舊思想と新婦の新思想との衝突である、それから實際と理想との衝突又東洋と西洋との衝突であります、併し私の考では此處置を着けることも又多くあらうと思ふのです、第一現今の生徒が舅姑の地位に立つた時分になりましたら餘程減じて來るだらうと思ひます、第二には學問が進むで參りましたら一般の人が敗德と云ふことを知つて來ましたなら餘程違ひませうし殊に今日では日本の富の程度が低いが、日々富の度が進むやうになつて來ましたら少しは此弊を矯め易くならうと思ひます、併し私の敎育上で執りまする方針は日本の現今の文物制度を根據としまして、さうして西洋の長所を取るやうにしなければならぬ、何時までも舊い株を守るやうなことは惡いが、と云つて西洋流に偏じて仕舞つても惡い、兎に角平等主義を執らなければならぬと思ひます、まア男尊女卑が東洋の缺點の如く西洋の女尊男卑も又缺點であります、玆に私が思ひまするのに一家團欒の家庭を作り平和の生活をする條件が三つあると思ひます、それは一には愛二には嚴三には秩序、此一家と云ふものは全躰嚴と云ふ許りでは大變惡い、何ぜなれば乾燥無味になつて仕舞ふ、又愛のみに偏じて參りますと墮落になります、即ち上下も長幼の差別もなくなつて仕舞ひます、さう云ふ譯でありますから一家は必ず秩序と云ふことが大切で、親子夫婦の間は嚴と愛との秩序か第一であります、然るに西洋の今日の家庭は愛が勝つて東洋の家庭は嚴が主になつて居ります、でありますから愛もあり嚴もあり秩序もあると云ふやうにするのが肝要であります、嚴があつて長幼の序が立ち愛があつて乾燥無味を和らげると云ふやうにしまして種々の方面から折衷的の家庭を作らなければならぬ、併し是は自分が敎育上實際の經驗から感じましたことを申上げましたのですが、要

する三十世紀の女子敎育に關する社會問題と云ふのは、まア主として家庭團欒のことであらうと思はれます、尙ほ家庭に就きましては種々お話もございますが今日は是にて御免を蒙りまして、又機會がございましたらお話致す積りでございます、唯ホンの私が幼年時代に於ける感化並に敎育に關する實歷を申述べたまでのことでございます（三十四年二月十五日）

清韓遊歷所見

奥村五百子刀自述

私は今度支那から歸朝して、是非軍人の遺族を慰勞する會（即ち『愛國婦人會』と申まするので今日は其の爲め近衞公爵婦人に參ッて宮樣に總裁になつて頂く事に願ひました）でそれを立てなければ成らんと思ひ立ちましたのは、實際彼の國へ往つて兵士の難義をする樣や、傷病兵などの辛苦する有樣を目のあたり見ますに付て如何しても此の儘にして置く事は出來ないと思ひ立つたのです。夫は何故かと申すと結局金が足りない爲めに、看護婦などの派遣も少ない所から漸次病人の世話が屆かずして無慘の死を遂げさする者も多いのです、如何しても私の考へではこれからは病氣に成つた兵は、其地に於て大抵全快する迄看護して夫れから當地へ送り廻すと云ふ樣にしなければ迚も仕方がないと思ひます。夫れから亦內地に於きましても軍人の遺族などの救恤と云ふ事も充分屆きません爲めに、隨分困難して居る者も在るやうですから此等の人々にも縱令僅少計りの者でも宜いから年々頒つと云ふ事に仕たいのです。左樣で無いと終には軍人に成る人が無く成つて仕舞ます。只今でも彼地此地で聞き

ますのに、其遺族の人が歎きの餘り斯う申て居るさうです。『私も伜を軍人にさへ仕なかつたら斯んな苦い境遇に陥りは仕無かつたものを、軍人に仕たが爲めに死なれて仕舞てあとは此始末だ。夫れだから何でも向後は小供を育てたら、指物師でも商人でも何でも宜いから軍人に計りは仕ない方が宜い』と斯う申すさうです。實に夫れも尤もな話で杖とも柱ともたのむ伜や夫に死なれては後の者の困難は實に尤も千萬だと思ひます。夫れですから私は皆樣にお勸め申て一ヶ年に一人の婦人に就て襦袢の襟一枚宛を脱いで頂きたいと申すので御座います。皆々樣も其つもりで心懸けて下すつたら一ヶ年の間に襦袢の襟一つ位の事は如何にても成るだらふと思ひます。私が實に感心致しましたのは、天津領事の夫人です。夫人は其名を濱子と申しまして、佐賀の人で御座います。昨年清國が各國と戰爭が始ッた當時に於て同地に居留して居る婦人は皆逃げ匿て仕舞た中に、夫人は其下婢と二人領事館に止まつて居つて夫の鄭氏を輔けて、雨霰と降る彈丸の中を物ともせずに往來して、自から飯を炊いたり、看護婦人に成つたり。夫れは〳〵あらゆる艱難辛苦を盡されて、又同地居留民の爲めに食物其他の需用物を求める爲めには夫の鄭氏が百圓出せと云へば夫人は必ず二百圓出すと云ふ樣な工合にして、殆と家産を盡して之に當て仕舞ました。其邸内には東本願寺より派遣された所の僧侶を招待して、戰死者の後世を吊ふたり、實に何から何迄行屆て其心を盡された事と云ふものは言葉にも筆にも盡す事は出來ません實に夫人は日本婦人の活きた龜鑑と云ふべき人です。私は杭州と云ふ所へ參りました。玆には武備學堂と云ふ物があつて、其所に陸軍の方の敎師には日本から齋藤大尉と林、三宅といふ三人が敎授に往つて居られます。尤も此内で大尉は齋藤さん丈で他の二人の方は少尉であります。其校の校長は支那人の吳玄孫と云ふ人であつて私は其人にも面會しました。夫れから文學の方の敎師には本願寺から、

伊藤玄道と云ふ人が參つて居る。又其所には寄宿生徒も許多おいてあります。そこで私は其の武備學堂の授業を一度見ましたが、其生徒の年齡は十八九才位から、三十四五才位迄の人が入校つて居りますが先づ私が第一番に、不思議に感じましたのはその服裝です、何故と云ふのに、敎師の大尉はちやんと軍服を着けて、劍を帶びて居られるのに、其生徒が皆銘々思ひ〳〵に紫緞子の袴やら、淺黃緞子の袴を穿いて居つて少しも一定して居らぬのです。夫れゆゑ私は大尉に一躰彼の生徒は何に成る生徒だらふと問ひました。而うすると彼れは陸軍の將校だと申されましたから、夫れなら貴官は制服を着て居られるのに、生徒は何故軍服を着けて居らないのですと申しましたら大尉は苦笑を仕ながらイヤ其の愚鈍には實にお咄にならない樣な事柄があるのです。實は此所では文官の方は非常に勢力があつて威張つて步行ますが、武官の方は軍服を着けて他へ出ると人民に道を讓らなければ無らないのです。夫れは何故かと云ふに、當地の兵は皆土方や日傭に傭はれて往くのです。夫れですから人民の方は雇つて使ふのですから旦那樣で威張つて居つて、雇はれて使はれる方の兵士から道を讓らなければ無らないのです、尤も彼地では日本と異つて兵士を皆給料で抱へるので其給料は日本の二圓五十錢位に相當のださうです。夫ですから自分一人の人はどうにか喰べて往かれますけれ共、親とか妻子のあるものは、其家族を養はなければ無らないから、日傭にでも何でも雇はれて往くのです。夫ですから彼地では皆兵にならふか乞食にならふかと申て居る位です。左樣な譯ですから自然兵士に出る人が少ない故徵兵適齡なども十五歲から五十歲位迄の人をとるのですから實に不揃なものです。夫れで調練は一ヶ月に四、五回位あるのださうですが、之れもほんの申譯丈けの事であとは土方に雇はれるのです。斯樣な工合ですから、彼の國では軍機だの何のと云ふ事は賑はぬ譯だと思ひました。夫れですから彼の北京の

城の門の扉などはあの通り、丈夫な、一尺五寸も厚さがあつて其上金物で以てすつかり張りつめて在つて實に只見た所では如何しても人間業で之れを破ることは出來まいと思ふ位な城門であるのに其上門の内側には土俵を高く積重ねて實に堅固な物で在つたけれども、どう〳〵日本兵士の爲めに綿火藥で破られて仕舞ました。ですから幾程道具や、仕掛計り丈夫に出來て居りましても之を守る所の兵士が弱くては何の役にも立ちません。夫故何でて今日の處は兵士を強くして軍機を益々隆にするより外は致し方が無いと思ひます。

夫れから又賊の多い事と云つたらお話に成らない位で、一寸他へ出ても十圓以上の金を持て居ると直ぐに殺されて仕舞ふ。で金持の家などでは、夫れは〳〵非常に要心して居つて中々這入る事の出來ない様に塀などは一丈餘も高く築いてあります。尤も巡査もある事はあるけれ共、金さへ遣れば如何にでも成るのだから何の役にも立ちません丸で無政府同様なのですから皆各自に自分で守るより外仕方がないのです。斯樣な仕末ですから旅などする者の難澁と云つたら實にお話には成りません。

又或時外へ出で見ましたら一の川を隔て大勢の人が兩岸に立つて向ふと手前と戰爭を仕て居りますから、彼れは一躰如何して何を爭つて居るのですかと尋ねましたら、或人の云ふのに、あれは二ケ村の人民が水爭ひを仕て居るのだと申ますから、私がそんな水爭ひ位にあんな銃砲などを打つて戰を始めてお互ひに死人を出さなくつても政府に訴へたら宜さそうな物だと申しますと、其人の答にイヤどうして夫れを訴へて理非を正す事が出來る位なら彼等迚もあんな戰なんかは致しません。けれ共此の國では中々而うは往かんのです訴へれば結局金の澤山ある方の村が勝利を得て金の無い方の村は敗るに定まつて居ますから夫れで互に政府に訴へるよりも各自に自分の力の限りを盡して戰爭をするので

す。左樣有樣ですからして、此の國の人民は百姓が肥料を擔いて歩くにも其息杖の中に鎗を仕込で夫れを擔いであるくのです。

夫れから彼の國の母親が小供を育てる其の仕方と云ふものは、實に日本などとは比べものにならんのです。先づ小供が生れて少し大きくなると母親は常に小供に向つて斯う云つて聞かせるのです。お前達は何でも金を溜める事を一生懸命に心懸けないと不可ぞよ。金が無ければ妻を娶る事が出來無いからと斯う申して聞せるのです。夫れは何故かと申すと、彼の國では中等以上の人でも亦極く〳〵下等の人でも皆嫁を金で以て買ふのです。夫れですから其の買ひ得る丈けの金が無い人は一生涯妻を貰ふ事が出來ないのです。其替りに斯うして一旦金を出して妻を買つた以上は若しも其妻が自分の氣に入らなければ、何處なりとも勝手次第に又賣飛すのです。最早斯う成つた以上の實家の親達は夫れに付いて何とも云ふ事は出來ない。夫れで彼の國の習慣として、嫁を買つてから三日目に、聟の方から嫁の實家へ、豚を丸の儘油揚げにして其頭へ、花頭挿を挿した物を遣るのです。之れは其嫁が無事に其家の妻に成つた所の證據です。夫れで若し三日經ても嫁の實家へ、其油揚の豚が往かなかつたなれば最早其女は其家の妻に成る事は出來ないのです。他に賣られて往かなければ成らんのだ。凡て斯う云ふ樣な始末で少しも人權を重んずると云ふ事が無いから、夫れで今日の樣な有樣に成つて仕舞つたのであらうと思ひます。（三十四年二月十八日小石川養育院に於て記者筆記）

畫談

野口小蘋女史述

畫には色々流儀もありませうがまづ私の流義では初めに四君子を習はせまして、運筆の稽古をさせます。それ故に成る可く長く四君子を習つて呉れる方が宜いのです、四君子が巧く畫けるやうになッてから、花卉石芝類を敎へます。それから筆が動くやうになると淡彩を敎へそれから段々寫し物をさせます。寫生の出來る力が付けば寫生もさせます。さうして成るべく古人の書いたものを見るやうにさせます。人の書いたものを鑑識することが出來ぬやうでは、迚も繪は書けませぬから、成るべく古人の書いたものを見せたり、寫すとの出來るものは、寫させるやうに致します。さうして試して見まするに、同じく繪を習つて居る子供でも、自分で繪の書ける者は、古人の書いた繪を見せても、此處は巧く書いてあるとか、こゝは巧くないとか言ひますが、私が平生見込が無いと思つて居る者は、其鑑識が出來ませぬ。夫故に繪を習ふには、どうしても鑑識がなければなりませぬ。己が書くことばかり知つて居て、人の書いた繪を鑑識することの出來ぬやうな者には、迚も繪は出來ませぬかと思ひます。

又繪を敎へるには、唯繪ばかり書けても、落款を書く位置を知らぬやうでは困りますから、是も敎へなければなりませぬ。最初の中は落款を書く位置も分らず、縦し書いても餘り拙筆では肝心の能く出來て居る繪を打壞はすことがございますから、繪を習ふなれば少しは學問もし、書も習つて貰ひたい。さうして落款の位置の治まるくらゐに書いて貰ひたいと思ひます。將來見込の無い人には申しませぬけれども、是ならば將來物になるだらうと思ふ人には、其事を話しまして、一寸繪を書いてもそれを私の

前へ持つて參つて、どこへ落款を入れませう、どのくらゐの大きさにしたら宜からうと云ふことを相談させるやうに致します。又餘暇があれば、學問もするやうにして貰ひたいと申して居りますから、少しはやる人もあるやうでございます。流儀に依つてはさう云ふことにチヨツトも構はぬ流儀がございます。どこへ落款があつても、大きくても、少さくても、少しも構はぬ人があるやうでございます。それは必ず人が非難して居るやうでございます。あの社中は繪は巧いけれども、落款の拙いのには閉口するなどゝ云ふ人がございます。私は子供の時から學問は致しませぬが、學者や文人と交りまして、こんな落款を書いて置くと仰しやることが耳に這入りますから、自然自分も注意をするやうに致しましたから、門人にも其事を心掛けたら宜からうと云ふことを申すやうになるのでございます。

私が繪を習つたのは親が好んで習はせたのでは無く、私が四歳ばかりの時天然痘に罹つて、無理を言ふところから、筆くれ、紙くれと言ふのを、親が宜しく／＼と言ふて與へられた時、是が梅だとか、これが菊だとか云ふて、形狀も何も爲しませぬが、筆を持つことが嗜きでございますから、書いて居りました。

私が繪を習ひ初めたる頃は、今より四十二三年も前のことでございますから、まだ世間には學校も無し、唯手習師匠とか何とか云ふものがあるだけで、普通の婦人は裁縫でも出來れば宜しいくらゐでございまして婦人に繪を習はせる者は少ない時でございましたから、親も固より私に繪を習はせる積りはございませぬで、お前繪ばかり書いて居て、どうするかと申しますから、繪書きになるなどゝ云ふて居りましたが、段々人の書いた繪を見て書くやうになりまして、親も承知して繪を習はせるやうになりました。それから初めは大阪の人で今の流儀と違ふ人に手本を書いて貰つて、習つたことがございましたが、是は僅のことで、多くは古人の書いたものを見て習つて居りました。

それから少し譯が分つて來てから、京都の日根對山と云ふ人の門人に入りました。其頃まで自分勝手にでも筆を持つて居りまして、少しは繪も書けるやうになつて居りましたから、折々繪を書いて先生の所へ持つて行つては論を聞き、こゝは惡るいから斯うしろと云ふて敎へて貰ふやうにして居りました。日根が沒しましてから後は、誰に就て習つたと云ふ譯はございませぬが、私は何も繪に就て天稟の才があると云ふでもございませぬし、當時は勿論繪の學校があるでは無し、師匠を取つたところが、幾日々々に稽古をすると云ふ譯でも無し、唯師匠の所へ繪を書いて持つて行つて、こゝは繪にならぬ、斯う云ふものでは無いと云ふ話を聞くだけで、私が今子供に敎へるやうに、手を取つて敎へるのではございませぬ。唯土佐風を書く人の所へ行くと、私等の書く時はあゝはしないが土佐派ではあゝ云ふ風に書くかと云ふことに眼を着けて、覺えるやうにしました。それは即ち自分の工風でございます。只今では三四年稽古して居つてもチヨツトも出來ぬ人がございますが、それでは困ります。昔は今日とは世の中が違ひますから、師匠からさう明細に敎へて貰つたのでも無い、自分がどうかして繪を書きたいと云ふ熱心から起つて出來るのでございますから、自分の流派でなくても、人の書く所に注意して、あれはあゝ書くものかと云ふことを見て、著色などを覺えたのでございますから、唯師匠から敎はるばかりでなく、自分の働が無くては、迚も本當の繪を書く者にはなれぬと云ふことを時々娘などに話します。今日は上手下手は措いて、若手に大層繪を書く人が出來まして、令孃方などにも繪を習はせるやうになつて流行り物のやうになりました。美術學校などに入つて專門に繪を習ふ者は別でございますけれども、さうで無く慰み半分に親御も繪を習はせたいと云へば、自分も習ひたいと云ふ者が澤山でございます。其中には非凡の上手も出來ませぬが一寸筆を持つ婦人が大層出來ました。私の子供の頃に婦人で

筆を持つ人は、大垣に江馬細香と云ふ人がございました。是は書畫共に出來、又詩も作りました。それから京都の梁川星巖の妻に紅蘭と云ふ人がございました。此人は詩は固より出來ましたし、繪も四君子ぐらゐは書きましたが、今日から見れば感心した繪ではございませぬ。又御一新後では奥原晴湖が出まして、一時文人畫のやうなものを書きましたが、此節は又密畫を書くやうになりました。先づ婦人で繪を書いたものはそれくらゐのもので、其外世間で知つて居るやうな人はございませぬ。今日では繪を書いて専門にして居る女子も大分ございます。其他慰みに繪を學ぶ人は數知れずでございます。尤も晴湖さんなどは私共より年長の人でございまして、他へ嫁さずに修業した人で、自分が望んで繪を習つたもでございますから、少し變つた人でございませう。今より四五十年前では親に勸められて繪を習つた人はなからうと思ひます。其頃は婦人は裁縫を習つて置かなければならぬとか云ふことで、縱令其子が嫌ひでも親が勸めて少しでも敎へたものでございませうけれども、繪を書くとか、詩を作るとか歌を詠むとか云ふやうなことは、自分から望んでした者の外はございませぬから、隨つて熱心に稽古をして、良く出來る者が現はれたのでございませう。今日はさうでなく、當人の嗜き嫌ひに拘はらず、親が勸めて繪を習はせるのでございますから、習つても出來ない人の澤山あるのは當然かと思ひます。

昔時清國には繪を良く書いた婦人がございましたが、今日清國の人に逢つて話を聞きますと、婦人で繪を書く人はございませぬ。支那人は婦人の繪を書くことを好みますが、一寸花卉を書く人があるくらゐのもので、山水などを書く人はございませぬさうです。私共へ支那人が繪を書いて貰ひたいと云つて頻に來る時は、必ず山水を書いてくれと云ひますから、どうして山水を好むかと云ふて聞いたところ

が、支那には山水を書く婦人は無いと申しました。

此節は密畫々々と云つて、密畫が流行りますが、繪書きに取つては却て密畫の方が書きよいでございます。一寸古人の繪があつても、密畫なればどうか眞似が出來ますが、粗畫では一寸眞似をしやうと思つても出來ませぬ。世間では密畫々々とばかり申しますが、餘り密畫でも面白くございませぬから、五十年も經つたならば、又餘り密畫で無いものが流行るやうになりませう。併し眞黒なツク子芋のやうなものを良いと云ふのではございませぬけれども……眞直な線を引くに、唯眞直に引けば眞直に出來ますが、大腕力でズウツト眞直に引いたものを眞似をするのは弱い手腕では出來ませぬ。

私共が數十年間繪を書いて居る中には、隨分困難なことに出逢つて、どうして斯う云ふに出來ないかと思つて、嫌厭になることがございます。今でもさう云ふことがございますが、自分で出來ないと思ふ時は、技倆の上る時でございます。其の時は自分の書いた繪を見るのもいやになつて、突込んで置いて、一二箇月の後それを出して見ると、ソナイに惡るい繪ではございませぬが、其時は惡るいと思ふのです。それが爲めに中頃で止める人が往々あるのでございます。

私共のやうに繪の事を專門にして居ると、繪の事を忘れたことはございませぬ。餘所の家に行つて居つて、庭に鳥が飛んで來るを見ても、それに氣を注け、又夜分でも寢られぬ時は繪のことを考へ出して、あれはどうしたら宜からうと考へるところが往々ございます。其くらゐに苦心して書いても、一枚として難の無い繪はございませぬ。書いてしまつて後こゝは斯うするのではなかつた、あすこはあゝするのではなかつたと思ふことがございますが、それを一々書直すことは出來ませぬから、其儘にして上げますが、自分で考へれば瑕瑾だらけでございます。

日本の女子教育

棚橋絢子女史述

女子の教育と云ふことに第一大切なのは、昔から言うてある通り、夫婦と云ふのが一番大切であつて、夫婦あつてから親子と云ふものもあり、又主從と云ふものも君臣と云ふものもある。であるからして此夫婦と云ふものが一番大切であります、其夫婦の大切な所を云ふと、先づ昔の教――私共は古いことが矢張り好きであつて、今の風は善いには違ひないけれども、極く根本から善くして往かむならぬ、それであるからして女大學と云ふもの――私共は女大學と云ふものは好きは好きですけれども、強ちアレを全然アノ儘で今日用ゆると云ふことは難かしく思ひますけれども、アレを鹽梅能う解しさへすれば、餘程良い書物と考へるのです、それでマア第一彼の女大學の開卷にありますが、女子は他人の家へ行くものであるからして、それで親の教を忽諸にしてはならない、男子よりも格別注意をして教へなければならぬ。其注意が足りないと云ふと良夫に疎まれ、且つは舅姑の教が正しいと云ふとこれに又堪え難く思ふ、平素嚴しく育て付けて置かぬと云ふと、どうしても其結果が惡いからして、遂には離縁と云ふやうなことが起つて來やうと思ふ。

それであるからして此一般の教育、即ち今では女子教育。女子教育と云うて大變に盛んになつたやうでありますけれども、皆其皮想であつて、根本の所に一向注意が足らなからうと私共は考へるのです、根本と云ふのは今の夫婦が一番根本で、夫婦を根本と見れば女の子に其教育をするのが一番大切である、日本ではどうしても根本的の教が第一であります。

そこで今の子供と云ふものは、女子の小さい時から他へ嫁に行くものであるからして、一家を治める——他人の家を治める者であるからして、自分の家に居るならば、親と云ふものはそれは心安いものであるからしてどうでもなりますけれども、御互にヤイ〳〵と言つて叱つてもそれだけで濟むけれども、舅姑となると何方にも遠慮がある、又言ひたいことも言へぬと云ふ所から、それで兎角他の家へ行つて親でもない時には能く治まるかも知れない、けれども、親があると始終紛擾が絶えないと云ふやうなことが起る、ト云ふのは誠に情けないことであるからして、子供の中からどうしても從順と云ふことを主に致し、從順と申しても唯ハイ〳〵と云つて居るのではないです、確固とした心を有つて居らなければならぬ、それには小さい中から色々その昔の節婦とか烈女とか賢人とか云ふやうな人の言行を能く聽かして、さうして根本の固まるやうに一つ仕入れてやらなければならぬのである、さう云ふ工合に仕入れて行きますと云ふと、小供の精神が確かになるからして、それで追々敎育を受けても是が根本になつて、敎育を受けると自然其方針を自分にも取り、親も亦其方針を取らせ行くのが大變に必要であらうと思ふ。

彼の詩經などの初めの所にありますが、ア、云ふ具合に矢張日本の婦人も心懸けて行きたいものだと思ふです、嫁に行くと云つても先づ兩方とも非常に確かに撰んで、それから嫁に行く、男子の方もどうか一家を旨く治める者、金だとか顔だとか云ふやうなものに心を用ゐないで、其人の性質の確かな、全く母と云うて耻かしくない、後に屹度英才を敎育して行くと云ふやうな人を生まなければならぬし、又女の方でも唯肩書があるとか、又今日官途へ出て立派にして居ると云ふやうな所ばかり目懸けずに、どうぞ其德のある、其人物の確かであると云ふやうな人を撰ぶと云ふ工合にして行きたいのです、さうし

て兩方が丁度適した所で夫婦と云ふものが出來る、スルとそれから子供を育てると云ふことも、夫婦打合つて方針を同じやうに執つて行くやうに、其子供を養育しますれば、矢張りそれからそれへと子供が成長して立派なる人になると云ふ具合に立つて行く、それはマアさうやつて撰んで行かなければならぬ、撰んで行くにしても、此一家を治めるに付て、自分の身を愼んで、さうして良人の良いのを撰ぶ、それから一旦行けば又どんな良い所でも、美い衣服を着て、さうして交際々々と云つて外へ出たりして遊んで居るのが藝ではない、是も詩經を引くやうですけれども、着物を織ると云ふやうなことがある、矢張り此女工と云ふことを能くして行かなければならぬ、是が儉約の一つである、自分が織縫――織ると云ふことまで行きませずとも、縫うてさうして濯ぎ洗濯を自分に於てするとなると、ナカ〳〵一枚の着物は容易でないと云ふことが知れるからして、儉約をする、すればそれだけの得と云ふことが日本の經濟上に現はれて大變に宜い、支那では御妃でさへ――昔は日本でもさうであつたんですが、矢張り蠶を取つてさうして其女工の苦勞と云ふことを知るやうにしてあつたけれども、それを看做つて――下の人が看做つてやらむならぬと云ふので皆するのたけれども、下の方の驕奢が――却て中邊の所の驕奢が隨分劇しいものであるからして、近頃の樣子を見ると中々家で着物を縫うと云ふやうなことはない、皆他へ出してさうして美しい着物を着るからして、人にさせれば汚れることも厭はないし、又拵へるのも良人が拵へて呉れるのだから、一向に自分に苦勞と云ふことも知らないと云ふ理窟です、驕奢が自然に長じて來る、昨日も私は一寸人に聞いて見ると云ふと、日本には大變御金がないさうです、御金がなくて銀行などへ行つて見ると、是で軍艦があつたり、兵があつた所が戰爭は迚も出來ることはない、出來られない、一遍の戰爭も出來る金はありはしない、だからしてどうしても是はどうかしなければなら

ない、それを恬として矢張りモウ皆自分達の懐合さへ好ければ國はどうしても宜いと云ふやうな——口では御國のためぢやとか云つてナカナカ宜いことを言つて居るけれども、内幕へ這入つて見ると云ふと國を賣ると云つても宜い位です、ナカ／＼此御金がないのだから、夫等は能く男子ばかりでなく、女子がさう云ふことを少しは心得て置かなくてはならない、此國は極く困窮であつて、戰爭をしやうと思つても戰爭が出來られない、甘んじて他から無理を言はれても、戰爭が出來なければ御無理御尤もで通して居らねばならぬと云ふやうな姿に立至つて居ると云ふことは、少しは女子も心懸けて行かなければならぬ、其心懸けで行くのは何も外ではない、矢張り其儉約をして、さうして自分の手にて何事もしさへすれば、それだけ骨が折れると云ふことも分るし、自然に慈善の心と云ふものはそれから起る、自分が唯人に施しさへすればそれで宜いと云ふ風に思ひますけれども、決してさうでない、自分が苦勞して拵へた金をば人に施すから本統の慈善だけれども、良夫の物を只貰つて人に施した所が、是は慈善と云ふことではないだらうと思ふ。

扨て近頃奥さん方が大變慈善々々と云つて御金を施しなさるけれども、御自分の身躰から出したものはさう澤山はないだらうと思ふ、自分から儉約をして御出しなさるのが、一番宜い位のことだらうと思ふ、自分から儉約すると云ふのは車代を儉約するとか、紙屑を賣つて其代を溜めて人に施すとか、さう云ふやうな工夫は隨分なさるですけれども、自分が本統の儉約をして自分の身躰から生み出してすると云ふ慈善は誠に少いだらうと思ふ、本統の慈善をしやうと思へば、自分が今日成たけ儉約をして、一寸でも暇があつた時には或は他人に仕立物を出す所を自分が勉強をして家で仕立物をするとか、又御客があつた場合に割烹でも他へ依頼する時には、自分がそれだけのことをしたならば、全く是は自分か

ら生み出した御金です、それをどうやらすると間違つて、外へ出て御金を取つたりさへすれば自分が生出して儲けて居るのだと思ふのは、是は大きな間違で、外へ出て或は教師をして御金を取るやうな人も、如何にも自分から取つたのではあるし手柄ではあるけれども、其方に熱心にして、さうして内部が抜けて居つては一向にそれが償はぬやうなものである、故にそれぢやァチッカラ慈善しただの倹約したゞのと云ふ理窟にはならない、何でも人間は唯無駄に日を暮さぬやうにして居りさへすれば伸びて行く、何でもして居ればそれだけのことはある、唯ブラッとして遊んで居つたり、又儲けることはチャンと儲けるけれども、後との方にスポッと抜けて居るやうなことをしたならば、チッカラ是は倹約をしたの慈善をしたのと云ふ主義にはならない。

譬へば彼の鐵道と云ふものは時間が少なくて大層な物を送りますからして大變に繁昌する、それはそれで宜しいけれども、今では隨分其鐵道の道具や何にも彼も買つてあるけれども鐵道が敷けぬと云ふやうなことで、エライ勘定は宜いけれども御金が足らない、それから又そんなにモウ流行らぬと云ふやうな所に鐵道を無暗に敷く、或は何程の距離の所を何時間で往かれる、大變勘定の方は宜い、ボツ〳〵と肩に背負づたり車で送つたりするやうなことをして居るより大變勘定が宜い、けれども折角鐵道が出來てもソレ程に荷物がなかつたり、又乘る人が今日は五十人乘つても明日は些とも乘らなかつたならば、丁度一日分にして見ると大變宜いけれども、續かなければ詰り經濟が立つて往かぬと云ふやうなことが、隨分此鐵道のことに付てもあるさうです、私は確かなことは知りませんけれども、隨分勘定合ふて錢足らずと云ふやうなことになつとる所が大分あるさうです、さうして又金が唯遊んで居つて、勘定は宜いげれども色々な物を買つて鐵道が敷けないで、鐵道の道具だけは悉皆買つてあるけれども、そ

れを未だ數くことが出來られないで、見合はせて居るやうな所があるさうです、さう云ふやうなことになると云ふと、大變に儉約をしたと云つて其儉約が儉約にならない、又儲けたと云つても儲けたが儲けたに立たぬやうなことがあるからして、成たけ實際に儲けると云ふことは、金錢が今直ちに自分の手に這入らずとも、此世間に自然に殘る、それだけのものが殘ると云ふやうにして行けば、自分一己では儲からないけれども、世間に何かそれが役に立つて居るとすれば、世間の利益になつて居るからして、其方が一躰に大きいのである、一家の家内が今日御金を取つて來てさうして、是だけ儲けたからして大變經濟が宜いやうですが、決してさう云ふものではない、それよりは日々マア手が働いて居れば又外が休んで居る、手が休んで居れば口が働いてそれが役に立つて居るとか、日々色々變つて働いて、其時間と云ふものを大切にして、其經濟を立てゝ行くと云ふやうにしたならば、是が本統の國家の經濟で、一家の經濟のみならず、一家の經濟は一番入用であるけれども、それが積り積つて來ると云ふと國家の經濟になるであらうと思ふです。

それから又此昔の儉約と云ふものは、矢張り天子の妃であつても父母に歸寧する、歸寧すると云ふのは機嫌聽きに歸るのです、機嫌聽きに歸る時にも矢張り自分が子供の時分から教へて貰つて居る侍女とか何とか云ふ者が、御附きになつて行つて居るとか、又側の者の賢い者とか始終教を受けたり又相談をしたりするやうな者には、着物の美いのを着て行かうと言はない、汚ない着物を着て行つては甚だ禮に適はぬからして、何れか洗濯して綺麗にしたものを着て行かなければならぬ、けれども新らしい衣服を拵へると云ふことは言つて居らない、何れをば洗ひ何れをか滌がん、さうして父母に歸寧せんと斯う言つて居る、是等を見ると云ふと實に其儉約さ云ふことをして、さうして奢つたことはなかつたものであ

らうと思ふです、マア大抵は今里歸りをせむならぬからして、里歸りをするにはどうか立派な衣物でも着て歸らなければ往けない、何れも染めてどう云ふ具合にして行かうと云ふのが一般の風である、けれどもそれは決してさうでない、段々此世の中が開化になつて行けば、それは進んで行くと云ふもの丶、決して其奢りばかりが開化でない、質素にすべき所は質素にしなければならぬ、それから開化の度と云ふものもありますからして、總躰がそれ程になつて、國も金持になり、それからして又何事も進んで行つて、其處まで開化の度合が進んだならば、又一般がそれであるからして其位にして宜いけれども、今の日本と云ふものは實に聽いて見ると云ふと貧乏である、此貧乏であると云ふのは矢張り其驕奢の方だけが進んで行つて、始終身躰の自由だとか、此便利の宜いものを買はうと云つて、便利の宜い物ばかりを買つて御金を出して居るけれども、所謂人參買ふて首を縊ると云ふやうなもので、エライ便利の宜い物を買つて、大變家の具合は何事も宜いがと云つた所が、モウ金が足らぬでそれを使つて行くことが出來られないと云ふことになれば、何にもならないからして、今日の日本は餘程其處を注意して奢りを長くしないやうにして行かなければならぬ、一家だけはそれだけの金があるかも知らぬけれども、一般に此日本に金がないのであるからして、我ればかり宜くつても肝心の御頭の所に金が無ければ、自分ばかり宜いからと云つて奢ることをしたならば、國と云ふものがどう云ふ變動が起つて來るやら知れぬ、さう云ふやうな所は女子と雖も能く注意してやつて行かなければなりません。

それからして男子も亦家内などにはさう云ふやうなことを能く聽かして置くが宜い、けれども只家内などには成たけ美い衣物を着せて、自分が手の中の花のやうに思つて、綺麗にしたのを見て居るのが大變樂みだと云ふ風であつて見ると云ふと、誠に女と云ふ者は矢ッ張り馬鹿になるより仕様がないから、

一軒の經濟と云ふものやなんぞは、家內にスッカリ聽かして置くことが必要だらうと思ふ、けれども今では何ですな、一家の經濟のことを家內に聽かせると云ふ人は眞に稀です、唯自分が金を取つて、其部分を幾らか呉れと云へば宜シ〱と云つて遣ると云ふやうな風がある、又は自分が締くゝりはして、是だけでやつて行けとか云ふやうなことだけにして、さうしてマア家の經濟と云ふものが一體どうなつて居るやら知らぬ人が多いやうです、私共は能く人に聽くことでありますが、アナタの所はどれだけの經濟になつて、どうやつて御在でなさると聞くと、それは自分の身代を人に打出しては言はれませぬけれども、それでも大凡幾ら〱と云ふことは聽かなくても知つて居らなければならぬ、家內が一家の收支を知悉して居つて、俱に儉約をしなければならぬ、家內の方では「ナアニ良人が儲けてござるのだから困つた時はさう言へば主人がどうかして呉れるだらう」と云ふことでは、どうしても日本が金持になることは六ヶ敷いだらうと思ふ、デ其經濟と云ふものは、さう云ふ具合に儉約をして立てゝ行かねばならない、而して子供の中から、先程より申した通りに、禮儀廉恥と云ふものを能く敎へ込んで行かなけりヤアならない、夫婦同志であつた所が、其の所夫は所夫、兩親は兩親として尊んで、さうして締りをチヤンと付けて行かなければならない　是は日本では餘程其方を尊んで行くやうではありますけれども、近頃は餘程西洋の風が――西洋の風を惡いと言ふではないけれども、西洋の風は又其處に色々金錢上のことやら又一家の治め方が違ひ、一々其兩親に事へて、一緒に居つてすると云ふことはないやうになつて居る、それは銘々に覺悟をして、親は親でチヤンと覺悟するやうになつて居る、其代り子供が成長しても自分の食ふだけのものは殘して置かなければならぬと云ふやうになつて居るからして、さう一々世話を燒いたりすることはないけれども、日本では子供が成長すると云ふと、自分には何にも持た

ないで、皆子の物にしたいと云つて、子の方に與へると云ふ昔からの慣習であるからして、親は貴いものだから何處までも背けぬもの、尊んで行かんならぬものとしなければならぬ、子供の敎育にした所が、親は貧しき間からも子供の敎育を授け、大きくして其子に掛らうと思つて、自分のある物は殘らず、入れてゞも子供は敎育して居るものですから、自分の覺悟と云ふものが別段にしてない、其邊から見ると云ふと、どうしても年を老つた親には安心をさして養つて行くと云ふことが日本の風には必要である、西洋では宗敎で縛つてあるしするから、さう酷いこともないやうですけれども日本には宗敎と云ふものがないし、旁々さう云ふ具合になつて來ると云ふと、大變に親子の中も變なものになるからして、禮儀廉恥を尙び、どうしても長者は尊ばなければならぬ、親は大切にしなければならぬものである、禮を以て敬つて行かなければならぬ、と云ふことを始終心に存して置かなければならぬ。

それで小さい時分から能く今の根本を固めて行きさへすれば、詩に所謂我が心石にあらず轉ばすべからす我が心蓆にあらず卷くべからずと云ふ氣質を有つて居らなければならぬ、さうしてどうしても根本を能く固めて行きますと云ふと、自然經濟や又此一家の始め方を大切にして行きさへすれば、知らず識らず此日本と云ふ國が御金持になれる、それには女から第一に進み働いて行かなければならぬのであらうと思ふ、女の所作でスッカリ是は直るであらうと思ふです、さうして見れば其子供を育てる時に、小さい時分からの性質を能く其處へ當るやうに仕入れて行かなければならぬ、表面の敎育もなければならないけれども、其心根と云ふものを一つ固めて置かなければならぬであらうと思ふ、此頃支那へ行かれて奥村五百子と云ふ人が此間話されましたが、私はアレは大きに感心しましたのですが、お爺さんは山へ柴刈りに行きお婆さんは河へ洗濯をしに行くと云ふ話は全廢して貰いたい、私共は子供の自

分に楠三代記を親が能く話された、それであるからどうか御國のためには盡さねばならぬと云ふことがゾッコン頭にあるからして、それで今日斯うやつて日本の戰爭後の景況を見て、其遺族の人々の難義して居るのを救はなければならぬと、奮發して、此年になつて支那まで行き、彼方此方と御金を貰つて、遺族の人が今では大變に困つて居る、それに御金を下さると云うても御上も大變大勢のことだから迚もサウ〳〵は行屆かぬし、且又御國もエライ金持でもないものであるからして、さう澤山は下さらない、下さらないから皆大變困つて居る、遺族の困難は容易でないからして其遺族のために金を集め、さうしてそれを救はうと思ふ、只奥さん方がお正月に新らしい物を買ふのを買はないで、それだけの代を下さると云ふとそれを集めて遺族の人に上げるやうにしたいと思ふのであると云ふ、誠に殊勝なることであるし、それに又其子供の中に兩親がさう云ふ話をして聽かせたと云ふことに付て私共大變感じた、子供の中にさう云ふやうな話を聽かして親が能く敎へて行きましたならば良くなるには極つて居る、私共も子供の時分から親が少しばかり學問をして居りましたゆへ、學問の話に付ては時々女ぢやとても何時までも人の家に寄り掛つて、只養はれて——今日養つて貰つて居るから宜いと思つて、何にも知らずに暮らすと云ふは是は不甲斐ないことであるからして、何か自分で奮發をして覺え込み、マサカの時にはどう云ふ目に遇はぬとも言はれないからして、其時には自分一人で何とかして行かんならぬ、又どう云ふ災難に遇はぬとも限らないから、其災難に遇はぬとも限らないから、其災難に遇つたときには一家をチャンと維持して行く所の覺悟をして居らねばならない、子供を路頭に迷はせぬやうにすることを心懸けて居れば、自然此難義な人が澤山ないやうになるから、矢ッ張りそれだけ國の富になる、なんでもさう云ふ具合に覺えて、さうして自分で維持して行くやうにしなければならぬ、何を覺え

ても宜い、自分が一家を維持して行くだけの藝能を一つ有つて居らなければならぬ、今では女と云ふものは三界に家無しと云つて、誠に不甲斐ない位置に立つて居る、さう云ふやうなことのないやうに心懸けて行けと云ふことを、私共の子供の中に能く父が話しました、で其心がどうしても拔けぬのでありまして、始終私共は兄弟が澤山あつたからして、それで是と云ふ其藝能も別段に師匠を取つて教へて貰ふ譯には行かなかつたけれども、先づ少し書物を讀んで居たならば、食べる道と云ふものも自然に備はつて行くであらうと思つて、少しづゝ書物も讀んで見た、書物を讀んで見ると段々道理を解することが出來るに付ては、成程一家の維持と云ふことも、精神が確かでありさへすれば自然食べるに困るやうなことはあるものでないと云ふことが少しく解されました、それで少しく安心をしたやうな こともありました。

今日金でも取つて行くとか、又斯うやつて子供を維持して行くと云ふやうなことは、實際直ぐにやらないでも、自然自分自ら愼んで、今日手を明けないで成たけ日を空しくせずに暮して行くと云ふと、其德と云ふものが伸びて、全くさう困難すべきものでもなし、又身躰がそれに馴れて居るからして、極く困難の場合が來てもそれに堪へることが出來る、又其時の色々工夫で、前方から之を習つて、それで其時の維持にしやうとしても存外さうはいかぬもので、それを用ゐないで又外のことで役に立つと云ふことがあります、丁度悴などでも哲學を以て卒業したのでありますけれども子供の時分に遊ばせつゝ私が一人で臺所へ出て居りましたからして、臺所をさせると其中に漸く伊呂波四十八文字、假名が讀めるやうになつてから後は小説とか軍書本とか、假名の付いて居る書物をば讀ませて置いた、是は何のたしにしやうと云ふので讀ませたのではない、唯慰みに好きでありますから何でも老人が讀め〳

讀んで吳れと云ふ、自分が眼が見えないで讀むことが出來ませんから何でも讀ませた、それで自然にアノ歷史は敎へるとなしに段々好きになつて來て、サア軍書本を讀む、讀めば又歷史の本は面白い、支那の歷史も見、日本の歷史もチツトづゝ分ると云ふやうなことになつて、或は政記を讀んでも大抵軍書本を見てある爲めに大變分りが宜いと云ふ、解りが宜いから自然其風に氣が向いて歷史を少しづゝ噛り出して知つて居るやうになつた、それがために卒業をしましても、哲學の方の側で少しも人に敎へたりすることはしないで、歷史の方を專門か知らんと云ふやうな風に思つて居る人もある、又自分にも好きであるからして、始終其歷史の方の課目を受持つて人に敎へて居る、自然それは物を遣つて置きさへすれば、それが何時間に合ふと云ふやうなことに極らないで行くものである　デ子供の中から無駄に遊ばせぬやうに事をさせれば、子供でも決して退屈ばかりするものでない、それが慣習になつて自然にドレかで間に合ふと云ふことが出來ますし、又堪へ得ると云ふことが大變に出來るやうになります。

女の子と云ふものは小さい時分から、其善い話を聽かせ、それから手を休ませぬやうに使つて行つて、成たけ身躰の勞力にも堪へ得る、それから種々心を使ふにも堪へ得ると云ふやうに仕入れて置かぬと云ふと、男の子より一層私にそれを宜くして行かなければならぬものであらうと思つて居るのであります、それが今ではさうでなしに、大變に男の子の方には敎育を八釜敷く言つて、どうしても卒業させなければ徃かぬ、又卒業してからでも、世の中に出るに成たけ善い所へ出やうと思つて、又勉强もしますです、けれども女と云ふものは未だ漸う〳〵卒業するのは大變宜いことであつて、卒業してから一家を治めることになると、丸ッ切りそれを捨てゝ　チツト自分が出世をすると、矢つ張り習つたことを使ふと云ふことなしに、樂に衣服の美いのでも着でゾロッとして居れば大變に宜いと斯う思つて居る

人が今で大變多いやうです、今では餘程敎員とかになつて世間に出て居る人もありますけれども、是れとても、今の本統の經濟とか國の爲とか、一家のためになつて行くと云ふやうな側に心を用ゐて居る者はどうも少ないやうです、それが皆其心になつて吳るやうにならなければ、どうしても此日本の國が富んで來ないし、又女の敎育と云ふことも本式にならない、からしてホンの皮想だけである、皮想だけであると唯だ浮薄になつて來るばかりで、實際人間の本統に踏んで行く道と云ものが段々廢つて來るだろうと思ふ、それが廢つて來ると云ふと、子供に注込むことが出來ない、子供に注込むことが出來なければ段々後退りするより仕樣がない、表向き其皮想の方は進んで居るかも知らぬが、皮想は幾ら進んで來ても丁度木の枝葉は大變立派に出來ても、幹が丈夫でなければ誠に危いもので、一つ風でも吹いて來れば倒れて仕舞ふ、ソレ故に枝葉は少々立派でなくつても根本が確かな幹になつて居れば、少々風が吹いても一向倒れないから安心なもので、それが立派な材木になる、自然使ふ道か立派に出來るやうになつて來る、それですから根本を確かにして置かねば往けませぬ。

それからしてモウ一つ其根本の學問をして根本が固つて來ると云ふと、心と云ふものが自然に廣がつて自然面白い所があるものです、デ見た所ばかりはさうは往かぬもので、見ない所に一つの學問があると云ふことは、此頃私は一寸或書物を見ましたら斯ふ云ふことが書いてあつた、私はそれが大變に面白いと感じたのであります、則ち

有字の書は讀むことを解し無字の書を讀むことを解せず有絃の琴を彈ずることを知つて無絃の琴を彈ずることを知らず迹用を以て神用を以てせず何を以て琴書の趣きを得ん

斯う言つてあるです、總て感應の點に至るに云ふと、或は感應と云ふ程のことはなくても、其方に方針

を取つて能く物を解すると云ふと、ホンの皮想の字のある書物を讀んで解して居ると云ふことでは一向に詰らぬ、書物を讀んだとて、其書物にない所の道理を解するやうにならなければ、書物を讀んだと云ふものではない、又琴を彈じるのを聽いても、唯ピン〳〵鳴る音と手の巧みに動くだけを知ることは出來ますけれども、此心を樂ましめ、歌を謡つて人心を感動せしむると云ふことはありますけれども、無弦の琴の面白い所がある所を知らない、唯手でペン〳〵彈く、面白いと云ふだけのことは知れるけれども、其以外に面白い所のあることを世の中の人は知る者が少ない、斯う云ふことを言つてあるが誠に私共は是は成程と思ふです、陰德を積んで陽報のあると云ふことを昔の人は言つて居るが、大變 私共は信用して居ります、實際見ると云ふと、どうしても其陰德を稱んで陽報と云ふことにならぬと往かぬですけれども、求めなくても陽報は屹度あるものである、けれども今の皮想からすると云ふと、ソンな馬鹿氣たことはない、ソンな廻り遠いことをするのは馬鹿氣である、矢ッ張り今日は手ドラマイに利益を取る方が餘程宜い、或は陰德を積めば陽報があると云ふ道理だけは少しは解して居つても、どうしても履んで行はぬと云ふやうなことが澤山ある、であるからしてどうかして今の根本的の學問をして、自然に根本の方を能く子供の時分からして、それを重に致してさうして枝葉の學問をして行つたならば、大變に經濟上にも宜しい、それから人間の位置も大變高くなつて來るだらうと思ひます、ソレ故に初めて申しました通りに、女大學の女子の——小供の時分から能く其親が忽諸にせずして、立派に後の爲を思つて、男子よりも女の教を餘程嚴重にしてさうして育てゝ貰ひたい、しますと云ふとそれが根本になると云ふと、始めの通に良人を選び、又男子の方では是非さう云ふ所の者を撰んで、さうして配偶をする、配偶をすれば良人のためと思ふて儉約をしなければならぬ、國家のためを思へば儉約をして往

かなければなりませぬ、ナカ〳〵容易に自分が欲しい物を勝手に買ふと云ふやうな理窟には往かぬで、成たけ洗ひ滌ぎもしなければならぬし、又それだけの苦勞をすると、苦力と云ふことも分つて來る、人の勞力が分れば自然に慈善が其中に含んで來る、自分の心の根本が固まつて居れば、世の中が亂れて來ても確乎として守つて行くと云ふ精神もそれに伴つて來るだらうと思ひます、女子敎育の六ケ敷いと云ふものは其處にある、其處に能く意を用ゐて貰つたならば、追々と今の風が改まつて、さうして舅姑に仕へると云ふことも今迄の風が改まつて來る、それが馴れて來れば一家と云ふものも自然に穩かに治まつて來るであらうと思ふ、ソレ等に付ては是まで見る所では隨分困難なる所が何處にも見える、故に是だけは一つどうかして救ひたいと云ふ心は、私共十分有つて居るけれども、私共の微力では迚も爲せる理窟はないからして、世間の御方がどうか其方針を執つて下すつたならば、或は必す効果を得るであらうから、一つやつて見て御貰ひ中したい、さうして行つたならば私共の希望が、少しは屆くか知らぬと思ふのでございます。（三十四年二月二十日）



五號豫告

次號例刊の要目は、「論說」には三輪田眞佐子女史の斬新有益なる女子敎育談を載すべく、「講義」には鹽井、久保、大町三文學士の講義の續稿を掲げ「傳記」には、中内文學士の佛國革命時代の女傑と、鹽井福子の和氣廣蟲、その他學海先生の日本名媛の評傳、「地理」には喜田文學士の修學旅行心得を新載すべく、また日本名蹟雜話の續篇は益々趣味あり、「學術」には藤堂氏の柳と櫻、岡田みつ子の理化叢談、後閑菊野女史の家政上に關する意見等最も見るべし、「家庭」には、棚橋絢子の家庭敎育談、その他衞生裁縫料理等有益且つ趣味ある講演、「技藝」には、前號の續稿の外、新たに洋畫指南を載すべく、「小說」には學海居士の菜摘川の續篇にして趣味洋々たる好文字なり、また水蔭氏の礎の淸水は、淸新婉麗の作なり、「雜錄」には、奥村氏の韓國婦人談、石澤文學士の英國女皇、三宅花圃の夜半の埋火、野中千代子の女德、丹下氏のうつゝの夢、其他讀むべきもの多し

每月一回五日發行

價定表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢	
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢	

內｛定刊數……十二冊／增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁廿二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十二圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

◎本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
◎御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
◎總目錄御入用の方は二錢郵券相添へ申込あれ。

明治三十四年三月十五日發行　第一卷第四號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千八十八番　二千六百二十番

〇女流の讀み給ふべき書類

博文館發兌

これは御婦人方の見るべき本でないと限つたものは一冊もないので總目錄中の本は何品にても御愛讀を希上ることは勿論でありますが其内にて殊に御婦人方の御高覧を仰ぐべき重なる書類を撰び出し夫からそれと御評判を蒙りまして一冊も餘計に御求め玉はんことを願ふ譯です

日本歌學全書　全部十二冊

佐々木弘綱佐々木信綱大人校訂

一　古今和歌集　友則家集　忠岑家集　躬恒家集　貫之家集

二　後撰和歌集　順家集　天徳歌合　元輔家集　能宣家集

三　拾遺和歌集　公任家集　紫式部家集　清少納言家集

四　後拾遺和歌集　經信母集　相模家集　高陽院歌合

五　金葉和歌集　詞華和歌集　堀川百首

六　千載和歌集　永久百首　忠度集　後京極自歌合

七　新古今和歌集　自讃歌　鴨長明集

八　林下集　山家集　頼政集　金槐集

九十十一　萬葉集　上中下

十二　悦目抄　無名集　歌がたり　にひまなび　新學異見　歌袋　調の直路

紙數一冊四百廿頁以上　一冊金廿五錢　郵税一冊六錢

●本書一二三四五六七八十二の各編品切れに相成當分再版出來兼候間左樣御承知相成度候

（後付の一）

十五版

茶の湯と生花

茶の湯、生花は日本特有の一技にして、國風の瀟洒、淸麗、氣韻、沈正の態を見るに足る、苟くも中以上の士女は皆之を辨へざるを耻とす。茲に斯道の大家に請ふて、其技の初步より奧秘に至る迄を、最平易明瞭に述べ、文の足らざる所は圖繪を以て之を補ひ、本書を讀む人をして又師に就くの煩なからしむ。

全一冊菊判正價金二拾錢　郵稅六錢

歌の栞

佐々木信綱君著

此書其上編に論ぜられたる沿革種類法則は最も嚴密に最識見高く、雅遊はあらゆる歌の上の遊を載せ、書式は當時の能書多田親愛君に請て名筆七葉を載せ、中編に學げたる類題名所假字格冠辭歌詞の諸課目は歌を詠ずる者の必知らざるべからざる所にして下編に載せられたり。作法類語集作例名歌集は各題につきて其作法類語を懇切に說かれ及最卓絶せる秀歌を示されたり。古來かつて斯の如く歌に關する一切の事を綱維せる書なし、殊に戀歌をはぶき新題詞兼題を加へ、從來歌書の面目を一新せられたる新思想少なからず、これ實に編者が數年間の苦心より出たる結果なり。世の歌人諸君並に歌に志す諸君必ず一本を座右に備へられん事を

全一冊洋裝背皮金字入紙數千六百頁

正價金壹圓貳拾錢
小包目方四百匁

增補

詠歌自在

公爵近衞篤麿君題辭　子爵福羽美靜君序文
伯爵東久世通禧君序文　佐々木信綱君著

此書は故佐々木弘綱翁の著にして、息信綱君に増補を請へるもの初學を導くと最も懇篤なり。本書の特色といふべきは歌題を改頁して當世に適せざるを省き新題を載せ、且つ作例の歌と精選せるにあり、而して本書の體裁は先づ題の作法を示し次に句の順序に隨ひて歌詞を載せ、次に作例を擧げたり。附錄の詞の栞は歌詞の辭典、假字の栞は假名の字典にして、且つ當代の能書家多田親愛先生の懷紙色紙短冊竪詠草等の書式を載す。これら實に錦上花を添ふるもの、歌に志す人は、必ず一本を座右に備へ給ふべし。

全一冊洋裝總クロース金字入
正價金壹圓　郵稅拾四錢

四版

作歌自在

本書は、和歌の起原、沿革變遷より始めて、和歌の種類、和歌の心得、文法大意、假字遣、枕辭、和歌書方、屏風貼方、歌會、作例等に至る迄、各部門を分ちて、詳細に說述したり。されば眞に歌詠んさする者の爲には、こよなき良書と云ふべし。

全一冊菊判正價金二拾錢　郵稅六錢

詠歌辭典

佐々木信綱君著

現今辭書の出版其數少なからずと雖も、未だ和歌專門の辭書ある事なし。此書は詠歌社會に最も名ある、佐々木信綱先生の編纂にして「雅語俗解」には萬葉集、廿一代集等の解し難き語、七千六百餘字を載せ「俗語雅譯」「熟語字典」には共に歌讀む人の寶庫といふべきもの「假字格字典」は、あらゆるかなづかひを載せ「枕詞字典」には枕詞の解釋を掲ぐ以上の五編に附錄として「小文典」を添ふ而して本書の特色は解釋の懇切なる、字數の多き、熟語を網羅せる、文典を添へたる體裁清楚にして携帶に便なるにあり。

全壹冊洋裝袖珍　金文字入
正價金七拾五錢　郵稅八錢

琴曲獨稽古

琴は神代の昔より傳はりて普く上下に愛玩せられ、風調高適音韻精妙最も餘情に富み、和漢諸樂器の調一として之を應用せられざるなし、此書は其獨習の解法も平易親切に擧け圖を以て之を初歩より奥の手まで其順序に由て明解せり、閨秀才女が一本を繙き玉はゞ琴曲の妙に達する容易なるべし。

全一冊菊判正價金二拾錢　郵稅六錢

化粧品製造法

容貌の醜美は、本と天賦に在りと雖、之に人工を施せば醜も亦美に化すべし其必要に應じて出るの書、即ち此編と爲す。白粉脂臙は言ふまでもなく、香水香油毛生藥に至るまで、萬種の化粧品、丁寧に其製造法を說く、實に是れ交際場裡紳士貴女の珍寶なり。

全一冊菊判正價金二拾錢　郵稅六錢

新撰歌典

落合直文君著

歌は文學の最も高尚なるものなり、月夕花晨一たびこれを詠ずれば其の快樂實にいふべからず此書陳套なる歌書の面目を一新し和歌沿革の如き作法の如きは面白く類語は充分に精撰せられ例歌は萬葉集を始め代々の撰集家々の歌集最近歌人の歌に至るまでその英華なるものは漏すところなく。殊に長歌、今樣の如き其他の歌體の如き皆これ感情の神美にして見るべきものなり而してかの戀歌を減じ、更に人倫の部を設けたるが如き著者が經營慘憺たる意匠の深きを見るに足らん、歌を學ばんとするもの、この書を置きてまた他に何かあらむ。

金壹冊洋裝　紙數五百七十頁
正價金四拾錢　郵稅八錢

新撰女子書翰文

本書の特色
雅に失せず俗に流れず能く文弊を洗て數多の正則を示す四季寒暑の普信社交吉凶の辭義其他必要の文例集めて數百題繁簡中を撰び文躰實用を主とす東久世伯の序文あり小野鵞堂麗筆の書式あり印刷鮮明製本優美眞に婦女必携の最有益書なり

正價三十五錢郵税六錢
洋裝菊判表紙石版刷

東京神田區錦町
發兌元 勉強堂書店

家庭に於ける感情教育

全一册
和裝菊判
正價五十錢
郵税六錢

紙數二百卅頁

北海道師範學校教諭熱田眞吉君著

人情の大部分は幼年時代に形成せらるゝものなれば家庭教育が兒童の内部に及ぼす影響は亦感情に於て其著しきを見る著者多年此問題に注意し幼年ハ感情に及ぼす次第を詳述す先初に緒論次に兒童身躰より特性觸覺に及び次に父母の資格を論じ次に家庭論次に感情論次に感情教育の方法を詳述せり故に本書を一讀せば兒童の養育上に多少の資益を得べく家庭最要の新册なり

東京京橋區弓町 松邑三松堂發兌

三松堂の出版物は誠實勉強を主とし御注文の節は迅速に御送本仕り尚書目御入用の方は貳錢切手封入御申込あれは進呈す

篆刻の依頼に應す

土居香海

東京日本橋區本石町二丁目七番地

（後付の八）

編輯主任 久保天隨 小杉天外 大谷繞石

新文藝

第壹巻 第參號 三月一日發行

挿畫 絶望の圖(ストルイス筆)

目次

本誌體裁四六一倍

毎月壹回一日發行

定價●一冊金十二錢●六冊前金六十六錢●十二冊前金一圓二十錢●外に郵便税一冊壹錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す

但し投稿は本郷區西片町十番地ノ二十一へ宛送號新文藝編輯所附の事

發行所 東京市神田區仲猿樂町 新文藝社
發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂

(並平製本)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版②
明治34年3月（第1巻第3号、第4号）

2005年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］ 03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2836-0　C3321